

松本市文化財調査報告 No.59

# 松本市島内遺跡群

## KITAGATA 北方遺跡Ⅱ・北中遺跡 KITANAKA

—— 県営ほ場整備に伴う緊急発掘調査報告書 ——

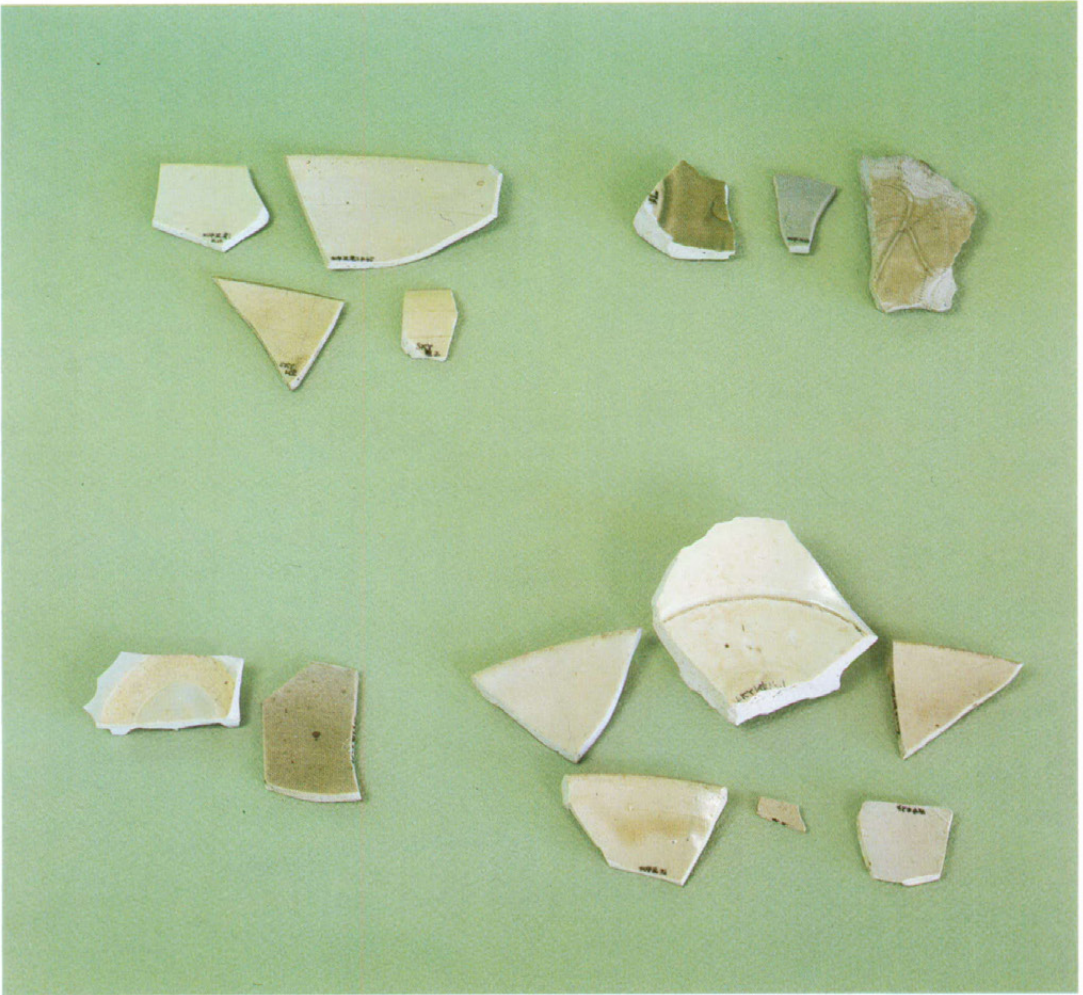
1988・3

松本市教育委員会





第9号住居址出土白磁碗(13)



北方・北中遺跡出土輸入磁器

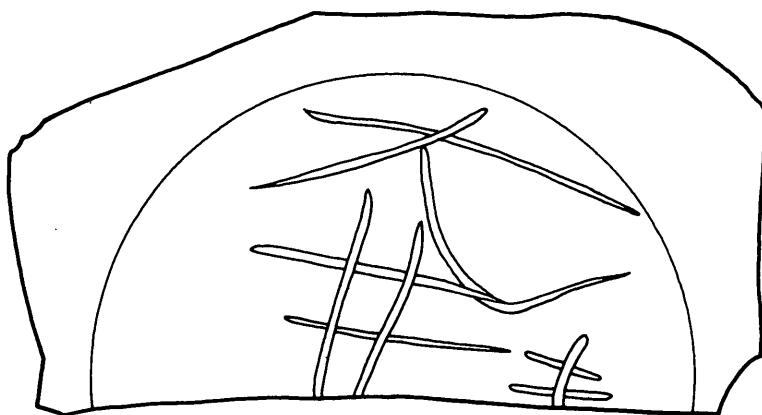
# 松本市島内遺跡群

KITAGATA

KITANAKA

## 北方遺跡Ⅱ・北中遺跡

—— 県営ほ場整備に伴う緊急発掘調査報告書 ——



1988・3

松本市教育委員会

## 序

島内地区は奈良井川と梓川に囲まれていて、遺跡の存在も地元の研究者によって以前から知られておりました。北方遺跡もその一つで、昭和59年には中央道長野線の東側が、今回は西側が調査されました。前回と同じく同地区の県営ほ場整備にあたり、文化財保護の立場から記録保存を目的とした緊急発掘調査で、松本地方事務所から当教育委員会に委託されて行われたものです。調査は8月から10月まで実施され大きな成果を上げることができました。特に3個発見された巨大な須恵器の「かめ」はみごとにたなものでみなさまの関心のあるところと思います。現在は復元されて市の考古博物館に展示されております。また他には中国から輸入された白磁など当時の文化の一端をしのぶことができます。引続き調査されました北中遺跡は、中世の建物跡や墓跡などが発見され、北方遺跡に続く時代の遺跡として注目されます。

このような遺跡の発掘調査が、今後よりいっそう地区の歴史解明のために役立つことと思います。この調査を通じてあるいは調査結果をまとめた本書によって、文化財の大切さ、保護の必要性をご理解いただければ幸甚に存じます。

最後に、調査にあたりまして多大なご理解とご協力をいただきました島内土地改良区、全面的にご援助をいただきました島内公民館、島内出張所及び地区の皆様衷心より謝意を表して序といたします。

昭和63年3月




松本市教育委員会教育長 中 島 俊 彦



# 例 言

- 1、本書は昭和61年8月1日から10月12日に行われた島内遺跡群<sup>しまうち</sup>北方遺跡<sup>きたがた</sup>及び11月20日から12月24日に行われた同北中遺跡<sup>きたなか</sup>の緊急発掘調査報告書である。
- 2、本調査は県営ほ場整備に伴う緊急発掘調査であり、松本市が松本地方事務所から委託を受けて松本市教育委員会が実施したものである。
- 3、本書の執筆は、第1章事務局、第2章第1節太田守夫、第3章第3節1、第4章第3節1直井雅尚、他については熊谷康治が行った。
- 4、本書の作成にあたり、作業分担は次のとおりである。

土器の復元	滝沢智恵子、岩野公子
土器の実測	竹原 学、土橋久子、岩野公子、藤井尚子
鉄器処理・実測	神沢昌二郎
石器の実測	関沢 聡、赤羽包子
遺構図面類の整理・トレース	竹原 学、三村竜一、土橋久子、藤井尚子
遺物トレース	土橋久子、岩野公子、藤井尚子、赤羽包子
遺構写真撮影	熊谷康治
- 5、出土遺物の写真撮影は宮嶋洋一氏にお願いした。
- 6、本書の編集は事務局が行った。
- 7、本書内で使用したスクリーントーンは、別に記載がないかぎり次のとおりである。

	炭化物及び焼土粒の分布範囲		焼土粒及び焼土面の範囲		焼骨の出土範囲
---	---------------	---	-------------	--	---------
- 8、本書で報告する出土遺構の内、竪穴住居址、土壇、ピットの番号は59年北方遺跡の遺構番号に引き続くよう設定し報告した。出土遺物の注記については旧番号のままであるため新旧対比表を作成し、市立考古博物館に保管している。
- 9、第5図に使用した「助長野県埋蔵文化財センター調査分」の遺構配置図については助長野県埋蔵文化財センターのご厚意により掲載させていただいた。
- 10、本書作成にあたり、出土遺構及び出土遺物の内、大甕埋設遺構については桐原健氏（松本市文化財審議委員）、陶磁器については原明芳氏（助長野県埋蔵文化財センター調査研究員）にご指導、ご教示いただいた。記して感謝申し上げる。
- 11、発掘調査全般に関して、助長野県埋蔵文化財センターにご便宜をはかっていただいた。衷心より感謝申し上げる。
- 12、本調査に関する書類及び遺物、図面類、写真などは松本市立考古博物館が保管している。

# 目 次

第1章 調査経過	
第1節 事業の経緯と文書記録	1
第2節 調査体制	4
第2章 遺跡の環境	
第1節 遺跡の立地と地理的環境	5
第2節 周辺遺跡	7
第3章 北方遺跡の調査	
第1節 調査の概要	9
1. 調査地区の設定	9
2. 調査結果の概要	10
第2節 遺構	14
1. 竪穴住居址	14
2. 掘立柱建物址	37
3. 竪穴状遺構	43
4. 土壇	45
5. 大甕埋設遺構	49
第3節 遺物	52
1. 土器・陶器・磁器	52
2. 鉄器・鉄製品	86
3. 石器	86
4. 土製品	86
第4章 北中遺跡の調査	
第1節 調査の概要	92
第2節 遺構	95
1. 竪穴住居址	95
2. 掘立柱建物址	97
3. ピット群	102
4. 土壇・溝	102
第3節 遺物	110
1. 土器・陶磁器	110
2. 鉄器	113
3. 石器	113
第5章 調査結果のまとめ	117

## 挿 図 目 次

第1図	遺跡分布図と調査位置	2	第29図	土壌 (1)	47
第2図	北方・北中遺跡調査範囲図	3	第30図	土壌 (2)	48
第3図	地層断面図	6	第31図	土壌 (3)	49
第4図	周辺遺跡	8	第32図	大甕埋設遺構	50
北方遺跡			第33図	土壌・ピット群	51
第5図	遺構配置図及び周辺地形	11	第34図	長野県内出土の台付鉢	54
第6図	調査地区全体図	13	第35図	出土土器 (1)	67
第7図	第7号住居址	15			
第8図	第8号住居址	16	第48図	出土土器 (14)	80
第9図	第9号住居址	17	第49図	出土鉄器 (1)	88
第10図	第10・11号住居址	18	第50図	出土鉄器 (2)	89
第11図	第12号住居址	20	第51図	出土石器	90
第12図	第13号住居址	21	第52図	出土土製品	91
第13図	第14・17号住居址	23	北中遺跡		
第14図	第15号住居址 (1)	24	第53図	調査地区全体図	93
第15図	第15号住居址 (2)	25	第54図	第1・2号住居址	96
第16図	第16・22号住居址	26	第55図	建物址1・4	98
第17図	第18号住居址	28	第56図	建物址2・5	99
第18図	第19号住居址	29	第57図	建物址3	100
第19図	第20号住居址	30	第58図	土壌 (1)	103
第20図	第21号住居址 (1)	31	第59図	土壌 (2)	104
第21図	第21号住居址 (2)	32	第60図	土壌 (3)	105
第22図	第21号住居址 (3)	33	第61図	土壌 (4)	106
第23図	第23号住居址	35	第62図	II区土壌・ピット	108
第24図	建物址1	39	第63図	III区土壌・ピット	109
第25図	建物址2	40	第64図	出土土器	111
第26図	建物址3・4	41	第65図	出土鉄器	114
第27図	建物址5・6	42	第66図	出土石器 (1)	115
第28図	竪穴状遺構1・2・3	44	第67図	出土石器 (2)	116

## 表 目 次

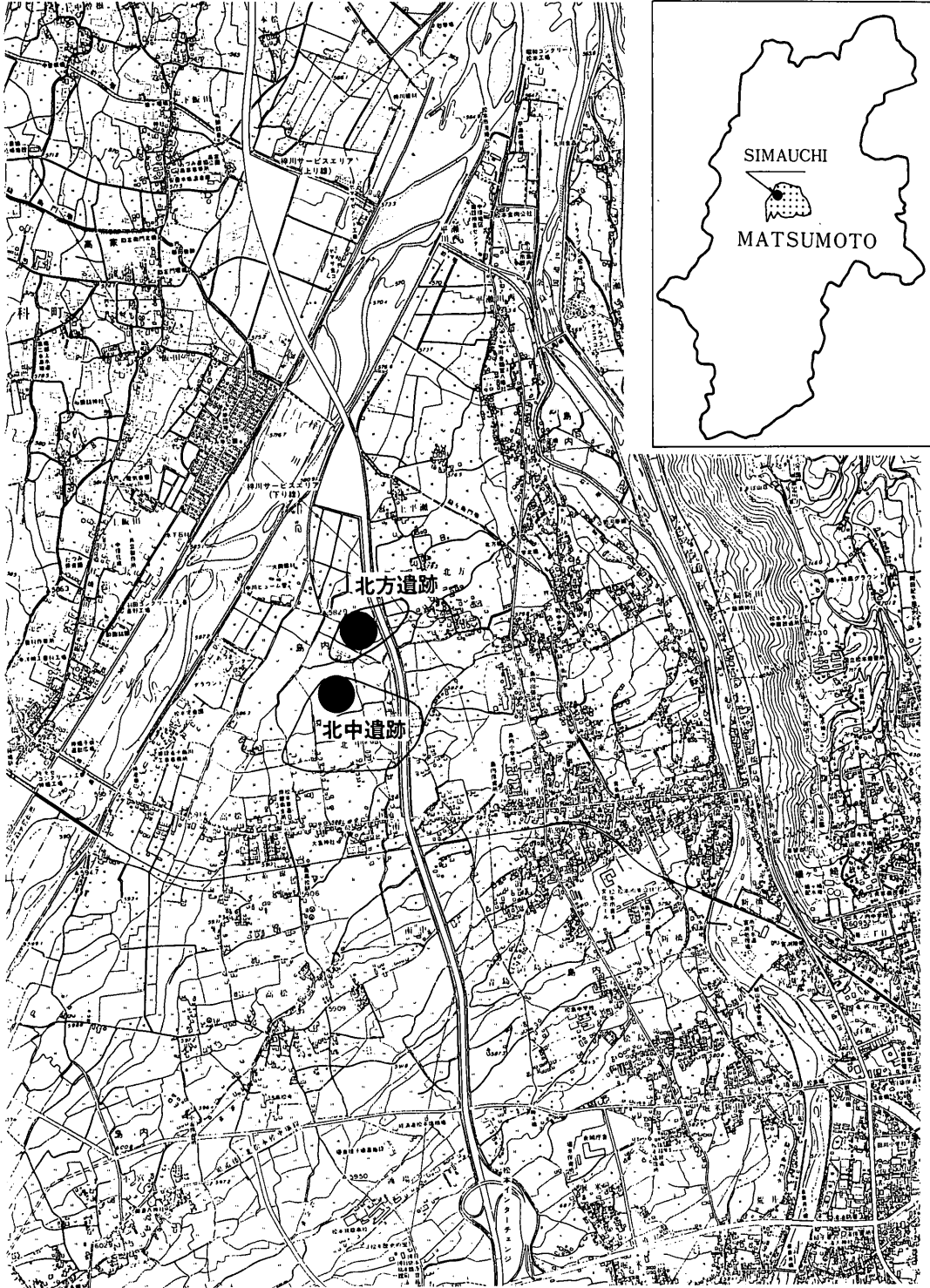
北方遺跡		表10	出土土器観察表	81
表1	住居址一覧表	表11	鉄製品一覧表	87
表2	掘立柱建物址一覧表	表12	石器一覧表	87
表3	竪穴状遺構一覧表	北中遺跡		
表4	土壌一覧表	表13	住居址一覧表	95
表5	大甕埋設遺構一覧表	表14	掘立柱建物址一覧表	101
表6	土師器出土量一覧	表15	土壌一覧表	107
表7	須恵器・灰釉・陶器出土量一覧	表16	出土土器器種・器形一覧	110
表8	土器出土量一覧 (土壌)	表17	出土土器観察表	112
表9	土器出土量一覧 (ピット)	表18	出土石器一覧表	113



# 第1章 調査経過

## 第1節 事業の経緯と文書記録

- 昭和60年10月9日 埋蔵文化財保護協議を市役所及び現地にて実施。出席者は長野県教育委員会、中信土地改良事務所、松本市教育委員会。
- 昭和61年1月10日 昭和61年度補助事業計画書提出。
- 4月15日 昭和61年度国宝・重要文化財等保存整備費補助金内定連絡。
- 5月1日 昭和61年度国宝・重要文化財等保存整備補助金（国庫）交付申請書提出。
- 5月30日 昭和61年度県営ほ場整備事業島内地区島内遺跡群埋蔵文化財包蔵地発掘調査委託契約を結ぶ。
- 6月9日 昭和61年度文化財保護事業補助金（県費）交付申請書提出。
- 7月23日 昭和61年度国宝・重要文化財等保存整備費補助金（国庫）交付決定通知。
- 8月4日 昭和61年度文化財保護事業補助金（県費）交付決定通知。
- 8月5日 島内遺跡群北方遺跡埋蔵文化財発掘調査の通知提出。
- 8月29日 昭和62年度埋蔵文化財保護協議を市役所及び現地にて実施。出席者は長野県教育委員会、松本地方事務所、松本市教育委員会。
- 10月20日 昭和61年度県営ほ場整備事業に伴う島内遺跡群北方・北中遺跡発掘調査委託契約の変更。
- 11月26日 島内遺跡群北中遺跡埋蔵文化財発掘調査の通知提出。
- 12月23日 昭和62年度補助事業計画書提出。
- 昭和62年1月10日 島内遺跡群北方・北中遺跡埋蔵文化財取得届及び同保管証提出。
- 2月20日 島内遺跡群北方・北中遺跡埋蔵物の文化財認定通知。
- 4月28日 昭和62年度国宝・重要文化財等保存整備費補助金内定連絡。
- 5月16日 昭和62年度国宝・重要文化財等保存整備費補助金（国庫）交付申請書提出。
- 7月11日 昭和62年度文化財保護事業補助金（県費）交付申請書提出。
- 7月20日 昭和62年度国宝・重要文化財等保存整備費補助金（国庫）交付決定通知。
- 8月5日 昭和62年度文化財保護事業補助金（県費）交付決定通知。



第1図 遺跡分布図と調査位置



第2図 北方・北中遺跡調査範囲図



## 第2節 調査体制

発掘調査は前節の経緯にもとづいて松本市教育委員会が直営で実施することとなり、以下のとおり調査団を結成した。

### 昭和61年度（発掘調査）

調査団長	中島俊彦（松本市教育委員会教育長）
調査担当者	神沢昌二郎（松本市立考古博物館館長）
現場責任者	熊谷康治（社会教育課主事）
調査員	太田守夫（地質） 大久保知巳（考古）日本考古学協会員 竹原 学（考古）長野県考古学会員 三村竜一（考古）〃
調査補助員	土橋久子（考古）〃
事務局	浜 憲幸（社会教育課長）、岩淵世紀（文化係長）、柳沢忠博（主事） 熊谷康治（主事）、直井雅尚（主事）、岩野公子

### 作業協力者

北方遺跡 青柳洋子、五十嵐裕之、伊那和則、大出六郎、大島澄子、大谷成嘉、大塚袈裟六、開嶋八重子、小池直人、神戸巖、小松弘、小松正子、小松量子、酒井文雄、瀬川長広、高山淑三、田尻健治、土橋幸子、中島新嗣、林昭雄、藤井尚子、藤本嘉平、穂刈松子、丸山岩保、山崎文雄

北中遺跡 青柳洋子、安藤正人、岩坂善郎、臼井美枝子、大出六郎、大久保芳茂、河内ゆり子、小松正子、瀬川長広、高山園子、高山淑三、滝沢直美、土橋久子、中島新嗣、中村恵子、中村文一、堀内福一、堀内実牧垣とよ、山崎文雄

### 昭和62年度（整理作業）

整理作業についても松本市教育委員会が直営で実施した。実施にあたっては特別団の編成はせずに次のとおり行なったものである。

総括：神沢昌二郎（松本市立考古博物館館長） 責任者：熊谷康治（社会教育課主事）

調査員：直井雅尚（社会教育課主事） 竹原 学（社会教育課） 土橋久子（長野県考古学会員）

事務局：浅輪幸市（社会教育課長） 小松 晃（文化係長） 柳沢忠博（主査） 大村敏博（主査） 熊谷康治（主事） 直井雅尚（主事） 洞田睦子

## 第2章 遺跡の環境

### 第1節 遺跡の立地と地理的環境

#### 1. 遺跡の位置と地形

本遺跡は、松本市島内北方集落<sup>きたがた</sup>の西方、中央道長野線の西沿い、標高580～585mに位置している。市文化財調査報告 No. 36(59年度)の北方遺跡とは、県埋蔵文化財センターによる発掘地を挟んで、その西側に当る。

地形上は梓川現河床より約500m、現河床のはん濫原からは約100mしか離れていない。現河床のはん濫原(幅約400m、水田化されている)との間には約1m前後の段差(現河床による段丘<sup>がけ</sup>崖)があって、本遺跡の地形面とは形成期を異にしている。

島内地域における梓川扇状地の形成については、前記の文化財報告 No. 36に述べた。本遺跡の地形面はその中で、最も古いと考えられる自然堤防状の高まりの最後のはん濫原である。

これを発掘面にあらわれた、はん濫原の流れの方向を示す河床礫や礫層の堆積でみると、N40°Eで、現河床の流向とほとんど平行している。しかし地形面は、遺跡の地形面 $\frac{8}{1000}$ 、現河床及びこれに続く地形面 $\frac{9.5}{1000}$ と、明らかに堆積の状況を異にしている。市文化財調査報告 No. 41所載の上平瀬遺跡とは、全く同じ条件下にあるといえる。

#### 2. 遺跡の堆積層と礫

本遺跡に隣接する県埋蔵文化財センターの発掘地の南端(本遺跡の南東30m)には、幅約10m、明らかに河床礫と考えられる、おびただしい中・大礫の堆積があらわれた。流れの方向はN40°Eを示し、上平瀬遺跡発掘の時に調査できた勘左衛門せぎ壁の、上平瀬寄りの礫層へ続くものと思われる。

本遺跡内にはこのような堆積はなく、幅2ないし6.5mほどの数条の礫層(N40°E)が断続的にあらわれ、その間に土層が介在している。住居跡は主にこの土層に営まれている。

一般に堆積層(第3図)は、上から10～12cm 灰黒色土・10cm 灰色土・25～30cm 斑鉄<sup>はん</sup>を含む(鉄分マンガンの集積層がない)土の水田耕土、以下耕土外と考えられる褐色土層25cm、住居跡面の各種の層40～50cm(褐色土層・砂質土層・礫層・礫混り土層等)、土混り礫層40cm、礫混り土層40cmの順である。土層は一般に砂質である。

遺跡の面では、北西部に細・小礫層が発達し、東部・中央・南西部は土層が卓越している。住居跡はほぼ中央以南のこの土層中に発見された。

砂礫層にある礫は、いずれも梓川系統のもので、硬砂岩を主とし花こう岩・安山岩・チャート・礫岩・粘板岩・砂岩と粘板岩のホルンフェルス・ひん岩の円礫一部亜円礫である。硬砂岩・花こう

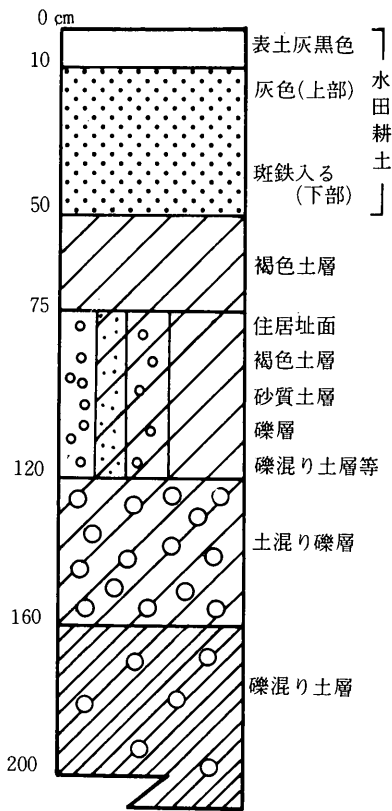
岩・安山岩のなかには大礫（径20×15・20×10cm）が多く、他は小礫か細礫が大多数である。時どき、径50×40cmの花こう岩や、50×30cmの硬砂岩の巨礫が散在している。

また住居跡内には径の平均35～55cmに及ぶ、硬砂岩・花こう岩・チャートの巨礫があり、利用されたものか、利用後投げこまれたものか不明である。

### 3. 遺跡の立地

以上に述べた堆積層は、乱流を物語るはん濫原の結果を示すもので、遺跡面にみられる礫層も土層も恐らく同時異相の堆積と考えられる。住居は土層を選んでつくられたものであろうが、実際には砂礫層に及んでいる。従って住居が営まれた時期は、前期の乱流の堆積の終わった後と考えられる。

堆積層の形成年代については、市文化財調査報告 No. 36, No. 41の島内遺跡群で述べたように、一般に新しいはん濫原の堆積層の形成年代の推定は、現在むしろ考古学的発掘の資料に負うことが大きい。島内地区のはん濫原の堆積も、奈良平安時代をあまりさかのぼらない時期とそれ以降の二つと推定するのが、現在の知識である。



第3図 地層断面図

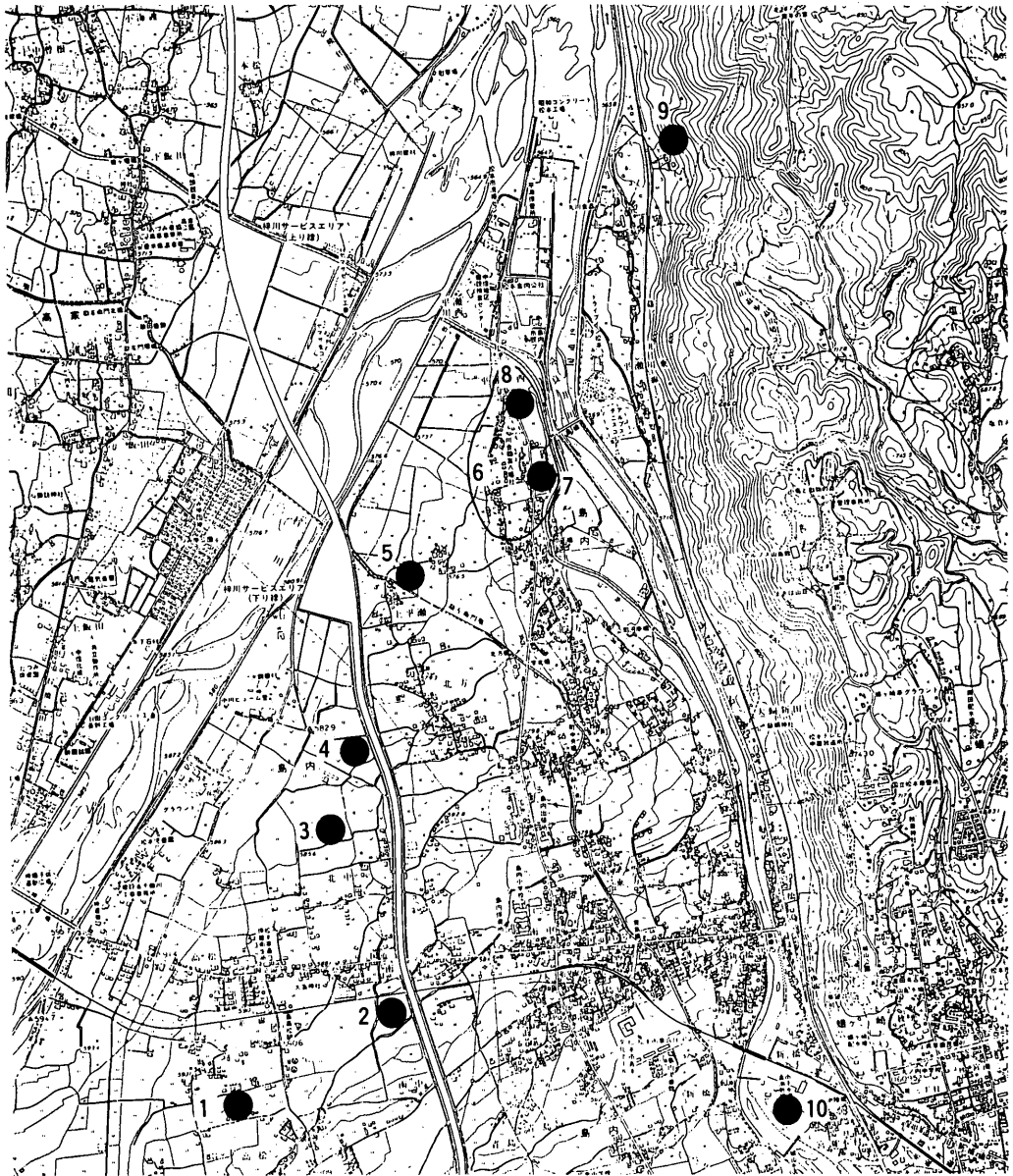


## 第2節 周辺遺跡

島内地区は松本市の西北端に位置し、西側に梓川、東側に北流する奈良井川が三角地帯を形成し古来より水田地帯として知られている地域と、奈良井川右岸の城山山麓地域とに分れる。水田地帯に分布している遺跡を総括して島内遺跡群と呼ばれている。島内遺跡群は梓川の影響により形成された微高地上に遺跡が点在している。これらの時代は平安時代から中世以降が主であるが、62年に発掘調査された高松遺跡は5軒の住居址が発見され、内1軒は奈良時代に遡ることが確認された。同遺跡は以前から、土師器、須恵器、灰釉陶器、内耳土器、古銭等が出土している。同じ段丘上を東へいくと、59年に発掘調査された南中遺跡がある<sup>(1)</sup>。同遺跡は市教委の調査や(財)長野県埋蔵文化財センターの調査結果から見て西側に中心があるものと推定されている。北側には今回報告される北中及び北方遺跡が続く。北中遺跡は58年に市教委により<sup>(2)</sup>、また、61年に(財)長野県埋蔵文化財センターにより発掘調査され、堂址の一部と見られる集石や石棺状遺構等が確認されている。北方遺跡は59年に市教委により調査され、平安時代の住居址6軒と土壌等が発見された<sup>(3)</sup>。また61年には前述の埋蔵文化財センターによって中央道長野線敷地内の発掘調査が進められ多くの遺構、遺物が確認された<sup>(4)</sup>。次の上平瀬遺跡は島内遺跡群の北端に位置し、以前の床下げ時に土器等の出土が確認されており市教委でも60年に発掘調査を実施して、平安時代の住居址2軒と建物址等を確認した<sup>(5)</sup>。同遺跡群の北側に平瀬遺跡があり土師器、須恵器、灰釉陶器が出土している。又、平瀬地区には平安時代の布目瓦を出土する法住寺跡や中世の城館跡の平瀬城館跡が知られている。奈良井川右岸の城山山麓地域へ移ると時代も多様になり遺跡の種類も多種になる。平瀬河東、鳥居山入口など山麓付近に縄文土器や石鏃の出土を見、泣坂といわれる岡田地区へ通じる古道付近の丘陵に平瀬坂下(泣坂)古墳群があり現在数基が確認されている。坂下(泣坂)古墳群の北側山腹に寺山遺跡があり、平安時代と見られる須恵器が出土している。山田地籍へ入ると老平、老根田、稲千原などの遺跡がある。老平からは平安時代の土師器・須恵器、老根田は縄文中期から後期のものと見られる土器・石鏃・打製石斧または有孔大珠、平安時代の須恵器・砥石、中世の鉄鏃など幅広い時代の遺物が確認されている。稲千原は当市では数少ない尖頭器を出土した所として知られており、他に打製石斧、磨製石斧など縄文時代の遺物が出土している。その他に山田地籍周辺から岡田地区一帯は古代に須恵器を生産した古窯址が数多く残っている。過去にその一部が調査<sup>(6)</sup>されたものの大部分は未調査のまま全容は不明で今後に期待される。

### 参考文献

- 藤沢宗平他『東筑摩郡・松本市・塩尻市誌』第二巻、歴史上 東筑摩郡・松本市・塩尻市郷土資料編纂会 昭和48年  
長野県史刊行会『長野県史 考古資料編』全一卷(1) 遺跡地名表 昭和56年  
注(1) 松本市教育委員会『松本市島内遺跡群北方遺跡・南中遺跡緊急発掘調査報告書』昭和60年3月  
(2) 松本市教育委員会『松本市島内遺跡群緊急発掘調査報告書』昭和59年3月  
(3) (財)長野県埋蔵文化財センター『長野県埋蔵文化財センター年報3』昭和62年3月  
(4) 同上  
(5) 松本市教育委員会『松本市島内遺跡群上平瀬遺跡緊急発掘調査報告書』昭和61年3月  
(6) 中島豊明、河西清光『松本市田溝古窯址の調査』『信濃』16-4



島内遺跡群

- |          |              |
|----------|--------------|
| 1. 高松遺跡  | 6. 平瀬遺跡      |
| 2. 南中遺跡  | 7. 法住寺跡      |
| 3. 北中遺跡  | 8. 平瀬城館跡     |
| 4. 北方遺跡  | 9. 坂下(泣坂)古墳群 |
| 5. 上平瀬遺跡 | 10. 宮瀬遺跡     |

第4図 周辺遺跡

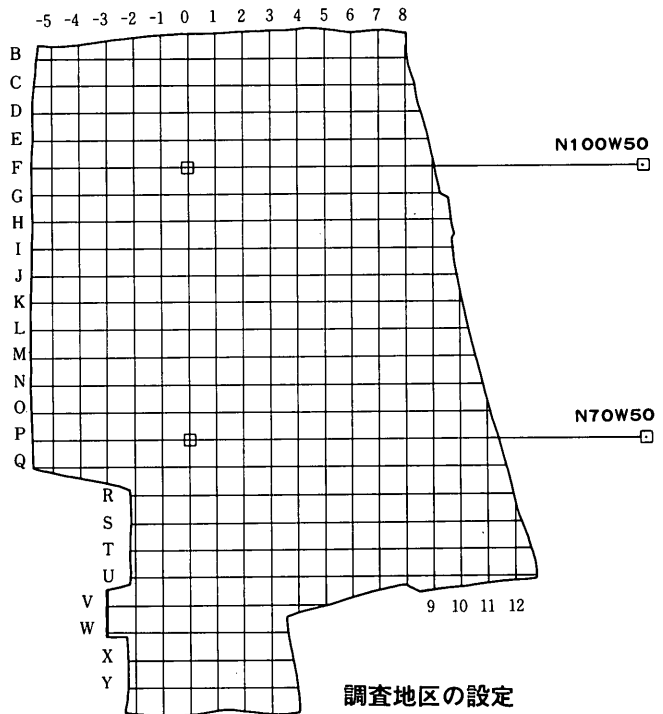
# 第3章 北方遺跡の調査

## 第1節 調査の概要

### 1. 調査地区の設定

北方遺跡周辺は梓川が形成した扇状地の末端に当り、微高地状をなしている。現状は水田で南から北に緩やかに傾斜している。調査地の西側50 mの所に約1 m程の段が南西から北東方向に形成されており、段丘の下段は耕作土下礫層となっている。このため段丘上を遺跡の範囲と推定した。

北方遺跡は59年に調査され、遺跡の東端がほぼ確認されたが、西側に隣接した水田内より、以前から土器の出土が知られており、遺跡の中心は西及び南西に広がっているものと予想された。土器が出土した水田は中央道長野線用地内に入るため、その西側に接する場所を今回の調査地とした。調査地内は同じ頃中央道長野線用地内の調査を実施された(財)長野県埋蔵文化財センターの好意により用地内の基準点(N100W50・N70W50)より西へ50 m引き出した点Fo・Poの2点を基準として、調査地内を3 mのメッシュで被った。この調査で使用した基準点はPoで、基本数値は次のとおりである。



基準点	Fo	X = 28100	Y = -50500	
	Po	X = 28070	Y = -50500	H = 581.593

## 2. 調査結果の概要（第6図）

北方遺跡は松本市大字島内に所在し、松本北西部の梓川と奈良井川に囲まれた水田地帯に位置する。周辺は梓川の影響を受けた扇状地の末端部で、近年まで水害があり一部は荒地であったところもある。遺跡は河川の繰りかえす氾濫によって形成された微高地にある。この微高地は南西から北東方向に続いており、遺構もこの方向に沿って検出された。

当遺跡は59年に1回目の調査が行なわれ、今回で2回目である。1回目の調査地は中央道長野線用地を挟んで東側にあたる。出土遺構は竪穴住居址が6軒、溝状遺構2基、土壇、ピット等が確認されている。これらはおもに調査地内の西側に片寄っていたため、遺跡の範囲は西側に中心があることが予想されていた。

今回の調査面積は3,700 m<sup>2</sup>である。検出面までの深さは約40～50 cm程で、全体が鉄分を含む黄褐色の砂質土である。特に西側及び南西側は黄灰色の砂で、非常に検出しにくい土層である。北西部は、旧流路があり部分的に礫層が露出している。検出した遺構は竪穴住居址、掘立柱建物址、竪穴状遺構、土壇、ピット、大甕埋設遺構で、出土状況は住居址が中央部に、他の遺構は南東及び北西側に集中している。以上調査地区の概要である。次に遺構別に調査概要を記述する。

### 竪穴住居址

合計17軒が確認された。平安時代中頃以降の住居址である。覆土中に礫が混入するものが多く、18住及び21住などのように大礫が投げこまれているものもある。切合は少ない。遺物は須恵器坏、土師器坏、甕、灰釉陶器碗の他にほぼ完形の灰釉陶器手付瓶、白磁輪花碗などが出土している。

### 掘立柱建物址

全部で6軒が確認された。時期は中世である。覆土は灰色の粘質、砂質であるため、中世以前の遺構とは判別しやすい。建物址3の柱穴より環状鉄製品が出土している。

### 竪穴状遺構

3基が確認された。時期は中世であろう。覆土は灰色の粘質、砂質で、小礫が混入する。竪穴状遺構2は多量の礫の投込みが見られた。遺物は陶器、白磁、及び少量の土師器、それに漆器片が出土している。

### 土壇、ピット

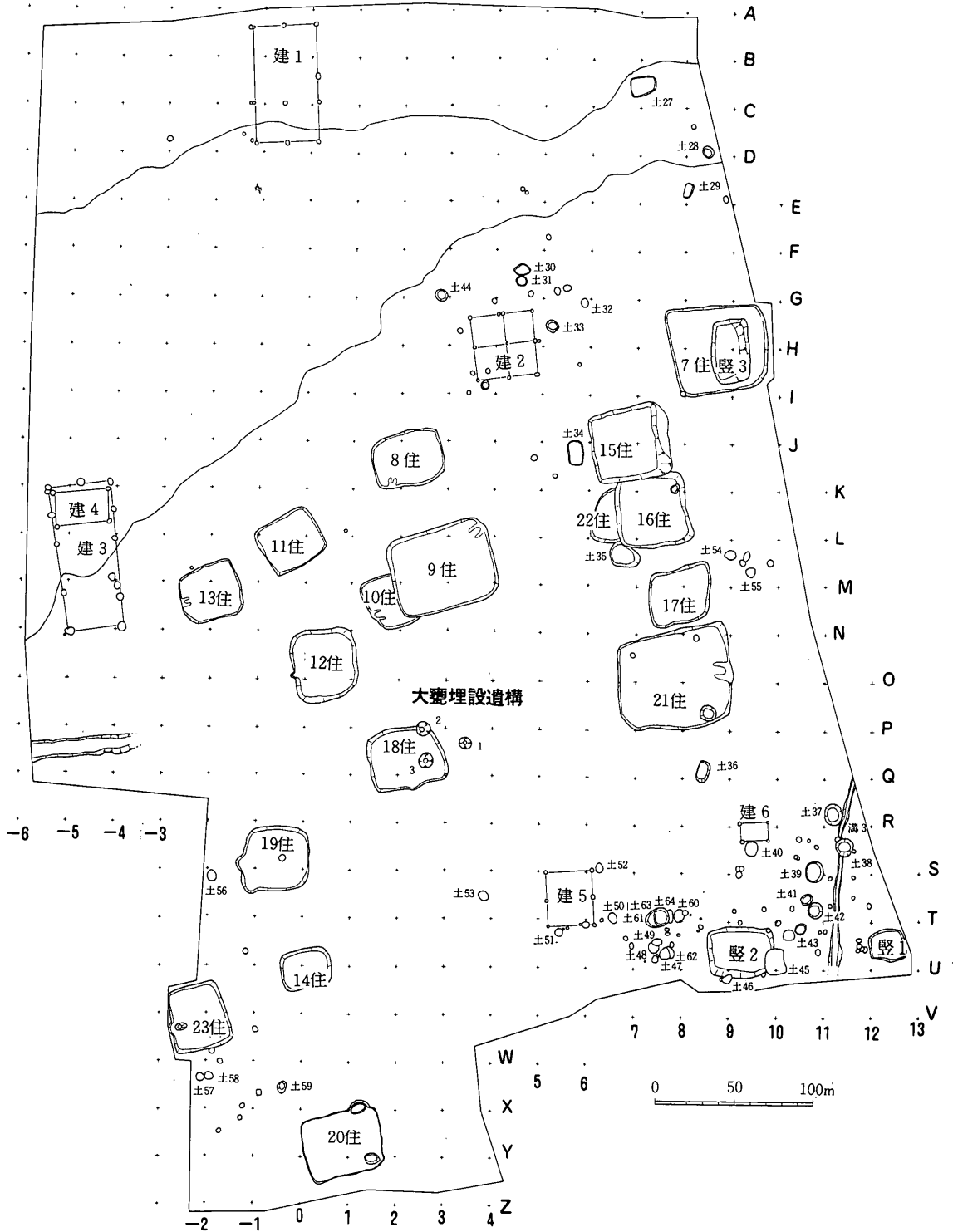
土壇は39基、ピットは138基が確認された。土壇は大半が墓址と思われる。ピットに炭化物が混入するものもある。遺物は土壇から須恵器、土師器、灰釉陶器、中世陶器、鉄器等、ピットから土師器、須恵器等が出土している。

### 大甕埋設遺構

大甕1、2、3の3基が確認された。位置関係は大甕2、3が18号住居址と切合い、大甕1は18号住居址の東側で三角形をなす。3基共上部の僅かな部分を欠くのみでほぼ完形に復元された。内部からは須恵器坏、四耳壺が出土している。







第6図 北方遺跡調査地区全体図



## 第2節 遺 構

### 1. 竪穴住居址（第7図～第23図）

#### 第7号住居址

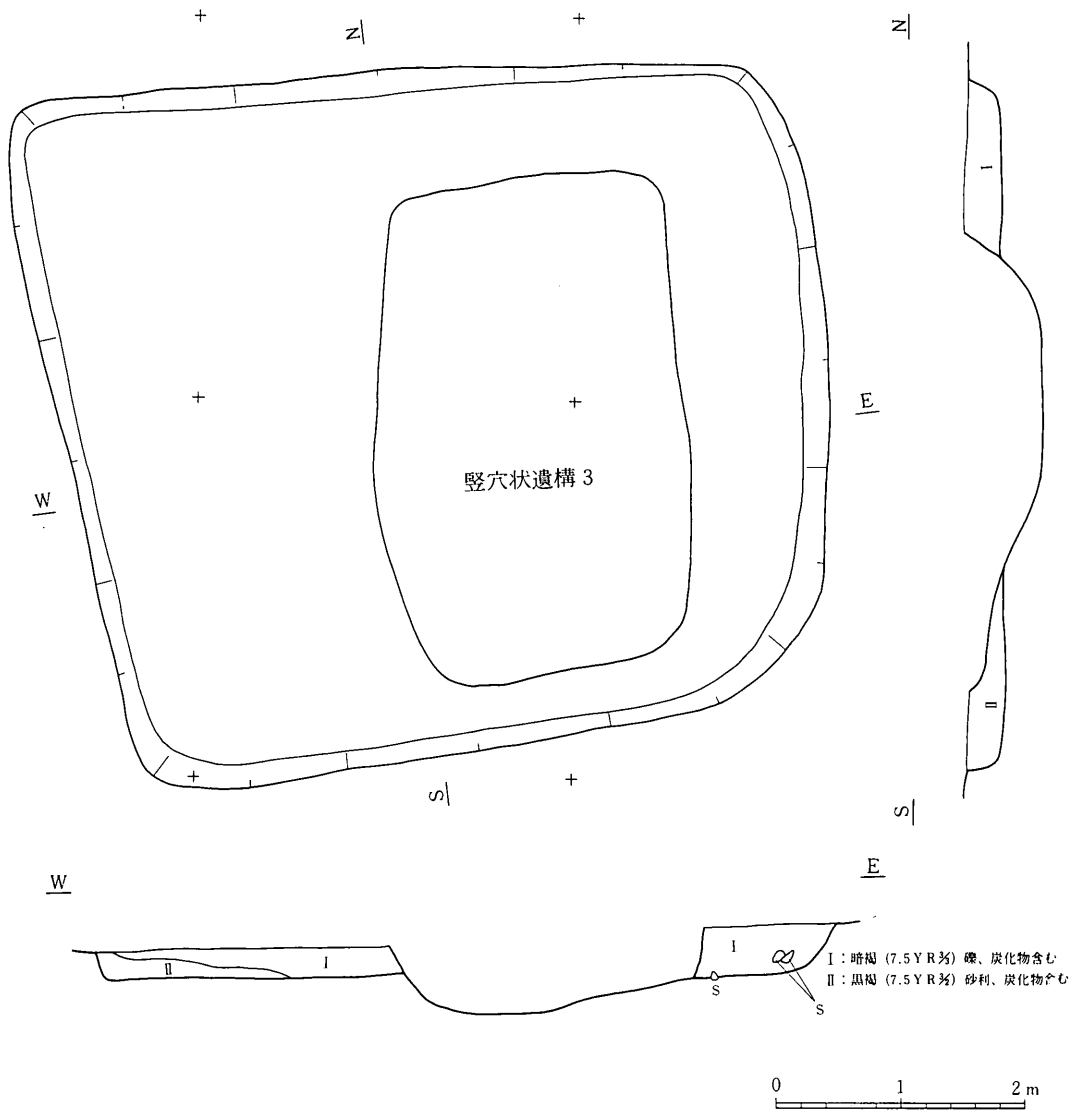
本址は調査地区東端北寄に検出された。竪3が本址内にあり断面観察の結果、本址は竪3より古い。平面形状は隅丸長方形を呈し、大きさは5.5×6.2 m、床面積は28.31 m<sup>2</sup>を測る。主軸方向はN-84°-Eを示す。覆土は全体に砂質で小礫が混入する。壁は礫層を掘り込むため北壁がやや不明瞭である。残存高は20 cm程である。床面は砂質に粘質土が僅かに混入するため他の住居よりやや堅い。東側は竪3に切られているため僅かしか残っていないが、西側床面に比べてやや高いため段があった可能性もある。カマドは東壁中央と思われるが不明である。出土遺物は土師器坏、甕、小形甕、須恵器坏、壺、甕、灰釉陶器碗、瓶、白磁である。図示したものは6点で、内3点は白磁であり、全て覆土中からの出土であった。遺物の総量は2,623 gである。

#### 第8号住居址

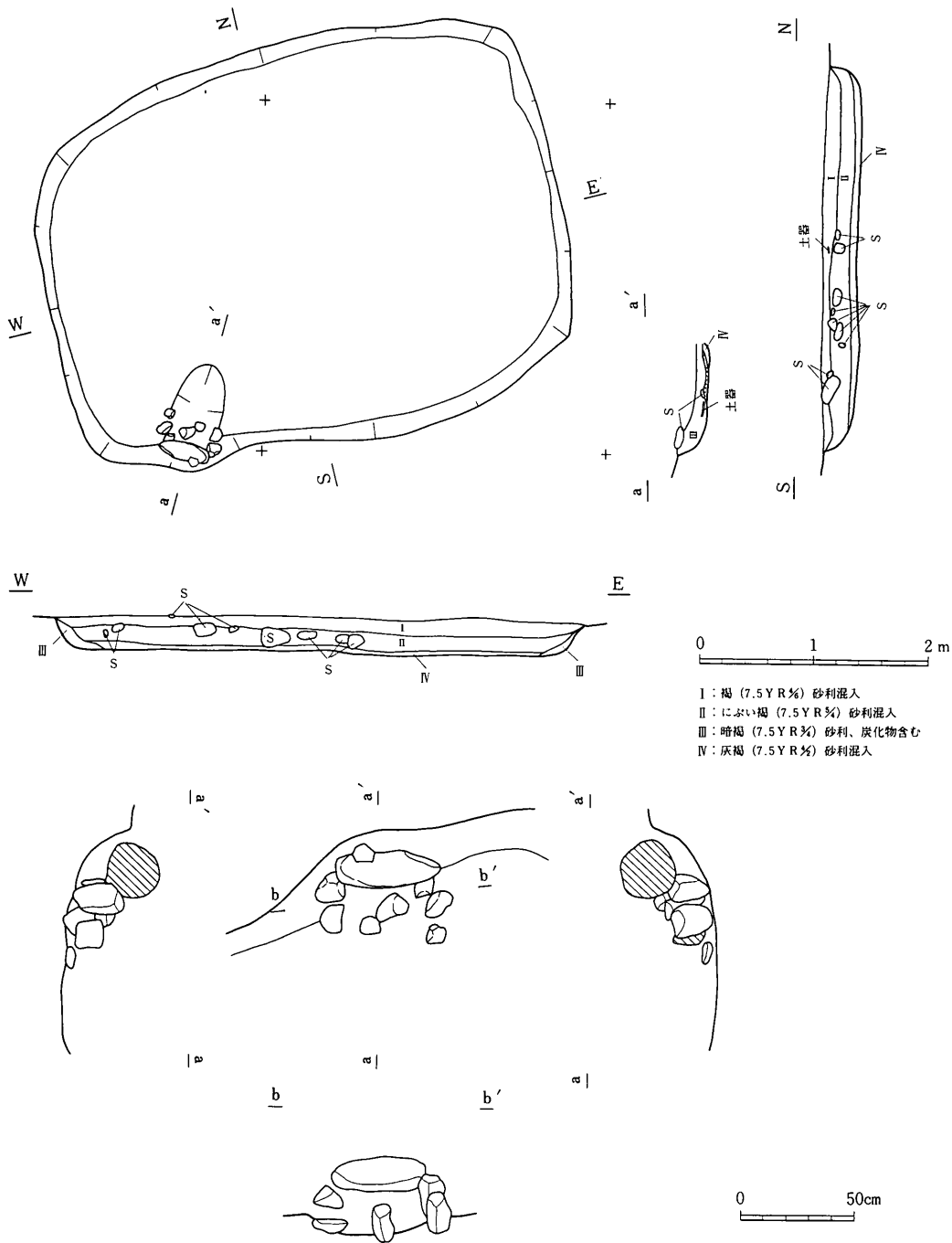
本址は調査地区中央部北寄に位置する。隅丸長方形を呈し、大きさは3.5×4.6 m、床面積は12.36 m<sup>2</sup>を測る。主軸方向はS-13°-Eを示す。覆土は4層に分割され、全体に砂質で砂利が混入する。II層中には5～30 cm大の垂円礫がある。III層中には僅かに炭化物を含む。壁は砂質で崩れやすく、下層の砂利層を僅かに掘り込んでいる。残存高は30 cm程を測る。床面は西側が砂質、東側が砂利で鉄分を多く含み、軟質である。カマドは南壁西隅寄に構築されている。石組カマドで石材は花崗岩を使用している。焼土及び炭化物も僅かしか見られない。II層中にある礫は中央部から南寄にあり、床面より約20 cm程上に投込まれている。礫下の床面上に炭化材片が出土した。柱穴は確認されなかった。遺物は土師器坏、埴、鉢、甕、小形甕、須恵器坏、壺、灰釉陶器碗、瓶であるが小片が多く、図示できたものは3点である。総量は1,655 gである。ほとんど覆土中からのもので床面一括出土のものはない。

#### 第9号住居址

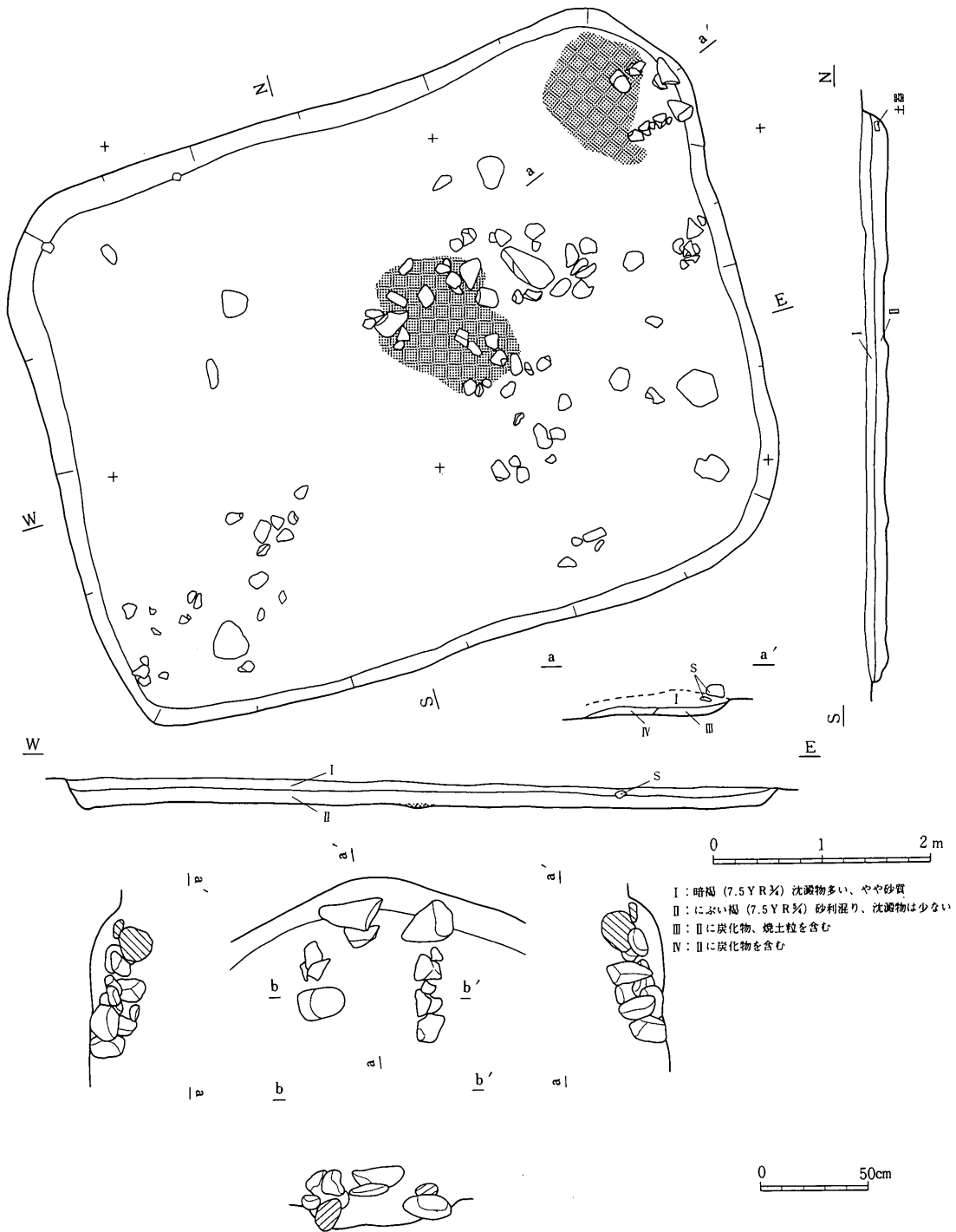
調査地区のほぼ中央部に位置し、10号住居址を切る。隅丸長方形を呈し、大きさは5×6.5 m、床面積は29.12 m<sup>2</sup>を測る。主軸方向はN-73°-Eを示す。覆土は2層に分割され、やや砂質で全体に小礫が混入する。壁は検出面に出ている礫層を切って掘り込んでいるため東、南、北壁は明瞭であるが、西壁は10号住居址と切合っているため不明瞭である。残存高は24 cm程を測る。床面は砂利層上で軟らかい。カマドは東壁北隅寄に構築されている。燃焼部は僅かに凹んでおり、周辺には炭化物及び焼土が多量に散在している。中央東側に10～20 cm大の垂円礫があって、床面より10～15 cm程上に投込まれている。礫下の床面上には焼土、炭化物が認められた。柱穴等は確認されなかった。



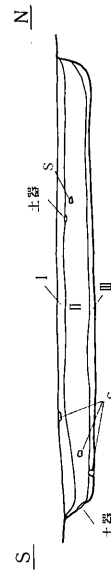
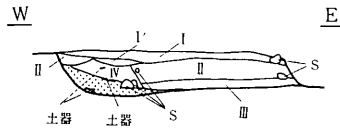
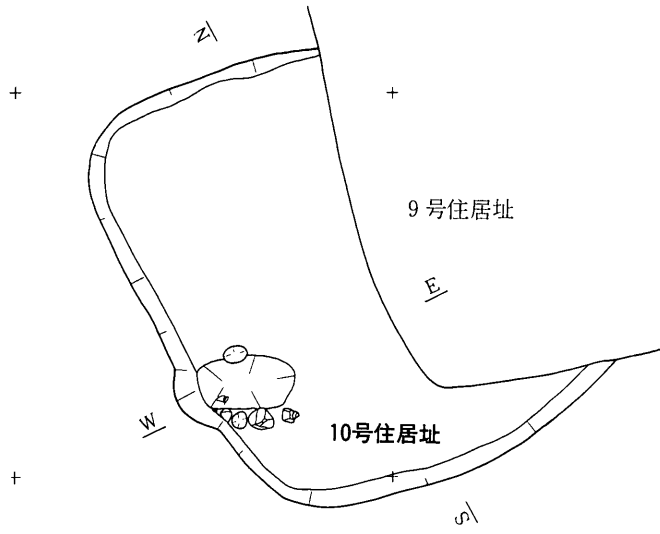
第7図 北方遺跡第7号住居址



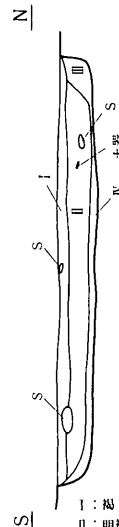
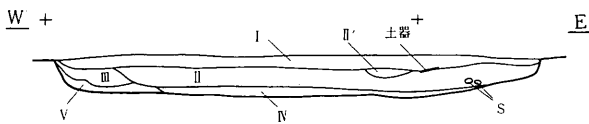
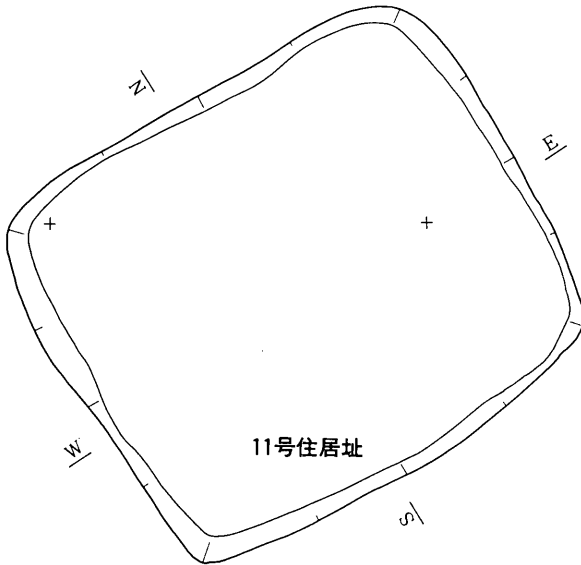
第8図 北方遺跡第8号住居址



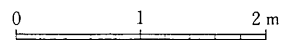
第9図 北方遺跡第9号住居址



- I : 褐 (7.5 Y R %) やや砂質、沈着物多量に含む
- I' : I に灰色土混入
- II : 褐 (7.5 Y R %) 暗灰色土混入
- III : 灰褐 (7.5 Y R %) 砂質、小砂利混入
- IV : 暗褐 (7.5 Y R %) 焼土塊、炭化物含む



- I : 褐 (7.5 Y R %) やや砂質、鉄分含む
- II : 明褐灰 (7.5 Y R %)
- II' : II に灰を含む
- III : 褐灰 (7.5 Y R %) II より砂質
- IV : 褐灰 (7.5 Y R %) 砂質
- V : にぶい黄褐 (7.5 Y R %) IV より砂質



第10図 北方遺跡第10・11号住居址

出土遺物は土師器坏、埴、鉢、台付鉢、甕、小形甕、須恵器坏、壺、甕、灰釉陶器碗、耳皿、瓶、白磁輪花碗で、図示したものは5点である。この内13の白磁輪花碗は北壁中央付近の床面より4～5 cm上の覆土中より出土した。12の灰釉陶器耳皿は東壁中央付近の覆土中より出土した。床面上からの良好な出土遺物はなかった。総量は4,560 gである。

#### 第10号住居址

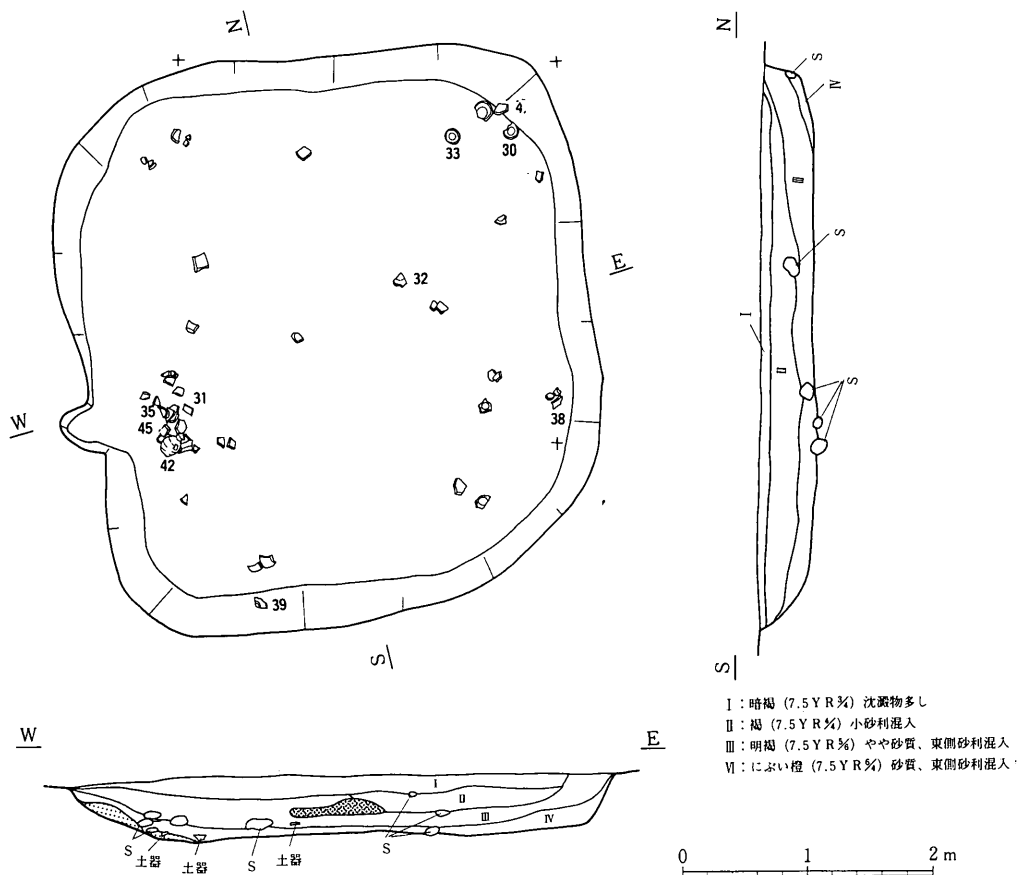
本址は調査地区の中央部に位置する。9号住居址に切られ、全容は不明である。推定形状は隅丸長方形で、大きさは3.8×4 m、床面積15.2 m<sup>2</sup>を推定する。覆土は4層に分割され、全体に小礫及び砂利を含む。床面は砂利及び砂質で軟らかい。壁は一部、砂利層を掘込んでいるため明瞭に区別しえるが、検出面は砂地のため平面プランの確定は困難であった。残存高は26 cm程である。カマドは西壁中央部に構築されており、石組カマドで片側の袖石が残存し他は袖石の抜取り痕が認められた。燃焼部は僅かに凹んでいて、多量の焼土塊が混入している。遺物は、土師器坏、埴、小形甕、須恵器坏、蓋、壺、甕、灰釉陶器碗、皿で、この内土師器甕片が47.5%の約半数を占め、ほとんどがカマド内及び周辺から出土した。図示したものは10点である。総量は9,611 gであった。

#### 第11号住居址

調査地区中央部西寄に検出された。形状は方形に近い隅丸長方形を呈し、大きさは3.4×4 m、床面積は11.15 m<sup>2</sup>を測る。主軸方向はN-59°-Eを示す。覆土は5層に分割される。土層に乱れがなく、全体に砂質で下層ほど砂質が強くV層はほとんど砂層である。北東側床面付近の覆土中に10 cm大程の礫が見られた。壁は北、南壁の東寄及び東壁は砂利層で割合明瞭に認められたが西寄及び西壁は砂層のため崩れやすく、不明瞭である。残存高は30 cm程である。床面は東寄が砂利層上で、西寄が砂層であり軟らかい。カマド及び、柱穴は確認できなかった。遺物は土師器坏、埴、鉢、甕、小形甕、須恵器坏、壺、灰釉陶器瓶、緑釉陶器片で、図示したものは4点である。出土総量は6,322 gである。

#### 第12号住居址

本址は調査地区の中央部西寄に検出された。形状は隅丸方形を呈し、大きさは4.5×4.2 m、床面積は13.33 m<sup>2</sup>を測る。主軸方向はS-78°-Wを示す。覆土は4層に分割される。全体に砂質で東側程砂利が混る。III層中に炭化物が1層を形成している(III')。この層は中央部やや西寄で、範囲は50～60 cmの不整形、床面から約16 cm程上部にあたる。僅かに焼土粒が含まれる。壁は砂利層を掘込んでおり、他に比較してゆるやかに立上がる。残存高は50 cm程である。床面は砂質及び北東側は砂利層上にあり全体に軟質である。カマドは西壁中央にあり壁外に張り出す。袖石は無かったが周辺には使用したと思われる30～50 cm大の石が散乱していた。張り出した壁際には僅かに焼土面が認められた。カマド付近の覆土中には炭化物及び焼土粒が混入している。柱穴等は確認できなかった。出土遺物は土師器坏、埴、皿、鉢、台付鉢、甕、小形甕、須恵器坏、蓋、壺、甕、灰釉陶器碗、皿、瓶である。この内、42は灰釉陶器手付瓶で口縁端部及び把手を欠くがほぼ完形である。出土状



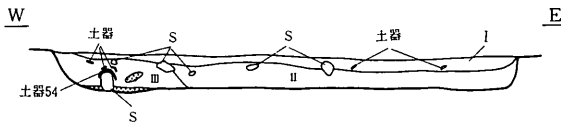
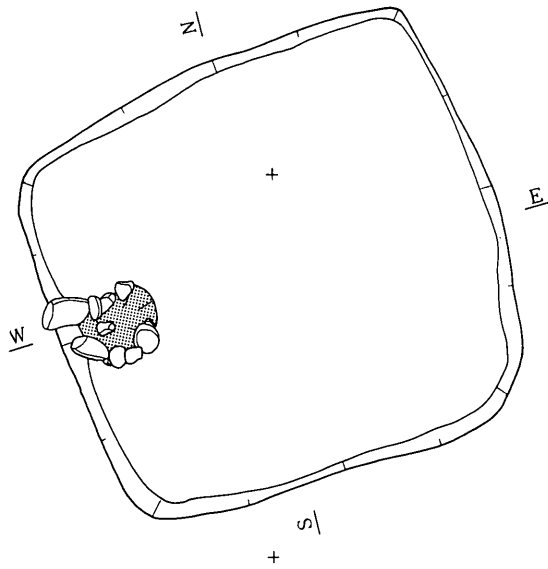
第11図 北方遺跡第12号住居址

態はカマド付近の西壁寄の覆土内で、床面より5 cm程上からの出土であった。他に特殊なものとしては44の土師器台付鉢片がある。図示したものは25点である。出土遺物の総量は今回の調査住居址中では多い方で11,286 gである。

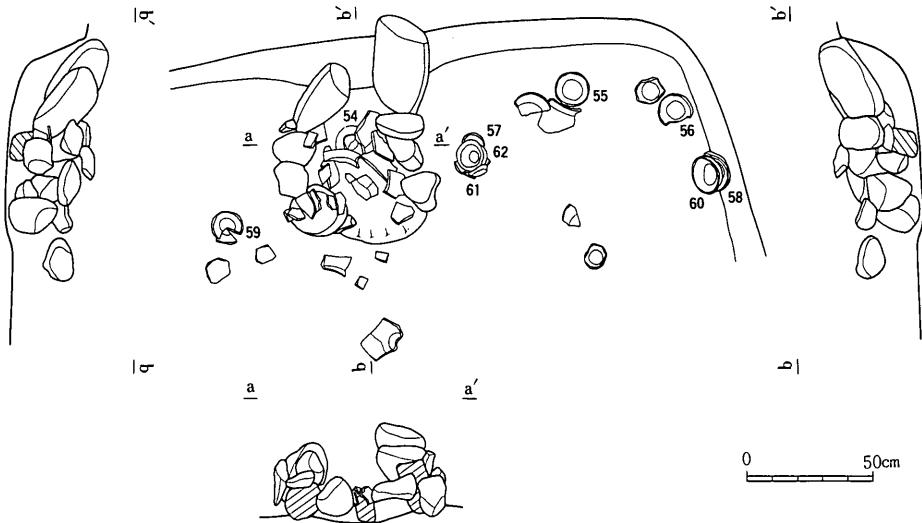
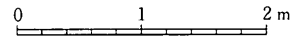
### 第13号住居址

本址は調査地区の中央部西寄に検出された。平面形状は隅丸方形を呈する。大きさは3.5×3.6 m、床面積は10.8 m<sup>2</sup>を測る。主軸方向はS-69°-Wを示す。覆土は分層が困難であるが、灰色粘質土塊と炭化物粒の有無により2層に分割される。全体に砂質で床面付近の覆土中に20~30 cm大の礫が入る。礫は中央部西寄に多い。東壁は砂利層を掘込んでいるので明瞭であるが、西壁側は検出面上が砂に近い砂質土であるためプラン確定が困難であった。崩れやすく立上りが不明瞭であった。残存高は26 cm程を測る。床面は灰色粘質土を含む砂質土で軟らかい。カマドは西壁中央部に構築されており、花崗岩を主体とした石組カマドで残存状況は良い。カマドの覆土内には炭化物及び焼土塊を含み、燃焼部は僅かに凹み、約20 cm大の細長い支柱石が立っている。柱穴及びピットは確認され





- I : 褐 (7.5 Y R 5/6) 沈澱物多、砂質
- II : 灰褐 (7.5 Y R 5/6) 砂質
- III : にぶい黄褐 (10 Y R 5/6) 炭化物、焼土塊を含む



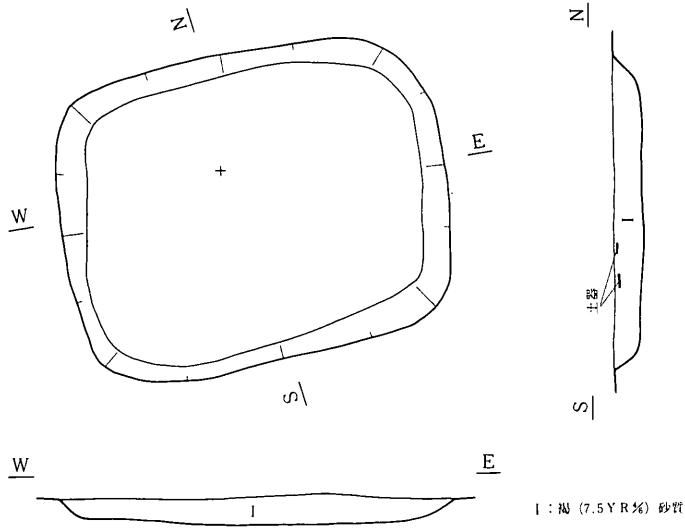
第12図 北方遺跡第13号住居址

なかった。出土遺物は土師器坏、埴、甕、小形甕、須恵器坏、蓋、壺、甕、灰釉陶器碗で、図示したものは10点である。本址は今回の調査住居址の中ではまとまった一括資料を出土した。55、56、57、58の須恵器坏、60の土師器坏、61、62の小形甕の7点はカマド北側の北西隅壁際の床面上から正位の状態で出土した。58、60は2枚重ねで、61は正位で62を押しつぶした様な状態であった。カマド内は多量の土師器甕片の他に、54の須恵器坏が出土した。これは支柱石上に逆位でかぶせられていた。2次焼成は認められない。59の須恵器坏はカマド南側に正位で出土した。出土遺物の総量は10,249 gである。

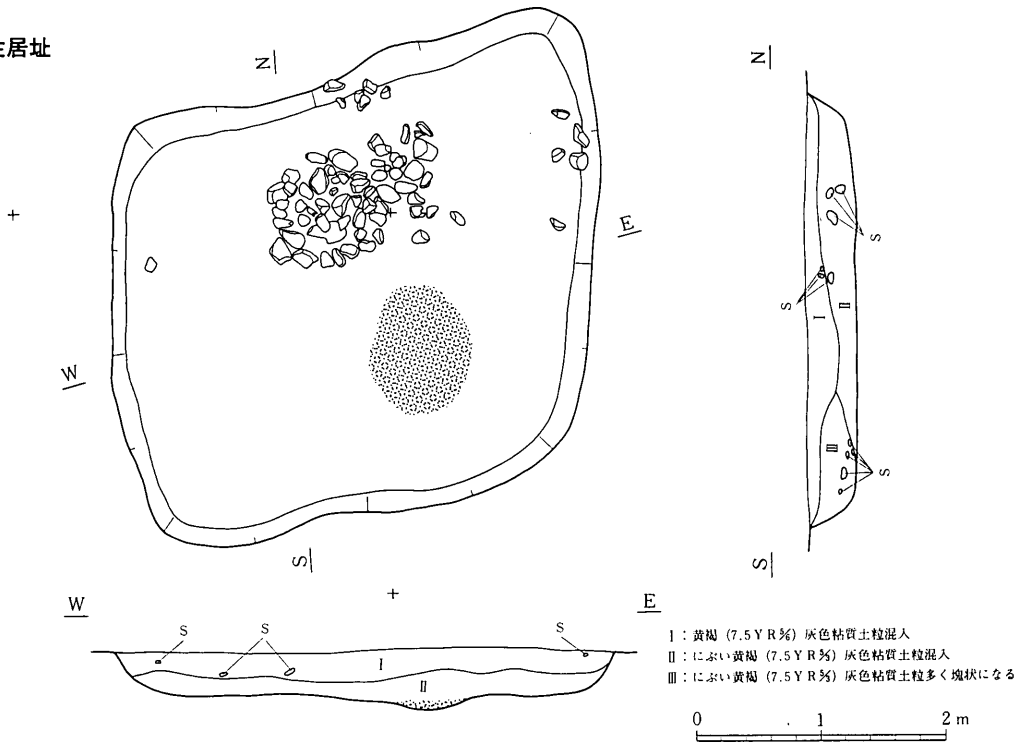
#### 第14号住居址

本址は調査地区の南側西寄に検出された。平面形状は隅丸方形で大きさは2.4×3.1 m、床面積は5.32 m<sup>2</sup>を測る。主軸方向はS-78°-Wを示す。覆土は1層で全体に砂層に近い砂質層である。壁の残存高は22 cm程である。床面は西側が砂利層上で、東側は砂層上にあり全体として軟質である。カマド及び柱穴、ピットは確認されなかった。南壁際東寄の覆土中に炭化物、焼土粒が多量に認められた。厚さ約10 cm、範囲は20×80 cm程の不整形である。同様なものは12号住居址、19号住居址に認められたがこれらに比較して本址は焼土が多く、炭化物は少ない。出土遺物は土師器坏、埴、耳皿、甕、小形甕、筒形土器、須恵器坏、蓋、甕、灰釉陶器瓶で図示できたものは4点のみである。出土総量は2,255 gである。

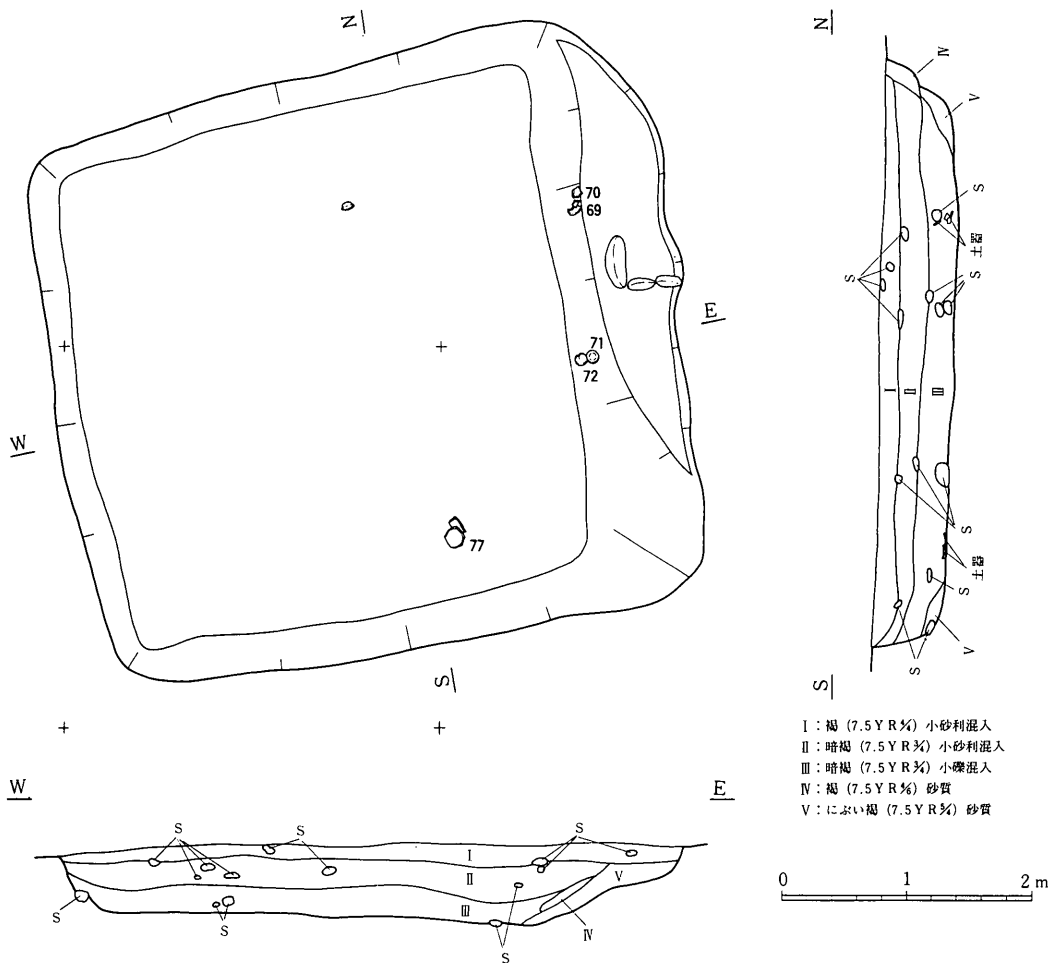
14号住居址



17号住居址



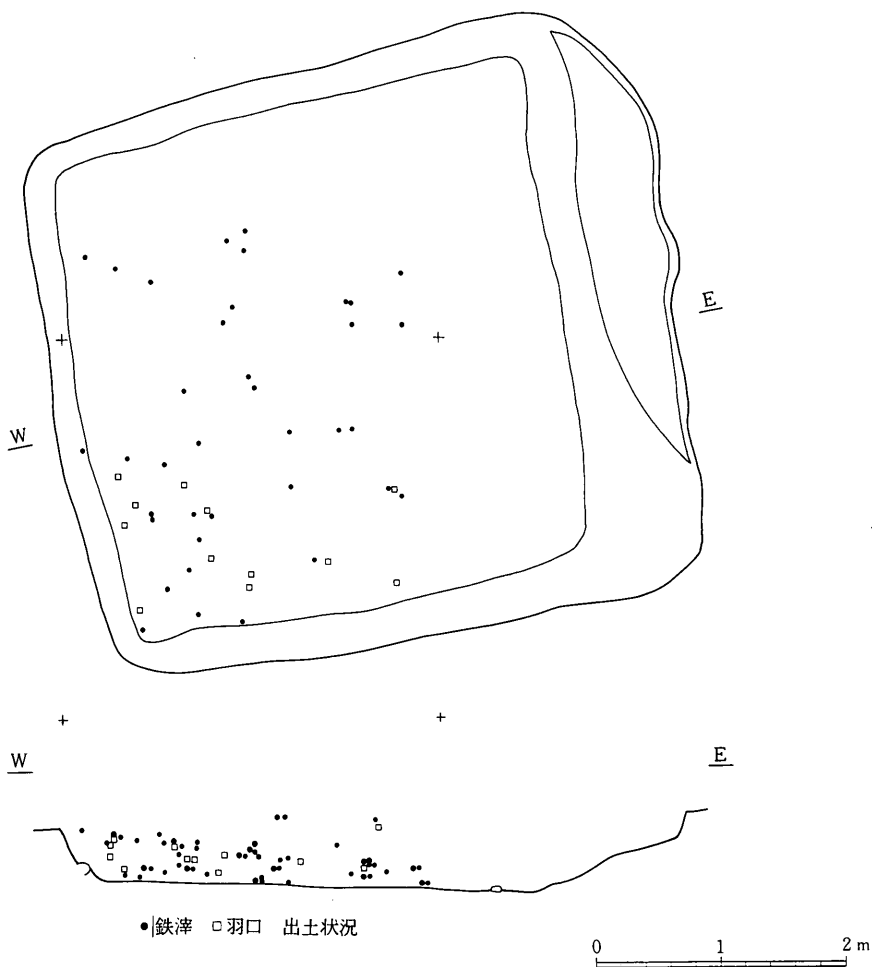
第13図 北方遺跡第14・17号住居址



第14図 北方遺跡第15号住居址(1)

### 第15号住居址

本址は調査地区の中央部東寄に位置し、16号住居址を切る。平面形状は隅丸方形を呈し、大きさは4.6×5 m、床面積は15 m<sup>2</sup>を測る。主軸方向はN-77°-Eを示す。覆土は分層は困難であるが砂利、小礫、砂質の僅かな違いで5層に分割した。全体は砂利層で下層ほど砂質土が強い層となる。中層から下層にかけて10~30 cm 大の礫が混入する。特に南側に多い。壁の残存高は64 cmと割合深い。カマドについては破壊されていて確認できなかったが、東壁中央やや北寄の壁際にわずかに焼土が見られたため、この場所に推定できる。柱穴及びピット等は確認できなかった。この住居址の特徴は鉄滓及び羽口を出土したことである。出土状況は平面的に見ると住居址内西側で南西隅に集中する傾向が見られる。特に羽口にその傾向が強い。断面で見ると鉄滓は西から東にかけて上層から下層へと出土位置が移り、羽口にも僅かにその傾向が見られるが羽口は中層からの出土が多い。



第15図 北方遺跡第15号住居址(2)

これら鍛冶関係の遺物に伴う、住居址内の施設はあきらかではないが、他の住居址と比べての相違点は東側に幅50 cmの不整形な段を持つことであるが鍛冶関係のものと断定はできない。その他、炉址やそれに伴う焼土、炭化物等は確認されなかった。出土遺物については土師器坏、埴、皿、鉢、台付鉢、甕、筒形土器、須恵器坏、蓋、壺、灰釉陶器碗、皿、瓶、緑釉陶器片である。特殊な遺物としては台付鉢、筒形土器が掲げられる。図示したものは14点である。出土総量は11,497 gであった。



### 第16号住居址

本址は調査地区中央部東側に位置し、15号住居址に北壁を僅かに切られ、22号住居址を切る。平面形状は隅丸方形を呈し、大きさは4.6×4.7 mで床面積は15.99 m<sup>2</sup>を測る。主軸方向はN-78°-Eを示す。覆土は3層に分層され、土層に乱れはない。全体的にやや砂質であるが粘質土が含まれるため硬い。II層には少量の炭化物が含まれる。壁は西壁側ほど砂利となる。残存高は48 cmを測る。カマドは確認されなかった。ピットは北東隅にP<sub>1</sub>のみである。規模は長軸66 cm、短軸で46 cm、深さ10 cmを測り楕円形を呈する。出土遺物は土師器坏、埴、皿、鉢、耳皿、台付鉢、甕、小形甕、筒形土器、須恵器坏、壺、甕、灰釉陶器碗、皿である。15号住居址と同様に、台付鉢、筒形土器を出土している。図示したものは10点であり、出土総量は9,395 gである。他には覆土中より3点の鉄滓が出土した。羽口の出土は見られなかった。

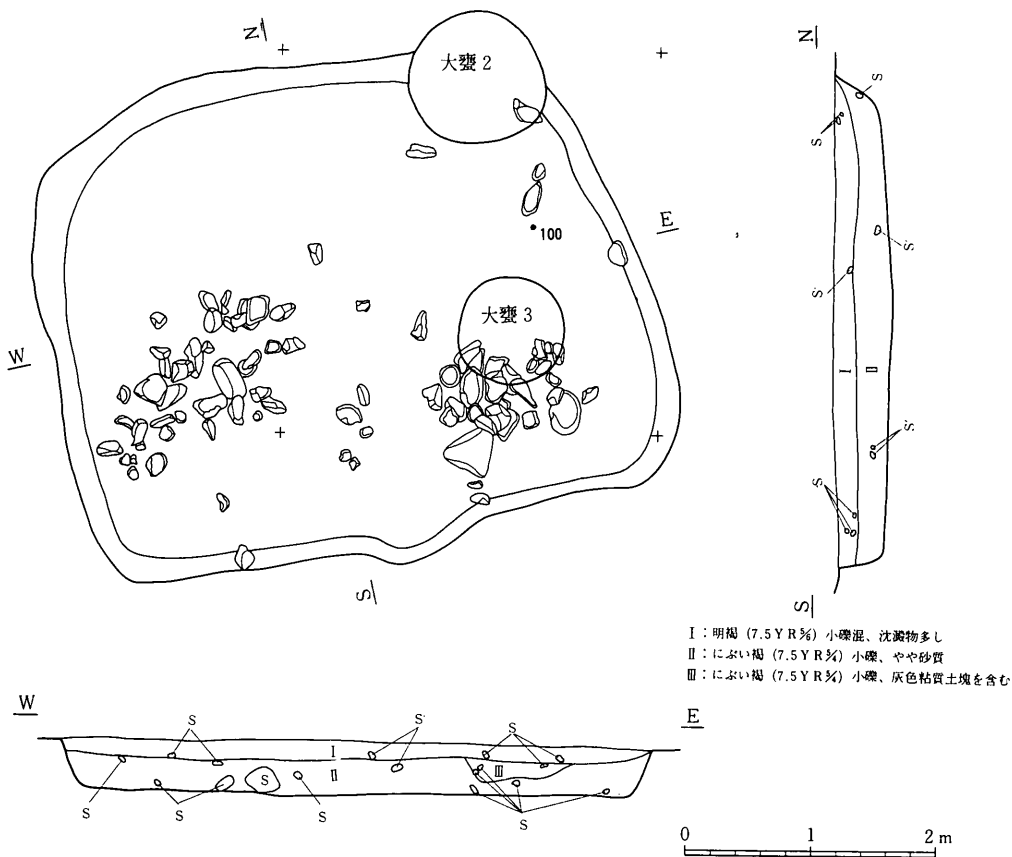
### 第17号住居址

本址は調査地区の中央部東側に検出された。16号住居址と21号住居址に隣接する。平面形状はややゆがんだ隅丸方形を呈し、大きさは3.6×3.9 m、床面積は10.92 m<sup>2</sup>を測る。主軸方向はN-77°-Eを示す。覆土は3層に分層される。全体に砂質土で小礫及び砂利を混入する。壁は上部が砂質、下部に砂利層が露出しており、上部は崩れやすい。残存高は28 cm程である。カマド及び柱穴等は確認されなかった。中央部北壁寄に集石状の礫が見られた。礫の大きさは10~20 cm大で、床面から10 cm程上面である。径約1 m程の円形状で、東、北側は崩れている。中央部やや東寄の床面上に焼土粒を含む灰層が見られた。100×80 cmの楕円形を呈し、床面を僅かに掘り凹められている。層の厚さは約5 cm程である。出土遺物は白磁と刀子のみであった。

### 第18号住居址

本址は調査地区中央部南寄に検出された。大甕埋設遺構2、3と重なる。状況から見て大甕埋設遺構が新しい。平面形状は隅丸長方形を呈し、大きさは3.9×4.8 m、床面積は14.22 m<sup>2</sup>を測る。主軸方向はN-80°-Eを示す。覆土は全体に砂質で小礫が混入する。土層に乱れはないがIII層は大甕埋設遺構3に関係するものと思われる。II層には灰色粘質土塊が含まれる。壁の残存高は42 cm程である。下部に砂利層が露出している部分があり、上部の砂質部分は崩れやすい。カマド及び柱穴等は確認できなかった。床面は砂利、砂質土で軟質である。床面より2~5 cm上の覆土中に10~30 cm大の円礫及び垂円礫の投込みが見られる。大きく2ヶ所に分けることができる。中央部西壁寄と東側南壁寄である。前者中には焼けたような花崗岩片もあるためカマドの石材があるかもしれない。後者は礫が大きく、平たいものが多い。またこの上には大甕埋設遺構3があった。出土遺物は土師器坏、埴、鉢、甕、小形甕、筒形土器、須恵器坏、蓋、壺、甕、四耳壺、灰釉陶器碗、皿、瓶で、図示したものは11点である。特記すべき遺物は見込み部分に『大井』の刻書がある灰釉陶器碗(100)である。残存度は2/3程であり、欠損部分にも刻書が続いている。また底部裏面にも見られるが全容は不明である。出土遺物の総量は14,146 gで調査遺構中2番目に多い。

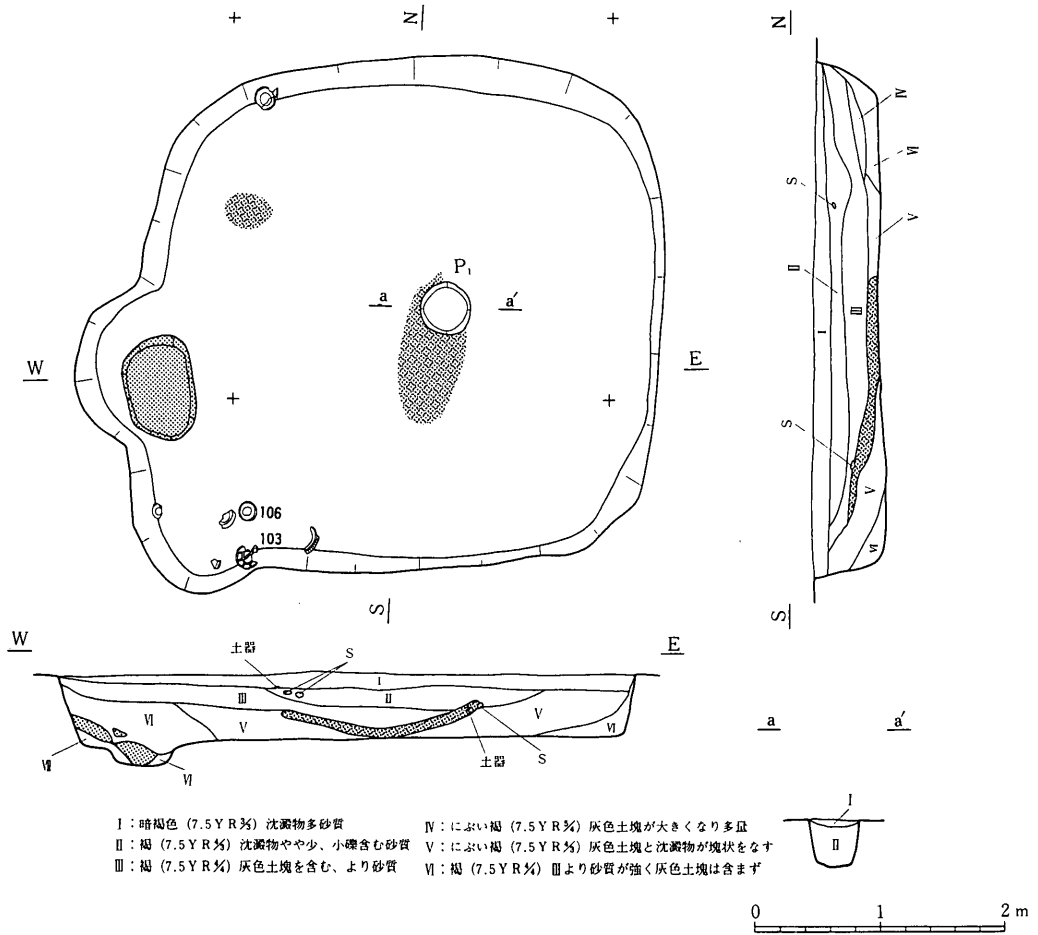




第17図 北方遺跡第18号住居址

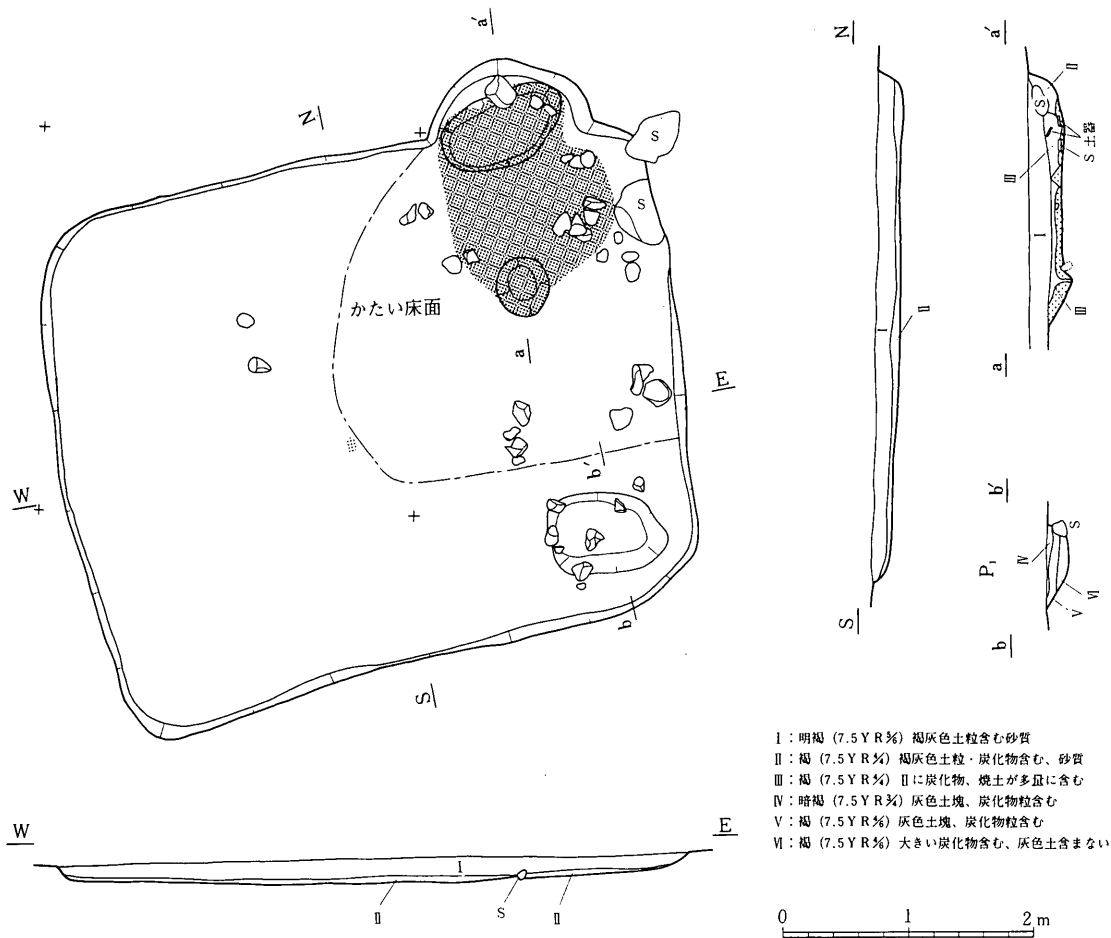
### 第19号住居址

本址は調査地区南側西寄に検出された。平面形状は隅丸方形で南西隅に張出部がある。大きさは3.9×4.1 mで床面積は13.32 m<sup>2</sup>を測る。主軸方向はS-85°-Wを示す。覆土は5層に分割される。全体に砂質で下層及び壁際が砂となる。V層とIII層の間に炭化物層が形成されている。この層は焼土面はなく、焼土粒が少量含まれる程度である。断面で見ると方向は南から北へ下っており先端は床面上に達している。12、14号住居址と同様なものと思われる。壁は砂に近い砂質土で非常に不明瞭であり、特に北壁及び西壁は検出が困難で、107の土師器坏が壁際の床面上より出土したため立上りが確認された。残存高は60 cm程を測る。床面は西半分が砂質土、東半分が砂利となり全体に軟質である。カマドは西壁中央部で壁外に張出している。袖石は不明である。カマドの中央部は浅い掘込みとなっており、焼土塊、焼土粒、炭化物が認められる。中央部やや東寄にP<sub>1</sub>が確認された。径40 cm程で円形を呈し、深さ40 cmを測る。柱痕は不明である。出土遺物は土師器坏、埴、鉢、甕、



第18図 北方遺跡第19号住居址

小形甕、筒形土器、須恵器坏、蓋、壺、甕、灰釉陶器碗、皿、瓶で図示したものは8点である。この内、106は完形の土師器坏で南西隅寄の床面上に正位で出土し、近くから103が出土した。遺物の出土総量は、9,575 gである。

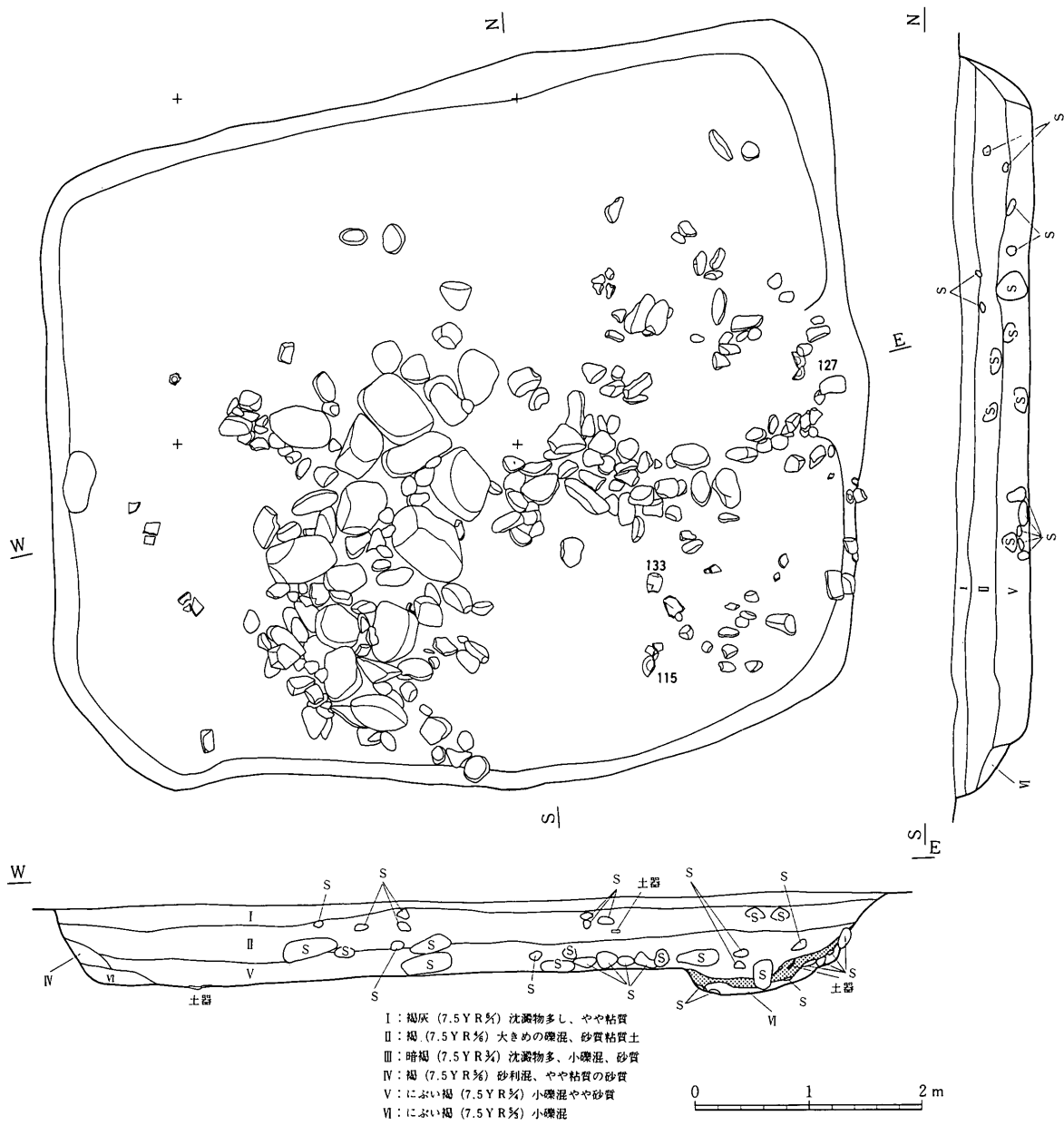


- I : 明褐 (7.5 Y R 5/6) 褐灰色土粒含む砂質
- II : 褐 (7.5 Y R 5/6) 褐灰色土粒・炭化物含む、砂質
- III : 褐 (7.5 Y R 5/6) IIに炭化物、焼土が多量に含む
- IV : 暗褐 (7.5 Y R 5/6) 灰色土塊、炭化物粒含む
- V : 褐 (7.5 Y R 5/6) 灰色土塊、炭化物粒含む
- VI : 褐 (7.5 Y R 5/6) 大きい炭化物含む、灰色土含まない

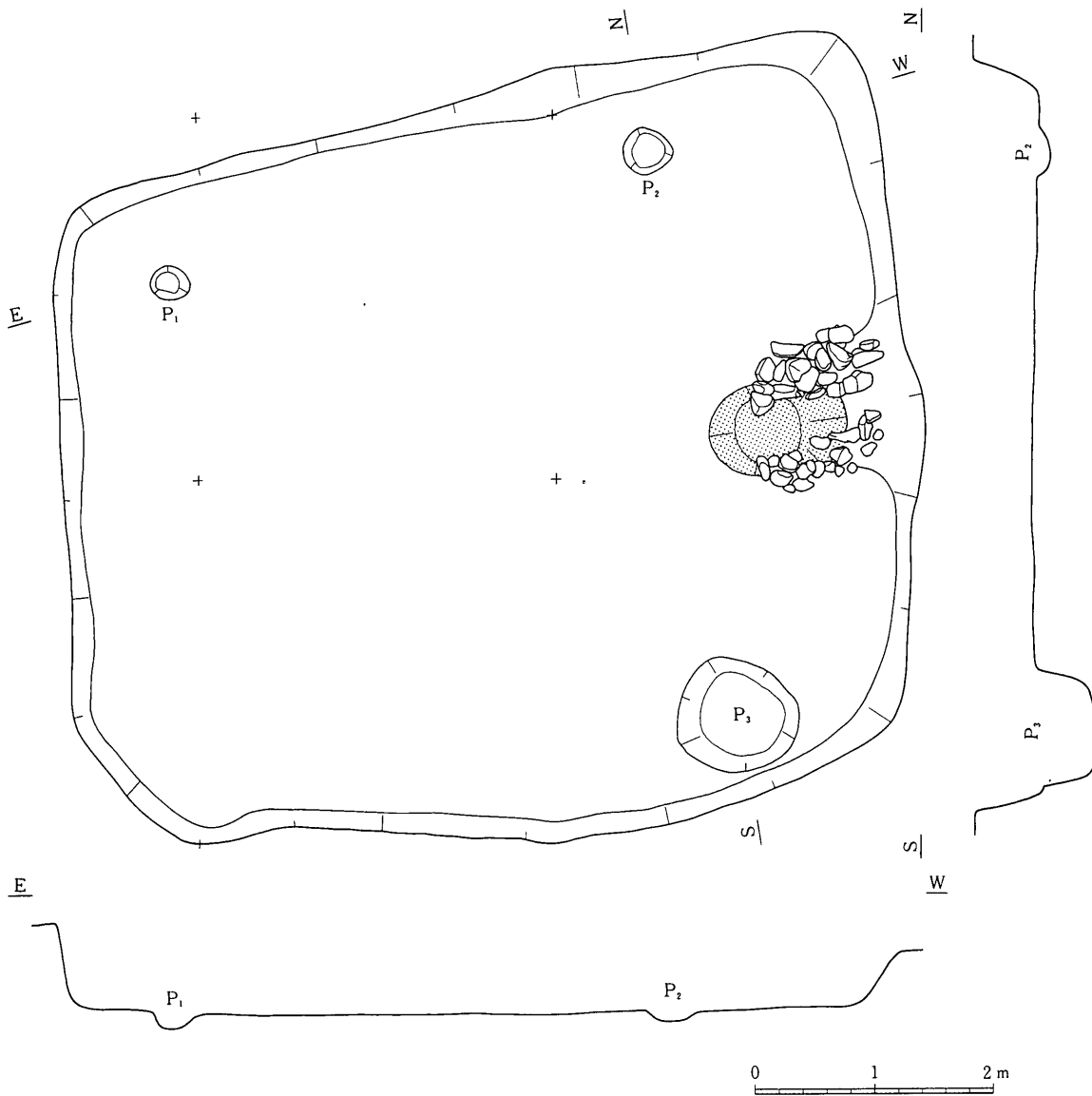
第19図 北方遺跡第20号住居址

第20号住居址

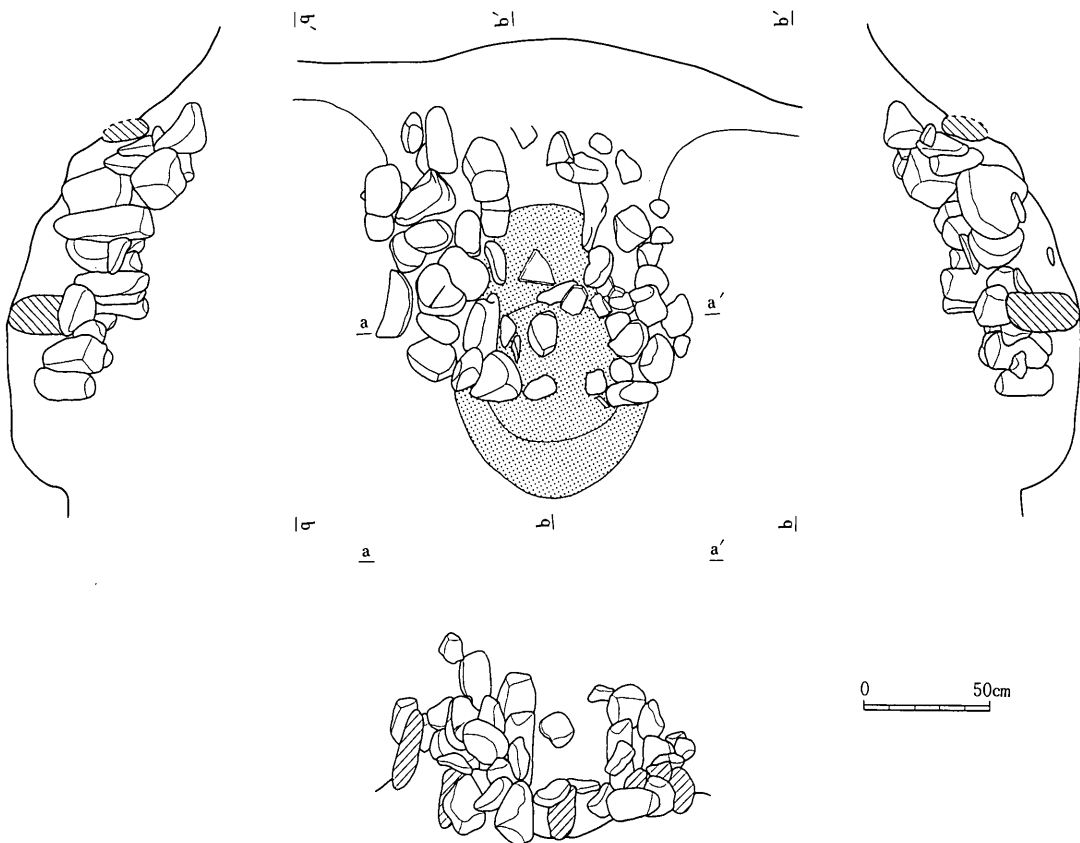
本址は調査地区の南端に検出された。平面形状は隅丸長方形を呈し、大きさは4.1×4.9 m、床面積は18.52 m<sup>2</sup>を測る。主軸方向はN-12°-Wを示す。覆土は全体に砂質土で小礫が混入する。分層は困難であるが、鉄分等の沈殿物の違いによって2層に分割される。北側から西側にかけて砂質が強い。壁の残存高は20 cm程で比較的浅い。床面はほぼ砂利層上である。中央部から北東側にかけて灰褐色粘質土を含み、堅い床面がある。カマドは北壁東端にあり、壁外へ張出す。袖石は不明である。カマド周辺の比較的広い範囲に炭化物、焼土が散布して浅い凹みとなっている。ピットは南東隅にP<sub>1</sub>がある。形状は不整形な楕円形を呈し、大きさは95×60 cm、深さは10 cm程を測る。内部は10 cm大程の礫と炭化物が混入する。住居址内の出土遺物は土師器坏、埴、鉢、甕、小形甕、須恵器坏、甕、灰釉陶器碗、瓶であり、多くはカマド及び周辺の炭化物の範囲より出土した。ほとんどが破片であり、図示し得たものは2点のみであった。総量は1,073 gである。



第20図 北方遺跡第21号住居址(1)



第21图 北方遺跡第21号住居址(2)



第22図 北方遺跡第21号住居址(3)

### 第21号住居址

本址は調査地区東側地区外寄に検出された。平面形状は隅丸長方形を呈し、大きさは6.1×7 m、床面積は36.67 m<sup>2</sup>を測り、今回調査住居址中最大の規模をもつ。主軸方向はN-82°-Eを示す。覆土はI層にやや粘質で灰色のつよい褐灰色土があり、明確に分層できる他は分割しにくい混入物等の違いによって6層に分層した。I層以下は砂質分が強く、壁際は小礫が混入する砂層となる。壁は南壁以外は確認しやすかった。南壁の検出面は南側に中世の遺構が続くためか覆土と検出面の土質が非常に類似しているためプランが不明瞭であった。また南壁は鉄分等の沈殿物が多い砂質土で崩れやすい。壁の下部は砂利層を掘込んだため砂利層が露出しており、床面はこの上にある。カマド北側からP<sub>2</sub>周辺、及び南西隅周辺にやや堅い面が認められる。カマドは東壁中央部に構築されている。袖石は内側に縦長の石を立てて、外側にはそれを支えるように10~20 cm 大の円礫が多量に使用されている。全体に使用礫は小さい。燃烧部は掘り凹められ、多量の焼土粒、炭化物、灰を含む。ピットは北壁側東西にP<sub>1</sub>、P<sub>2</sub>、南壁東隅にはP<sub>3</sub>が確認された。P<sub>1</sub>、P<sub>2</sub>は径40 cm 前後の円形で、



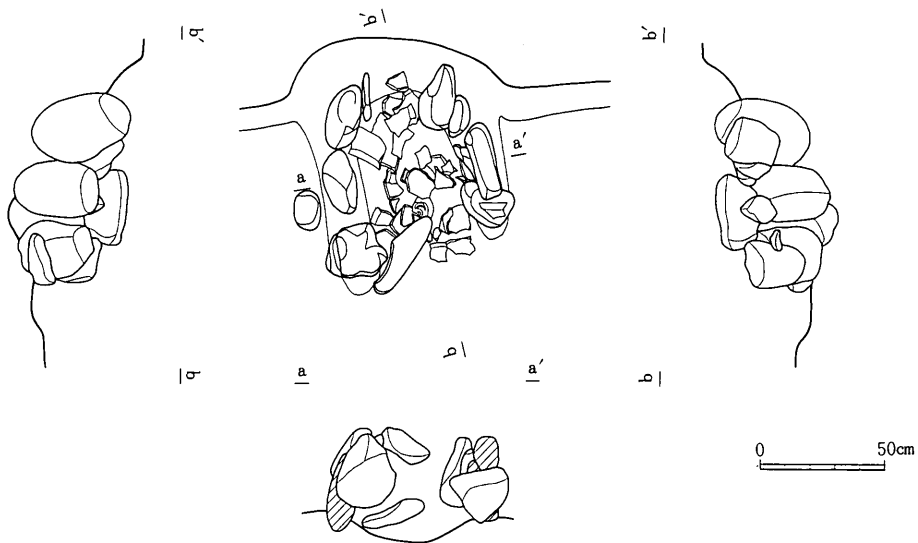
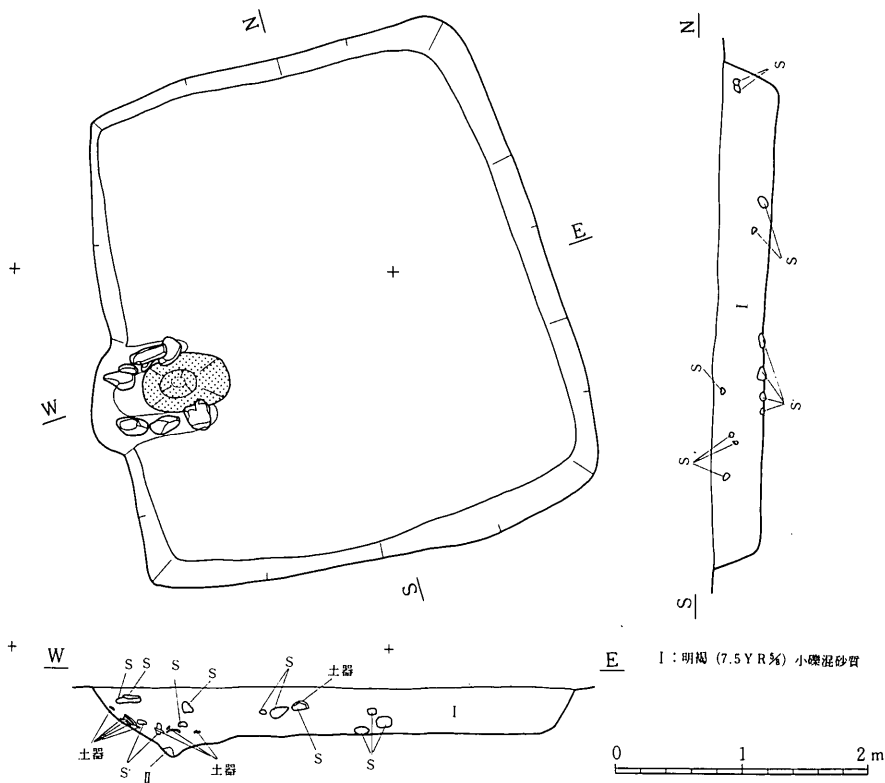
深さは10 cm程である。P<sub>3</sub>は径100 cmを測る円形で大形のピットである。深さは50 cm程を測る。炭化物及び灰色粘質土を含む暗褐色土である。遺物は底部より121の土師器坏が出土している。本址の特徴は覆土中に見られる集石状の投込みの礫が大きなものが多いことと、礫の量が多いことである。集石状の投込みは平面的に見ると2つのブロックに分けることができる。1つは中央部、他はカマド周辺である。前者は10～80 cm大の大形の礫で、後者は10～40 cm大の小形のものが多い。断面的に見ると床面上からは覆土中層までの間に入っている。出土遺物は土師器坏、埴、鉢、台付鉢、甕、小形甕、須恵器坏、蓋、壺、甕、四耳壺、灰釉陶器碗、皿、瓶、緑釉陶器、磁器、陶器である。これらの内陶器については中央部南端のI層内より完形で出土した瀬戸美濃系陶器のおろし皿(135)である。出土状態は本址検出面の灰色の強い粘質土、いわゆる中世遺構に見られる土層でおおわれており、上面より10 cm程のところ逆位に出土した。本址の所属時期よりかなり新しいもののため上面で確認できなかった遺構があるとも考えられるがここでは一応本住居址出土遺物として図示した。他は特に礫間の覆土中及びカマド周辺の床面上より127の灰釉陶器皿、133の灰釉陶器長頸瓶等が出土した。図示したものは30点で総量は調査遺構中量も多い27,504 gである。他に鉄製品では刀子、鉋、釘が出土している。

#### 第22号住居址

本址は調査地区中央部東寄に検出された。16号住居址に切られており全容は不明である。平面形状は隅丸方形を推定する。覆土は小礫を多量に含む砂質土で分層できない。壁の残存高は25 cm程である。床面は礫層上で東側やや傾斜している。出土遺物も少量で、土師器甕、須恵器坏、甕の小破片のみで図示できるものはなかった。総量は70 gである。

#### 第23号住居址

本址は調査地区南西端部に検出された。平面形状は隅丸長方形を呈し、大きさは4×3.7 m、床面積は11.55 m<sup>2</sup>を測る。主軸方向はS-73°-Wを示す。覆土は分層できず、全体に小礫が混入する砂質土である。西側床面付近は砂層となる。壁は西壁が砂質土、東壁下部はレンズ状に砂利層が露出している。残存高は44 cm程である。中央部やや西寄に集石状の投込みが見られた。床面より5 cm程上で礫の大きさは10～40 cm大の円及び垂円礫である。この内、火を受けたり、ススが付着している花崗岩もある。カマドは西壁やや南寄に構築され、壁外へ張出す。袖石は30～50 cm大の円礫を使用して残り良好である。燃焼部は2段に掘り凹められ、深さは15 cm程である。柱穴及びピットは確認されなかった。遺物は土師器坏、埴、皿、鉢、甕、小形甕、筒形土器、須恵器坏、壺、甕、灰釉陶器碗、皿、瓶である。図示したものは11点である。出土状況は主に集石状の礫内及び周辺の覆土中とカマド内から出土した。前者は完形の土師器坏(149)、須恵器坏(143、147)が出土し、後者は151の土師器小形甕が出土した。出土総量は9,529 gである。他に鉄器で刀子が出土している。



第23图 北方遺跡第23号住居址

表 1

北方遺跡住居址一覽表

番号	平面形	主軸方向	規 模			カ マ ド		出 土 遺 物 量 (g)						面積× 高さ m <sup>2</sup>	g/m <sup>2</sup>	
			大きさm	床面積m <sup>2</sup>	残存高cm	位 置	形態、焚口巾×奥行	H	S	K	R	磁器	陶器			総 量
7	隅丸長方形	N84°E	5.5×6.2	28.31	20			1712	517	287		107		2623	566.2	4.63
8	隅丸長方形	S13°E	3.5×4.6	12.36	30	南壁西寄	石組(30×94) 壁外へやや張出す	1129	419	107				1655	370.8	4.46
9	隅丸長方形	N73°E	5×6.5	29.12	24	北東隅	石組(30×64)	2850	817	743		150		4560	698.88	6.52
10	(隅丸長方形)		(3.8×4)	(15.2) 6.82	26	西壁南寄	石組(40)×96 壁外へ張出す	7603	1862	146				9611	177.32	54.2
11	隅丸長方形	N59°E	3.4×4	11.15	30			5384	807	123	8			6322	334.5	18.9
12	隅丸方形	S78°W	4.5×4.2	13.33	50	西壁中央	石組? 壁外へ張出す	7938	1706	1642				11286	666.5	16.93
13	隅丸方形	S69°W	3.5×3.6	10.18	26	西壁中央	石組 26×84	7736	2479	34				10249	264.68	38.72
14	隅丸長方形	S78°W	2.4×3.1	5.32	22			1670	525	60				2255	117.04	19.27
15	隅丸方形	N77°E	4.6×5	15.00	64	東壁中央?		8591	2138	763	5			11497	960	11.98
16	隅丸方形	N78°E	4.6×4.7	15.99	48			7642	1417	336				9395	767.52	12.24
17	隅丸方形	N77°E	3.6×3.9	10.92	28							6		6	305.76	0.02
18	隅丸長方形	N80°E	3.9×4.8	14.22	42			10815	2781	550				14146	597.24	23.69
19	隅丸方形	S85°W	3.9×4.1	13.32	60	西壁中央	不明 壁外へ張出す	7621	1592	362				9575	799.2	11.98
20	隅丸長方形	N12°W	4.1×4.9	18.52	20	北東隅	石組? 壁外へ張出す	872	138	63				1073	370.4	2.9
21	隅丸長方形	N82°E	6.1×7	36.67	65	東壁中央	石組 70×184 壁外へやや張出す	20186	4899	2148	17	4	250	27504	2383.55	11.54
22	(隅丸方形)		(3.2×3)	(9.6) 4.54	25			54	16	0				70	113.5	0.62
23	隅丸長方形	S73°W	4×3.7	11.55	44	西壁南寄	石組 74×148 壁外へ張出す	7751	1510	268				9529	508.2	18.75
合 計								99554	23623	7632	30	267	250	131356	10001.29	

## 2. 掘立柱建物址（第24図～第27図）

今回の調査で確認された建物址は6軒である。出土場所、柱穴の状態及び覆土の状況から見て全てが中世以降の時期に所属するものと思われるが、建物址2はやや遡るかもしれない。全体的に出土位置を見ると、調査地区の縁辺部で住居址より北側に建物址1～4、南東側に建物址5、6が位置し、堅穴住居址が検出された中央部をはずれている。調査地区の北側を南西から北東方向に旧流路があり、住居址は全てこの部分をさけて検出されたが建物址1、3、4は流路上にある。建物址2については流路上をさけて住居址と同じ配列上にある。南東側の建物址5、6は周辺から検出された遺構全て同様な時期のものである。柱穴は円及び楕円が多く、方形、長方形でも円に近いものである。大きさは最大で径60 cm、最小で径18 cmを測る。柱痕は全部で29基から確認されており、大きさは8～30 cmで円形が多く、楕円形もわずかにある。覆土の状態も似ている。青灰色粘質土で柱痕はややあざやかな色調となるものが多い。建物址の平面形は長方形が多く5軒、方形が1軒、長軸方向は南北に長いものが4軒、東西に長いもの2軒である。以下建物址ごとに要旨を記述する。

**建物址1** 平面形は長方形を呈し総柱式である。規模は7.4×4 m（2×2間）を測る。桁の柱間寸法がそろわず、北側が4.9 m、南側が2.5 mである。このためP<sub>36</sub>、<sub>41</sub>、<sub>42</sub>は調査地区外へ続く別の建物址の可能性も考えられる。柱穴は方形が多く、長方形、楕円形、円形もある。全てに柱痕が確認できた。大きさは8～16 cmの円又は楕円で、中央のP<sub>39</sub>、<sub>40</sub>、<sub>41</sub>が他より太い。P<sub>42</sub>、<sub>43</sub>はP<sub>47</sub>、<sub>46</sub>に区切られる。P<sub>47</sub>、<sub>46</sub>はP<sub>45</sub>と直線上に並ぶため、建物址1の建替え等に関係があるかもしれない。遺物はP<sub>36</sub>より土師器塊（159）が出土している。

**建物址2** 平面形は方形を呈する。総柱式で規模は3.72×3.72 m（2×2間）で柱間寸法は桁行間で1.8 mと1.92 m、梁行間で1.68 mと2.04 mを測る。柱穴は円形及び楕円形で円形が多く、大きさは18 cmから30 cm前後である。覆土は住居址と同様な鉄分等が沈殿する砂質土で柱痕も確認できなかった。遺物の出土もなかった。

**建物址3** 平面形は長方形を呈する。側柱式で規模は9.12×3.63 m（4×2(1)間）である。柱間寸法は桁の北側柱間は2間で2.2 mと1.8 mと、南側柱間では1間で3 mである。梁行間は1～3 mを測る。柱穴の形状は円形及び楕円形を呈し大きさは15～41 cmを測る。覆土は全体に砂質及び砂利質で北側ほど砂利が混る。柱痕はやや粘質である。掘方の周囲には鉄分等の沈殿物が付着している。柱痕はP<sub>90</sub>、<sub>95</sub>以外は確認された。大きさは12～30 cmである。P<sub>86</sub>、<sub>87</sub>、<sub>88</sub>の柱痕は直線上に並ばず、P<sub>87</sub>が外に張り出す。遺物はP<sub>87</sub>内より環状鉄製品が出土している。出土状態は掘方の南東側の壁を袋状に掘抜きこの内より出土した。底部から約20 cm程上である。

**建物址4** 平面形は長方形を呈する。側柱式で規模は2×3.45 m（1×1間）で南北より東西間の方が長い。柱穴は楕円形及び円形を呈し、楕円形が多い。大きさは30 cm前後を測る。覆土は全体に砂利質で小礫が混る。柱痕は全て確認された。10～16 cmの円形及び楕円形である。本址は建物址3の内側に入っている。また覆土及び柱痕の状況などからして同一の建物の可能性も考えられる。

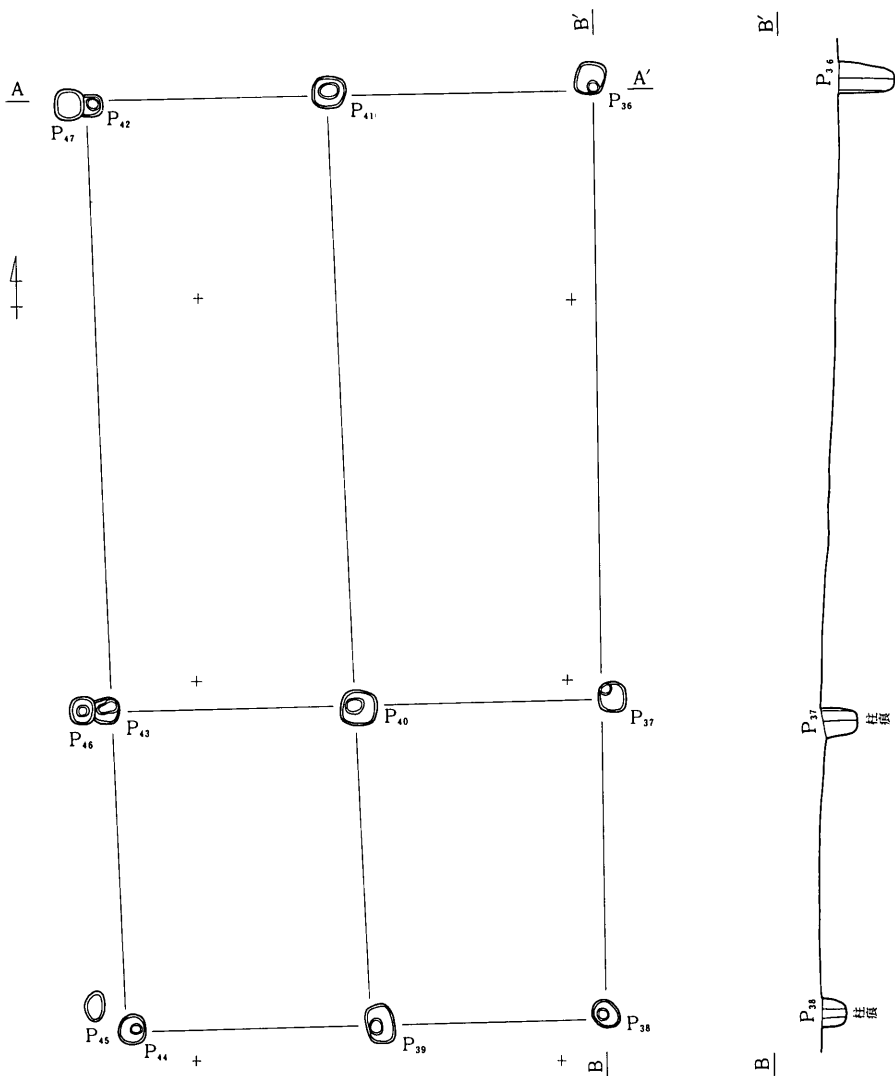
遺物は P<sub>82</sub>より須恵器片が出土した。

**建物址 5** 平面形は長方形を呈し、側柱式で規模は3.4×2.96 m (2×1間) 桁行の柱間寸法は1.7 m と1.8 m を測る。柱穴の形状は円形及び楕円形で大きさは20~30 cm 前後である。覆土は青灰色砂質土で柱痕は明青灰色やや粘質土である。柱痕は P<sub>119</sub>、<sub>120</sub> 以外は確認された。P<sub>120</sub>は38 cm 大の亜円礫が入っている。この礫につぶされるように柱痕らしいものも見えるが不明である。遺物は P<sub>119</sub>、<sub>120</sub>、<sub>121</sub>より土師器片が出土した。

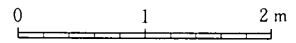
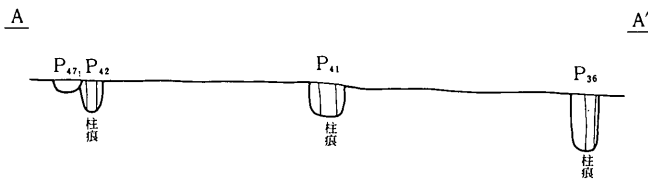
**建物址 6** 平面形は長方形を呈し、側柱式で1.16×1.74 m (1×1間) である。南北より東西間の方が長い。柱穴は楕円形及び円形を呈し、20~30 cm 前後を測る。柱痕は8~14 cm を測る円形である。覆土は青灰色やや砂質土、柱痕は明青灰色やや粘質土で軟らかい。遺物の出土はなかった。

表 2 北方遺跡掘立柱建物址一覧表

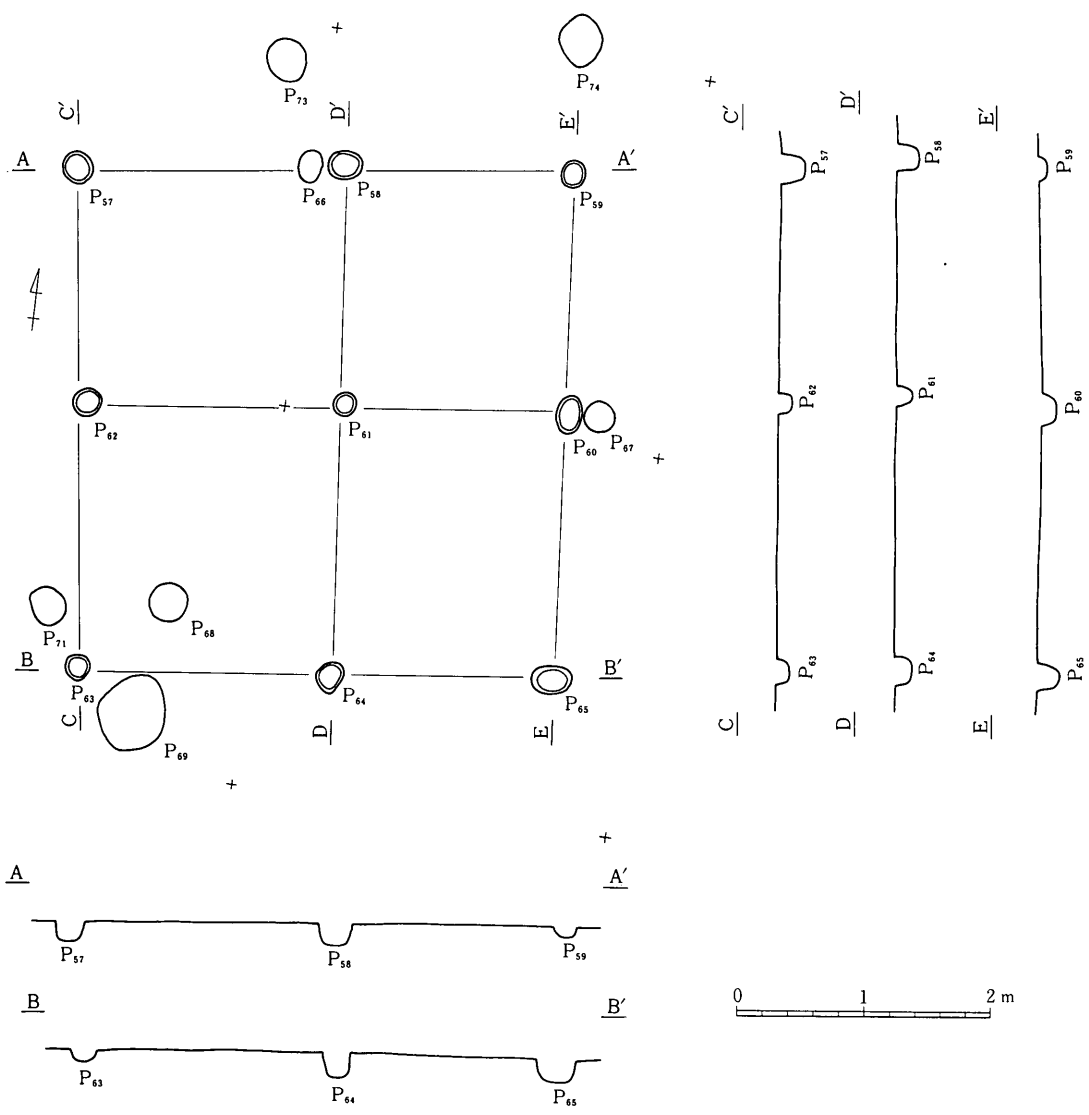
NO.	位 置	平面形	規 模 (桁行×梁行)	柱 間 寸 法	柱 穴					所 見
					NO.	大きさ	形 状	深 さ	柱 痕	
1	北端西寄 N-3'-W	長方形	2×2 (間) 7.4×4 (m)	桁 2.5~4.9 m 梁 1.9~2.1	36	24×22	方	45 <sup>cm</sup>	8 <sup>cm</sup>	北側の地区外に近いため、北側へ続くか、P <sub>38,41,42</sub> は別物の可能性もある。 P <sub>41-42</sub> は建替か 覆土は、やや粘質土が強い青灰色砂質土。柱痕は明青灰色粘質土。P <sub>38</sub> から土師器塊 (159) 時期は中世以降
					37	22×22	方	29	8	
					38	24×20	楕円	20	8	
					39	30×22	長方	13	12	
					40	26×26	方	19	12	
					41	24×24	方	31	16	
					42	18×( )	(方)	30	8	
					43	20×( )	(方)	20	16	
					44	24	円	10	8	
					2	中央東寄 N-7'-W	方形	2×2 (間) 3.72×3.72 (m)	桁 1.8~1.92 梁 1.68~2.04	
58	28×22	楕円	18							
59	22	円	8							
60	30×20	楕円	13							
61	18	円	13							
62	24	円	11							
63	20	円	11							
64	24×20	楕円	15							
65	32×22	楕円	17							
3	中央西端 N-6'-W	長方形	4×2(1) (間) 9×4 (m)	桁 1.8~3 梁 1~3						86
					87	50×46	円	41		
					88	50×36	楕円	15		
					89	38×36	円	21		
					90	38	円	27		
					91	50×46	楕円	32		
					92	60	円	22		
					93	66×50	楕円	40		
					94	38×30	楕円	24		
					95	34×32	円	27		
96	50×36	楕円	38							
4	中央西端 S-84'-W	長方形	1×1 (間) 2×3.45 (m)	桁 3.45 梁 2.08	82	30×26	楕円	10	建物址 3 の内側に入り、柱穴は、ひとまわり小さい。 時期は中世以降	
					83	34×30	楕円	19		
					84	30	円	24		
					85	34×30	楕円	24		
5	南端東寄 N-3'-W	長方形	2×1 (間) 3.4×2.96 (m)	桁 1.7~1.8 梁 3.4	116	24	円	29	P <sub>119,120,121</sub> から土師器片が出土 時期は中世以降	
					117	20	円	28		
					118	22	円	33		
					119	26×22	楕円	26		
					120	32×24	楕円	22		
					121	30×26	楕円	25		
					121	30×26	楕円	25		
6	南東隅寄 N-86'-E	長方形	1×1 (間) 1.16×1.74 (m)	桁 1.16 梁 1.74	122	26	円	28	時期は中世以降	
					123	30×26	楕円	33		
					124	20	円	36		
					125	20	円	22		
					125	20	円	22		



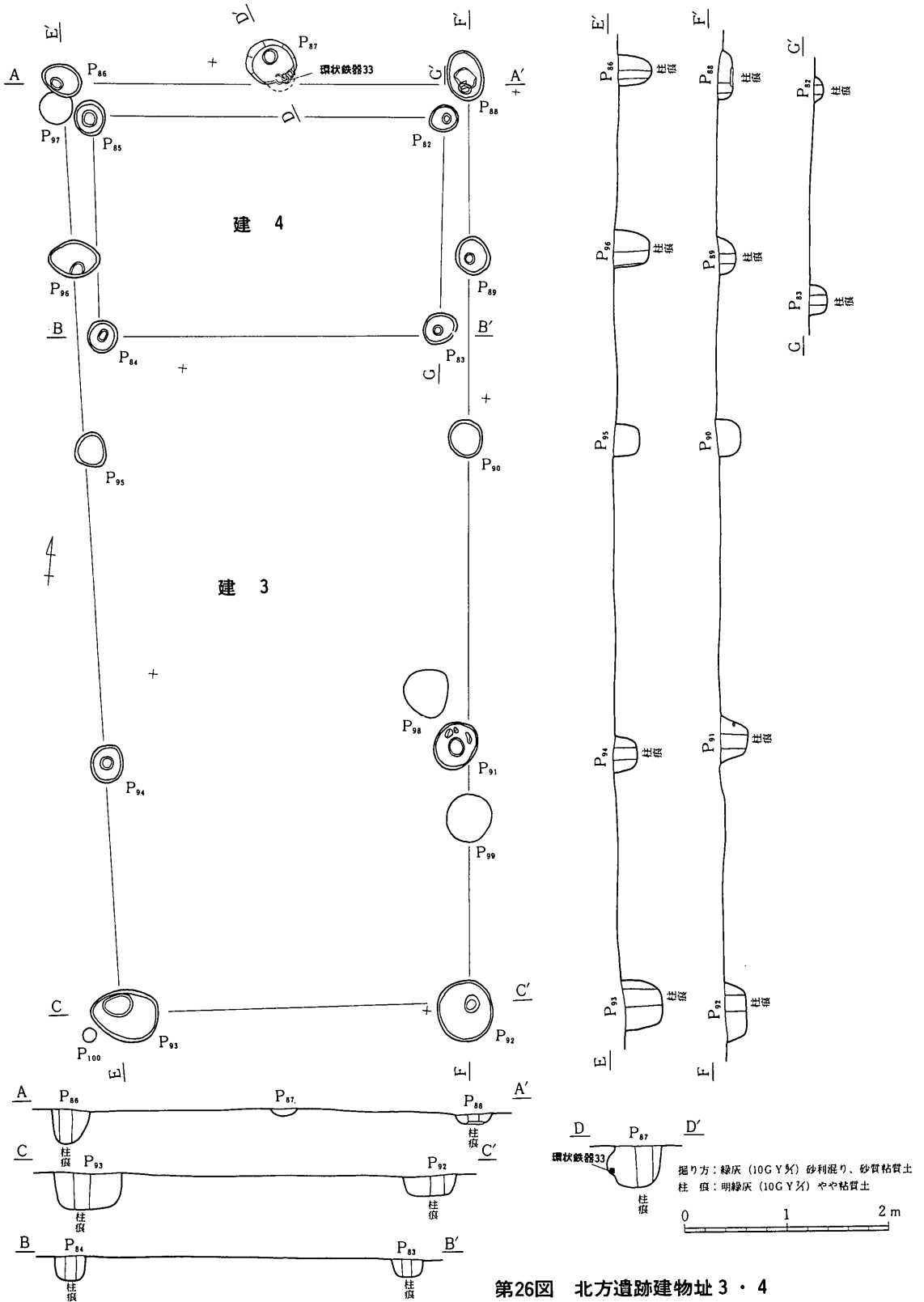
掘り方：青灰（10B G 灰）粘質砂質土や粘質が強い  
 柱 痕：明青灰（10B G 灰）粘質砂質土や粘質が強い



第24図 北方遺跡建物址 1

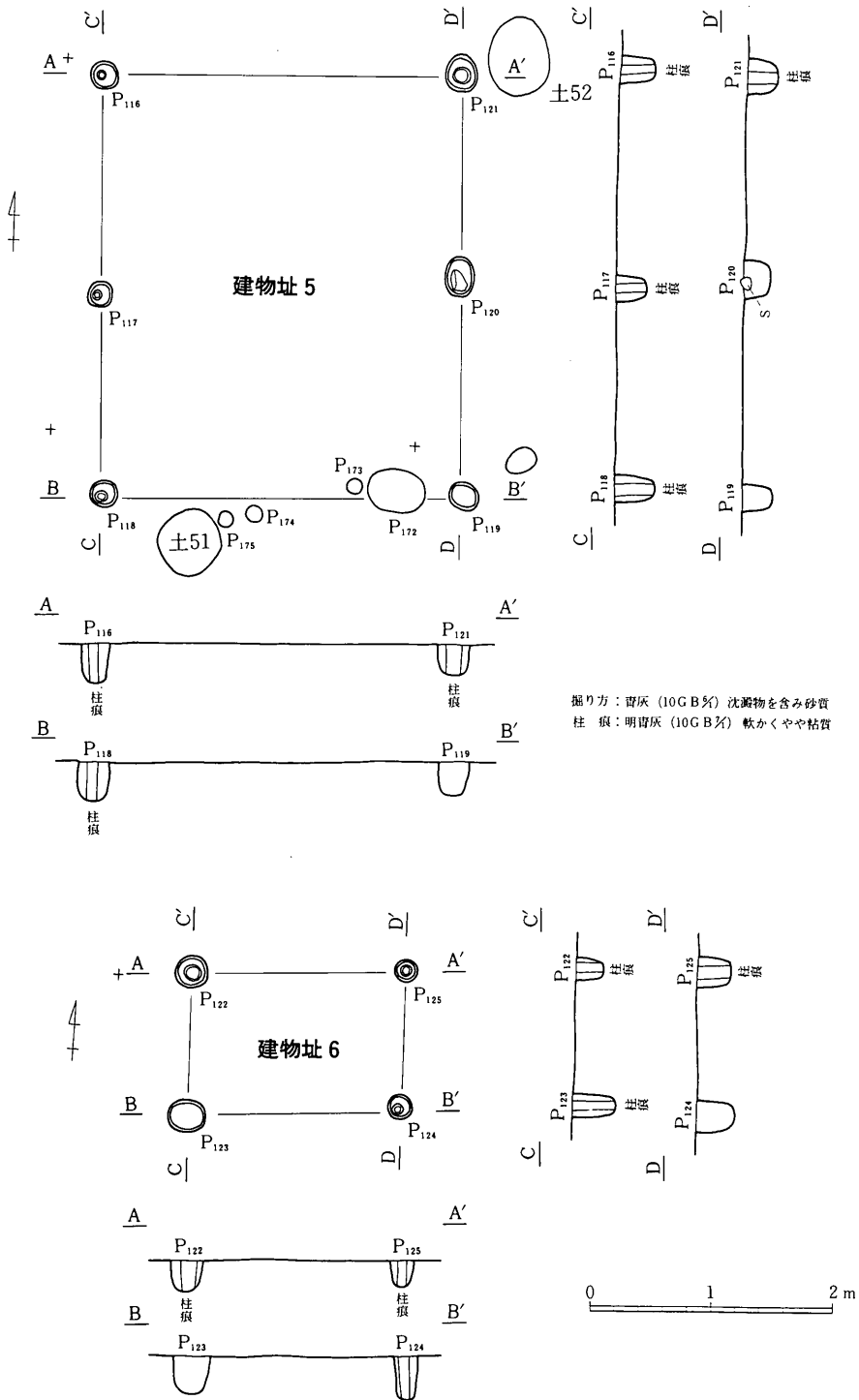


第25図 北方遺跡建物址 2



第26図 北方遺跡建物址 3・4





第27図 北方遺跡建物址 5・6

### 3. 竪穴状遺構（第28図）

今回の調査で竪穴状遺構としたものは次のとおりである。

①形状は方形又は長方形を呈し、竪穴住居址と似ているもの。②内部にカマド等の施設を持たず礫が多量に入っているもの。③性格は土壌と似ているが土壌より大きく、住居址より小さいもの。

上記により竪穴状遺構としたものは竪1、2、3の3基である。3基とも所属時期は中世以降にあたるものであろう。

**竪穴状遺構1** 南東隅に検出された。平面形状は不整形な長方形を呈し、200×180 cm、深さ45 cmを測る。覆土は全体に砂質で砂利が混入するが灰色粘質土ブロックを含む砂利層を掘り込んでいるため底部は砂利上となる。礫は底部から覆土中層にかけて中央部に集中して入っている。遺物は北東隅壁際の覆土中より漆器碗片が出土した。1 cm大程の口縁部片であざやかな赤色を呈している。内側の木質部は腐って外側の漆部分のみが残存した。大きさ等は計測できない。

**竪穴状遺構2** 南東隅のやや西寄に検出された。平面形状は長方形を呈する。規模は410×280 cm、深さ43 cmを測る。覆土は粘質土を含む砂質土で粒子が荒い。中央部の覆土中層に焼土が混入した部分がある。底部は鉄分が1層をなしたように多量に沈殿して非常に堅い。礫は底部直上から覆土中層にかけてほぼ全面に入っている。遺物は西壁北寄の壁内より土師器碗（154）と礫間より2の凹石、3の石臼？が出土している。

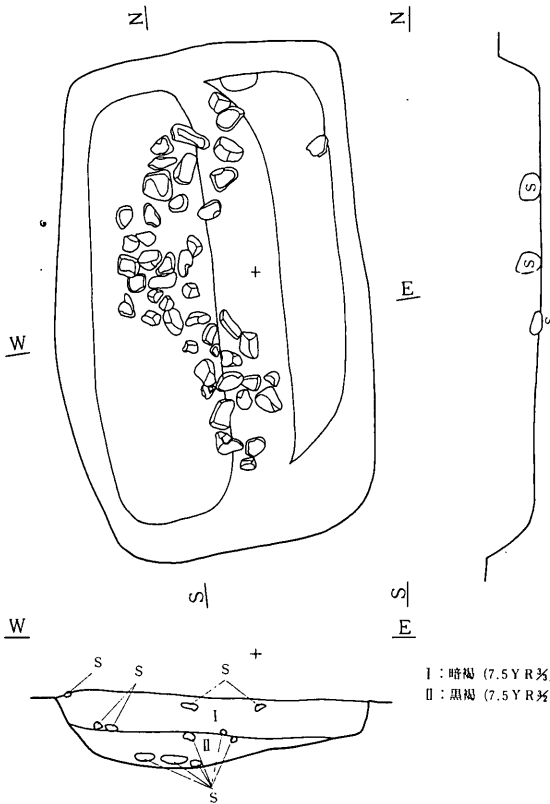
**竪穴状遺構3** 東側北寄に7号住居址掘下げ時に確認された。全部が1号住居址と重なっている。断面観察の結果、住居址を切っている竪3が確認された。規模は384×224 cmで長方形を呈し、深さ66 cmを測る。全体に炭化物を含み、砂質で下層ほど砂質が強い。東側に段をもち、西側へゆるく傾斜している。遺物は緑釉陶器碗（155）白磁（156）釘（6、15）である。

表3

北方遺跡竪穴状遺構一覧表

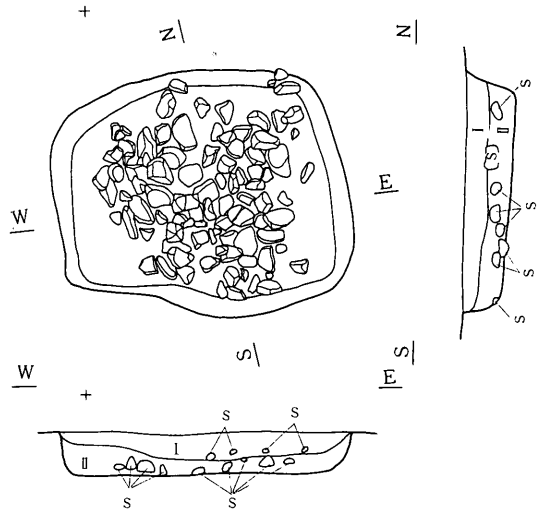
番号	平面形	規模 長軸×短軸	深さ	出土遺物 (番号は報告番号)	摘要
1	長方形	200×180 cm	45 cm	漆器	10～30 cm 大の礫多量に入る。 南側不整形、北側やや張る。 覆土は小砂利を含む。全体に砂質だが粘質土をブロック状に含む。
2	長方形	410×280	43	土師器碗（154） 凹石（3） 石器（2）	10～50 cm 大礫多量に入る。 少量の焼石有り。中央覆土内に焼土混入。覆土は粘質土を含む砂質土で上層は堅い。
3	長方形	384×224	66	緑釉陶器碗（155） 白磁（156） 釘（6、15?）	7住と重る。7住より新。 竪1、2に比べて礫は少ない。 東側に段有り。覆土は全体に砂質で下層はより砂質。 炭化物を含む。

豎穴状遺構 3



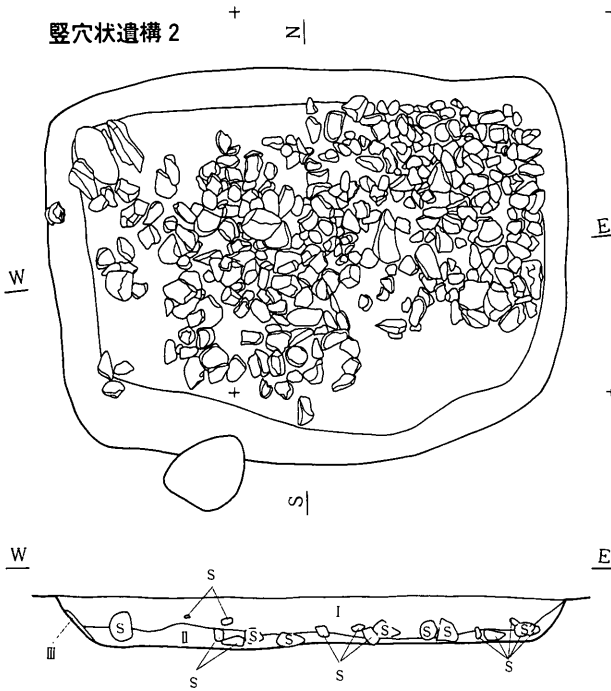
- I : 暗褐 (7.5 Y R %) 炭化物混やや砂質
- II : 黒褐 (7.5 Y R %) 炭化物、砂利混

豎穴状遺構 1



- I : 褐 (7.5 Y R %) 灰色粘質土と砂利混
- II : にぶい褐 (7.5 Y R %) 灰色粘質土多く砂質
- III : 灰褐 (7.5 Y R %) 灰色粘質土塊混

豎穴状遺構 2



- I : 灰黄褐 (10 Y R %) 沈着物多や粘質
- II : 褐灰 (10 Y R %) 粗い砂質
- III : 褐灰 (10 Y R %) 沈着物含まず砂質

0 1 2 m

第28図 北方遺跡豎穴状遺構 1・2・3

#### 4. 土 壙

今回の調査で土壙としたものは次のとおりである。

①形状は円形及び楕円形または長方形を呈する。②大きさはおおむね50 cm 以上で長方形のものは堅穴状遺構より小さいもの。③内部に人為的な礫が入っているもの。④柱痕のないもの。

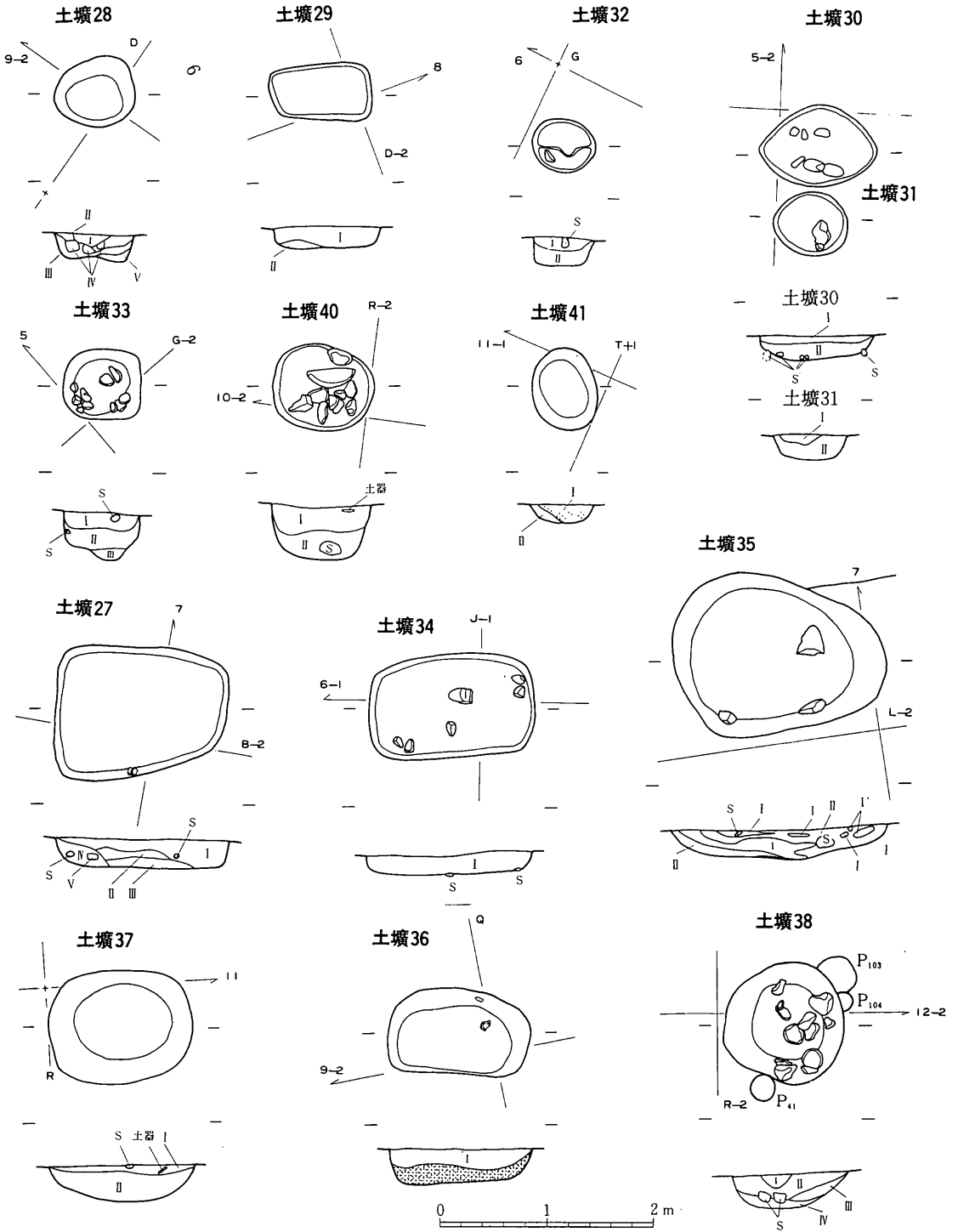
上記により土壙としたものは土壙27～64の38基である。所属時期が確認できるものはないが、検出場所、覆土から見て中世以降がほとんどで一部平安時代末のものもあるであろう。検出場所は大きく3ヶ所に分けられる。1つは南東隅で最も多数がここに集中している。南側及び東側の調査地区外へ続いている。覆土は堅1及び堅2と同様、全体に砂質でやや粘質土を含む青灰色土である。他は建2周辺から東側にかけての10基である。覆土は砂質で鉄分等の沈殿物が多く褐色土が混る灰色土である。もう一つは南西隅の23住周辺に4基である。この検出面はほとんど砂に近く、そのため覆土も同様に砂層に近い。淡黄灰色土か明黄灰色土である。

次にこれらの土壙の性格であるが、確実に墓址と確認できるものは土36、62のみである。土36は検出面の壁際に焼土及び炭化物が見られた。内部は2層あり、I層内には焼土粒、炭化物を含み、II層は炭化物層である。焼土は少量で焼骨が確認された。底部及び壁面に焼土面は見られなかった。他の土壙については不明であるのでここには要旨別で記述し、今後の課題としたい。土壙中内部に礫が入っているものは土30、31、33、34、38、40、42、43、48、49、55、56、60、61、63、64の16基である。この内土42、43以外は底部から10～30 cm 前後上に入っており、礫は10～50 cm の円礫、または垂円礫である。複数で入っているものが多い。覆土中に炭化物が含まれているものは土27、28、29、33、36、37、40、41、42、46、50、54、55、56、57、62の16基でこの内焼土も含むものは土27、36、41、46、54、62の6基である。特徴的なものは土54、56である。土54はI層内に炭化物が薄い層をなしている。厚さ2～5 mm 程である。土56に入っている炭化物は粒状ではなく塊をなしており、他とは異なっている。骨片が確認されたものは土36、62の2基のみで、他からは確認されなかったので確実に墓址とはいえないが可能性のあるものを掲げると炭化物及び焼土の量等から見て、土27、56であろう。次に出土した遺物は土師器坏、甕、須恵器坏、甕、灰釉陶器、内耳、中世陶器である。破片が多く図示したものは土48より出土した灰釉陶器耳皿(157)と土34より出土した中世陶器(158)の2点である。炭化物、焼土及び礫等は含まないが特徴的なものは土44である。検出時から土壙中央に土器の輪郭が確認されており、土師器坏が3点出土した。内2点については正位と逆位で重ねられ、他は正位の状態で出土した。ほぼ完形であるが、全体にもろく、保存状態が悪いため図示し得なかった。

表 4

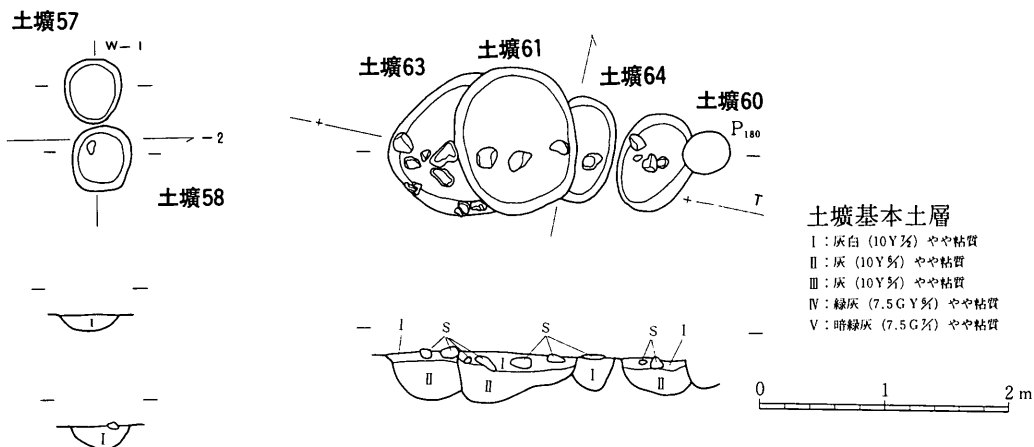
北方遺跡土壌一覽表

番号	平面形	規 模 (cm)		出 土 遺 物	摘 要
		長軸×短軸	深 さ		
27	長方形	150×120	21	土師坏	全体に炭化物、中層に多量の焼土粒含む
28	楕円形	75×60	21	土師坏、須恵	上層に炭化物含む
29	長方形	95×50	22	土師甕	〃
30	楕円形	110×75	22	灰釉	10～40 cm 大の礫
31	〃	68×54	23.5	土師	土質がもろく、くずれやすい。40 cm 大の礫
32	〃	58×48	28	土師甕	
33	長方形	70×50	48	土師坏、須恵坏	10～15 cm 大の礫 上、中層に炭化物
34	〃	153×92	18	陶器 (158)	10～20 cm 大の礫
35	楕円形	145×130	32		
36	長方形	132×77	24	土師	火葬墓、炭化物層、焼土粒、骨片有り
37	楕円形	135×107	34	土師、須恵	下層に炭化物
38	円形	113×112	34	土師、灰釉	10～30 cm 大の礫
39	楕円形	126×115	46	土師	
40	〃	92×78	55	土師坏、内耳	10～50 cm 大の礫 下層に炭化物
41	〃	77×60	23	土師坏	上層に少量の炭化物、焼土粒
42	円	98×95	33	土師坏	10～20 cm 大礫、下層に少量炭化物
43	〃	径70	33	土師、須恵、灰釉	〃
44	〃	径70	37	土師坏	上面に土師器坏 3 個体
45	長方形	150×120	30	土師、灰釉	
46	〃	65×47	11	土師	上層に炭化物、焼土ブロック
47	楕円形	65×57	30	土師	
48	( 〃 )	65×( )	41	土師、灰釉耳皿(157)	西壁際に10～20 cm 大の礫
49	〃	65×45	41	土師、須恵	東壁際に10～20 cm 大の礫
50	〃	67×50	36	土師、須恵甕、灰釉	全体に少量の炭化物
51	円形	径55	30	須恵	
52	楕円形	64×50	30	土師、須恵	
53	〃	67×55	31	土師	
54	〃	80×63	25		上層内に炭化物の薄い層、焼土、下層に炭化物
55	円形	径60	31	須恵甕	全体に炭化物
56	楕円形	65×55	14		10～30 cm 大の礫、全体に炭化物塊
57	〃	50×45	25		上層に少量の炭化物
58	円形	径50	27		
59	楕円形	75×55	30		
60	〃	75×60	23	土師坏	20 cm 大の礫
61	〃	115×105	37	土師	30 cm 大の礫
62	( 〃 )	72×( )	28	土師	焼土、炭化物多量、焼土内に骨片
63	( 〃 )	( )×( )	41		
64	( 〃 )	80×( )	25		



第29图 北方遺跡土壙(1)





第31図 北方遺跡土壙(3)

### 5. 大甕埋設遺構

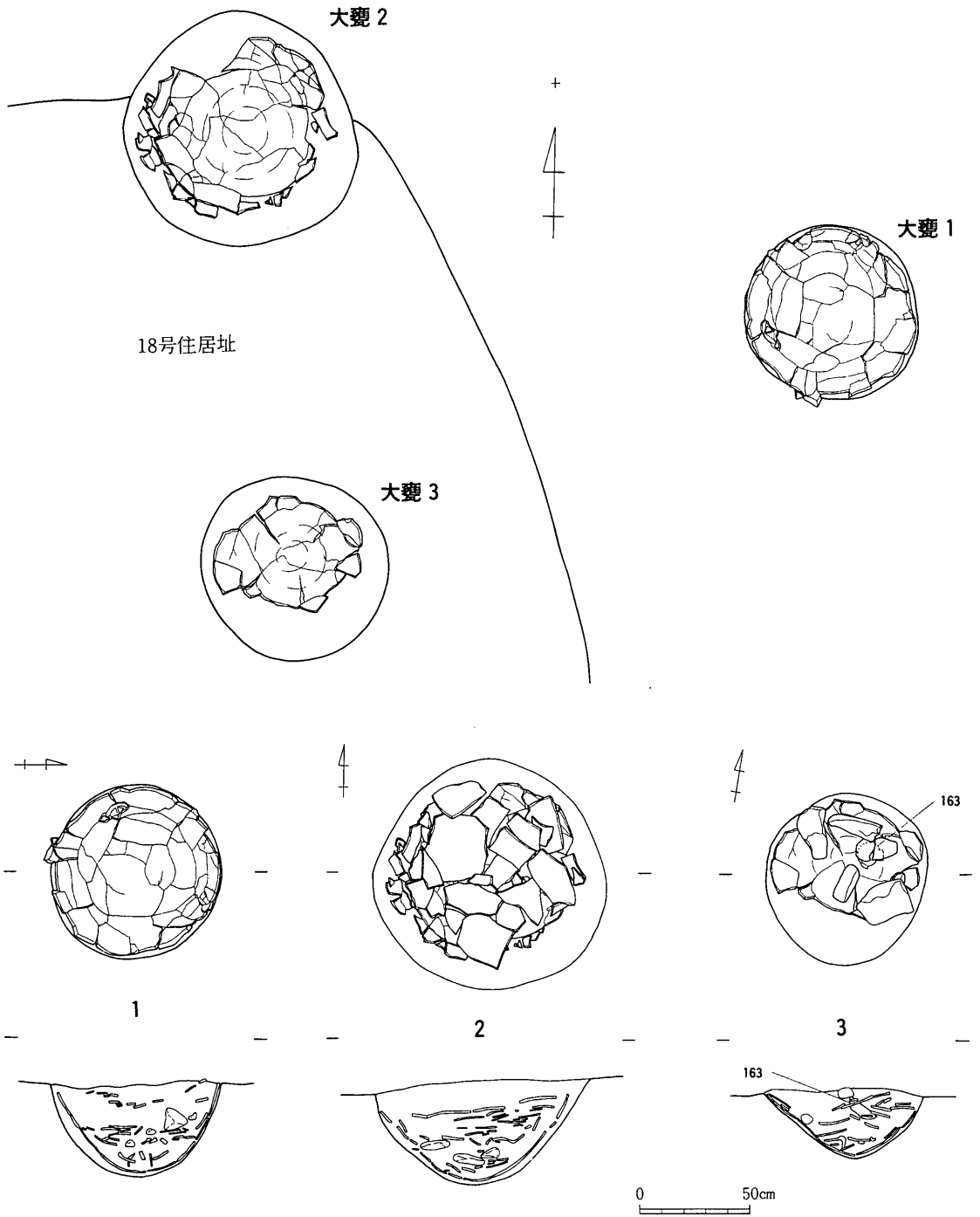
本址は調査地区中央やや南に3基検出された。大甕1は重機による排土作業中に大甕胴部が環状に確認された。大甕2、3は18号住居址内にあり、住居址埋没後に設置されている。位置関係は大甕1が大甕2、3の東側、大甕2が大甕3の北側、大甕3が大甕2の南側にあり直線で結ぶと三角形を呈する。それぞれ地面を掘込んで設置されているが、掘り方についてははっきりしない。大甕2の場合は18号住居址検出時に住居址と切合うように確認された。大甕3は平面ではわからず、大甕と接してあるものと推定した。一覧表の掘り方の計測値は推定線を計測したものである。以下は遺構別に調査要旨を述べる。

大甕1は内部は暗褐色のやや粘質土で炭化物塊が入っており大甕片は2段に落ち込んでいて、1段目と2段目の間に焼けた花崗岩や10 cm 大程の礫が入っている。大甕以外の遺物は164の須恵器四

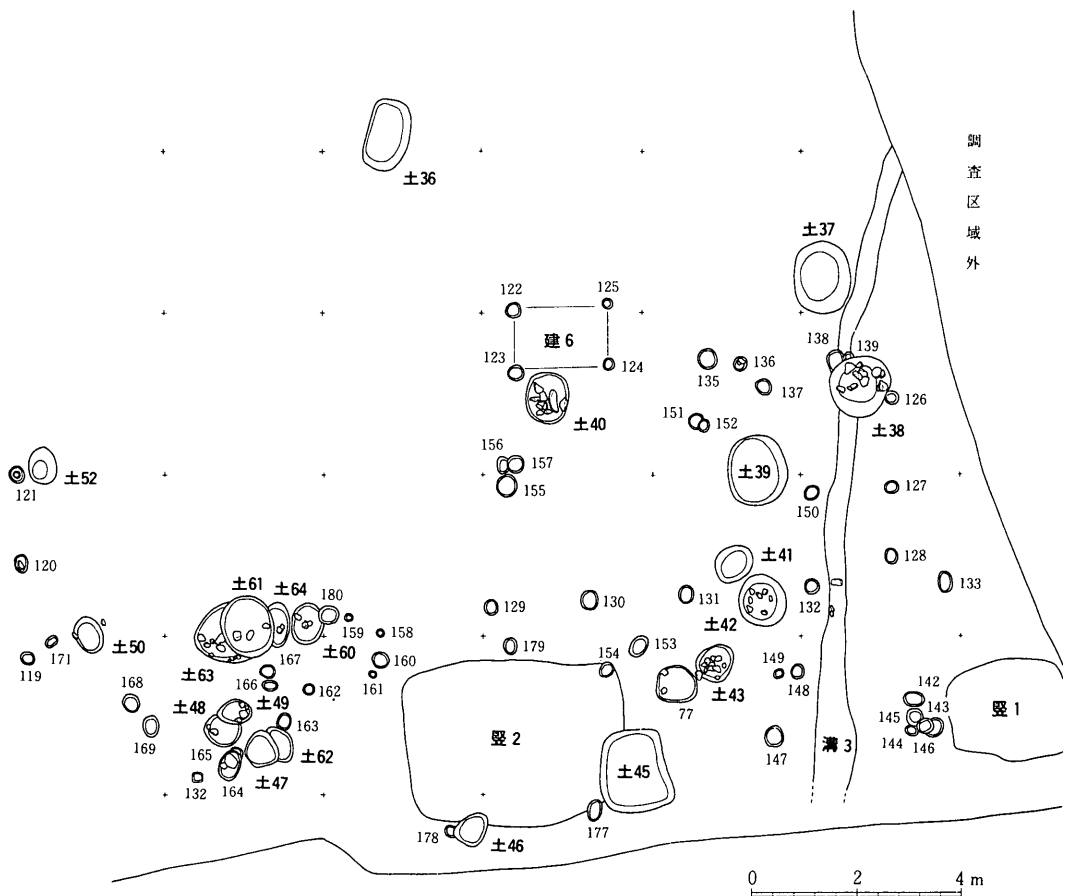
表5 北方遺跡大甕埋設遺構一覧表

番 号 (図示番号)	掘り方の大きさ 径 (cm)	残 存 高(cm)		内 部 の 状 態	出土遺物 ( )内は図No
		掘り方	大 甕		
1 (165)	77	42	40	大甕片の落ち込みが2段に分かれる。炭化物、礫が入る。	須恵器四耳壺 (164)
2 (166)	105	45	46	上面に大甕片を蓋状にかぶせてある。下から大甕片。	須恵器四耳壺 (164)
3 (167)	85	28	26	3基中最小。上部に須恵器坏、礫、炭化物が入る。	須恵器坏 (163)





第32図 北方遺跡大甕埋設遺構



第33図 土坑・ピット群

耳壺でこれは大甕2内より出土したものと接合した。

大甕2は検出面では大甕の存在はわからなかった。検出面より6 cm下で一端が確認された。内部は大甕1同様の粘質土で炭化物塊は大甕1より多い。大甕2の特徴は大甕の上面を胴部の大形破片で覆っている（蓋をする）ことである。大甕片は全体に入っているが、断面で見ると東側より落込んでいる。礫は下層に多い。他の遺物は大甕1同様164の須恵器四耳壺である。

大甕3の場所は18号住居址内に投込まれた礫があって表面で掘り方の確認は困難である。上面に焼けた礫が多い。内部は他と同様やや粘質土の暗灰褐色土で炭化物塊が入る。大甕片は大甕2と同様東側より落込んでいる。他の遺物は上層より163の須恵器坏が出土している。

## 第3節 遺物

### 1. 土器・陶器・磁器

#### 1) 提示の方法

図示については、実測図作成可能な土器は300点以上あったが、その中から更に残りの良いものや器種・器形の多様性が窺えるものを限定・抽出して図化し、出土遺構毎にまとめて提示した。(第35～48図、総数167点)<sup>(1)</sup>。図中では、土器の製作過程で残された成形・調整痕は模式化して表現し、統一を図るように努めた<sup>(2)</sup>。各土器の図の脇に付した通し番号に「H」が続くものが土師器、同様に「S」は須恵器、「K」は灰釉陶器、「R」は緑釉陶器であり、その他は具体的に「白磁」等の表記をした。また、図示した土器についての、個々のデータは観察表にまとめ、一覧できるようにしてある(表10)。表中の項目で、「種別」は土師器・須恵器等、焼き物の種類を示し、「器形」は次段で述べる器種の分類の内容に従うものである。「残存度」は図化にあたって水平の基準線を求めた口縁部(底部)の残り具合、「色調」には灰釉陶器・緑釉陶器およびその他の陶器・磁器についてのみ「外面」の項に胎土の色調、「内面」の項に釉調を記してある。

各遺構出土の土器群の様相についての提示は、当該遺構出土のすべての土器(片)を可能な限り器種・器形に細分し、それら毎の計量(重量の測定、破片数の数え上げ等の方法)を行うことによつて<sup>(3)</sup>、基本となる客観的なデータを把握し(表6～9)、記述により行った。

#### 2) 出土土器の概要

各種の遺構覆土・底面および検出面から多量に出土している。総量は134.9 kgに及ぶ(大甕埋設遺構の本体である須恵器大甕3個は除く)。種別の構成は、土師器・須恵器・灰釉陶器・緑釉陶器・磁器・瀬戸美濃系陶器から成り、その比率は、土師器：76.1%、須恵器：18.5%、灰釉陶器：4.9%、その他：0.5%で、土師器と須恵器が全体の9割以上を占めている。これらの大部分は、形態(外形)や製作手法の特徴からみて、当地方の平安時代の土器様相の中に位置づけられるものと考えられる。

#### 3) 器種の分類と様相

各種別の中で従来「坏」、「甕」等と呼称されている大分類(器種)の中に存在する、外形・製作手法上の共通性を有す小群(器形)を規定、把握する。これにより土器説明の記述の便を図るとともに、各遺構出土の土器群の様相を器種・器形組成の量的な比率で提示する作業に細かい視点を与えることができる。具体的な分類の方法、および分類・細分した器種・器形の呼称については、松本市南栗遺跡(第三次)、同北栗遺跡の報告書<sup>(4)</sup>に掲げたものを基本的に踏襲する。

## ①土師器

器種は、坏・埴・皿・鉢・耳皿・台付鉢・甕・小形甕・筒形土器がある。台付鉢と筒形土器は今回初めて固有の器種として名称を与えたものである。坏・埴・皿・鉢には「黒色土器」と呼称される、内面または内外面に黒色処理の施されたものを含んでいる<sup>(5)</sup>。

**坏** 製作段階にロクロが用いられるものがすべてで、坏C(内面ミガキ、底面糸切り痕)、坏D(内面ミガキなし、底面糸切り痕)のみである。内面黒色のものは坏Cに限ってみられる。寸法を、I(口径12cm以下)、II(同12~16cm)、III(同16~20cm)に分けると、坏CII・坏CIII・坏DI・坏DIIの4種類の組合せが認められる。坏DIは土師質土器と従来呼ばれていたものを含み、かなり器高が低く、むしろ皿とするにふさわしい外形をとるが、型式変化からみてここに含めるのが妥当と考える<sup>(6)</sup>。土器の観察表「器形」欄では、特殊な場合を除き「II」の文字は省略してある。

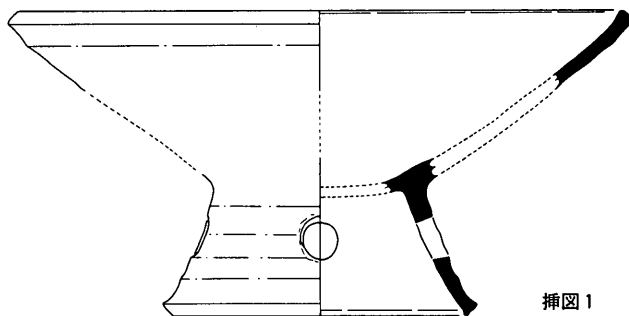
**埴** 埴A(内面ミガキ)、埴B(内面ミガキなし)の2種のみで、内面黒色のものは埴Aに限られる。寸法は、口径12~16cmの範囲にすべて収まる。

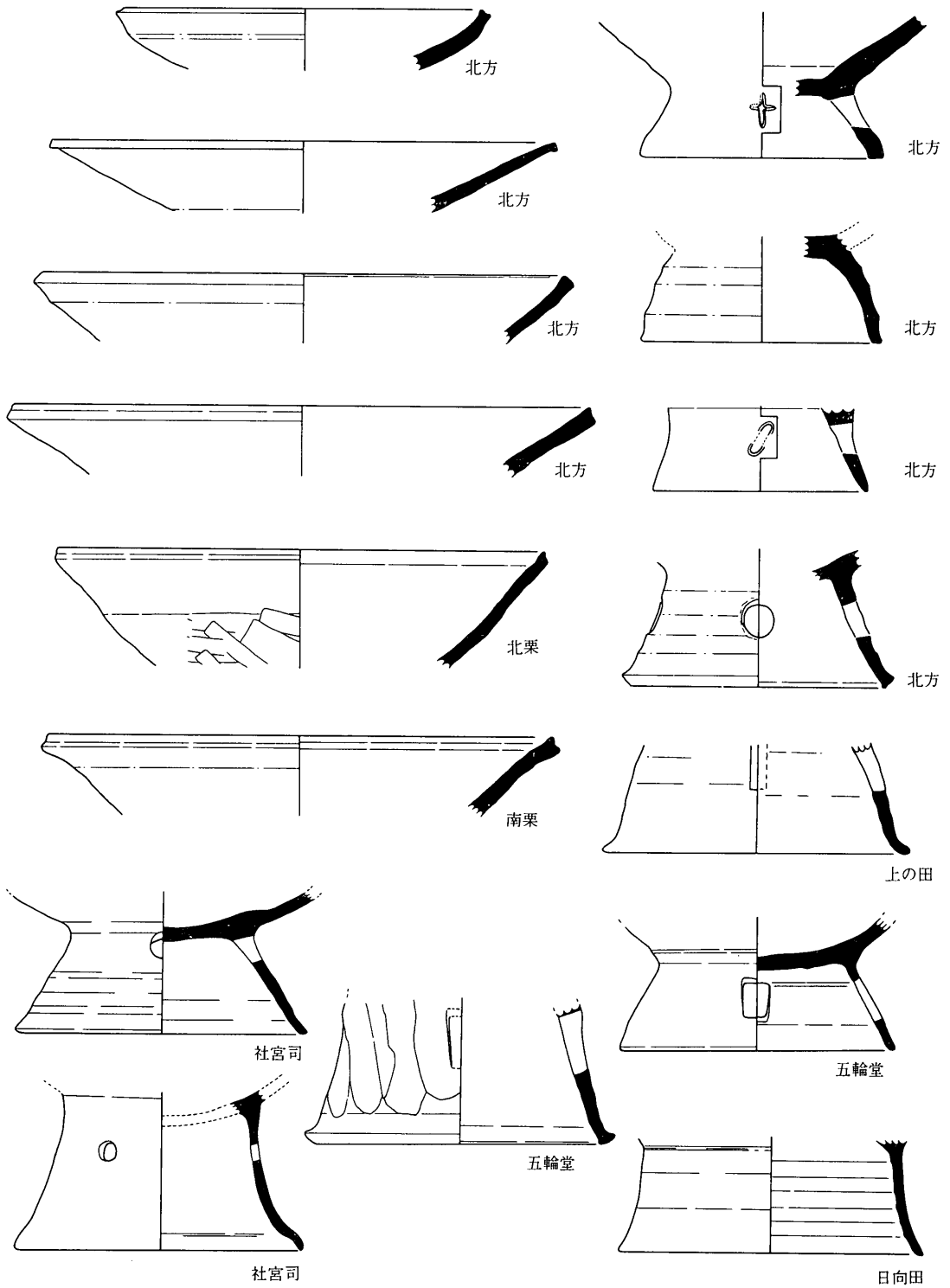
**皿** 皿A(内面ミガキ)のみがみられる。外形は、やや深く碗形に近いもの(72・73)、端部が肥厚するもの(37)の2種が認められる。

**鉢** 坏Cと同様の外形・手法で、口径が20cmを超えるものをあてている<sup>(7)</sup>。図示できたのは77の1点のみだが、破片数は比較的豊富で多くの遺構から出土して総量は2.5kg程になる。口縁端部が僅かに肥厚して平らな面をもつものと、単に尖って終るもの、片口のつくもの等、口縁部の外形に変化が認められるが<sup>(8)</sup>、ほとんどのものは内面黒色である。

**耳皿** 図示した2点(66・85)しか出土していない。高台をもたない底面に回転糸切り痕を残し、他の部分は内外面ミガキ・黒色処理がなされる<sup>(9)</sup>。外形は、本器種が模倣しているとみられる灰釉陶器の耳皿に高台・無高台の2者がみられるので、それに対応する器形の存在を推定して、高台付をA、無高台をBと細別する(即ち66・85は耳皿Bとなる)。

**台付鉢** 今回初めて全体像が把握された器種で、以前にも断片の出土例はあったが器種不明と報告していたものである<sup>(10)</sup>。粗悪な胎土と焼成を呈す器面にロクロ痕が明瞭に残る特徴的な土器で、直線的あるいは僅かに内湾して大きく開く鉢部と、同様に下方へ開く脚部をもち、口縁端・脚端を面取りするものもある。脚に3~4単位で透し孔の穿たれることもあり、楕円、長方形、円、十文字形の透しがみ





第34図 長野県内出土の台付鉢

られる。全形を知り得るものはないが、挿図1に想定復元図を示す。寸法は口径が20 cm を超え、供膳形態とすると比較的大形器種と言えるが、規格性については今のところ不明である。第34図は県内出土の台付鉢を集めたもので<sup>(11)</sup>、外形により更に細別が可能とみるがとにかく新器種なので資料の増加を待ちたい。

**甕** 甕 E(外面縦ハケ、口縁内面カキメ)、甕 F(口頸部ヨコナデ、胴部外面ケズリ)、および甕 X があり、甕 E が甕類出土総量の 9 割を占めている。甕 X は従来の分類のいずれにも属さないものを一括した便宜的な呼称で今後細別の必要が生じる。図示できたものでは、14・49が甕 X に該当、14は頸部のくびれをもたない厚いもので一見羽釜の鍔が欠けた様だがその痕跡はない<sup>(12)</sup>。49は「く」の字形に外反する厚い口縁部をもち、胴部内面に横のハケメが施される。

**小形甕** 小形甕 E(ロクロ使用、胴部外面カキメ)、小形甕 F(ロクロ使用のみ)が大部分を占める。その他は、ロクロ不使用の小片が微量と、器面が磨滅して器形の判定が不可能だったものだけである。小形甕 E・Fともに口径にバラツキが大きく、寸法が分化している感じはない<sup>(13)</sup>。61は内面にミガキがあるが、小形甕 Fとして扱う<sup>(14)</sup>。

**筒形土器** 今回初めて取り上げる器種で<sup>(15)</sup>、全形を知り得るものはなかった。外面に縦のハケメ、内面には雑な調整により輪積み痕を残す。上下についても不明瞭で、図示したものは端部の状態で判定したが確実ではない。

## ②須恵器

器種は、坏・蓋・長頸壺・短頸壺・甕・四耳壺がある。大形の貯蔵具を除くと須恵器の出土総量は土師器の 3 割程度と少なく、それに応じて器種も少ない。

**坏** 坏 C(箱形・有台)、坏 D(逆台形・底面糸切り痕)、坏 E(坏 D と同形で胎土・焼成不良)の 3 種がみられる。坏 E は須恵器とするには胎土・焼成が軟質で粗悪だが、系譜的にみて須恵器に含めておく。しかし実際には土師器坏 D の中にきわめてよく似るものがあり、それらを含めて今後見直しが必要となる可能性がある<sup>(16)</sup>。

**蓋** 南栗遺跡において蓋 A～D まで 4 類に細分したが<sup>(17)</sup>、今回は蓋 C・蓋 E の 2 類がみられるのみである。蓋 E(64)は新たな器形で、天井部端が稜をなして下方へ長くまっすぐ折れる外形を呈しており、他例から天井部に宝珠つまみの付くことがわかる。

**長頸壺** 全形を知り得るものはない。断片から推測すると胴部は下部のつぼまる卵形で高台をもち、口縁部は短く立ち上がる外形を呈すようだ<sup>(18)</sup>。肩上部に環状把手が 1 ヶ所付された跡のあるものもある<sup>(19)</sup>。

**短頸壺** 全形を知り得るものはない。肩が張り、口縁部が短く立ち上がる特徴ある外形を呈すが<sup>(20)</sup>、破片では長頸壺と区別がつかないものも多い。図示できた 1 点(22)には外面にカキメが施されている。

**甕** 外形・製作手法等は 大甕埋設遺構出土の大甕 3 点(155～157)に代表されるが、寸法は貯

蔵具として中形から特大のものまで各種が存在することを窺わせるさまざまな破片がある。中形のものでは、底部は平底で口縁部外面の櫛描波状文は施文されない。口頸部にロクロ目を残し、頸部以外は外面をタタキ目が覆う。タタキは土器正位で右まわりに下から上へなされるようだ。内面はタタキの当て具痕をナデて消してあるものが多いが、僅かに同心円文の痕跡を残すものもある。166の胴部内面には横位のハケメがあり珍しい。

**四耳壺** 中形でやや細身の甕の肩部に、横一条の突帯とその上に4単位の突起(耳)が貼りつけられた中形の貯蔵具で<sup>(21)</sup>、今回は少数の出土をみるのみで全形を知り得るものはない<sup>(22)</sup>。

### ③灰釉陶器

器種は、碗・小碗・皿・段皿・耳皿・長頸瓶・手付瓶・小瓶がある。器種・器形の分類や外形・手法の観察は生産地において精緻な研究がなされているので<sup>(23)</sup>、ここではそれらに従う。出土量は供膳形態に限っても全体の1割に満たない。図化提示できた器種は前記のうち小瓶を除くすべてだが、長頸瓶に全形を留めるものはない。小碗・段皿・手付瓶・小瓶はそれぞれ1点のみの出土で、碗・皿・長頸瓶が灰釉総量の9割を占める。

### ④緑釉陶器

小破片のみで全形を知り得るものはないが、器種は碗と瓶類がある。

### ⑤陶器

瀬戸美濃系陶器のおろし皿・天目茶碗・折縁深皿がみられる。数量はきわめて少ない。

### ⑥磁器

白磁が9点、青白磁1点、青磁が1点出土している。白磁はすべて碗でIV類、V類、VIII類がみられる<sup>(24)</sup>。小片が多いが13は全形を知り得る優品である。青白磁は皿、青磁は碗とみられるが、いずれも小破片である。

## 4) 遺構出土土器群の様相

各遺構から出土した土器を、器種・器形に分類して重量を計測した結果が、表6(土師器)、表7(須恵器・灰釉陶器・その他)である<sup>(25)</sup>。土器群の様相は、基本的には器種・器形の組成と量的な比率によって表されると考えるので、表6・7の数値に従って、遺構毎に概観してみたい<sup>(26)</sup>。(尚、文中の⊕は土師器、⊗は須恵器、⊙は灰釉陶器を示す略号で、煩雑になる箇所のみ用いた。)

**第7号住居址** 土師器坏C・坏D・甕X、須恵器坏D・坏E・甕、灰釉陶器碗・長頸瓶、白磁碗が出土している。この他、須恵器の壺類の存在が推定できる。甕Xは破片ばかりで全形を知り得るものはないが、いずれも厚く、ナデやオサエの雑な調整痕を残しており、14の様な外形をとると想像する。一部は羽釜の破片である可能性も残る。食器類<sup>(27)</sup>の種別による構成比は、土師器79.1%・須恵器4.8%・灰釉陶器10.0%・磁器4.9%、器種・器形による構成比は、大きい順に、⊕坏D50.4%・⊙碗7.2%・磁器6.1%・⊕坏C3.1%・⊗坏E2.6%・⊗坏D1.7%<sup>(28)</sup>となっている。図示したものは、⊕坏D(DI:1・2、DII:3)、白磁碗(4~6)、の6点である。

第8号住居址 土師器坏C・埴A・鉢・甕E・小形甕E・小形甕F・鉢形土器、須恵器坏D・坏E・短頸壺、灰釉陶器碗・長頸瓶が出土している。須恵器甕・長頸壺も存在すると推定される。「その他・不明D」欄の300gは非ロクロ厚手の鉢形土器(8)である。食器類の種別による構成比は、土師器59.8%・須恵器35.5%・灰釉陶器4.7%、器種・器形による構成比は、数字の大きい順に、㊦坏E35.0%・㊧埴A16.0%・㊨坏C15.4%・㊩鉢6.7%・㊪碗4.7%・㊫坏D0.5%となっている。土師器の甕類は甕Eが独占している。図示したのは、㊫坏E(7)、㊩鉢形土器(8)、㊧小形甕Fの底部(9)の3点である。

第9号住居址 土師器坏C・坏D・埴A・鉢・台付鉢・甕E・甕X・小形甕E・小形甕F、須恵器坏D・坏E・甕、灰釉陶器碗・小碗・皿・耳皿・長頸瓶、白磁碗が出土している。この他、土師器埴B、須恵器の壺類の存在が考えられる。食器類の種別による構成比は、土師器61.4%・須恵器15.4%・灰釉陶器16.0%・磁器7.2%、器種・器形による構成比は、㊨坏D24.4%・㊫坏E12.7%・㊬皿10.7%・㊩坏C8.7%・磁器7.2%・㊪碗5.3%・㊧埴A4.3%・㊫坏D2.6%という順になっている。図示したものは、㊩坏D(10)、㊪小碗(11)、㊬耳皿(12)、白磁碗(13)、㊭甕X(14)、の5点である。

第10号住居址 土師器坏C・埴A・甕E・小形甕E、須恵器坏E・蓋・短頸壺・甕、灰釉陶器碗・皿が出土している。須恵器甕・長頸壺、灰釉陶器瓶類も存在すると推定される。「その他・不明B」欄の866gは、甕Eの胴部外面ハケメがケズリ状になっているもので、甕Eの変形とみている。食器類の種別による構成比は、土師器82.8%・須恵器13.0%・灰釉陶器4.2%、器種・器形による構成比は、㊨坏C35.5%・㊩埴A14.6%・㊫坏E13.0%・㊪碗2.9%・㊬皿0.2%となる。土師器の甕類は甕Eのみである。図示できたものは、㊫坏E(15)、㊩坏Cまたは埴A(16)、㊨坏C(17・18)、㊩埴A(19)、㊪碗(20・21)、㊫短頸壺(22)、㊫甕(23)、㊩甕E(24)、の10点である。21の底面には判読不能だが墨書が記されている。

第11号住居址 土師器坏C・埴A・鉢・甕E・小形甕F、須恵器坏E・長頸壺、灰釉陶器小瓶、緑釉陶器(瓶類の一部と推定)が出土している。この他、㊫甕・㊪碗または皿の存在が推定できる。食器類の種別による構成比は、土師器81.1%・須恵器15.0%・灰釉陶器3.9%、器種・器形による構成比は、㊨坏C35.2%・㊩埴A16.6%・㊫坏E14.5%・㊩鉢0.5%の順となっている。土師器の甕類は甕Eのみである。図示したものは、㊫坏E(25)、㊨坏C(26)、㊩埴A(27・28)の4点に限る。

第12号住居址 土師器坏C・埴A・皿A・鉢・台付鉢・甕E・小形甕E・小形甕F、須恵器坏D・坏E・蓋・長頸壺・短頸壺、灰釉陶器碗・皿・長頸瓶・手付瓶が出土している。また、須恵器甕の存在が推定できる。㊬手付瓶は完形に近い一括品1点の出土のため1,100gという大きな値を示す。食器類の種別による構成比は、土師器66.6%・須恵器19.2%・灰釉陶器14.2%、器種・器形による構成比は、㊨坏C22.0%・㊫坏E18.5%・㊩埴A15.6%・㊪碗6.5%・㊬皿4.3%・㊩鉢3.9%となっている。土師器の甕類は甕Eのみである。図示したものは、㊫蓋(29)、㊫坏E(30・31)、㊨坏C(32・



33)、㊦壺 A (34・35・36)、㊦皿 A (37)、㊦碗 (38・39)、㊦皿 (40・41)、㊦手付瓶 (42)、㊦小形甕 F? (43)、㊦台付鉢 (44)、㊦小形甕 E (45~48)、㊦甕 X (49)、㊦甕 E (50~53) の25点で、本址出土土器群が示す重量の計測値を視覚的によく表わしている。31(㊦坏 E)の体部外面には墨書があり、「㊦」と判読できる。

第13号住居址 土師器坏 C・壺 A・甕 E・小形甕 E・小形甕 F、須恵器坏 D・坏 E・蓋・甕、灰釉陶器碗、が出土している。この他、須恵器の壺類が存在する可能性がある。図示した㊦小形甕 F(61)は内面に縦位のミガキがあり典型的なものと異なるが、他の要素から小形甕 F に含めた。食器類の種別による構成比は、土師器47.8%・須恵器51.1%・灰釉陶器1.1%、器種・器形別の構成比は、㊦坏 E50.0%・㊦坏 C24.6%・㊦壺 A7.1%・㊦坏 D1.1%・㊦碗1.1%となっている。ただしここで留意しなければならない問題がある。それは本址カマド内およびその右脇から、廃棄の同時性を有すると推定される一括遺物が出土している点である。カマド内からは、3個体程にわたるとみられる㊦甕 E の大小破片が3,175 g と支脚石の上にかぶせた完形の㊦坏 E 1個体、カマド右脇からは完形ないしはやや欠損する㊦坏 E 7個体・㊦坏 C 1個体・㊦小形甕 E 1個体・㊦小形甕 F 1個体、カマド左袖前方から完形の㊦坏 E 1個体が出土しており、特にカマド右脇から出土した一群は、周辺に散布する小破片に対する扱いの問題は残るものの、廃棄に際して器種・器形とその数量に意図があったものであることを認め、無作為な廃棄・遺棄を一応の前提とした重量の計測による土器の提示の対象からはずし、個体数単位の扱いをするべきと考える。この結果、導かれる数字は、食器の種別構成比、土師器62.8%・須恵器35.6%・灰釉陶器1.6%、器種・器形別構成比、㊦坏 E33.9%・㊦坏 C29.0%・㊦壺 A10.4%・㊦坏 D1.6%・㊦碗1.6%と訂正される。土師器の甕の構成は甕 E のみである。図示したものは、㊦坏 E (54~59)、㊦坏 C (60)、㊦小形甕 F (61)、㊦小形甕 E (62)、㊦甕 E (63) の10点で、55~58・60~62がカマド右脇一括出土、59がカマド左袖前方、54・63がカマド内出土(54は支脚石にかぶせたもの)である。59の体部外面には墨書があり、「㊦」と判読できる。

第14号住居址 土師器坏 C・壺 A・耳皿・甕 E・小形甕 E・筒形土器、須恵器坏 D・坏 E・蓋・甕、灰釉陶器長頸瓶が出土している。食器類の種別による構成比は、土師器73.1%・須恵器26.9%、器種・器形別では、㊦坏 C51.6%・㊦坏 D16.1%・㊦壺 A15.6%・㊦坏 E3.2%となる。土師器の甕類は甕 E のみである。図示したものは、㊦蓋 D (64)、㊦坏 D (65)、㊦耳皿 (66)、㊦筒形土器 (67) の4点に限る。

第15号住居址 土師器坏 C・壺 A・皿 A・鉢・台付鉢・甕 E・小形甕 E・小形甕 F・筒形土器、須恵器坏 C・坏 D・坏 E・蓋・長頸壺・短頸壺、灰釉陶器碗・皿・段皿・長頸瓶、緑釉陶器(碗と推定)が出土している。この他、須恵器甕の存在が推定される。食器類の種別による構成比は、土師器76.6%・須恵器14.7%・灰釉陶器8.7%で、器種・器形による構成比は、㊦壺 A18.1%・㊦坏 C16.7%・㊦坏 E14.0%・㊦鉢11.7%・㊦碗8.0%・㊦皿4.4%となっている。土師器の甕類はすべて甕 E が占める。図示したのは、㊦坏 E (68・69)、㊦坏 C (70)、㊦壺 A (71)、㊦皿 A (72・73)、

㊦碗(74・75)、㊦段皿(76)、㊦鉢(77)、㊦台付鉢(78・79)、㊦小形甕E(80)、㊦筒形土器(81)の14点である。

第16号住居址 土師器坏C・埴A・皿A・鉢・耳皿・台付鉢・甕E・甕F・小形甕E・筒形土器、須恵器坏D・坏E・甕、灰釉陶器碗・小碗・皿が出土している。この他、須恵器の壺類・灰釉陶器の瓶類が存在する可能性がある。食器類の種別による構成比は、土師器73.2%・須恵器19.9%・灰釉陶器6.9%、器種・器形別の構成比は、㊦坏C32.6%・㊦坏E19.5%・㊦埴A16.9%・㊦鉢4.8%・㊦碗4.2%・㊦皿1.8%となっている。土師器の甕類には甕Eと甕Fがある。甕Fは甕総量の1%以下であるが、本遺跡では存在自体が珍しい。図示したものは、㊦坏C(83・84)、㊦坏CIII(82・89)、㊦坏E(86)、㊦碗(87)、㊦皿(88)、㊦耳皿(85)、㊦足高高台付の埴?(90)、㊦筒形土器(91)の10点である。84の体部外面と底面、86・89の体部外面には墨書がある。84のものはいずれも「中」と判読でき、他は不明である。

第17号住居址 覆土と床面から青磁碗、青白磁皿の小片が計3点、6g出土しているのみである。

第18号住居址 土師器坏C・坏D・埴A・鉢・甕E・小形甕E・小形甕F・筒形土器、須恵器坏D・坏E・蓋・長頸壺・短頸壺・甕・四耳壺、灰釉陶器碗・皿・長頸瓶が出土している。食器類の種別による構成比は、土師器77.5%・須恵器15.2%・灰釉陶器7.3%、器種・器形別の構成比は、㊦坏C43.8%・㊦坏E13.6%・㊦埴A13.2%・㊦碗6.5%・㊦坏D2.0%・㊦坏D1.5%となっている。土師器の甕類は、甕Eのみである。図示したものは、㊦蓋(92)、㊦坏E(93・94)、㊦坏D(95)、㊦埴A(96・97)、㊦碗(98・99・100)、㊦甕E(101)、㊦甕(102)の11点で、97の底部には径7mm程の小孔が焼成後穿孔されている。また、100の底面には「大井」の刻字がある。

第19号住居址 土師器坏C・埴A・鉢・甕A・甕E・甕X・小形甕E・小形甕F・筒形土器、須恵器坏C・坏D・坏E・蓋・長頸壺・甕、灰釉陶器碗・皿・長頸瓶が出土している。食器類の種別による構成比は、土師器60.0%・須恵器37.0%・灰釉陶器3.0%で、器種・器形別の構成比は、㊦坏E31.5%・㊦坏C29.6%・㊦埴A12.4%・㊦鉢2.9%・㊦坏D2.9%・㊦坏C2.7%・㊦碗1.8%・㊦皿1.1%となっている。土師器の甕類は大半を甕Eが占めるが、僅かに甕A・甕X(49に似る)が混じっている。その比率は、甕A2.5%・甕E94.2%・甕X3.3%<sub>(29)</sub>である。図示したものは、㊦坏E(103・104)、㊦坏C(105)、㊦坏C(106~108)、㊦長頸瓶(109)、㊦筒形土器(110)の8点で、103と106の体部外面には同一とみられる墨書が記されている。

第20号住居址 土師器坏C・坏D・埴A・埴B・鉢・甕・小形甕F、須恵器坏D・坏E・甕、灰釉陶器碗・長頸瓶が出土している。食器類の種別による構成比は、土師器82.8%・須恵器12.9%・灰釉陶器4.3%、器種・器形別の構成比は、㊦坏D57.6%・㊦坏E12.3%・㊦坏C7.8%・㊦埴B6.5%・㊦碗4.3%・㊦鉢1.9%・㊦埴A1.5%となっている。土師器の甕類は、甕Eのみである。図示できたものは、土師器坏D(坏DI:111、坏DII:112)の2点に限る。

第21号住居址 土師器坏C・坏D・埴A・埴B・鉢・台付鉢・甕E・小形甕E・小形甕F、須恵器坏D・坏E・蓋・長頸壺・甕・四耳壺、灰釉陶器碗・皿・耳皿・長頸瓶、緑釉碗、白磁、瀬戸美濃系陶器おろし皿<sub>(30)</sub>が出土している。食器類の種別による構成比は、土師器79.8%・須恵器9.8%・灰釉陶器10.4%で、器種・器形別の構成比は、⊖坏D17.3%・⊖坏C15.6%・⊖埴A10.3%・⊖坏E9.5%・⊖埴B5.0%・⊖皿4.7%・⊖碗3.6%・⊖鉢2.1%の順となっている。土師器の甕類は甕Eのみである。図示したものは、⊖坏E(113~116)、⊖坏C(117・118・120・121・125)、⊖坏D(119・122~124)、⊖埴B(126)、⊖皿(127~130)、⊖碗(131)、⊖耳皿(132)、⊖長頸瓶(133)、緑釉碗(134)、瀬戸美濃系陶器おろし皿(135)、⊖台付鉢(136~141)、⊖小形甕E(142)の30点である。128・129の底面には、判読不能だが墨書がある。125は寸法からみると⊖坏C IIIだが、基本的な外形の相似がない点に問題を残す。

第22号住居址 土師器甕E、須恵器坏E・甕が出土している。非常に少量・小片のため構成比等の操作は行わない。図示できるものはない。

第23号住居址 土師器坏C・埴A・皿A・鉢・甕E・小形甕E・小形甕F・筒形土器、須恵器坏E・長頸壺・短頸壺・甕、灰釉陶器碗・長頸瓶が出土している。食器類の種別による構成比は、土師器52.4%・須恵器45.1%・灰釉陶器2.5%、器種・器形別の構成比は、⊖坏E45.1%・⊖坏C23.6%・⊖埴A15.1%・⊖碗2.3%となっている。土師器の甕類は、甕Eのみである。ところで本址のカマド内からは、かなりまとまった状態で土器が出土し、それらは他の覆土から出土したものと若干性格を異にすると考える。内訳は、⊖甕E1,070g、⊖小形甕E150g、⊖小形甕F135g、⊖坏E38gを示す。図示した土器は、⊖坏E(143~148)、⊖坏C(149)、⊖碗(150)、⊖小形甕F(151)、⊖甕E(151・152)の11点で、これらのうちカマド内出土は148・151の2点である。

竪穴状遺構1 土師器坏C・皿A、灰釉陶器碗、内耳土器が出土している。土器総量が101gしかないため、計測値の比較は不能である。図化提示できたものはない。

竪穴状遺構2 土師器坏C・坏D・埴A・埴B・台付鉢・甕E、須恵器坏E・長頸壺、灰釉陶器長頸瓶、磁器(碗と推定)が出土している。灰釉陶器碗または皿が存在する可能性がある。食器類の種別による構成比は、土師器87.1%・須恵器6.6%・灰釉陶器2.8%・磁器3.5%となっている。図示したものは、土師器埴A(154)の1点のみである。

竪穴状遺構3 土師器坏D・埴B・甕E、須恵器坏D・坏E・甕、灰釉陶器碗・皿、緑釉陶器碗、白磁碗が出土している。食器類は緑釉陶器・白磁まで含めて総量300gしかないため、計測値の比較は不能である。図示したものは、緑釉陶器碗(155)、白磁碗(156)の2点のみとなっている。

土壌 表8に示すとおり。図示できたのは、土壌34出土の瀬戸美濃系陶器鉢(158)、土壌48出土の灰釉陶器耳皿(157)の2点のみである。

ピット 表9に示すとおり。ピットのなかには掘立柱建物を構成する柱穴が含まれており、出土土器は当該建物址の時期を探る手懸りの1つとなろう。図示できたものは、P<sub>36</sub>出土の土師器埴A

(159)、P<sub>99</sub>出土の天目茶碗(160)の2点のみである。159の体部外面には墨書があり、上半を欠損するが、第12号住居址31や第13号住居址59の体部外面に記された墨書と同様と推定される。

**大甕埋設遺構** 須恵器甕の特出品3点が埋設され、その内部から須恵器坏E・四耳壺が出土している。坏Eは1個体で1/3程を欠き、四耳壺も1個体だが全体の半分程を欠損する。なお、大甕埋設遺構出土土器の重量は表6～9に加えていない。

### 5) 土器群の時期

器種・器形とその量による構成比に基づき各遺構出土土器群の相対的な時期を考えてみたい。具体的には前項で示した食器類の土器の構成比の比較による。

#### ①⊕坏C・⊕坩A・⊗坏Eを主体にもつもの

この3者が構成要素の上位3つを占めるのは、第8・10～13・15・16・18・19・23号住居址出土土器群である。その中でも、⊗坏Eが首位のもの第8・13・19・23、⊕坏Cが首位のもの第10～12・16・18、⊕坩Aが首位のもの第15の各住居址出土土器群に分かれる。

#### ②⊕坏Dを主体にもつもの

首位を占めるものが第7・9・20・21号住居址出土土器群であるが、とりわけ第7・20号では50%以上の高率となり、一方第15号では⊕坏Cより僅かに多い程度である。また⊕坏Dの中でも口径の小さい皿形を呈す⊕坏DIがみられるのは、第7・9・20号の3軒である。第14号は坏Dが構成要素の2位を占めている。

#### ③磁器をもつもの

第7・9号住居址出土土器群に磁器がある程度の量で伴っている。第7号では構成要素の3位、第9号では5位を占める。

ここで指標とした各器形の前後関係をみると、⊕坏Dは⊕坏Cの製作手法の省略形としての後継器形と考えられており、更に⊕坏DIは⊕坏Dがやがて大小に寸法分化して現われる<sup>(31)</sup>ものである。また磁器はより新しい要素とみたい。これを①～③にあてはめると、①→②古→(②新→③)という順序が想定できる。①の中では⊗坏Eが⊕坩Aよりも少なく3位にあるものが、新しい様相を示すとみたいが近接した時期なのでそこまでの細分は正しくないかもしれない。特に⊗坏Eの量的な動向には今のところ一定の見解が得られていない。とりあえず各遺構出土土器群の相対的な順序を示すと次の様になると考える。

[8・12・13・16・18・19・23] → [10・11・15] → [14・21] → 20 → [7・9]

第17・22号住居址出土土器群および竪穴状遺構・土壙・ピット出土のそれは資料数が少なく位置付けは難しい。強いて言うなら第17号住居址と竪穴状遺構2・3からの土器群は、第7・9号住居址のそれに近い位置におけると考える。大甕埋設遺構は土器群の様相のみからでは第20号住居址出土土器群以前としか言えない。

他遺跡等での編年研究に対比させると、松本市教委で行った島立地区の発掘調査の報告③の時期

分類<sup>(32)</sup>では〔8・12・13・16・18・19・23〕、〔10・11・15〕が④段階X期、〔14・21〕、20が④段階XI期、〔7・9〕が⑤段階XII期以降ということになり、岡田正彦氏の中农信地方の平安時代土器編年<sup>(33)</sup>では上記と同じ区分で第III期後半、第IV期前半、第V期があてはめられ、原明芳氏の研究<sup>(34)</sup>では〔7・9〕が第五段階、それ以前は第二段階にあたと考えられる。

- 註1 実測用土器の限定・抽出を行った理由は、第1に、松本市内では既に多数の平安時代集落を調査・報告しており、その中で多量の同期土器について触れていて、大部分の土器は模式化・記号化が終了していると判断したからであり、第2に、小片から信頼度の高くないような図を多数作成して掲載したところで、ひとつの遺構出土の土器群の性格をより明確には示し得ないと考えたからである。
- 2 基本的に、ロクロ使用によって残された微弱な稜はロクロ目として端部へ行く程間隔のつまる細い一点鎖線、明瞭な稜は端部へ行く程つまる隙間の狭い長破線、回転ケズリは等間隔のやや太い直線の破線、施釉の境界は太い実線、ハケメは平行する条線、ミガキはその幅を示す2本の細い平行線の集合で表現している。実測図と土器の観察表を比較して頂きたい。尚、ここ5年間程で松本市教委刊行の発掘調査報告書の同時代土器は皆、同様である。
- 3 厳密に考えると、破片数の数え上げの方法はあまり好ましくない。破片の大小に関係なく1片となるからである。また重量で土器の量を把握するという点と自体に疑問を投げかけ、あくまでも一遺構から何個体の出土があったかを知ることが重要だという意見もあるが、翻って考えると、ひとつの遺構から出土する土器が、個数と種類を意図され同時に廃棄されていることが証明・連想されるような出土状態を示さない限り、この意見は受け入れ難い。更に、完形品等から各器種の一個体の平均的な重量を求めておき、総重量をこれで割り戻して個体数を算出するという作業もあまり意味のあることは思えない。
- 4 南東遺跡(第三次)：文献1、北栗遺跡：文献2
- 5 黒色処理については、土器の表面をいぶすことによって炭素を吸着させたものと理解されている(文献3)。
- 6 杯D1の型式変化については文献4 P61、下頁8。(ただし当該文献では「杯AIII」)
- 7 南栗遺跡第3次(文献1)ではこの鉢を杯CIVとしたが、口縁部形態の多様性からみると単に杯Cの寸法が分化したものとのみ考えられない点が多く、北栗遺跡(文献2)から名称を改め、本稿はそれを継承するものである。
- 8 口縁部形態の各種類型を挙げると、端部に面をもつもの：南栗遺跡第2次47住149(文献5 P107)、南栗遺跡第3次6住74(文献1 P103)、片口のつくもの：北栗遺跡21住270(文献2 P114)等がある。
- 9 内外面ミガキ・黒色処理の手法は、この耳皿の他、皿B、境Cにあり、これらを土師器とのみ扱うのは好ましくないかもしれない。
- 10 松本市内では、南栗遺跡第3次6住87(文献1 P103)、北栗遺跡29住436(文献2 P122)等があった。尚、台付鉢の認定にあたって原明芳氏から有益な教示を受けた。記して感謝する。
- 11 出典は、南栗：文献1、北栗：文献2、更埴市社宮司：文献6 P34、更埴市上の田：文献7 P27、更埴市五輪堂：文献8 P20、飯田市日向田：文献9 P11。
- 12 14の類例は、塩尻市吉田向井遺跡20住(文献10 P83)、同市平出遺跡H-72住(文献11 P116)に見られる。
- 13 各遺跡の例を参考にすると、口径が20 cmを超えるものから8 cm位のものまである。
- 14 内面にミガキがあるものの類例として、北栗遺跡出土品(文献2 P135)がある。これには内面黒色処理まで施されている。
- 15 他遺跡に類例を求めると、松本市内では岡田西裏1住(文献12 P27)、松本平では塩尻市吉田向井1住・13住・55住(文献10 P73~93)、伊那地方で箕輪町中道40住(文献13 P251)等があり、中道例は形状がよくわかる。また、北信地方では古墳時代後期の土器群に混ってよく似た土器が出土する(長野市田中沖遺跡2住・7住・12住：文献14 P59~62、坂城町北浦遺跡：文献15 P533)が、口縁部形態に違いがある。
- 16 須恵器杯Dの終末期を示す資料である北栗遺跡5住(文献2 P103)や、くまのかわ遺跡6住(文献16 P63)をみると、内面の底部と体部の境界にはしっかり稜をつけているのに対し、同杯Eの内面の曲線はむしろ土師器杯C・Dに似る。また、土師器杯Dとの区別の難しさは、今回の21号住で統計をとったところ、サンプル3358中、判定に苦しむものが約60%あった。この数字の程度の精度でしか見分けがつかないことになり、近親性を有す可能性も想起される。
- 17 その後の調査で、蓋E(天井部比較的平らで端部が長く下方へ屈折。類例は塩尻市吉田向井27住：文献10 P86)、蓋F(蓋Cの天井部中央が平らでつまみを欠く)の2種を加え、都合6種類が当地方でみられることがわかった。
- 18 全形がわかる例として、下神遺跡SKKS10住出土品(文献17 P102)がある。
- 19 類例は、下神遺跡SKKS2住(文献17 P99)。
- 20 全形がわかる例として、南栗遺跡第2次47住(文献5 P107)出土品がある。
- 21 四耳壺については、笹沢浩氏の研究(文献18)がある。
- 22 全形がわかる例として、塩尻市剪屋敷8住・10住(文献19 P121・134)、松本市南栗第2次4住(文献5 P112)出土品がある。
- 23 文献20~22等。
- 24 白磁の分類は文献24による。尚、9点の白磁の明細は、7住出土品4点(IV類口縁1点：4、同底部1点：6、V類口縁1点：5、V類ないしはⅣ類口縁1点)、9住出土品1点(IV類?輪花：13)、21住出土品1点(V類体部)、建2出土品1点(IVかV類)、壺2出土品1点(V類)、壺3出土品1点(IV類)。

25 表6・7の項目の補足説明は次の通り。

- ①土師器の「坏」「埴」「皿」「鉢」「その他不明A」欄下部の「内黒」と空白の欄は、それぞれ内面黒色処理のあるものとないものを示す。
- ②「その他不明A」欄は、坏・埴・皿・鉢の何れかに属するものを示す。
- ③「その他不明B」欄は、磨滅により甕E・Fの見分けがつかないもの、および甕Xを示す。後者がある場合は本文中の記述でも示す。
- ④「その他不明C」欄は、磨滅により小形甕E・Fの見分けがつかないもの、およびその他の小形甕を示す。後者がある場合は本文中の記述でも示す。
- ⑤「その他不明D」欄は、土師器などの器種にも属さないものを示す。必ず本文中の記述で触れる。
- ⑥「その他不明E」欄は、坏C・D・Eの何れかに属するもの、およびその他の坏類を示す。後者がある場合は本文中の記述で示す。
- ⑦「その他不明F」欄は、部位により長頸壺・短頸壺の見分けのつかないもの、およびその他の壺類を示す。後者がある場合は本文中の記述で示す。
- ⑧「その他不明G」欄は、タタキ目等の甕を示す特徴がみられないが、破片の厚さ等から中・大形の貯蔵具と推定されるものを示す。
- ⑨「その他不明H」欄は、碗・小碗・皿・段皿の何れかに属するものを示す。
- ⑩「その他不明I」欄は、瓶類だが部位により器種の見分けのつかないものを示す。

26 土器群の様相を各遺構間で相対的に比較する時に重要なのは、食器類(供膳形態)の種別、器種・器形の組成と構成比であり、土師器甕のそれである。

27 供膳形態の土器、食膳具を示すが、本稿ではさらに限定して、坏・埴(碗)・皿・鉢を指し、蓋・小形の甕類・壺類は除いた。

28 この数字の算出方法は、前註で指定した食器類の重量の総和で各器形を割ったもの。1%以上の数字をもつものを採用した。

29 この数字の算出方法は、「その他不明B」欄のうち甕Xの重量、および「甕E」「甕F」欄の重量を加えたものを基本とした。

30 おろし皿は14~15世紀の産で、本址土器群の中ではこの1点のみ際立って新しい。覆土最上層から完形で出土したことを考慮すると、調査時に見落したごく小規模な遺構が本址上にあり、それに伴うものと理解したい。このためおろし皿の数値は構成比の計算に初めから除外してある。尚おろし皿の時期は原明芳氏の教示による。記して感謝する。

31 文献4 P291

32 南栗遺跡二次(文献5 P86~89)、南栗遺跡三次(文献1 P84~86)、北栗遺跡(文献2 P142・143)と一連のものである。

33 文献23

34 文献4

#### 参考文献

- 1 松本市教育委員会 1986『松本市島立南栗遺跡』
- 2 松本市教育委員会 1987『松本市島立北栗遺跡・条里的遺構』
- 3 小笠原好彦 1971『丹塗土師器と黒色土師器——土師器における二次的表面加工の問題について——』『考古学研究』18-2
- 4 原 明芳 1987『松本平における平安時代の食膳具——変化とその背景の予察——』『信濃』III39-4
- 5 松本市教育委員会 1985『松本市島立南栗・北栗遺跡、高綱中学校遺跡、条里的遺構』
- 6 更埴市教育委員会 1985『社宮司遺跡』
- 7 更埴市教育委員会 1983『横沢遺跡群I』
- 8 更埴市教育委員会 1987『五輪堂遺跡IV』
- 9 飯田市教育委員会 1985『町道知久町中村線道路改良工事に伴う埋蔵文化財調査報告書〔鼎・日向田遺跡〕』
- 10 塩尻市教育委員会 1983『吉田向井』
- 11 塩尻市教育委員会 1987『史跡 平出遺跡 昭和61年度県営畑地帯総合土地改良事業桔梗ヶ原地区埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』
- 12 松本市教育委員会 1986『松本市岡田西裏遺跡』
- 13 長野県教育委員会 1974『長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書——上伊那郡箕輪町——』
- 14 長野市教育委員会 1980『田中沖遺跡』
- 15 更級埴科地方誌刊行会 1978『更級埴科地方誌第二巻(原始古代中世編)』
- 16 松本市教育委員会 1982『松本市笹賀くまのかわ遺跡』
- 17 松本市教育委員会 1984『松本市下神・町神遺跡』
- 18 笹沢 浩 1986『凸帯付四耳壺考』『長野県考古学会誌』51
- 19 塩尻市教育委員会 1982『剪屋敷』
- 20 田口昭二 1982『美濃窯の灰軸陶器と緑釉陶器』『考古学ジャーナル』211
- 21 榎崎彰一・斉藤孝正 1983『愛知県古窯跡分布調査報告書(III)』愛知県教育委員会
- 22 前川 要 1984『猿投窯における灰軸陶器生産最末期の諸様相——瀬戸市百代寺窯出土遺物を中心にして——』『瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要III』
- 23 岡田正彦 1977『平安時代土師器等の編年試論——特に長野県中南信地方の住居址出土土器を中心として——』『信濃』III29-9
- 24 横田賢次郎・森田勉 1978『大宰府出土の輸入中国陶磁器について——型式分類と編年を中心にして——』『九州歴史資料館研究論集』4

表 6

北方遺跡土師器出土量一覽

(単位：8)

	坏		埴		皿		鉢		その他不明A		耳皿		甕		小形甕				筒形土器	その他不明D	土師器合計	
	内黒		内黒		内黒		内黒		内黒		台付鉢	E	F	その他不明B	小計	E	F	その他不明C				小計
第7号住居址	55	884							49	398				326	326				0			1712
8	34	98	87	50			57	30	157	30			265		265	6	45		51		300	1129
9	181	507	90				17	288	194	288	15	415		1041	1456	86	16		102			2850
10	692	482	485					665	430			3702		866	4568	188		93	281			7603
11	469	640	503	21				342	565	16		2757		58	2815		13		13			5384
12	383	357	347	180	24	103	30	482	336	30	250	4520			4520	882	44		926			7938
13	579	186	179	43				370	133			5099			5099	754	393		1147			7736
14	165	75	60					35	5	30		1190			1190	30			30	80		1670
15	1125	170	1358	50	320	25	910	1067	920		240	964			964	552	330	130	1012	430		8591
16	1264	305	813			8	63	170	560	339	21	2951	21		2972	223		35	258	769		7642
17															0				0			0
18	1806	1117	845					31	21	973	161	5039			5039	487	301		788	34		10815
19	598	63	264	14			64	270	68			4304		1114	5418	470	50		520	342		7621
20	69	510	13	58			17	67				102			102		36		36			872
21	2696	2984	1773	863			141	223	1961	3105	1413	3578		250	3828	811	209	179	1199			20186
22												54			54				0			54
23	215	317	341		6		15	150	135			6174			6174	231	135		366	32		7751
堅穴埴壇1	13	18				5		8	21						0				0			65
2	43	60	237	41				29	92		18	135			135				0			655
3		161	36									87			87				0			284
土壇(合計)	106	82	171	14				220	331			52			52		5		5			981
ビット(合計)		30	68					18	108			16			25				0			249
器種・器形別計	10493	9046	7634	1370	326	62	1418	7617	7465	51	2036	41404	21	3664	45089	4720	1577	437	6734	1687	300	101788





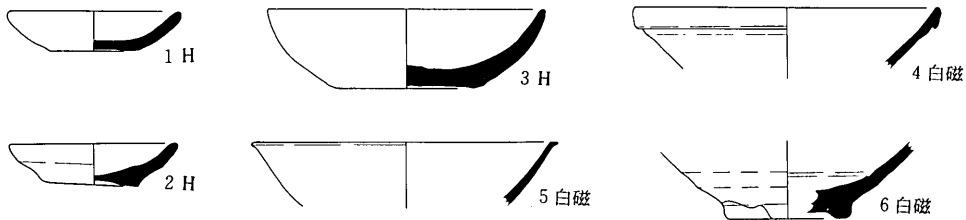
表8 北方遺跡土器出土量一覧(土壙) (単位：g)

土壙	土 師 器				須 惠 器				灰 軸 陶 器			陶 器	内 耳	計			
	環		境		環		甕		碗	碗	甕				瓶		
	内黒	内黒	内黒	内黒	他E	E	E	E									
27			12	14	40					43					109		
28				6	10							4			20		
29					35	26									61		
30									10						10		
31					10										10		
32										36					36		
33	15		45		4		5	6							75		
34													48		48		
36			56												56		
37			35	43	10			23	20	31		1			163		
38					5							3			8		
39	10	11	8	10	19	7									65		
40		24		5	9	15		71				4		235	363		
41		8		6	20										34		
42		5		4	8							10			27		
43	8		9		7			4							28		
44					56										56		
45						6	9					4			19		
46	32	6	5	42	15				19						119		
47					20			9							29		
48					9	10		3							66		
49	14			11	29			11							65		
50	15			6	15	5		31		100		4			176		
51								8							8		
52		5			19			4							28		
53	14														14		
55		4			10			4				3			21		
60			10	4	16					10					40		
61					4	5				60					69		
62	12	5			4			4							25		
計	106	82	171	14	220	331	52	5	158	59	270	10	58	29	48	235	1848

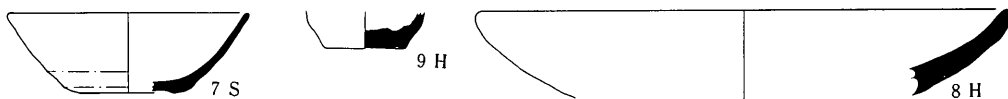
表9 北方遺跡土器出土量一覧(ピット) (単位：g)

ピット	土 師 器				須 惠 器		灰 軸 瓶	陶 器	計		
	環		境		環						
	非内黒	内黒	内黒	内黒	不明A	其他B					
36			63			9			88		
37(建1)					10				10		
40(〃)					2				2		
42(〃)					18				18		
43(〃)					9		3		12		
82(建4)							18		18		
98							15		15		
99								75	75		
109					15				15		
119(建5)					5	4		6	15		
120(〃)					10				10		
121(〃)			30						30		
131			5				12	9	26		
155					5	21		4	34		
156・157					10			10	20		
164						11	1	6	18		
167						4			4		
169						2	3		5		
計			68	18	108	16	9	68	23	75	415

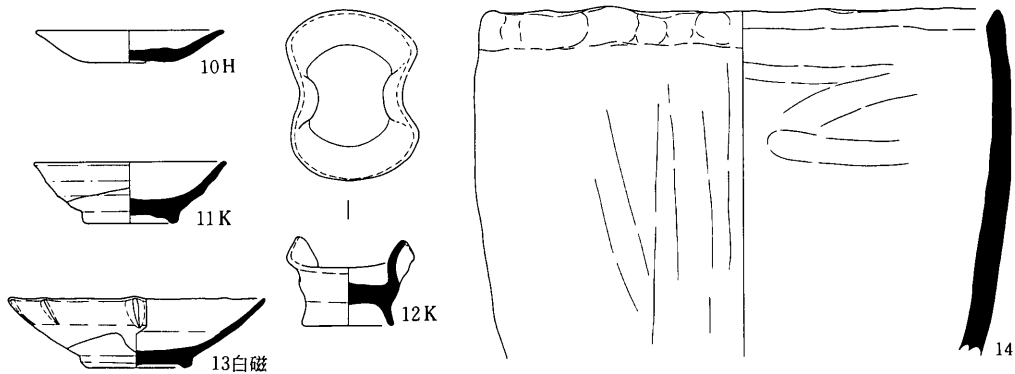
第7号住居址



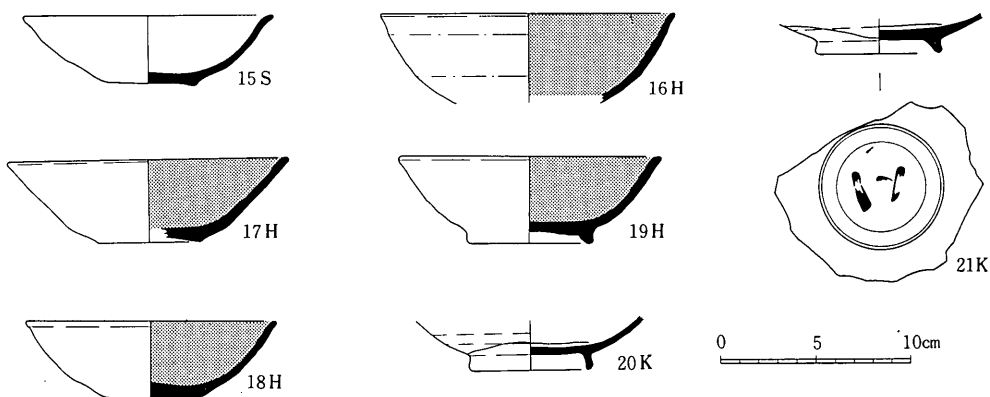
第8号住居址



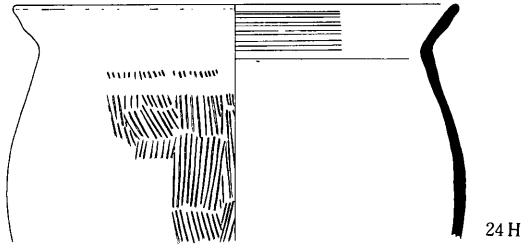
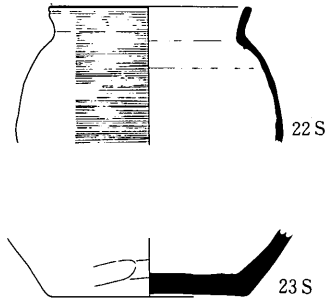
第9号住居址



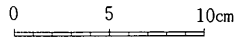
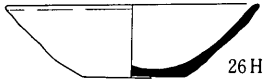
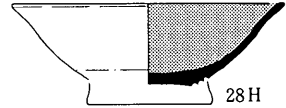
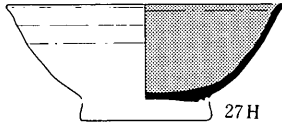
第10号住居址



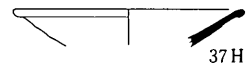
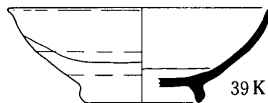
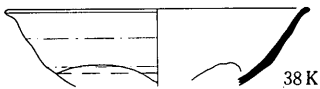
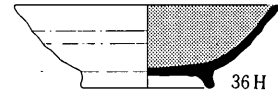
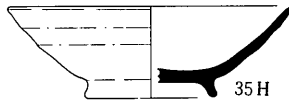
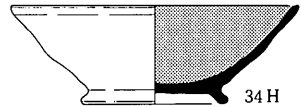
第35图 北方遺跡出土土器(1)



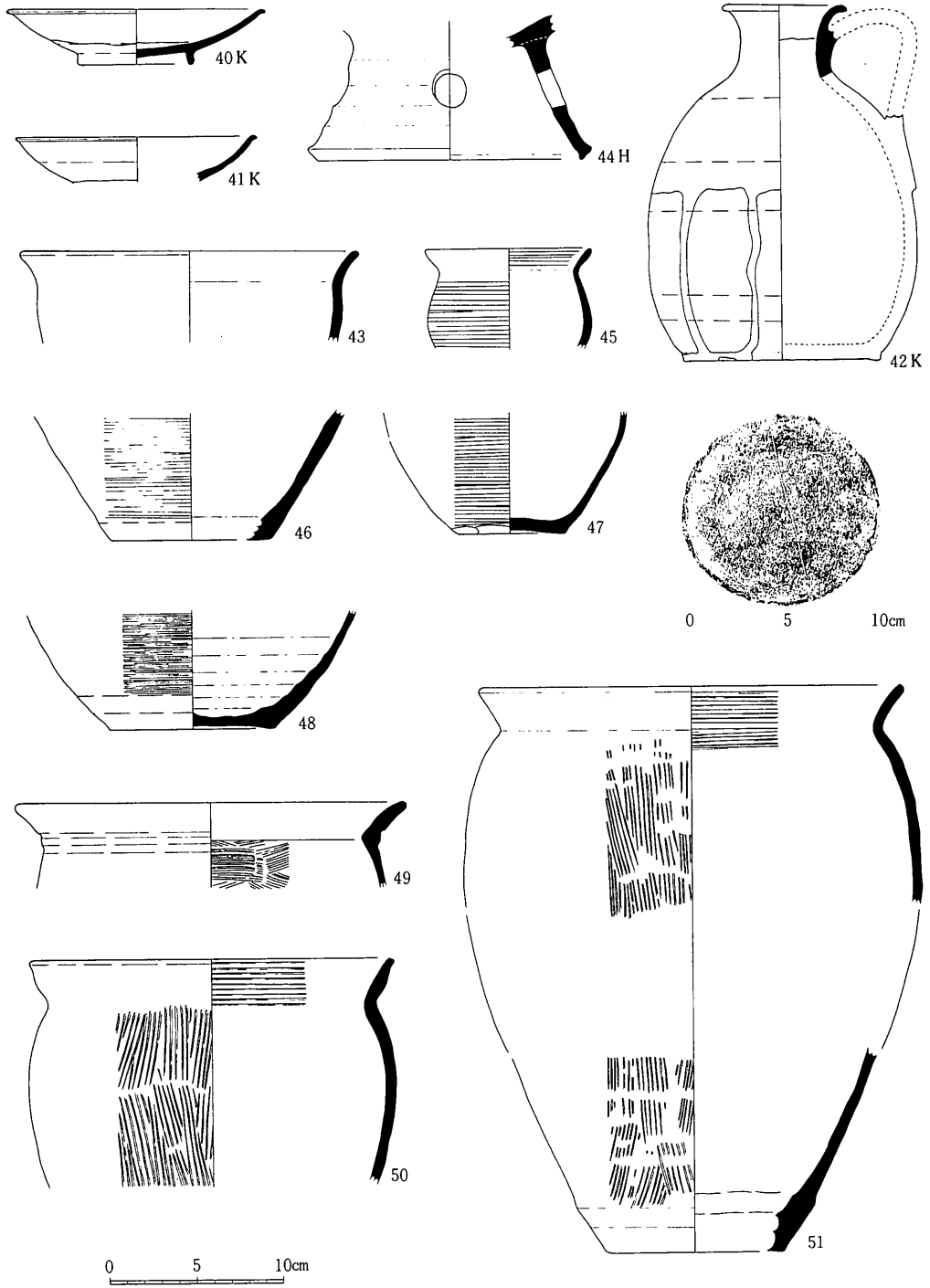
第11号住居址



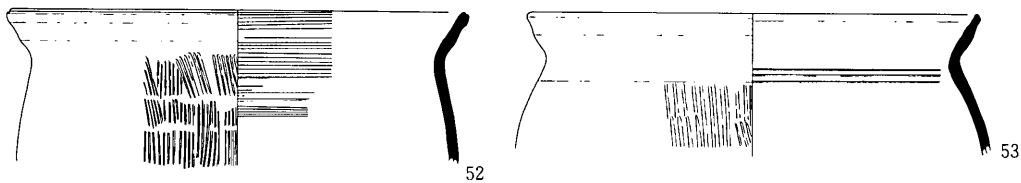
第12号住居址



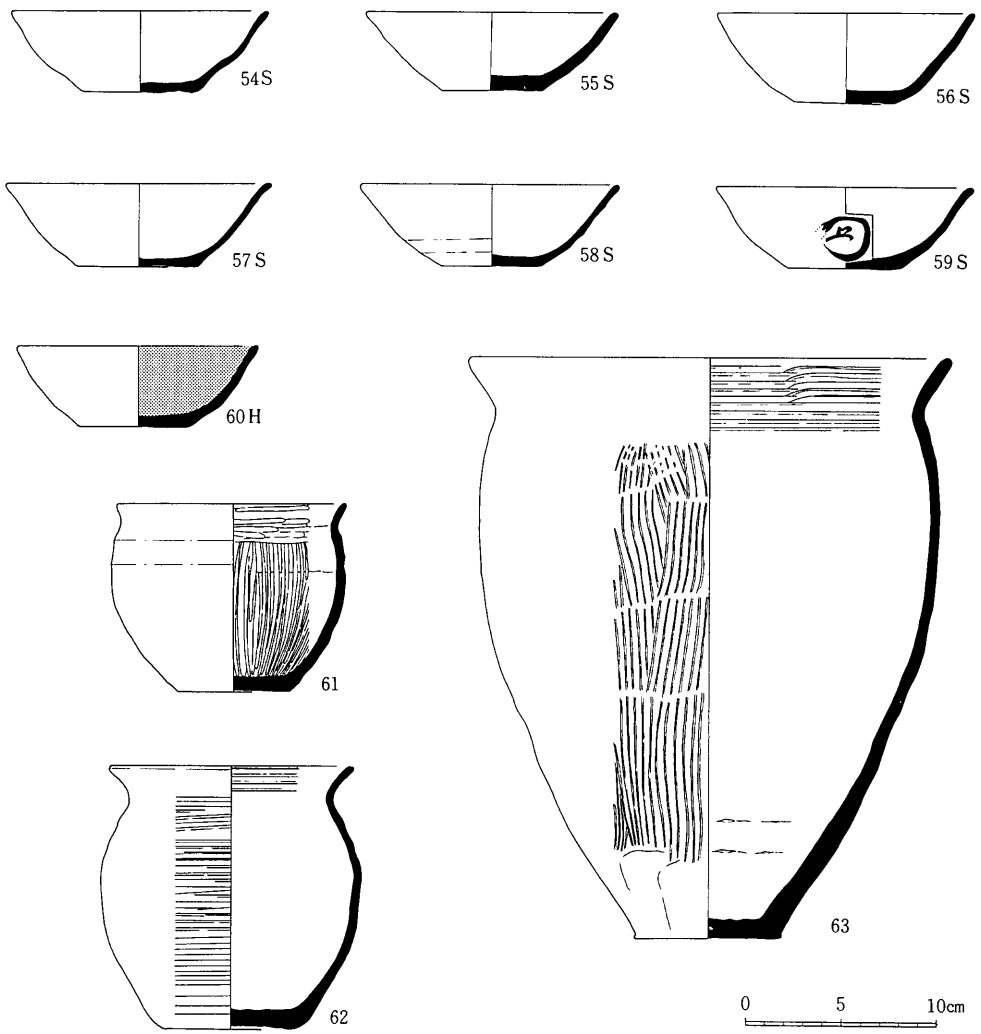
第36图 北方遺跡出土土器(2)



第37图 北方遺跡出土土器(3)

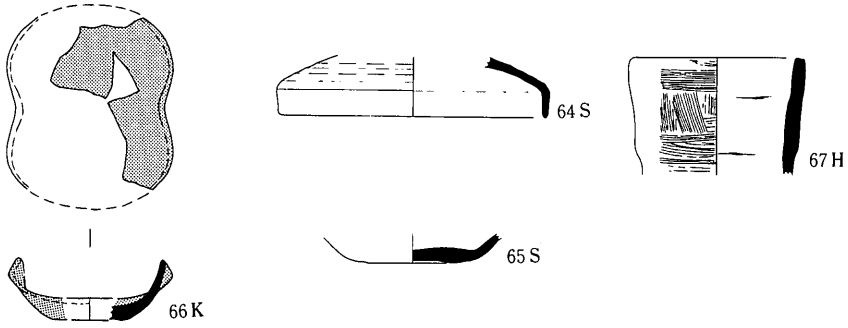


第13号住居址

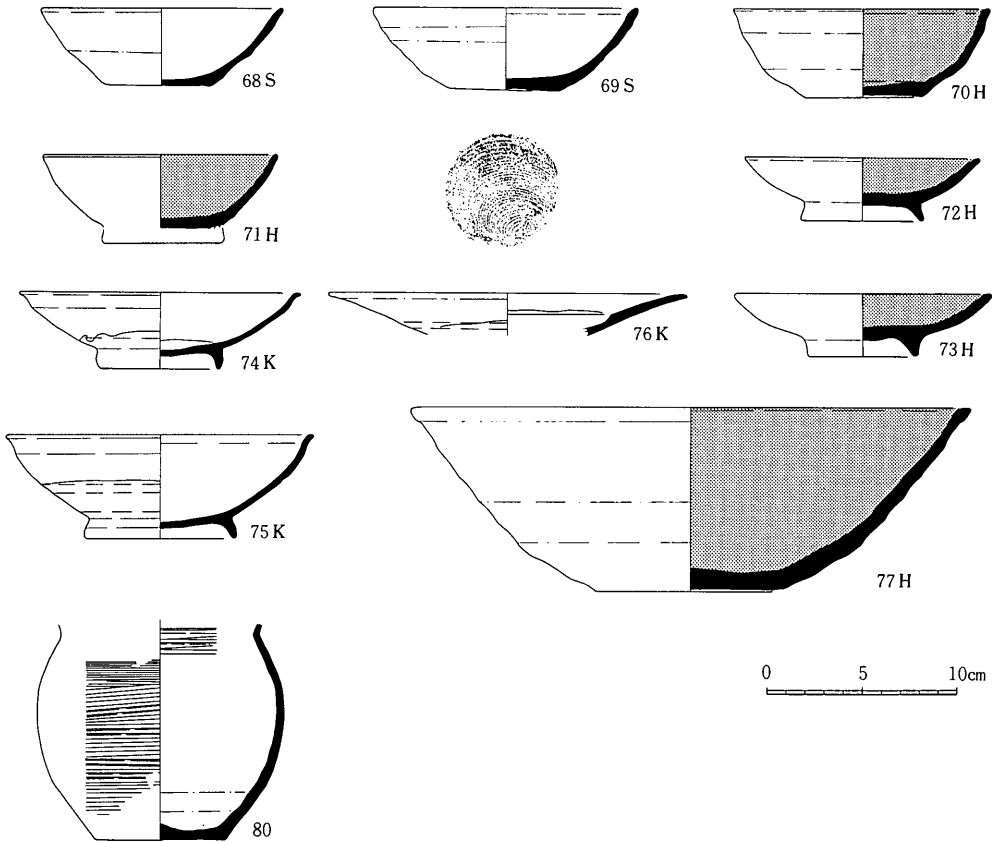


第38图 北方遺跡出土土器(4)

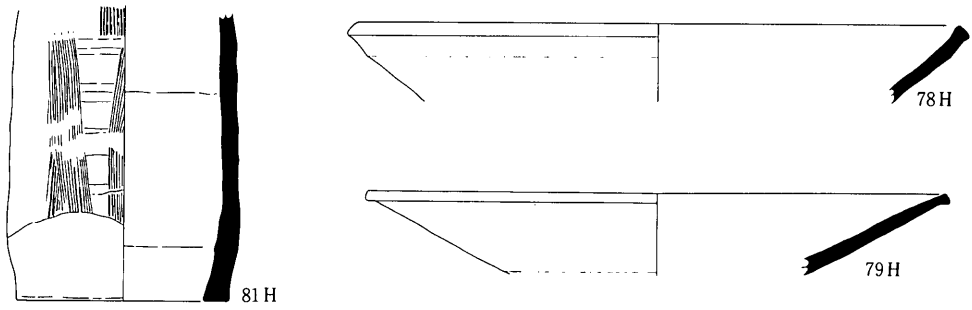
第14号住居址



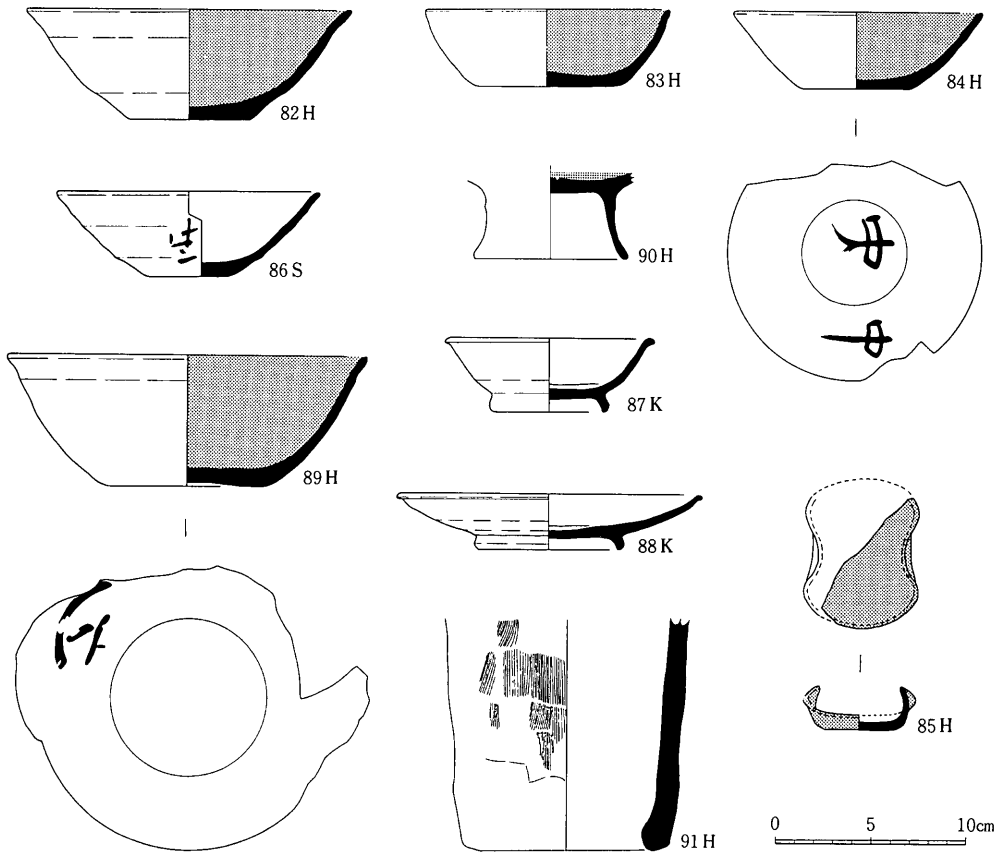
第15号住居址



第39图 北方遺跡出土土器(5)

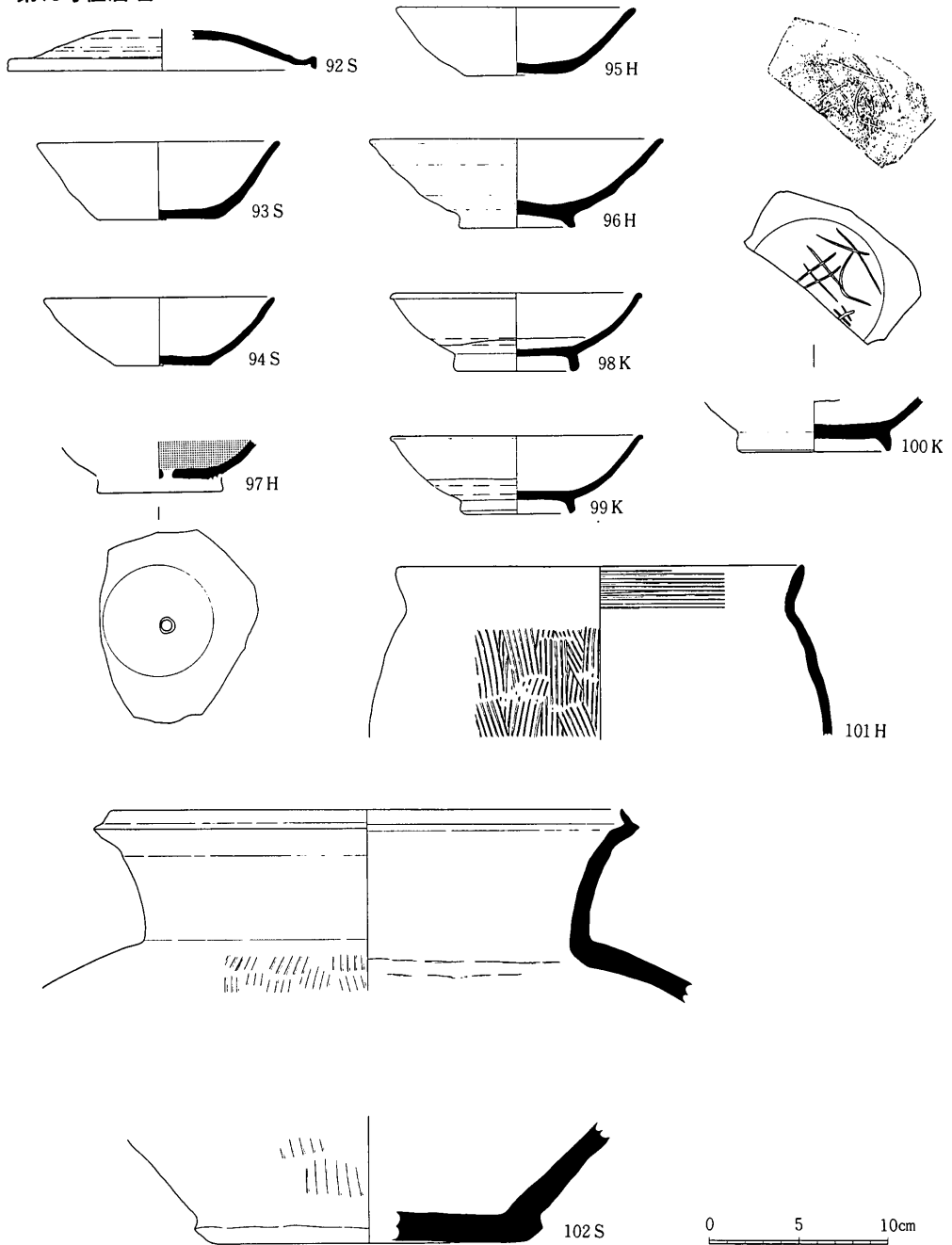


第16号住居址



第40図 北方遺跡出土土器(6)

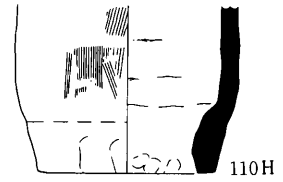
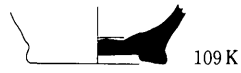
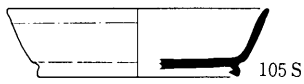
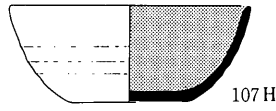
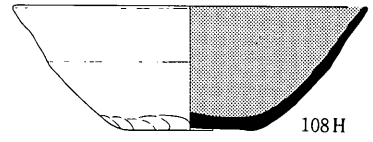
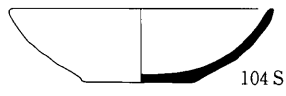
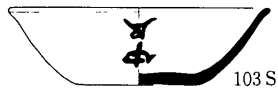
第18号住居址



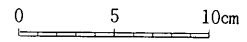
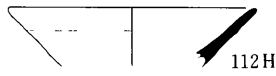
第41图 北方遺跡出土土器(7)



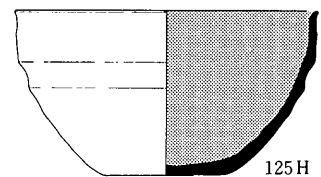
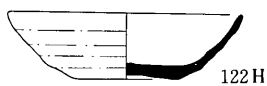
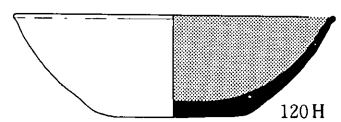
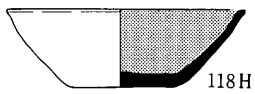
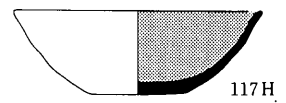
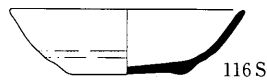
第19号住居址



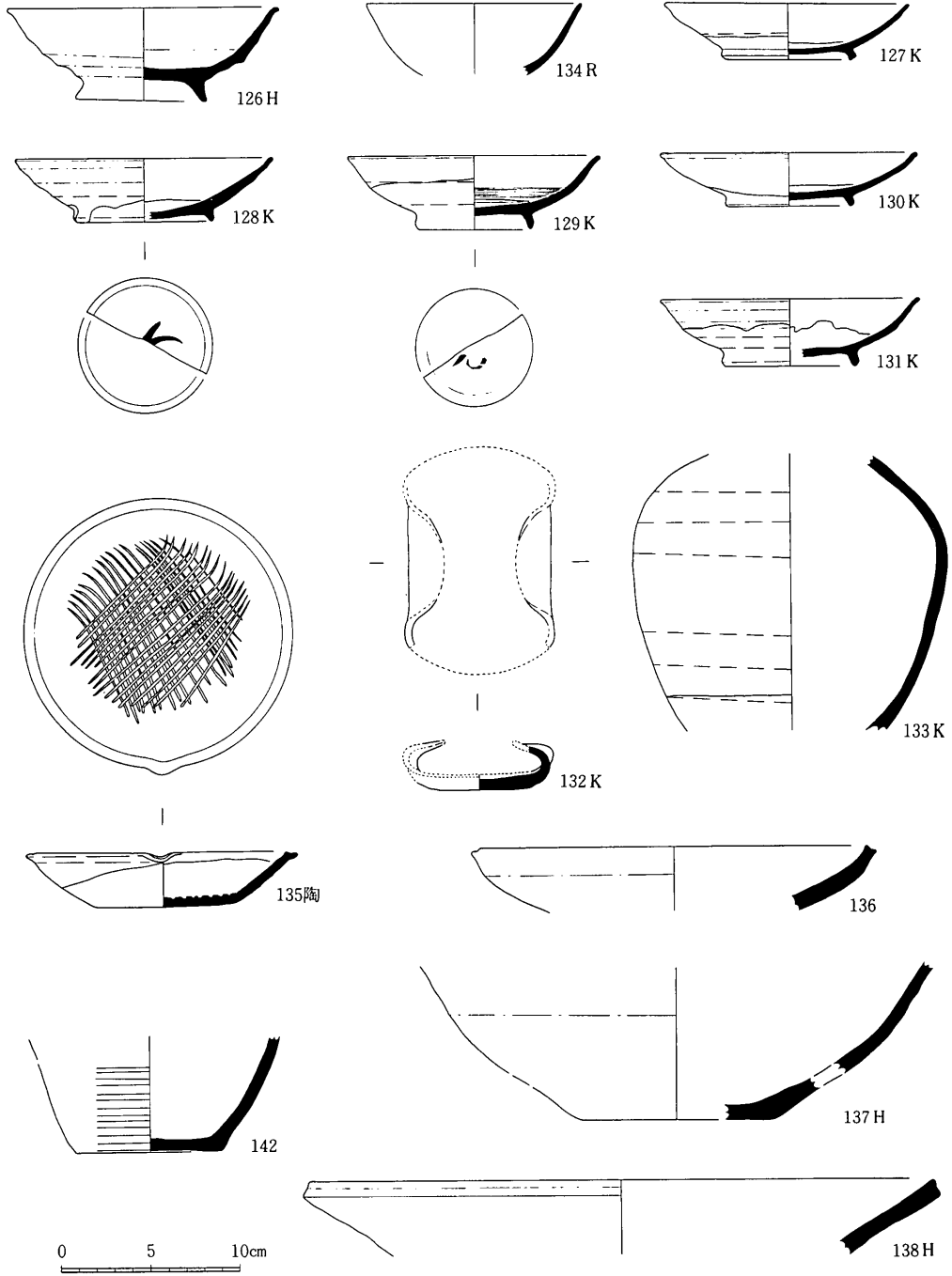
第20号住居址



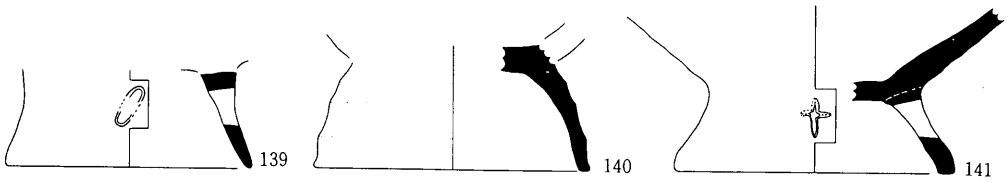
第21号住居址



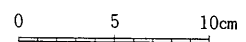
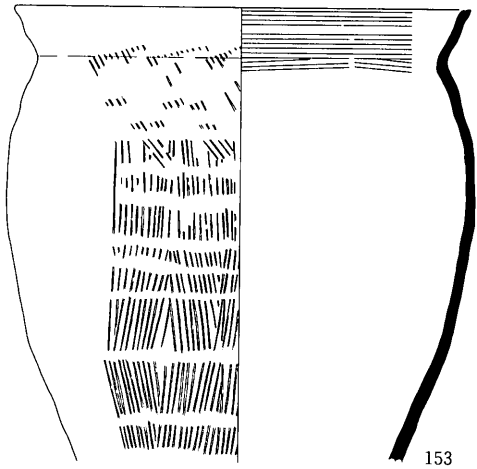
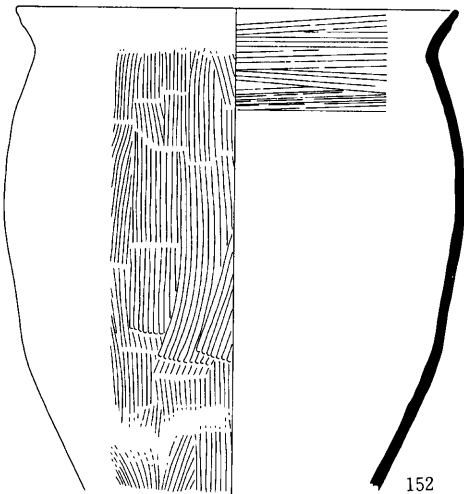
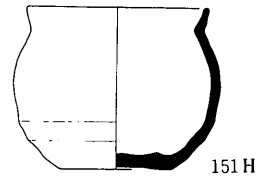
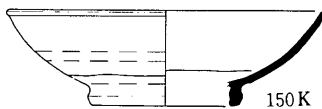
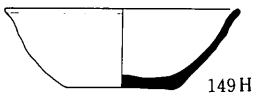
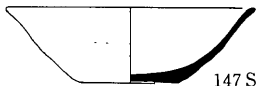
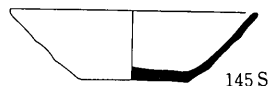
第42図 北方遺跡出土土器(8)



第43図 北方遺跡出土土器(9)

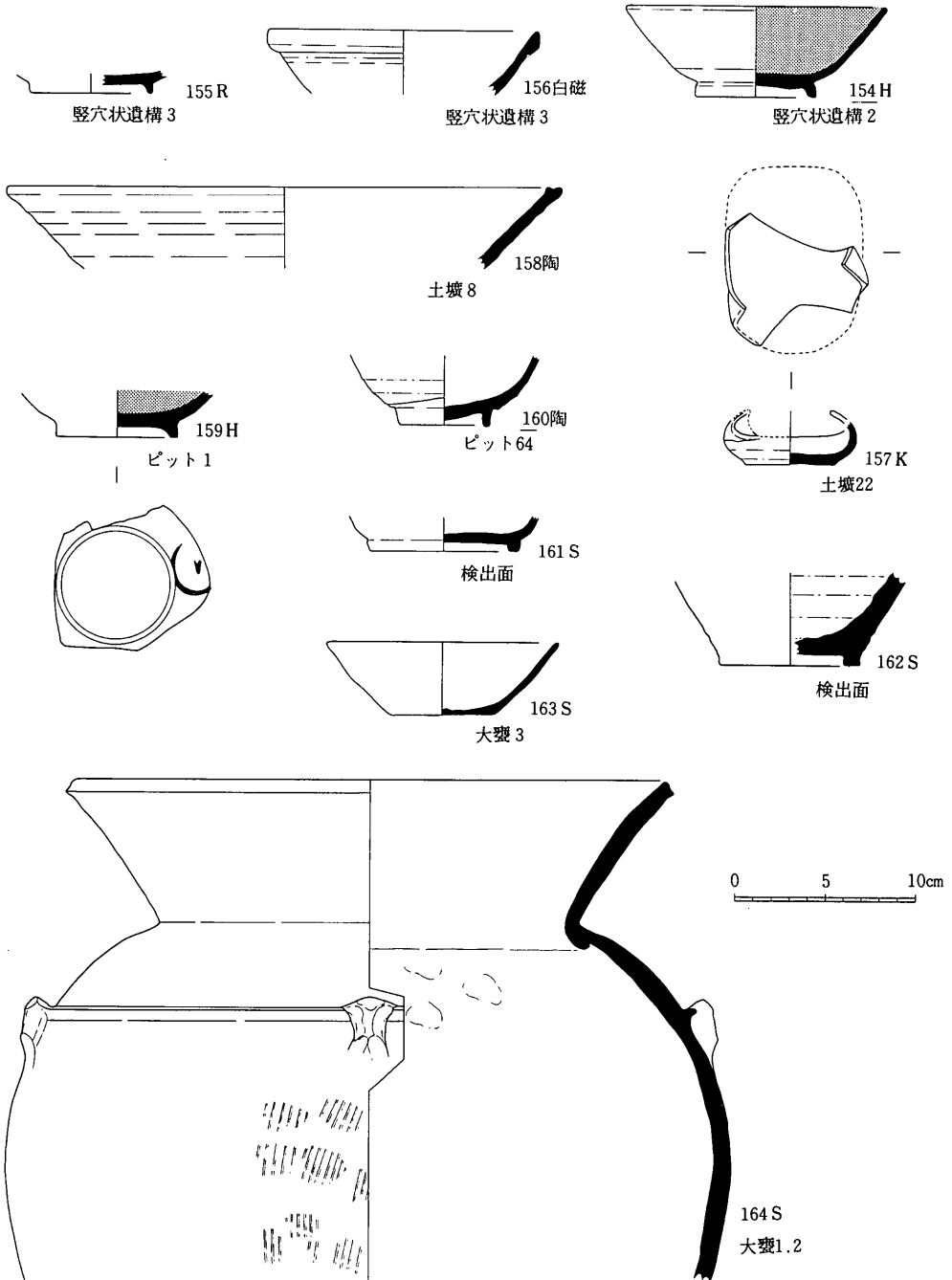


第23号住居址



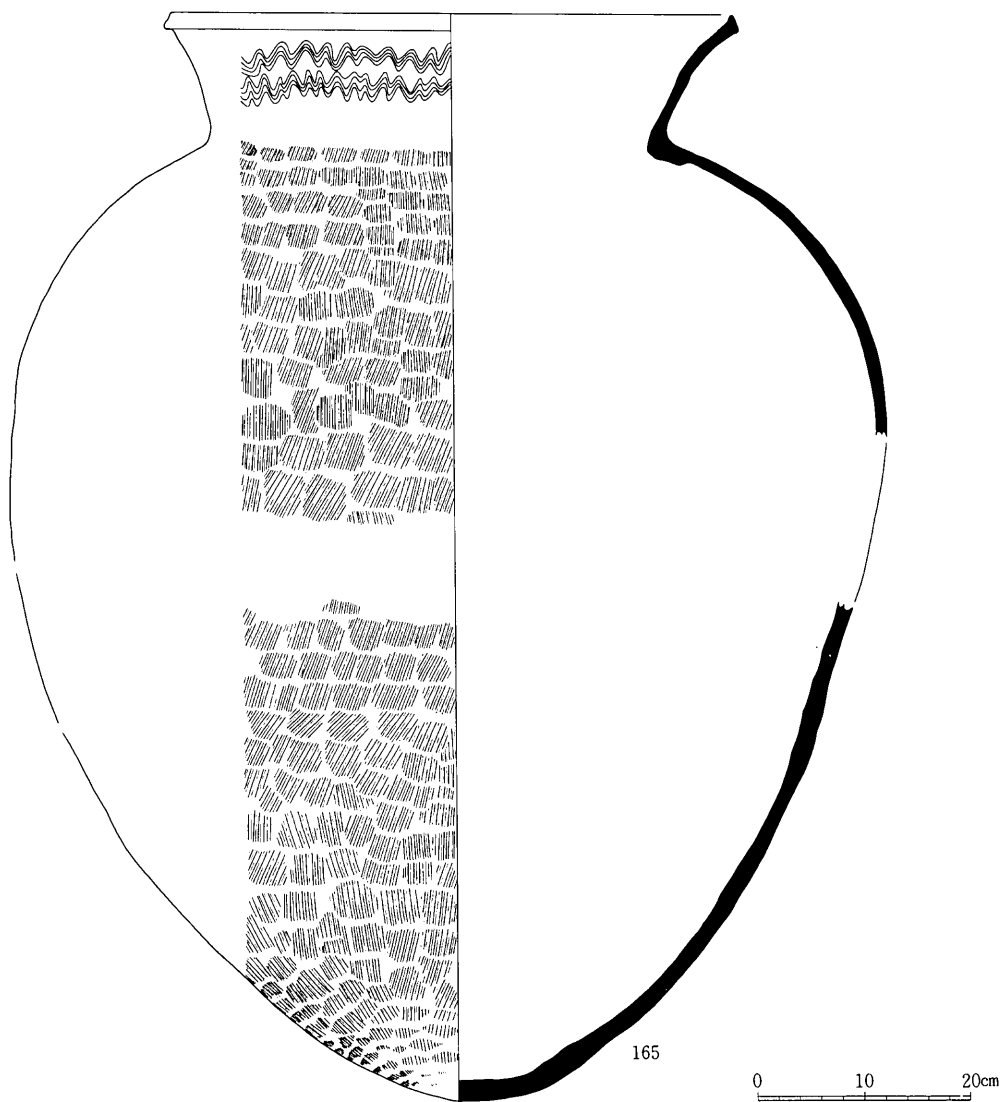
第44图 北方遺跡出土土器(10)

その他



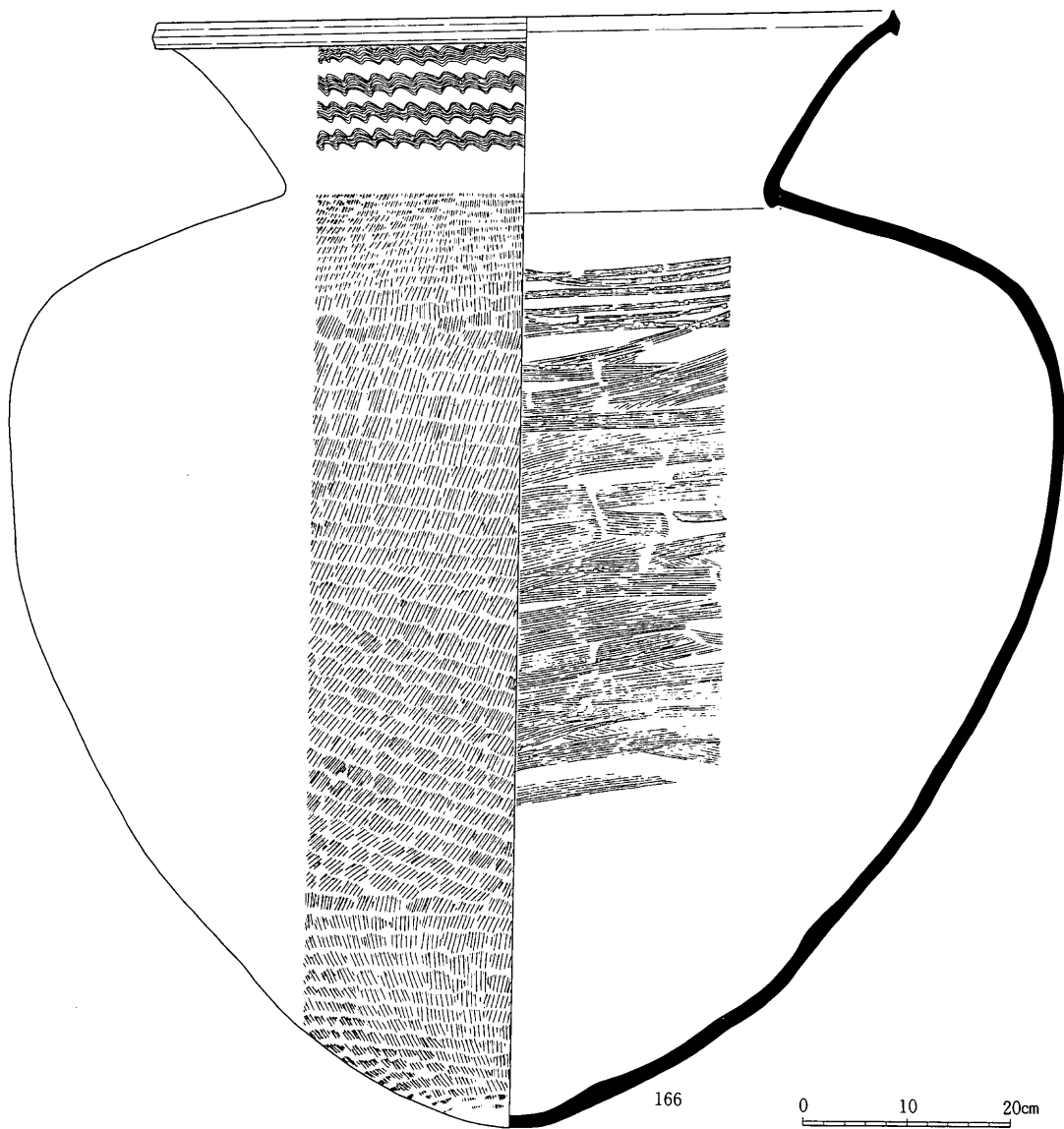
第45図 北方遺跡出土土器(1)

大甕 1



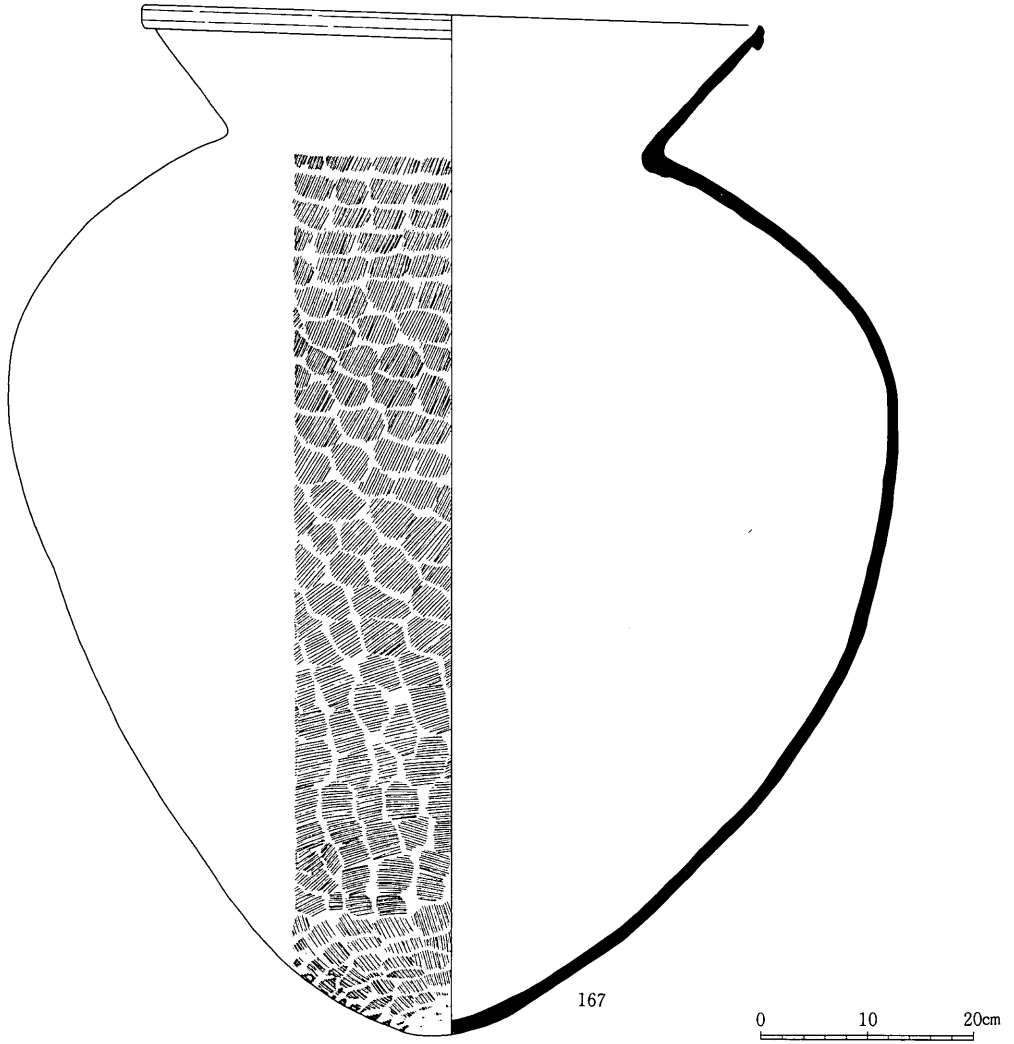
第46図 北方遺跡出土土器(12)

大甕 2



第47図 北方遺跡出土土器(13)

大甕 3



第48図 北方遺跡出土土器(14)

表10

北方遺跡出土土器観察表

No.	出土地点	種別	器形	寸法 (cm)		口径	口径高	色		調内面	形態・調整・特徴	備考
				口径	口径高			外面	内面			
1	住	土師器	坏D I	9.2	4.7	2.1	1/3	茶褐～暗褐	茶褐	ロクロナデ、底部回転糸切	作りが雑	
2	"	"	"	8.9	4.9	2.2	3/4	茶褐	"	ロクロナデ、底部回転糸切	作りが雑	
3	"	"	坏D II	14.5	7.1	4.1	1/3	淡黄褐	暗褐	ロクロナデ、底部回転糸切	12C	
4	"	白磁	碗IV類	16.3				白	淡灰	折り返した大きな玉縁の口縁、外面折り返し近くまでケズリ	12C	
5	"	"	碗V類	16.1			1/12	白	淡黄白	端反りの口縁、内面に胎筋文様	12C	
6	"	"	碗V類		7.5		(1/5)	白	白灰～乳白	ケズリ出し高台、外面高台際にもノミ痕、内面に沈線	12C	
7	住	須恵器	坏E	12.6	6.0	4.2		暗灰～灰	暗灰～灰	ロクロナデ、底部回転糸切		
8	"	土師器	鉢?	28.2				茶褐～暗褐	茶褐	ナデ		
9	"	"	小形變F		4.3			"	暗褐	ロクロナデ、底部回転糸切		
10	住	"	坏D I	10.0	4.7	1.8	1/4	茶褐	茶褐	ロクロナデ (?), 底部回転糸切のち板状のものでこする		
11	"	灰 釉	碗	10.2	5.0	3.2	3/4	淡灰	茶褐灰	ロクロナデ、回転ヘラケズリ、付け高台のちヨココナデ		
12	"	"	耳皿	5.6	4.8	4.5	完	淡黄灰白	乳白	ロクロナデ、底部回転糸切、付け高台のちヨココナデ、指による押し込み	一部スス付着	
13	"	白磁	碗IV類	13.4	5.7	3.7	2/3	白	暗褐	ケズリ出し高台、輪花(8本)、内面底部近いところに沈線	12C	
14	"	土師器	變X	27.2			1/5	淡黄褐	灰白	口縁端面取りかヨココナデ、外面脚部タテナデ、内面ヨココナデ	内外面スス付着	
15	10 住	須恵器	坏E	13.2	4.8	3.7	1/2	灰白～黄白	灰白	ロクロナデ、底部回転糸切		
16	"	土師器	坏一境	15.5			2/3	淡茶～黒	黒	ロクロナデ、体部内面ヘラミガキ	内黒	
17	"	"	坏C	14.9	5.4	4.3	1/4	淡黄褐	"	ロクロナデ、底部回転糸切、体部内面ヘラミガキ	内黒	
18	"	"	"	13.2	4.8	4.1	1/5	褐～暗褐	"	ロクロナデ、底部回転糸切、体部内面ヘラミガキ	内黒	
19	"	"	坏A	14.0	6.8	4.6	1/3	褐～淡黄褐	"	ロクロナデ、底部回転糸切、付け高台のちヨココナデ、体部内面ヘラミガキ	内黒	
20	"	灰 釉	碗		6.2		(1/3)	灰白	灰白	ロクロナデ、外面体部下半回転ヘラケズリ、付け高台のちヨココナデ		
21	"	"	"		6.7		(完)	白	淡黄灰	ロクロナデ、外面体部下半回転ヘラケズリ、付け高台のちヨココナデ	底部墨書	
22	"	須恵器	短頸壺	10.6			1/6	暗灰	暗灰	ロクロナデ、外面カキ目		
23	"	"	長頸壺		10.5		(完)	"	"	ロクロナデ、内面ナデ、外面回転ヘラケズリ、底部ナデ		
24	"	土師器	變E	23.2	9.4		1/2	赤褐～茶褐	赤褐～茶褐	口縁ヨココナデのち内面カキ目、脚部内面ナデ、外面ハケ目		
25	11 住	須恵器	坏E	13.2	5.4	3.7	1/4	黄褐～暗褐	黄褐～淡黄灰	ロクロナデ、底部回転糸切		
26	"	土師器	坏C	13.4	5.5	3.9	1/3	淡黄褐	淡黄褐～黒	ロクロナデ、底部回転糸切		
27	"	"	坏A	14.6			1/6	黄褐	黒	ロクロナデ、底部回転糸切、付け高台のちヨココナデ、内面ヘラミガキ	内黒、高台はがれている	
28	"	"	坏A	14.3			1/3	茶褐	黒	ロクロナデ、底部回転糸切、付け高台のちヨココナデ、内面ヘラミガキ	"	
29	12 住	須恵器	蓋C	16.7			1/8	淡青灰	青灰	ロクロナデ		
30	"	"	坏E	12.6	6.3	3.6	2/3	黄灰～淡灰	黄灰～淡黒灰	ロクロナデ、底部回転糸切		
31	"	"	"	13.2	4.6	4.4	2/3	灰白	灰白	ロクロナデ、底部回転糸切	外面に墨書	
32	"	土師器	坏C	13.9	5.6	3.9	1/16	茶褐	黒	ロクロナデ、底部回転糸切、内面ヘラミガキ	内黒	
33	"	"	"	13.0	6.4	4.1	2/5	淡茶褐～淡褐	淡黄褐～淡褐	ロクロナデ、内面ヘラミガキ、外面体部下半ナデ		



No	出土地点	種別	器形	寸法 (cm)		残存 口径 (底部)	色		調内面		成形・調整・形態の特徴	備考
				口径	底径		外	内				
34	住	土師器	桶A	15.2	7.8	5.2	2/3	淡黄褐	黒~茶褐	黒~茶褐	口シロナデ、底部回転糸切のちヨコナデ、付け高台のちヨコナデ、内面ヘラミガキ	内黒、外面にヘラのあたってあ
35	"	"	"	15.2	7.0	4.7	1/3	淡茶褐~淡黄褐	淡黄褐~淡褐	淡黄褐~淡褐	口シロナデ、付け高台のちヨコナデ、内面ヘラミガキ	内黒
36	"	"	"	13.9	7.0	4.3	1/10	淡黄褐~淡褐	黒	黒	口シロナデ、底部回転糸切のちヨコナデ、付け高台のちヨコナデ、内面ヘラミガキ	一部スス付着
37	"	"	皿A	12.1			1/8	黄褐	黄褐~暗褐	黄褐~暗褐	口シロナデ	
38	"	灰釉	碗	16.2			1/4	淡黄灰	透明	透明	口シロナデ、外面の底部及び側面にかけて回転ヘラケズリ	
39	"	"	"	14.0	5.9	5.0	1/5	淡灰~淡黄灰	淡緑~透明	淡緑~透明	口シロナデ、底部回転糸切、付け高台のちヨコナデ、体部回転ヘラケズリ	
40	"	"	皿	14.9	6.7	3.1	わすか(完)	淡灰	淡灰	淡緑	口シロナデ、底部から側面にかけて回転ヘラケズリ、付け高台のちヨコナデ	
41	"	"	"	13.8			1/6	"	"	"	口シロナデ	
42	"	"	手付瓶		11.4	20.5	(完)	灰白	緑灰	緑灰	口シロナデ、胴部外面・底部回転ヘラケズリ	
43	"	土師器	小形甕?	19.6				淡橙褐	明褐	明褐	口シロナデ	
44	"	"	台付鉢		16.4		(1/2)	黄褐~赤褐	黄褐	黄褐	口シロナデ、円形透し4か所	
45	"	"	小形甕E	9.6			1/4	暗茶褐	茶褐	茶褐	口シロナデ、胴部外面、口縁内面カキ目	二次焼成
46	"	"	"		9.2		(1/2)	赤褐	赤褐	赤褐	口シロナデ、外面カキ目、底部回転糸切、胴部下方ケズリ	
47	"	"	"		6.6		(完)	黄褐~暗褐	暗褐	暗褐	口シロナデ、外面カキ目、底部回転糸切、胴部下方ケズリ	
48	"	"	"		9.6		(1/4)	茶褐~暗褐	橙褐	橙褐	口シロナデ、外面カキ目、底部回転糸切、胴部下方ケズリ	
49	"	"	甕X	22.6			1/6	赤褐	赤褐	赤褐	口縁ヨコナデ、胴部外面ナデ、内面ヘケ目	
50	"	"	甕E	21.0			1/6	橙褐	橙褐~暗褐	橙褐~暗褐	口縁ヨコナデ、内面カキ目、胴部外面ヘケ目、内面ナデ	二次焼成
51	"	"	"	24.5	10.0		1/10	暗黄褐~茶褐	黄褐~茶褐	黄褐~茶褐	口縁ヨコナデ、内面カキ目、胴部外面ヘケ目、内面ナデ	
52	"	"	"	24.3			1/6	茶褐	茶褐	茶褐	口縁ヨコナデ、内面カキ目、胴部外面ヘケ目、内面ナデ	
53	"	"	"	24.0	10.0		1/6	暗褐	暗褐	暗褐	口縁ヨコナデ、内面部分的にカキ目、胴部外面ヘケ目、内面ナデ	二次焼成 スス付着
54	13 住	須器器	坏E	13.6	6.0	4.2	完	灰白~淡褐	灰白~淡茶褐	灰白~淡茶褐	口シロナデ、底部回転糸切	
55	"	"	"	13.3	5.4	4.2	3/5	淡黄灰~透灰	淡黄灰	淡黄灰	口シロナデ、底部回転糸切	
56	"	"	"	13.6	5.4	4.7	3/4	淡青灰~黄灰	黄灰~黒	黄灰~黒	口シロナデ、底部回転糸切	
57	"	"	"	14.0	6.4	4.4	完	灰~暗灰	淡黄灰	淡黄灰	口シロナデ、底部回転糸切	
58	"	"	"	13.7	5.2	4.3	"	淡黄灰	黄灰	黄灰	口シロナデ、底部回転糸切	
59	"	"	"	13.5	6.0	4.4	"	灰白	灰白	灰白	口シロナデ、底部回転糸切	外面に墨書
60	"	土師器	坏C	12.8	5.7	4.2	"	褐~暗褐	黒	黒	口シロナデ、底部回転糸切、内面放射状にヘラミガキ	内黒
61	"	"	小形甕F	12.1	6.0	9.9	"	茶褐~橙褐	淡黄褐	淡黄褐	口シロナデ、口縁ヨコナデのち内面ヘラミガキ、胴部内面ヘラミガキ、底部回転糸切のちナデ	
62	"	"	小形甕E	13.0	7.2	13.8	1/4	淡橙褐	褐	褐	口シロナデ、口縁ヨコナデのち内面カキ目、胴部外面カキ目、底部回転糸切	
63	"	"	甕E	25.4	7.6	30.5	2/3	褐~淡橙褐	褐~茶褐	褐~茶褐	口縁ヨコナデ、内面カキ目、胴部外面ヘケ目、下方ナデ(?)内面ナデ	
64	14 住	須器器	釜D	14.1			1/10	灰白	灰白	灰白	口シロナデ	自然釉
65	"	"	坏D		5.5		(完)	暗灰	暗灰	暗灰	口シロナデ、底部回転糸切	
66	"	土師器	耳皿	7.7	4.1	3.1	1/4	黒	黒	黒	口シロナデ、底部回転糸切、指による押し込み	

No	出土地点	種別	器形	寸法 (cm)		残存 口径 (底部)	色		調		成 形 ・ 調 整 ・ 形 態 の 特 徴	備 考
				口径	底径		器高	口径	底径	内面		
67	14 住	土師器	筒形	9.2		1/4	淡茶褐	淡茶褐	淡茶褐	口縁面取り、胴部外面ハケ目、内面ナデ		
68	15 住	須恵器	杯E	12.9	5.7	4.1	淡黄灰～暗灰	淡黄灰～灰	淡黄灰～灰	ロクロナデ、底部回転糸切		
69	"	"	"	14.0	6.0	4.4	淡黄灰～淡黒灰	淡茶灰～淡暗灰	淡茶灰～淡暗灰	ロクロナデ、底部回転糸切		
70	"	土師器	杯C	13.5	6.1	4.7	淡黄褐	黒	黒	ロクロナデ、底部回転糸切、内面ヘラミミガキ	内黒	
71	"	"	塊A	12.4		完	淡橙褐	"	"	ロクロナデ、底部回転糸切、付け高台のちヨコナデ、内面ヘラミミガキ	内黒	
72	"	"	皿A	12.4	6.7	3.3	茶褐	"	"	ロクロナデ、底部回転糸切、内面ヘラミミガキ	内黒	
73	"	"	"	13.6	3.3	5.8	淡茶褐	"	"	ロクロナデ、底部回転糸切、付け高台のちヨコナデ、内面ヘラミミガキ	内黒	
74	"	灰 釉	碗	14.8	6.4	4.0	淡黄灰	淡黄灰	淡黄灰	ロクロナデ、底部回転糸切、付け高台のちヨコナデ、内面ヘラミミガキ	内黒	
75	"	"	"	16.2	8.1	5.5	淡灰	緑灰	緑灰	ロクロナデ、底部回転糸切、付け高台のちヨコナデ、底部ヘラケズリのちナデ	重ね焼痕か(?)	
76	"	"	段皿	19.0		1/5	淡灰	"	"	ロクロナデ、底部回転糸切、外面下方ナデ		
77	"	土師器	鉢	29.6	10.0	9.7	褐	黒	黒	ロクロナデ、底部回転糸切、胴部外面下方の一部ヘラケズリ、内面ヘラミミガキ	内黒	
78	"	"	台付鉢	31.8		1/12	茶褐	茶褐	茶褐	ロクロナデ、口縁面取り		
79	"	"	"	30.5		1/12	"	"	"	ロクロナデ		
80	"	"	小形甕E		7.0	(完)	橙褐	橙褐～茶褐	橙褐～茶褐	ロクロナデ、口縁内面カキ目、胴部外面カキ目、下方部ナデカケズリ、底部回転糸切	スス付着	
81	"	"	筒形			(1/10)	茶褐～淡黄褐	淡茶褐	淡茶褐	胴部外面ナデのち上方ハケ目、内面ナデ		
82	16 住	"	杯C III	17.1	6.3	5.8	淡黄褐～黒	黒	黒	ロクロナデ、底部回転糸切、内面ヘラミミガキ	内黒	
83	"	"	杯C	11.2	6.7	4.4	赤茶褐	"	"	ロクロナデ、底部回転糸切、内面ヘラミミガキ	内黒	
84	"	"	"	13.4	5.7	4.2	淡黄褐	"	"	ロクロナデ、底部回転糸切、内面ヘラミミガキ	内黒、底部・底部に墨書	
85	"	土師器	耳皿	7.8	3.5	2.3	黒	黒	黒	ロクロナデ、底部回転糸切、内・外面ヘラミミガキ	黒色処理あり	
86	"	須恵器	杯E	(13.9)	4.2	4.4	淡褐	淡褐	淡褐	ロクロナデ、底部回転糸切	外面墨書	
87	"	灰 釉	碗	11.6	6.0	3.9	淡灰	淡灰	緑灰	ロクロナデ、底部から側面にかけて回転ヘラケズリ、付け高台のちヨコナデ		
88	"	"	皿	16.3	7.6	2.9	おすか	"	"	ロクロナデ、底部から側面にかけて回転ヘラケズリ、付け高台のちヨコナデ		
89	"	土師器	杯C III	19.0	8.4	6.9	淡黄褐	黒	黒	ロクロナデ、底部から側面にかけて回転ヘラケズリ、付け高台のちヨコナデ		
90	"	"	足高台		8.4	(1/4)	"	"	"	ロクロナデ、底部回転糸切、付け高台、内面ヘラミミガキ	内黒、底部外面に墨書	
91	"	"	筒形			(おすか)	赤茶褐	茶褐	茶褐	外面ハケ目、下方ナデ、内面ナデ	内黒	
92	18 住	須恵器	蓋C	17.2		1/4	青灰	暗灰～青灰	暗灰～青灰	ロクロナデ、外面上部回転ヘラケズリ	断面黄灰・青灰・赤灰のサンドイッチ状に着色	
93	"	"	杯E	13.6	6.8	4.3	暗灰～灰白	暗灰～灰	暗灰～灰	ロクロナデ、底部回転糸切		
94	"	"	"	13.0	5.4	3.8	淡黄～淡橙褐	灰～淡黄褐	灰～淡黄褐	ロクロナデ、底部回転糸切		
95	"	土師器	杯D	13.4	5.8	3.8	淡黄褐	淡黄褐～橙褐	淡黄褐～橙褐	ロクロナデ、底部回転糸切		
96	"	土師器	塊A	15.4	6.4	5.2	黄褐～黒	赤褐～黒	赤褐～黒	ロクロナデ、底部回転糸切、付け高台、内面ヘラミミガキ	内黒、転用皿	
97	"	"	"		6.3	(完)	淡黄褐	黒	黒	ロクロナデ、底部回転糸切、内面放射状にヘラミミガキ		
98	"	灰 釉	碗	14.2	6.6	4.4	淡灰白	淡緑	淡緑	ロクロナデ、底部から側面・見込部分回転ヘラケズリ、付け高台		
99	"	"	"	13.8	6.3	4.3	青灰	"	"	ロクロナデ、底部から側面にかけて回転ヘラケズリ、付け高台	重ね焼痕有	

No	出地点	種別	器形	寸法 (cm)		残存度 口径 (底部)	色		調		成 形 ・ 調 整 ・ 形 態 の 特 徴	備 考
				口径	底径		外	内	面	面		
100	18	住	碗		8.5	(1/2)	淡灰	透明	ロクロナデ、底部回転ヘラケズリ、付け高台のちヨコナデ	見込部分刻磨、重ね焼痕		
101	"	土師器	費E	22.6		1/3	茶褐~褐	褐	口縁ヨコナデ、内面カキ目、胴部外面ハケ目、内面ナデ			
102	"	須恵器	長頸瓶	28.5	17.5	1/10	暗褐	淡茶褐	ロクロナデ、口縁強いヨコナデ、胴部外面タタキ目、内面ナデ、底部ナデ	わずみ痕、あて具痕あり		
103	19	住	杯E	13.8	6.2	1/2	淡灰白~黒	淡灰白~黒	ロクロナデ、底部回転糸切	外面に墨書有		
104	"	"	"	14.0	6.0	3/5	黒~黄灰	黒~黄灰	ロクロナデ、底部回転糸切			
105	"	"	杯C	13.8	10.6	3.6	暗灰	暗灰~青灰	ロクロナデ、底部から側面下方にかけ回転ヘラケズリ、付け高台のちヨコナデ			
106	"	"	"	12.2		1/4	淡黄褐	黒	ロクロナデ、内面ヘラミガキ	内黒、外面に墨書		
107	"	土師器	"	12.8	6.3	5.0	褐	"	ロクロナデ、底部回転糸切、内面ヘラミガキ	内黒		
108	"	"	杯C III	18.8	6.4	6.5	黄茶褐~黒	"	ロクロナデ、底部回転糸切のち手持ちヘラケズリ、内面ヘラミガキ	内黒		
109	"	灰 釉	長頸瓶		7.2	完	淡灰白	淡灰白	ロクロナデ、底部から側面にかけ回転ヘラケズリ、付け高台	自然釉		
110	"	土師器	筒形		9.2	(1/3)	淡黄褐~茶褐	茶褐	外面ハケ目、底部付近ヘラケズリ、内面ナデ	指頭圧痕あり		
111	20	住	杯D I	8.1	4.5	1.8	淡黄褐	淡黄褐	ロクロナデ			
112	"	"	杯D II	13.1		1/4	暗褐	茶褐	ロクロナデ			
113	21	住	須恵器	13.4	5.6	3.6	灰白~灰	灰白	ロクロナデ、底部回転糸切			
114	"	"	"	12.6	5.2	3.7	淡赤褐	淡赤褐	ロクロナデ、底部回転糸切			
115	"	"	"	13.0	6.1	3.2	淡灰	淡灰	ロクロナデ、底部回転糸切			
116	"	"	"	12.4	5.9	3.4	淡橙褐~灰	淡黄褐~暗灰	ロクロナデ、底部回転糸切			
117	"	土師器	杯C	13.1	4.0	4.5	淡橙褐	黒	ロクロナデ、底部回転糸切、内面一部ヘラミガキ	内黒		
118	"	"	"	13.2	5.5	4.1	赤褐~黒	"	ロクロナデ、底部回転糸切、内面ヘラミガキ	内黒		
119	"	"	杯D	12.0	6.0	3.7	赤褐~黄褐	茶褐	ロクロナデ、底部静止糸切	鉄分付着		
120	"	"	杯C	15.8	6.7	5.2	赤褐~黒	黒	ロクロナデ、底部回転糸切、内面ヘラミガキ	内黒		
121	"	"	"	13.6	6.5	3.6	褐~黒	"	ロクロナデ、底部回転糸切、内面ヘラミガキ	内黒		
122	"	"	杯D	12.3	5.6	3.4	暗褐	暗茶褐	ロクロナデ、底部回転糸切	鉄分付着		
123	"	"	"	16.0	6.6	3.8	茶褐	茶褐	ロクロナデ、底部回転糸切			
124	"	"	"	11.8	6.0	3.6	橙褐	橙褐	ロクロナデ、底部回転糸切			
125	"	"	杯C III	18.8	7.4	8.3	暗黄褐	黒	ロクロナデ、内面ヘラミガキ	内黒		
126	"	"	塊B	8.2	7.3	5.2	淡褐	淡黄褐	ロクロナデ、底部回転糸切、付け高台のちヨコナデ			
127	"	灰 釉	皿	13.6	6.8	3.1	灰白	透明	ロクロナデ、底部から側面にかけ回転ヘラケズリ、付け高台のちヨコナデ	重ね焼痕有		
128	"	"	"	14.2	7.2	3.5	灰	淡緑	ロクロナデ、底部から側面にかけ回転ヘラケズリ、付け高台のちヨコナデ			
129	"	"	"	14.2	6.6	4.1	"	緑灰	ロクロナデ、底部から側面にかけ回転ヘラケズリ、付け高台のちヨコナデ、内面沈線	底部に墨書		
130	"	"	"	14.4	6.6	3.0	"	緑灰	ロクロナデ、底部から側面にかけ回転ヘラケズリ、付け高台のちヨコナデ			
131	"	"	碗	14.6	7.8	3.8	"	"	ロクロナデ、底部から側面にかけ回転ヘラケズリ、付け高台のちヨコナデ	重ね焼痕有		
132	"	"	耳皿		4.2		"	"	ロクロナデ、底部回転糸切			
133	"	"	長頸瓶				淡灰白	淡灰白	ロクロナデ、外面回転ヘラケズリ			

No	出土地点	種別	器形	寸法 (cm)		發存度 口徑 (底部)	色		調		成 形 ・ 調 整 ・ 形 態 の 特 徴	備 考
				口径	底径		器高	外 面	内 面			
134	21 柱	縁 袖	碗	12.1		1/12	灰	緑		ロクロナデ、ヘラミガキ、胎土硬質		
135	"	陶 器	おろし皿	15.2	7.8	3.1	茶褐~茶灰	淡褐~茶灰		ロクロナデ、底部回転糸切	瀬戸美濃	
136	"	土師器	台付鉢	22.8		1/7	茶褐	茶褐		ロクロナデ		
137	"	"	"			(0.8)	赤褐~茶褐	"		ロクロナデ		
138	"	"	"	35.2		1/8	淡黄褐	淡黄褐		ロクロナデ、内面ナデ、口縁ヨコナデ		
139	"	"	"			(1/10)	"	"		ロクロナデ、脚部スカン		
140	"	"	"	14.4		(1/8)	"	淡橙褐		ロクロナデ、脚部下縁ヨコナデ		
141	"	"	"	14.8		(1/4)	明橙黄褐	濃黄褐		ロクロナデ、脚部ロクロナデのち付け高台のちヨコナデ、十字のスカン4ヶ所		
142	"	"	小形甕E		8.2	(完)	淡茶褐	淡赤褐		ロクロナデ、底部回転糸切、外面カキ目		
143	23 住	須臾器	杯E	13.2	6.5	3.7	黄灰~黒灰	黄灰~黒灰		ロクロナデ、底部回転糸切		
144	"	"	"	13.3	6.1	3.6	黒~暗黄灰	黒~暗黄灰		ロクロナデ、底部回転糸切		
145	"	"	"	13.0	5.5	3.6	暗黄灰~黒	黒~暗褐		ロクロナデ、底部回転糸切		
146	"	"	"	13.4	6.0	4.3	黒~褐	黒~褐		ロクロナデ、底部回転糸切		
147	"	"	"	13.1	5.5	4	黒灰~淡黄灰	黒灰~淡黄灰		ロクロナデ、底部回転糸切		
148	"	"	"		5.4	(2/3)	灰白	暗灰		ロクロナデ、底部回転糸切		
149	"	土師器	杯C	12.4	6.0	4.4	赤茶褐~黒	赤茶褐~黒		ロクロナデ、底部回転糸切、内面ヘラミガキ		
150	"	灰 袖	碗	16.6	7.8	5.0	淡灰白	淡灰白		ロクロナデ、底部近回転ヘラケズリ、付け高台		
151	"	土師器	小形甕F	9.6	5.8	8.5	暗茶褐~暗橙褐	淡灰褐		ロクロナデ、底部近回転ヘラケズリ、		
152	"	"	甕E	23.4			暗黄褐	暗褐~茶褐		ロクロナデ、底部回転糸切		
153	"	"	"	24.0		1/3	淡黄褐~黒	茶褐		口縁ヨコナデのち内面カキ目、胴部外面ハケ目、内面ナデ		
154	壁 2	"	碗A	14.4	6.6	5.0	暗黄褐	黒		ロクロナデ、口縁ヨコナデのち内面カキ目、胴部外面ハケ目、内面ヘラミガキ	内黒、鉄分付着	
155	壁 3	縁 袖	碗		6.7	(1/8)	淡灰	淡黄緑		ロクロナデ、底部回転糸切、付け高台のちヨコナデ、内面ヘラミガキ		
156	"	白 磁	碗IV類	15.0		1/6	白	乳白		ロクロナデ、底部回転糸切のち回転ヘラケズリ、付け高台のちヨコナデ	12C	
157	土 壺 48	灰 袖	耳皿		4.8		灰	灰		折り返した大きな玉縁の口縁、外面折り返し近くまでケズリ		
158	土 壺 34	陶 器	折縁深皿	30.5			灰	淡緑		ロクロナデ、底部回転糸切、外面下部回転ヘラケズリ、指による押込	瀬戸美濃 外面に墨書	
159	ピット36	土師器	碗A		6.7	(おずか)	淡黄褐~黒	黒		ロクロナデ、底部回転糸切、付け高台のちヨコナデ、内面ヘラミガキ	天目	
160	ピット99	陶 器	碗		5.0	(完)	淡黄褐	淡黄褐		ロクロナデ、底部回転ヘラケズリ、付け高台のちヨコナデのち脚部折込		
161	M-6	須臾器	杯C		8.2	(1/2)	灰	灰		ロクロナデ、底部回転糸切、付け高台のちヨコナデ		
162	排 土	"	長頸甕		7.8	(1/2)	暗黄灰	暗赤灰~灰		ロクロナデ、底部回転糸切、付け高台のちヨコナデ		
163	大 甕 3	甕	杯E	12.8	5.7	4.0	淡黄灰	淡黄灰		ロクロナデ、底部回転糸切		
164	No.2内	"	四耳甕	32.2		1/5	灰	灰		ロクロナデ、外面タタキ目、内面指ナデ、タテナデ		
165	No.1	"	大甕	54.2		102.2	灰~暗灰~灰茶	"		頸部ヨコナデ外面破状文、胴部外面タタキ目、内面あて具真のちナデ		
166	No.2	"	"	71.6		106.6	灰~暗灰	灰~暗灰		頸部外面破状文内面ヨコナデ、胴部外面タタキ目、内面中央部ハケ目、その他ナデ		
167	No.3	"	"	58.8		95.8	"	灰		頸部ヨコナデ、胴部外面タタキ目、内面一部あて具真か?		

## 2. 鉄器・鉄製品 (第49・50図1～33)

鉄器・鉄製品は統計で33点あり、これらを図示したが、種別の判ったものは、釘、鉄鏃、刀子、カンナの4種で、他にはっきりしないもの、不明のものなどが半数を占めた。

1～20は釘又は釘状鉄製品で、一部曲ったものもあるが基本的には棒状のものを集めた。この類には径5～6 mm未満のものと、それ以上のものと大別することができる。6は細目のものとしては完形で、長さ6 cmで頭部は鍵形に曲り、上面は7×9 mmと方形に近く、身の断面は4×5 mmで角というよりは楕円形に近い形をしている。8はやや太目のもので、頭部は6と同じく鍵形に曲るものである。これらの中には芯金に鬆が入ったり、芯金に外側の鉄を巻きつけた状態が見えるものが3、5、8、9、15等に見られる。

21は鉄鏃の先端部で、ほぼ正三角形を呈している。22～29は刀子であり、いずれも欠損して全形を示すものはない。27は先端部が尖るもの、28は刃部の根元と柄の部分である。柄は断面四角形、刃部は三角形を呈し、内部には鬆が入っていて、大きな空洞部分もある。29は鍛造の様子がよくわかるもので、中心に芯金があり、その外側に2 mm余りの鉄を巻いた状態が窺える。30はヤリガンナと思われるものである。31、32は共に形状、種別とも不明のものである。

33は6.5～7.5 cmの大きさの環4ヶが一つにまとまったもので、1環に3環が繋がっている。環の断面形はほぼ楕円形で、環鉄の接合部分が溶着してコブ状になっているところがある。用途については錫杖の環、鉄釧などとも異り不明である。

## 3. 石 器

本調査で出土した石器は図示した3点のみである。住居址からの出土はなく、検出面と竪穴状遺構からのものである。1の砥石は凝灰岩製で一部欠損する。表面は鉄分の付着により褐色を呈する。使用面は4面で、手持ちにより使用されたものである。凝灰岩はこの周辺では採集されないため、他地方からの搬入品であろう。2は安山岩製の凹石である。淡い紫色を呈し、両面に凹みがある。安山岩は梓川水系で採集可能なため、加工されていないが同様な丸石は調査地区内で多量に見られる。3は安山岩製の石臼と思われるが欠損していて不明である。

## 4. 土 製 品

土製品は4点出土した。1、2は15号住居址から出土した羽口である。1は後端部が僅かに残り、器面は焼けて赤く変色している。2は先端部で器壁が溶解し紫色に変色している。周辺には溶解鉄が付着し、内面は赤く、外面は灰色に変色している。3、4は土錘である。調査地区北側の旧流路検出面から出土した。

表11

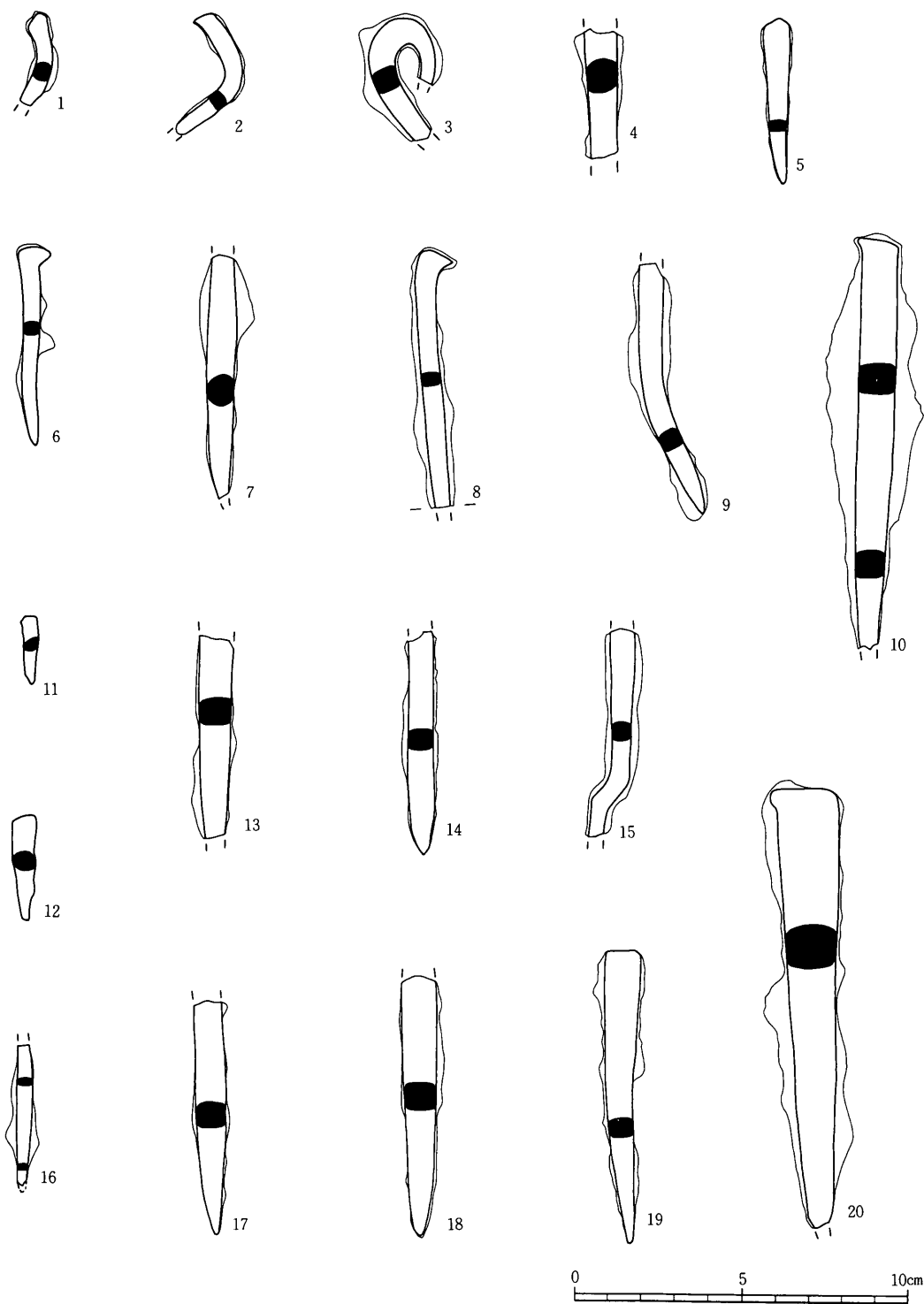
北方遺跡鉄製品一覧表

No	出土遺構	種 別	長さ(mm)	幅(径)(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	備 考
1	7住	釘	30	6	7	2.5	くの字状、先端欠損
2	21住	〃	37	5	4	4.7	〃
3	17住	〃	36	8	7	10.7	小石付着、芯金に鬆が入っている
4	21住	〃	38	13	10	1.9	頭部、先端欠損
5	15住	〃	48	6	3	4.8	小石付着、頭部欠損
6	堅3	〃	60	5	4	4.0	完
7	7住	〃	73	8	9	15.0	
8	21住	〃	78	6	4	11.7	中央空洞、小石付着
9	19住	〃	75	5	5	17.1	頭部欠損
10	7住	〃	121	11 9	9 8	75.6	
11	大ガメNo3内	釘か	20	5	3	0.6	
12	7住	〃	31	8	6	1.9	
13	19住	〃	62	10	9	16.8	頭部欠損
14	13住	〃	65	8	7	10.7	頭部欠損
15	堅3	〃	62	6	6	14.0	
16	R-8	〃	42	4	2	4.95	
17	7住	〃	70	9	8	11.1	頭部欠損
18	7住	〃	77	9	8	15.8	頭部欠損
19	20住	〃	87	7	6	12.4	
20	16住	〃	134	16	13	74.2	完
21	SE角	鉄鏃	24	15	3	3.8	
22	21住	刀子	60	9	3	1.9	
23	9住	〃	30	12	3	4.0	
24	21住	〃	53	9	4	7.8	前後欠損
25	18住	〃	65	14	3	11.7	鬆が入っている
26	21住	〃	60	9	3	9.3	
27	21住	〃	71	8	3	6.8	芯を重ねている
28	23住	〃	95	12 8	4 5	22.5	先端欠損
29	17住	〃	82	17 11	4 4	25.8	前後折損
30	21住	カンナ	75	7	3	8.35	前後欠損
31	17住	不明	19	4	5	0.7	
32	7住	〃	28	5	6	3.2	
33	ビット89	環状鉄器				168.7	つなぎ目がそれぞれコブ状のかたまりになっている

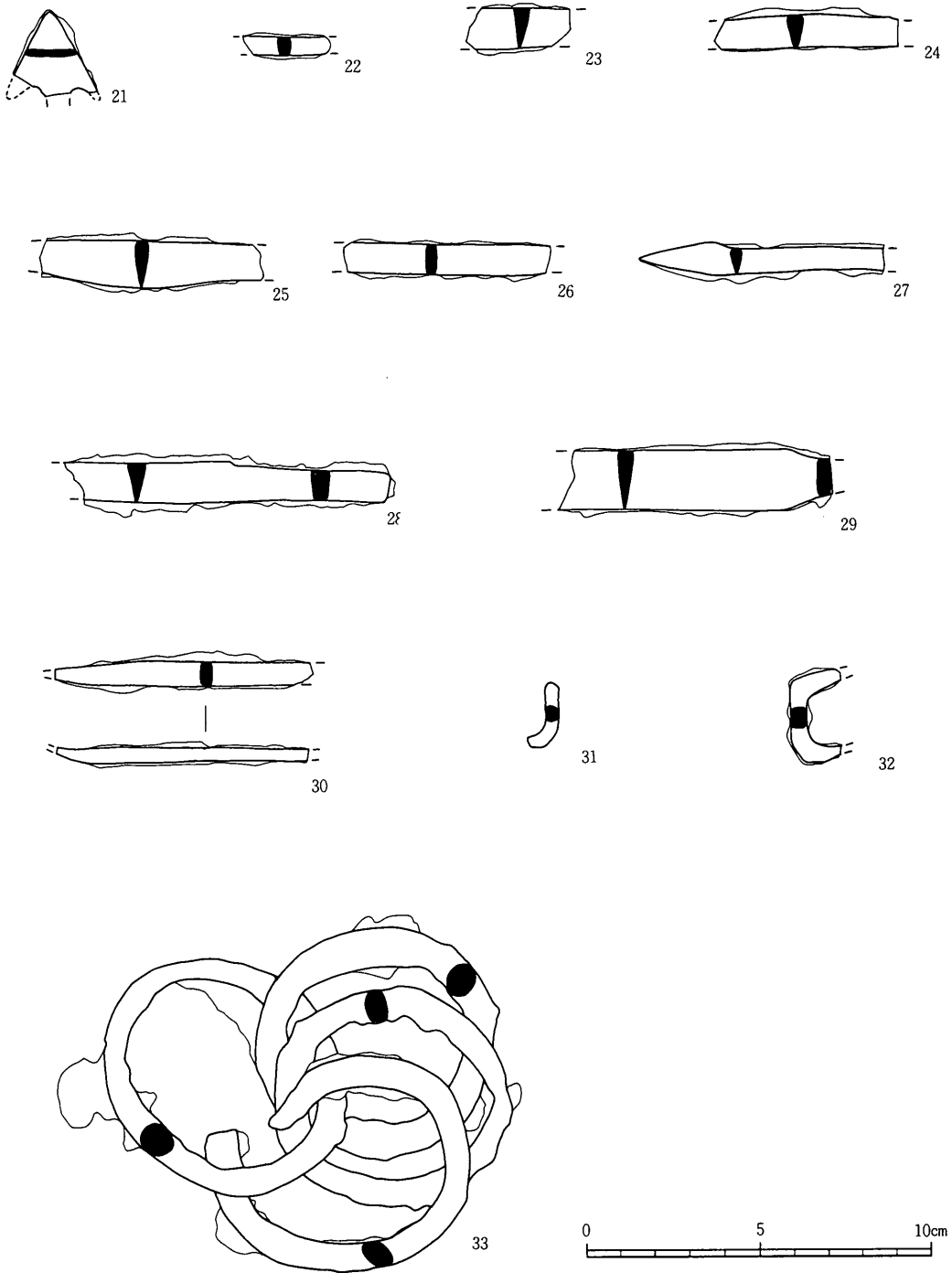
表12

北方遺跡石器一覧表

番号	器種	遺構	長さ(cm)	幅 (cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石質	欠損状況	備考
1	砥石	検出面	(10.01)	3.38	2.17	(125.55)	凝灰石		
2	凹石	堅2 No.3	9.95	8.07	4.87	650.00	安山岩	完形	
3	石臼?	堅2 No.4	(16.8)	11.45	(8.8)	(1875.00)	安山岩		

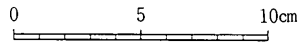
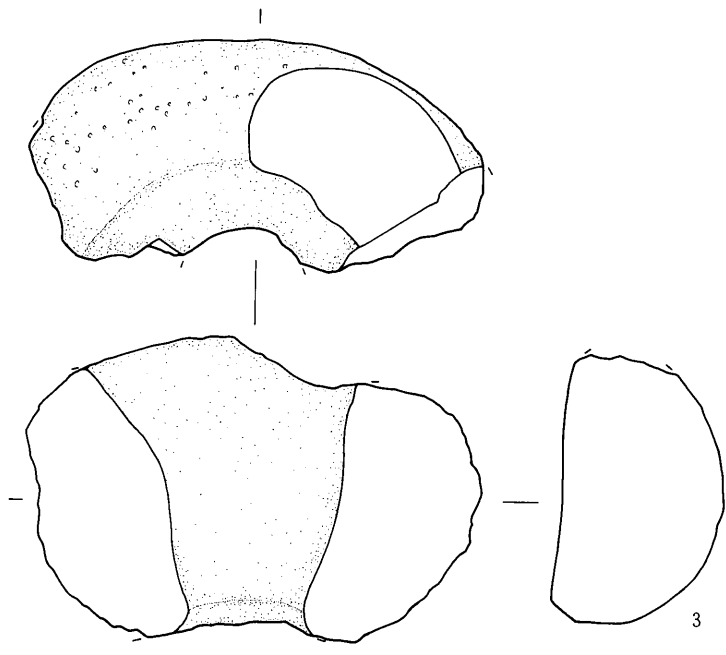
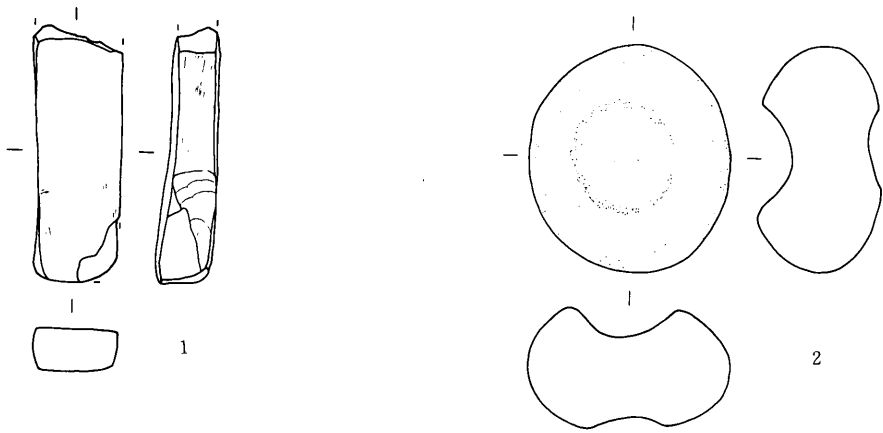


第49图 北方遺跡出土鉄器(1)

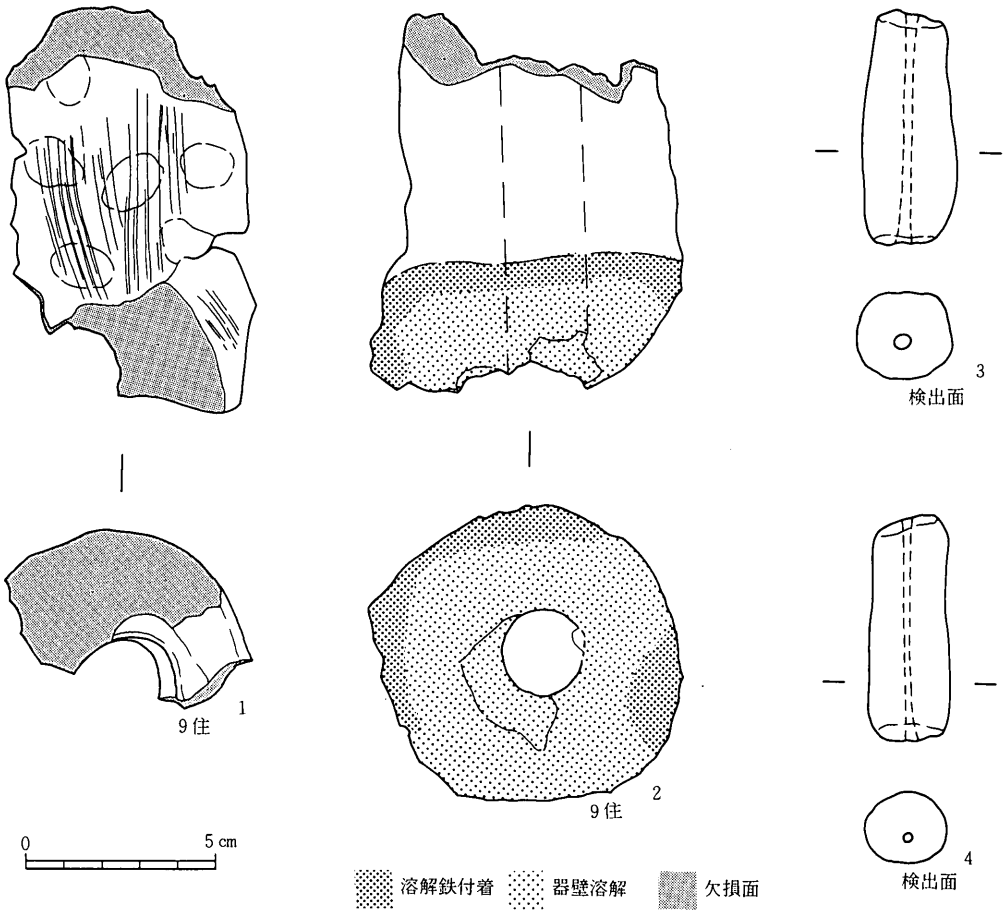


第50图 北方遺跡出土鉄器(2)





第51图 北方遺跡出土石器



第52図 北方遺跡出土土製品

## 第4章 北中遺跡の調査

### 第1節 調査の概要

北中遺跡は北方遺跡の南側に位置する。北方遺跡と同様に、梓川の氾濫によって形成された微高地上にある。今回の調査地は北方遺跡調査地点の南西約400 mの地点に設定した。この地点は北方遺跡の西側に形成されている段丘がより高くなって1.5～2 m前後となる段上にあたる。同じ段丘上に立地した遺跡であるが、両遺跡の間には大きな礫層があり、遺跡を分けている。方向は南西から北東である。

調査地点は前述のように設定したが同地区は場整備が冬場施工であること、また耕作者等の都合により当初の予定より調査規模を縮小せざるをえなかった。調査地区は3区設定した。I～III区である。I区内でII区も見通しのできる任意の点を基準点として南北及び東西に3 mごとに基点を設置した。次に東西の基点でIII区を見通しのできる基点を選択し、III区へ南北の基点を3 mごとに設置した。その後各区の基点上から振り出し、調査地区を3 mの方眼でおおい、南北の軸は東側よりAからPまでとし、東西の軸は北側より1から31までとした。

次に調査結果の概要を述べてみたい。調査地区の面積は合計で2,800m<sup>2</sup>である。主に遺構が検出された面はやや粘質の砂質土で、遺構のあまりない面（II区土壙29北側からI区の間）はところどころに砂利層が出ていて全体は砂に近い砂質土である。覆土は灰色及び灰白色の砂質土で、方向は北西から南東である。全区を見て砂質の強い所には遺構は少ない。検出された遺構は竪穴住居址2軒、堀立柱建物址5軒、土壙38基、ピット241基、溝1基である。これら遺構の出土位置は主にII区の南側、I区の南側に集中している。特徴的な遺構は土壙にある。大きさ1 m以上の円形及び楕円形を呈し、内に礫が入り、柱穴をもつ土壙もある。

遺物の出土量は少ない。時期的には古墳時代から中世にかけてのものが出土している。遺構に伴う遺物として主なものは青磁、白磁、中世陶器、石器では砥石、凹石、鉄製器では鋏がある。土師器、須恵器では坏、甕、横瓶等が出土しているが時期が多様で遺構に伴うかどうか不明である。



第53図 北中遺跡調査地区全体図



## 第2節 遺 構

### 1. 竪穴住居址（第54図）

竪穴住居址と思われるものは2軒確認された。いずれも調査地区外へかかり全容は不明である。

1号住居址はII区西側南隅寄に検出された。西壁側が僅かに地区外へかかる。平面形は隅丸長方形、大きさは3.4×2.9mを推測する。壁の残存高は47cmを測る。覆土は4層に分層され、全体にやや粘質土で床面付近ほど粘質が強い。I、II層に炭化物を含む。西側ほどII層内に小礫を含む。床面は砂利層上で軟らかい。カマドは確認できなかった。出土遺物は土師器甕の小破片のみで図示し得るものはない。本址の所属時期は決め手に欠き、不明だが形状及び覆土の状態から見て平安時代以降としたい。

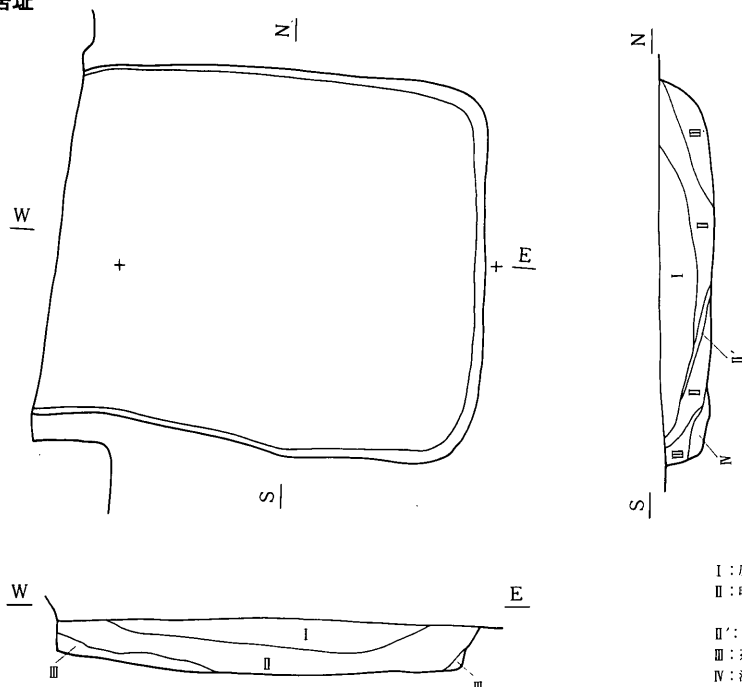
2号住居址はIII区の東側南寄に検出された。東側の約1/3が地区外にかかり、西側を土壇22が切る。平面形は長方形か方形で、大きさは2.5×2.1m以上を推測する。壁の残存高は23cm程を測る。覆土は2層に分層され、全体に砂利や小礫を含む砂質である。床面は砂質土で、炭化物及び焼土粒が混入する。軟質である。出土遺物は少なく、1の土師器坏（鉢?）と須恵器甕片のみである。この2点共覆土中からの出土であり、本址も所属時期は不明である。

表13

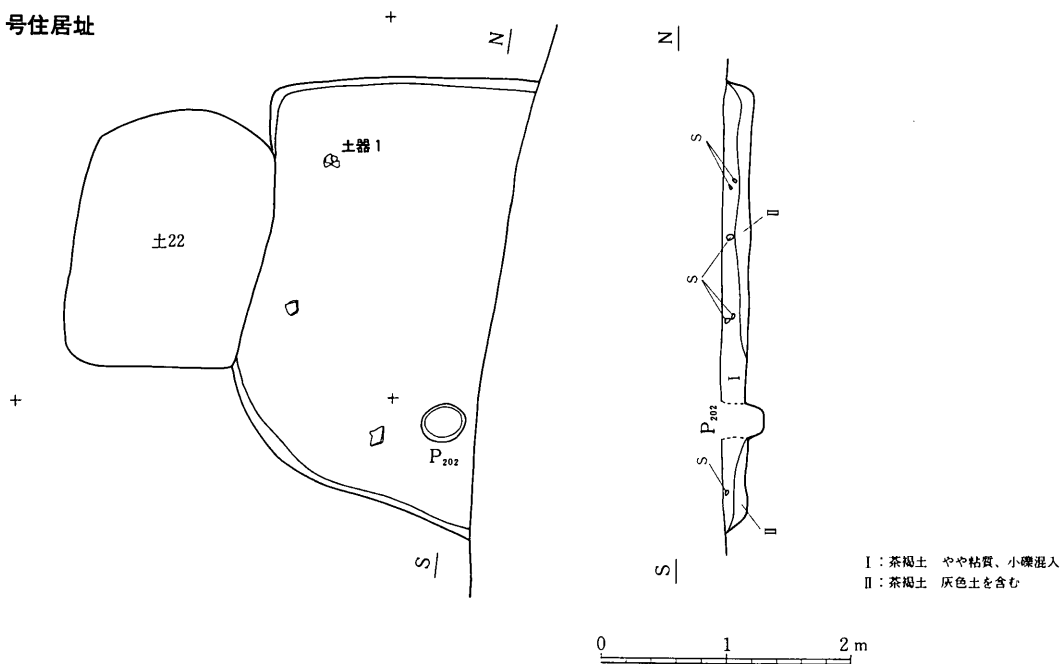
北中遺跡住居址一覧表

番号	位 置	平 面 形	大きさ(m)	残存壁高(cm)	覆 土 等 の 状 態	出 土 遺 物
1	II区	(隅丸長方形)	(3.4)×2.9	47	4層に分層、やや粘質炭化物含	土師器甕
2	III区	(長方形か方形)	2.5×(2.1以上)	23	2層に分層、砂質、床面に炭化物 焼土粒	土師器坏(鉢?)1、須 恵器甕

1号住居址



2号住居址



第54図 北中遺跡第1・2号住居址

## 2. 掘立柱建物址（第55、56、57図）

掘立柱建物址は全部で5軒確認された。全てII区で、西側に1軒、あとは南東隅寄である。所属時期は柱穴の形状、大きさ、覆土から見て中世以降であろう。以下、遺構別に要旨を記述したい。

### 建物址 1（第55図）

II区南側のピット群中にあり、P<sub>1</sub>～P<sub>15</sub>までである。この内P<sub>6</sub>は土壌2に切られる。平面形は長方形を呈し、規模は7.37×3.51 m（4×2間）を測る。柱間は桁行でP<sub>1</sub>と<sub>2</sub>、P<sub>4</sub>と<sub>5</sub>の間は狭く、1.2 m前後でP<sub>2</sub>と<sub>3</sub>、P<sub>3</sub>と<sub>4</sub>の間は2.3 m前後を測る。梁行ではP<sub>1</sub>とP<sub>10</sub>はP<sub>10</sub>とP<sub>15</sub>より広く、2.1 m前後、他は1.3 m前後を測る。柱穴の形状は円形及び楕円形で、大きさは40 cm前後である。柱痕はP<sub>2</sub>、<sub>10</sub>以外は確認された。16～24 cmの円形及び楕円形である。柱痕内に焼土粒及び炭化物が混入するものが多い。P<sub>1</sub>、<sub>5</sub>、<sub>7</sub>、<sub>8</sub>、<sub>9</sub>、<sub>12</sub>、<sub>13</sub>、<sub>14</sub>、<sub>15</sub>である。遺物はP<sub>8</sub>、<sub>10</sub>、<sub>14</sub>から土師器甕、須恵器甕、白磁碗が出土した。図示できたものはない。

### 建物址 2（第56図）

II区南側の地区外へかかり、全容は不明である。平面形は長方形、規模は7.32×2.14 m以上（4×2間）を推測できる。規模、形態ともに建物址1に似ている。柱穴の形状は円形及び楕円形で、大きさは40 cm前後を測る。柱痕はP<sub>18</sub>、<sub>19</sub>、<sub>22</sub>、<sub>24</sub>、<sub>25</sub>で確認された。16～20 cmの円形である。柱痕内に炭化物及び焼土が混入するものはP<sub>17</sub>、<sub>18</sub>、<sub>19</sub>、<sub>20</sub>、<sub>22</sub>、<sub>24</sub>、<sub>25</sub>である。柱穴からの出土遺物はなかった。

### 建物址 3（第57図）

II区南側にあり建物址1、2と重なる。切合い関係は不明である。平面形は長方形を呈し規模は7.12×5.62 m（4×2間）を測る。形態は建物址1と同じであるが、梁行が長い。柱間は桁行で、1.1～2.44 m、梁行で2.14～3.48 mである。柱穴の形状は円形及び楕円形で、大きさは30～65 cmとやや大きいものもある。柱痕はP<sub>33</sub>、<sub>36</sub>以外では確認された。12～20 cmのはほぼ円形である。柱痕内に焼土粒及び炭化物が混入しているものは、P<sub>31</sub>、<sub>32</sub>、<sub>35</sub>、<sub>43</sub>、<sub>45</sub>、<sub>47</sub>、<sub>48</sub>である。遺物はP<sub>31</sub>、<sub>42</sub>、<sub>43</sub>から土師器甕、P<sub>45</sub>から白磁碗（3）が出土している。

### 建物址 4（第55図）

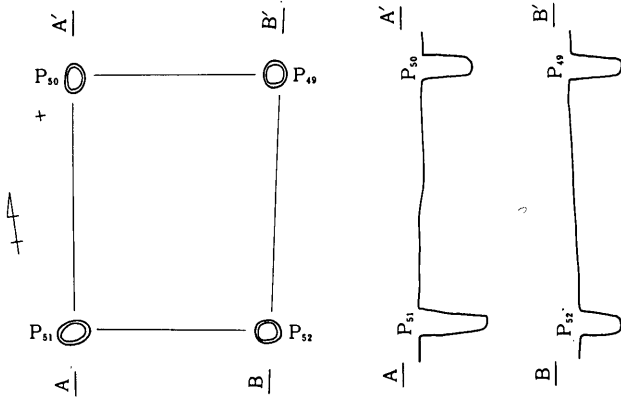
本址のみII区の西側に位置する。平面形は長方形を呈し、規模は2.2×1.9 m（1×1間）を測る。柱穴は楕円と円形で、20～30 cm大と小さい。柱痕は確認されなかった。出土遺物もない。

### 建物址 5（第56図）

本址はII区の東側南寄に検出された。平面形はほぼ方形を呈し、規模は4.0×3.8 m（2×2間）を測る。本址のみ総柱式である。柱間は桁行で1.8～1.98 m、梁行で1.9～1.98 mを測る。柱穴の平面形は楕円形を呈するP<sub>58</sub>以外は全てほぼ円形である。大きさは30 cm前後である。柱痕はP<sub>55</sub>、<sub>56</sub>、<sub>61</sub>で確認できなかった外は認められた。12～16 cmの円形である。出土遺物はなかった。



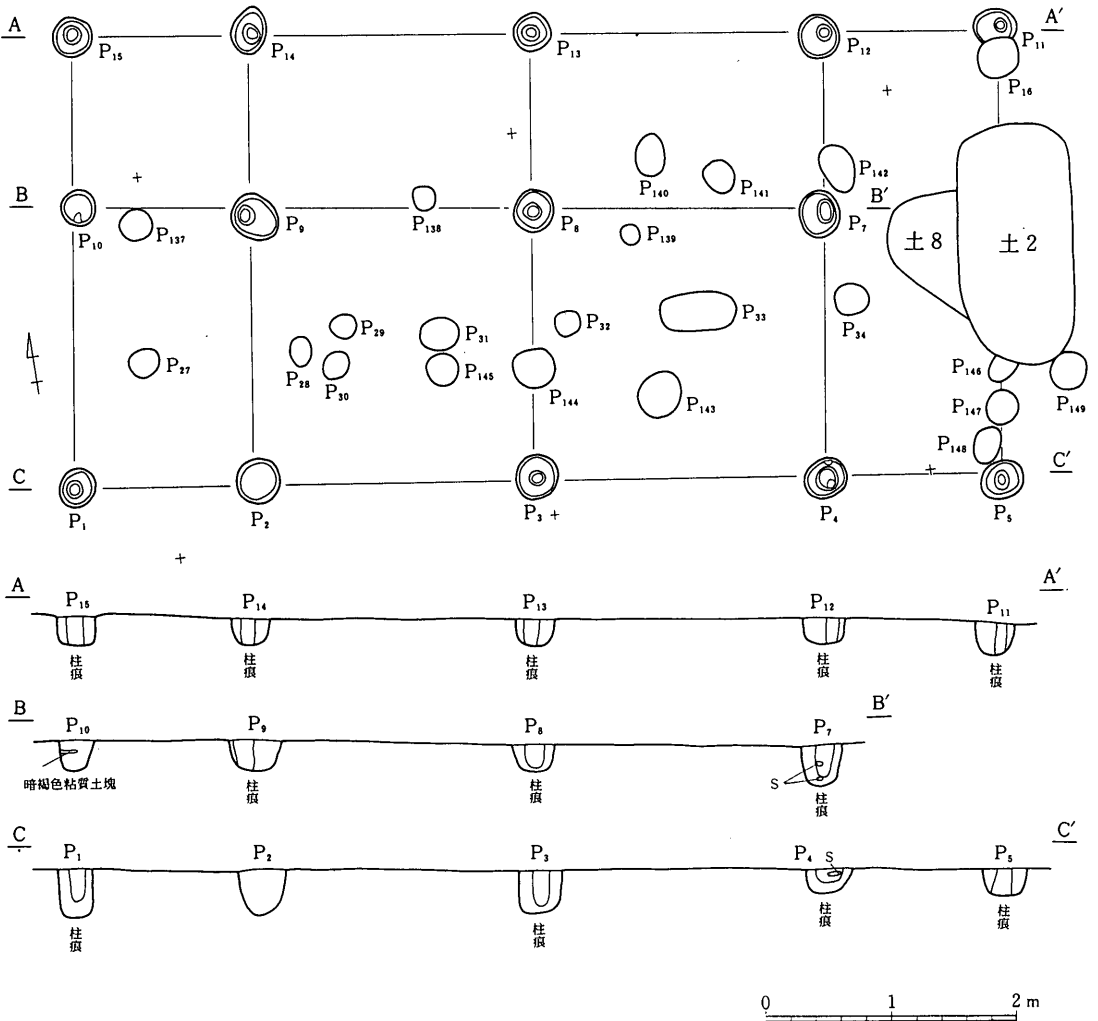
建物址 4



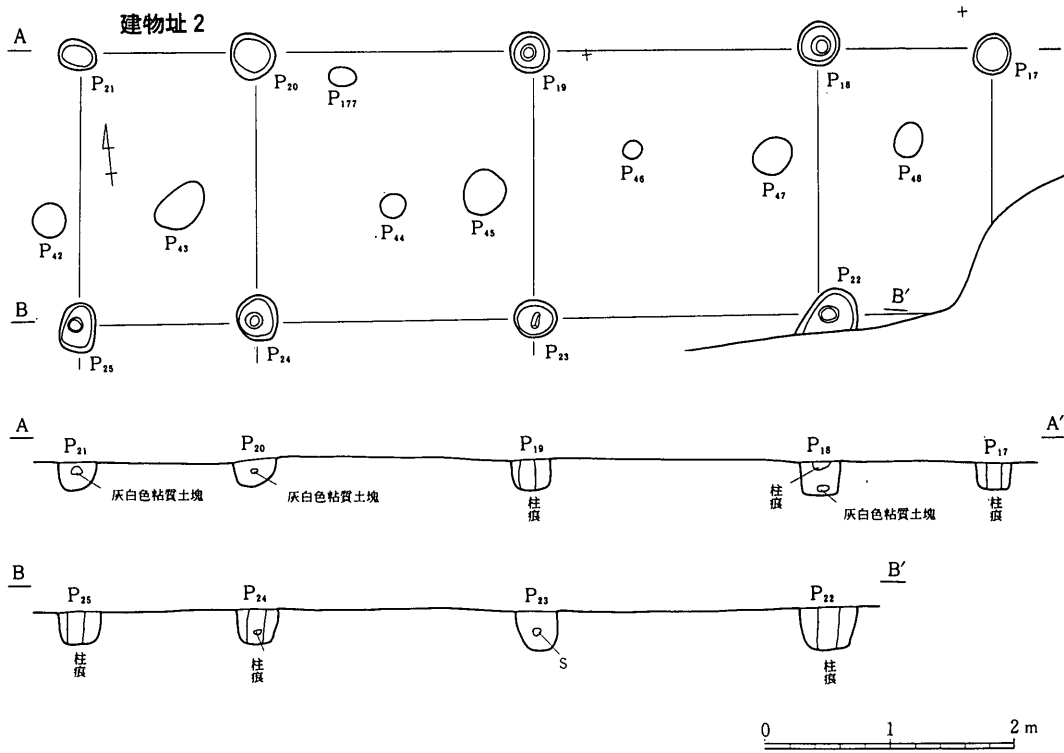
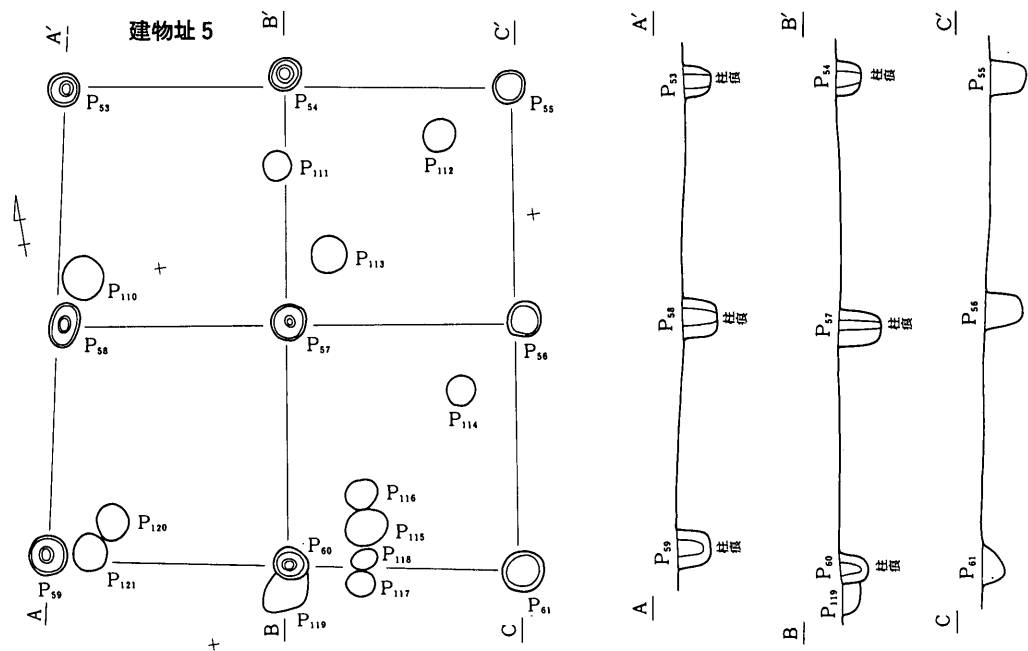
建物址基本土層

掘り方：灰白色土 やや砂質  
柱 痕：灰白色土 暗褐色土塊混入

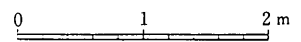
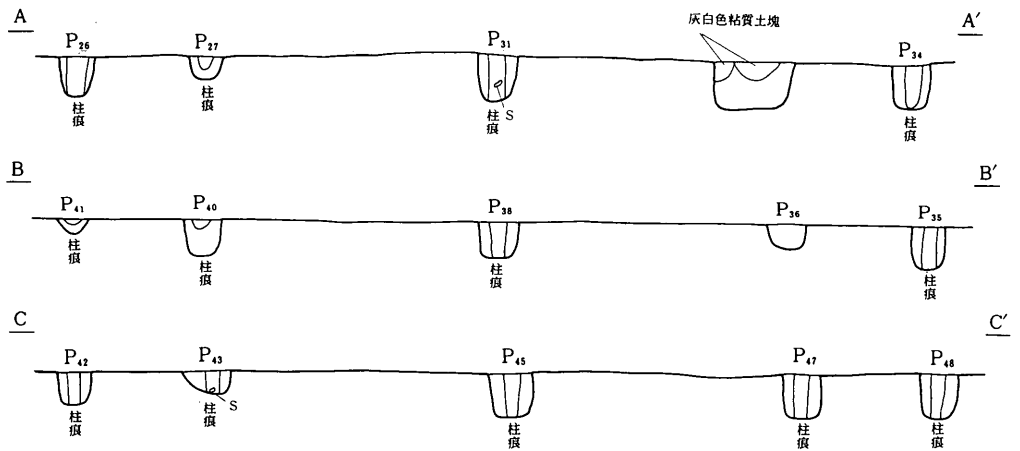
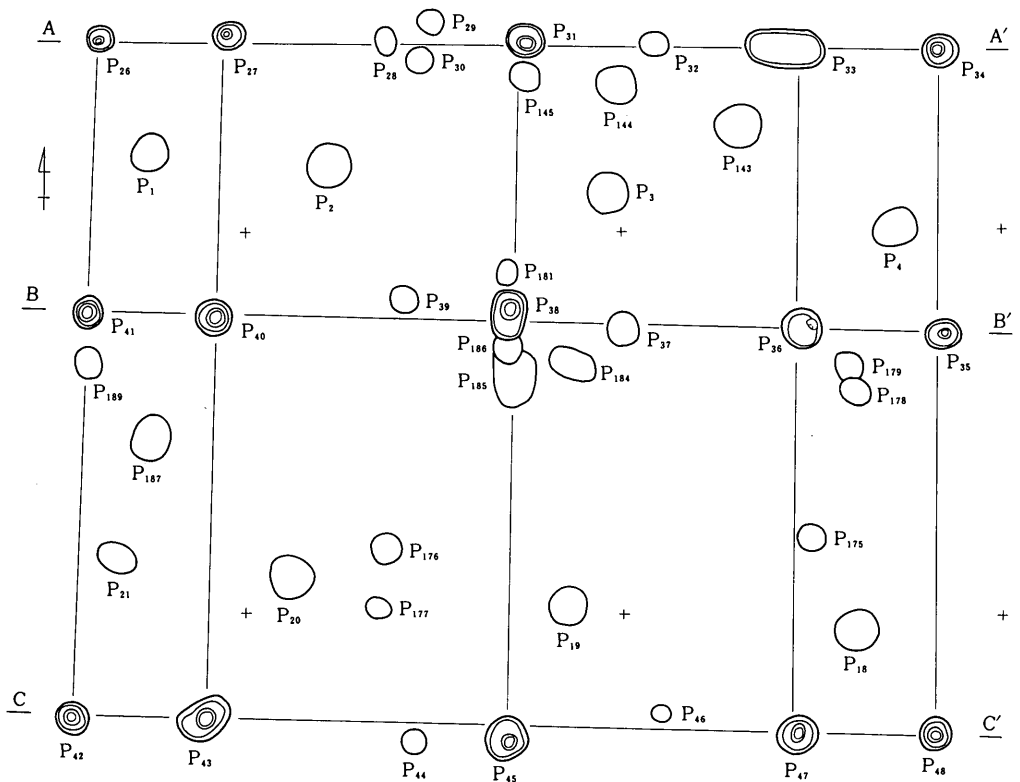
建物址 1



第55図 北中遺跡建物址 1・4



第56图 北中遺跡建物址 2 · 5



第57图 北中遺跡建物址 3

表14

北中遺跡掘立柱建物址一覧表

No.	位 置	平面形	規 模 (桁行×梁間)	柱 間 寸 法	柱 穴					所 見
					No.	大 き さ	形 状	深 さ	柱 痕	
1	II区南側 N-85'-W	長方形	4×2(間) 7.37×3.51(m)	桁1.24~2.34 m 梁1.36~2.15 m	1	34×32	円	42cm	16cm	P <sub>8</sub> が土壌2に切られる 東西に長軸をもつ 東、西、北側の柱間が狭い 炭化物、焼土粒を含む柱穴は、 P <sub>1</sub> 、5、7、8、9、10、12、13 遺物はP <sub>8</sub> 須恵瓦、P <sub>10</sub> 白磁碗 P <sub>14</sub> 土師甕?が出土  所属時期は中世以降
					2	40	円	40		
					3	38×36	円	36	16	
					4	40×34	楕円	22	24	
					5	40×32	楕円	24	18	
					6					
					7	42×36	楕円	36	22	
					8	36	円	26	18	
					9	44×38	楕円	30	20	
					10	32	円	28		
					11	38×( )	楕円	30	16	
					12	38×37	円	26	16	
					13	16	円	26	18	
					14	40×16	楕円	26	18	
					15	36	円	28	18	
2	II区南側 N-84'-W	長方形	4×2以上(間) 7.32×( ) (m)	桁1.42~2.27 m 梁1.4~2.26 m	17	34×33	円	24	南側の地区外へかかる。 全ての柱穴に焼土及び炭化物が含まれる。  所属時期は中世以降	
					18	37×36	円	30		18
					19	35×34	円	28		16
					20	40	円	24		
					21	36×27	楕円	26		
					22	( )×46	楕円	38		20
					23	38×34	円	35		
					24	40×38	円	32		18
					25	43×36	楕円	30		18
					3	II区南側 N-89'-W	長方形	4×2(間) 7.12×5.62(m)		桁1.1~2.44 m 梁2.14~3.48 m
27	( )×26	(楕円)	22	13						
31	36×30	楕円	40	18						
33	65×34	楕円	41							
34	35×31	円	38	17						
35	32×26	楕円	38	14						
36	38×37	円	24							
38	44×32	長方	32	19						
40	33×32	円	33	18						
41	30×27	円	16	18						
42	30×29	円	29	16						
43	46×35	楕円	22	20						
45	40×38	円	39	16						
47	37×36	円	39	20						
48	30	円	39	16						
4	II区西側 N-3'-E	長方形	1×1(間) 2.2×1.9(m)	桁2.2 m 梁1.9 m	49	26×22	楕円	44		
					50	28×20	楕円	58		
					51	30×22	楕円	42		
					52	24×22	円	36		
5	II区南東側 N-81'-W	正方形	2×2(間) 4.0×3.8(m)	桁1.8~1.98 梁1.9~1.98	53	30×29	円	25	東側の地区外へ続く可能性もある。  柱痕が確認できたものはP <sub>58</sub> のみ である。  所属時期は中世以降	
					54	30	円	24		15
					55	30	円	32		
					56	31	円	34		
					57	32	円	38		12
					58	38×26	楕円	32		16
					59	36×34	円	30		16
					60	32×30	円	26		16
					61	38×36	円	22		

### 3 ピット群 (第62、63図)

前記建物址周辺と、Ⅲ区南側に多数検出された。Ⅱ区の建物址周辺のピットについては柱痕が確認されたものもあり柱穴である可能性が高い。特に建物址5の南側にある一群については1列に並ぶものもあり、南側及び東側の地区外部分に続くものと思われる。Ⅲ区南側のピットについても東側の地区外へ続くので、建物址として捉えられるものもあるであろう。他はⅠ区のP<sub>72</sub>～<sub>74</sub>、P<sub>75</sub>～<sub>77</sub>はそれぞれ直線上に並び、また間隔も柱穴としてもいいが組合せが不明である。Ⅲ区北側にP<sub>78</sub>～<sub>83</sub>も直線上に並ぶ。間隔が短く、また柱痕も認められず浅いため、別の遺構と考えられる。

### 4 土壌、溝 (第58～61図) (第63図)

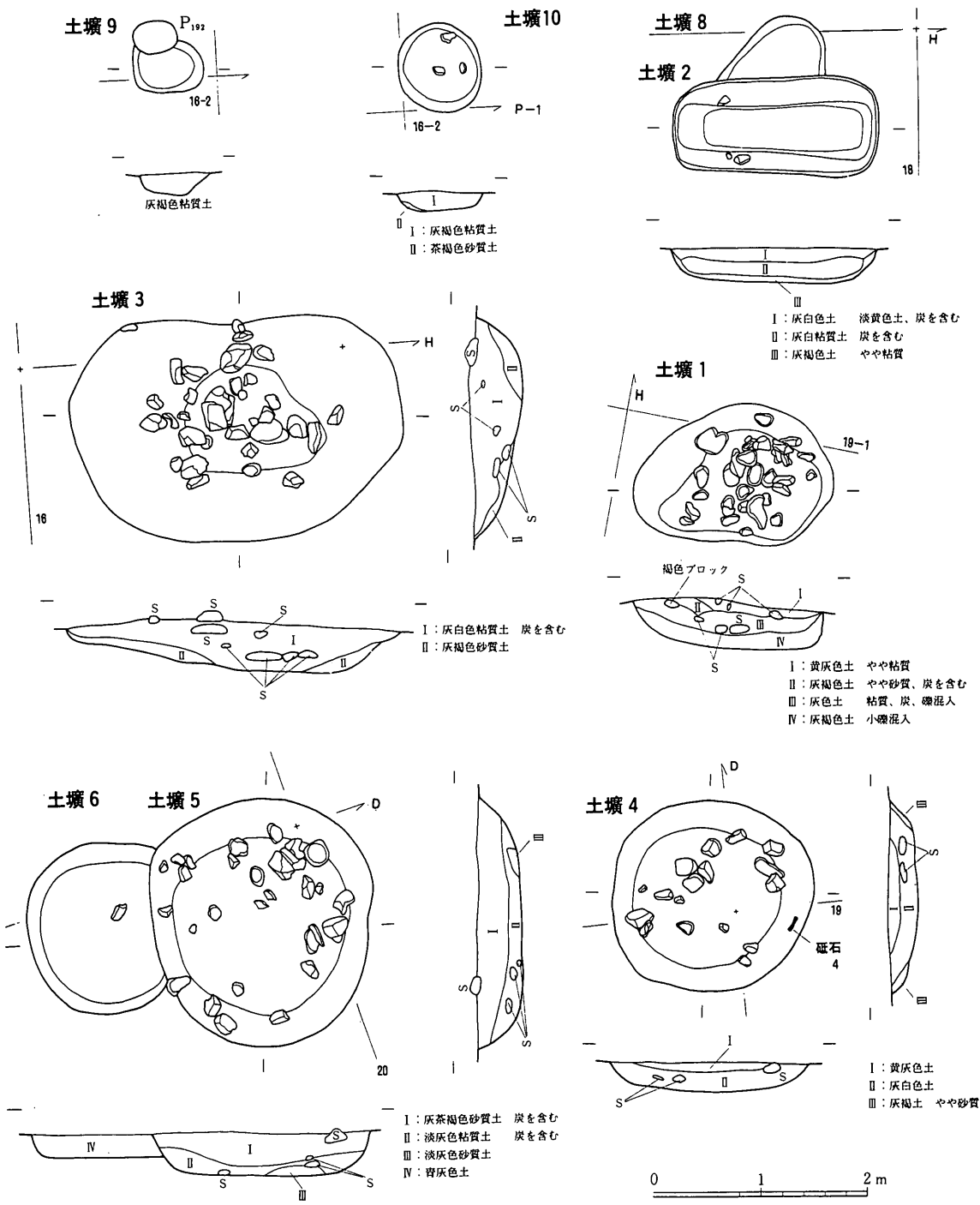
検出された土壌は1～38の38基である。この内墓址といえるものは土壌2、7、17で、土壌17は火葬墓である。以下は主な土壌について要旨を記述する。

墓址といえるものの内、土壌2は南北に長軸を取り、192×96 cmを測る長方形の墓墳である。土壌8と、建物址1を切る。深さは26 cm程で覆土は3層に分けられる。Ⅱ層は粘質土で炭化物粒、骨片を含み、断面はブロック状を呈する。土壌7は東西に長軸を取り、236×77 cmを測る長方形の墓墳である。深さは12 cm程で浅い。覆土は粘質土で中層に焼土とわずかに炭化物が入り層を成している。この墓址は周囲に柱穴を持つ。柱穴はP<sub>62</sub>～<sub>70</sub>の9基で片側4基、東側1基である。西側は入口部なのか柱穴は見られない。柱穴は20 cm前後を測る円形で柱痕はP<sub>62</sub>、<sub>63</sub>、<sub>68</sub>、<sub>69</sub>、<sub>70</sub>で確認された。

大きさは6～12 cmを測る円形及び楕円形である。遺物は土師器甕、坏の小片、鉄器で6の銚が出土した。土壌17はⅠ区の西端に検出された。検出面上に焼土及び骨片が認められる。特に西壁は厚さ1 cm程の焼土面で輪郭を確認することができる。南北に長軸を取り108×70 cmを測る楕円形に近い長方形の墓墳である。深さは20 cm程である。覆土は1層であるが中層の焼土面を境に上と下でやや異なる。上層に3ヶ所、焼骨のかたまりがあり南側より頭骨片が認められた。北側からは古銭が出土した。腐食がはげしく種別は不明である。他の遺物はない。

他の土壌については土壌21、22は墓址としたものと形状等似ており、焼土及び炭化物も少量含まれているが決め手を欠き不明である。遺物は土壌21から青白磁平型合子蓋が、土壌22から土師器、須恵器甕片が出土している。土壌1、3、4、5、6、20、23、24、37は大形な土壌で190 cm以上を測り、楕円形を呈する。覆土等の状態も似ており、内部に礫が多量に入っている。特にⅢ区の土壌23、24、37は形状、礫の入り方も似ている。出土遺物は土壌23に多く、土師器甕、坏、須恵器甕、須恵質の鉢形土器(11)、陶器こね鉢(5)、石器で砥石(4)凹石(5～9)、鉄器(2、4)が礫の間から出土している。他の主なものは土壌1から白磁碗、土壌5から白磁碗(8)、陶器こね鉢(6)、土壌24から陶器こね鉢(4)、白磁、青磁の碗が出土している。

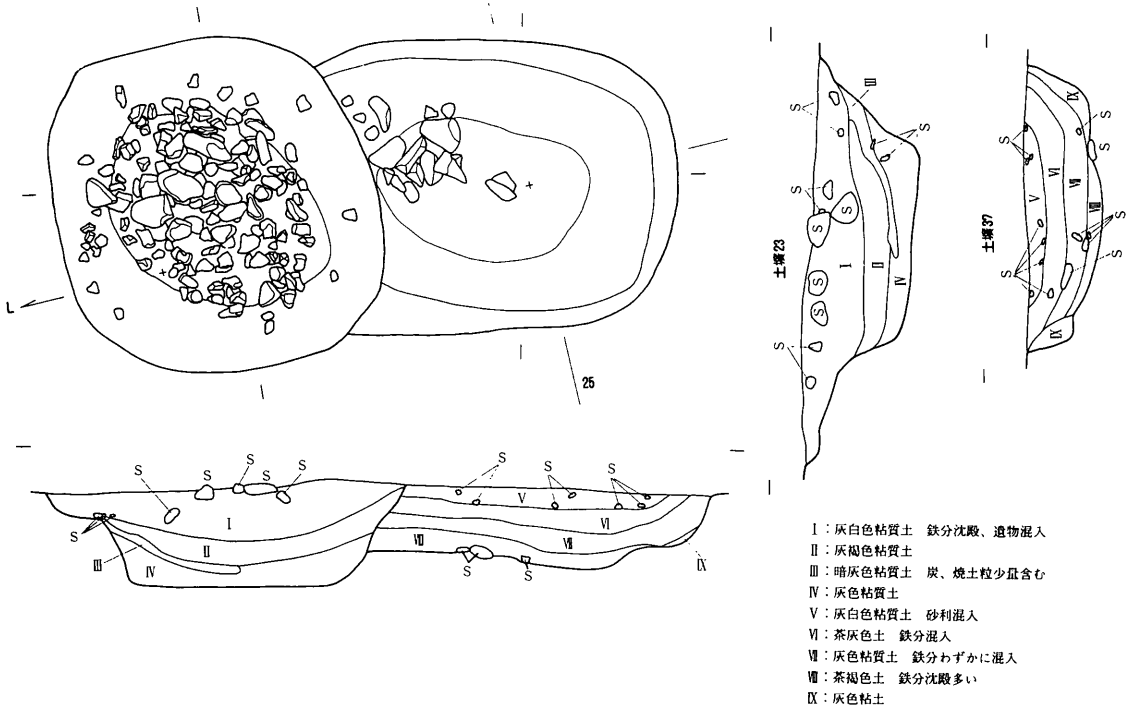
溝は1基のみである。Ⅲ区の土壌23と22の間に検出された。砂質土で深さは10～20 cm程と浅く、自然の溝と思える。内から2の青磁皿が出土した。



第58図 北中遺跡土壙(1)

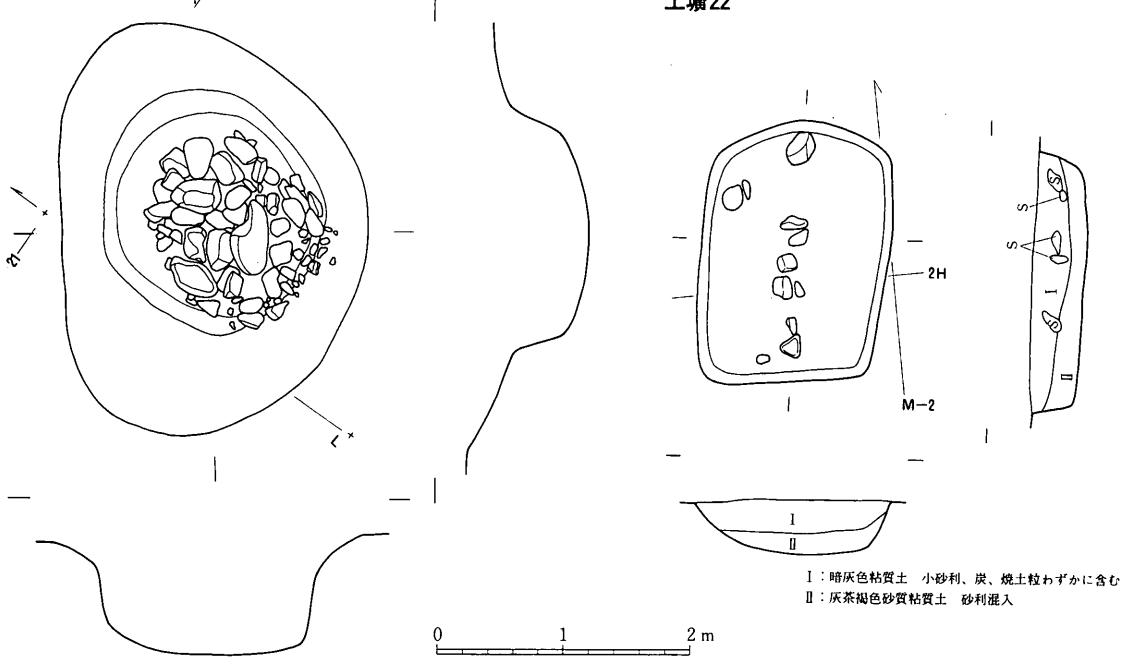
土壤23

土壤37



土壤24

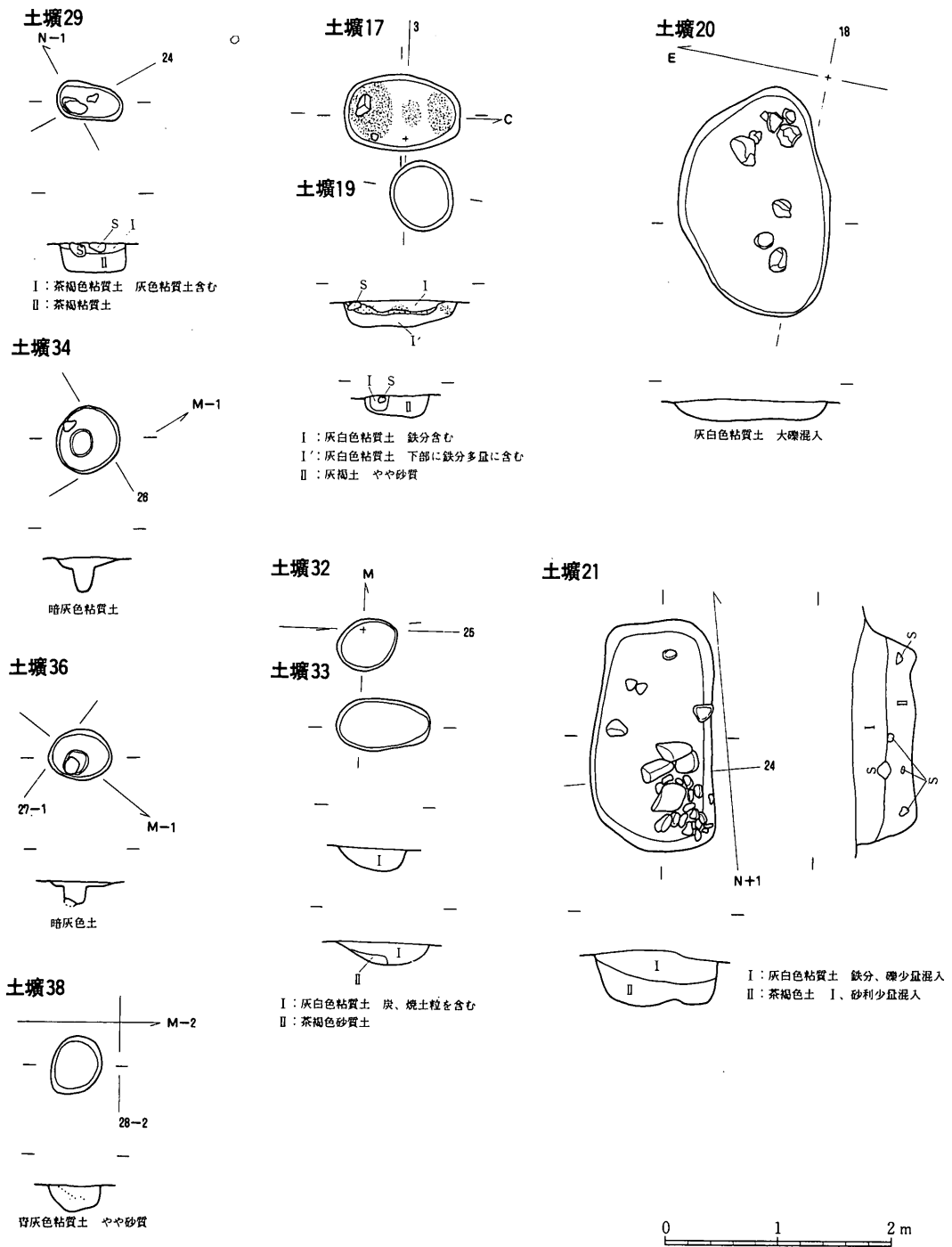
土壤22



第59図 北中遺跡土壤(2)





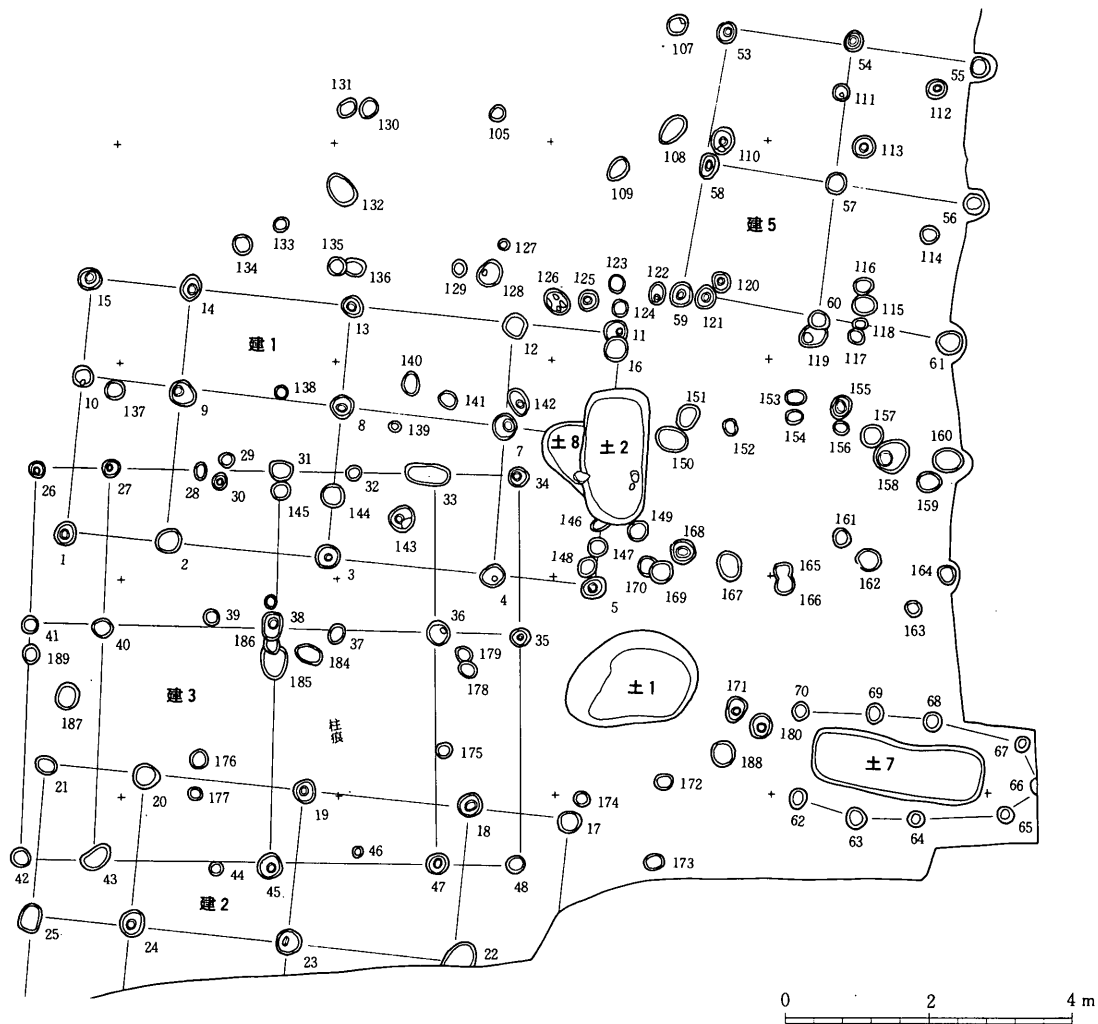


第61図 北中遺跡土壌(4)

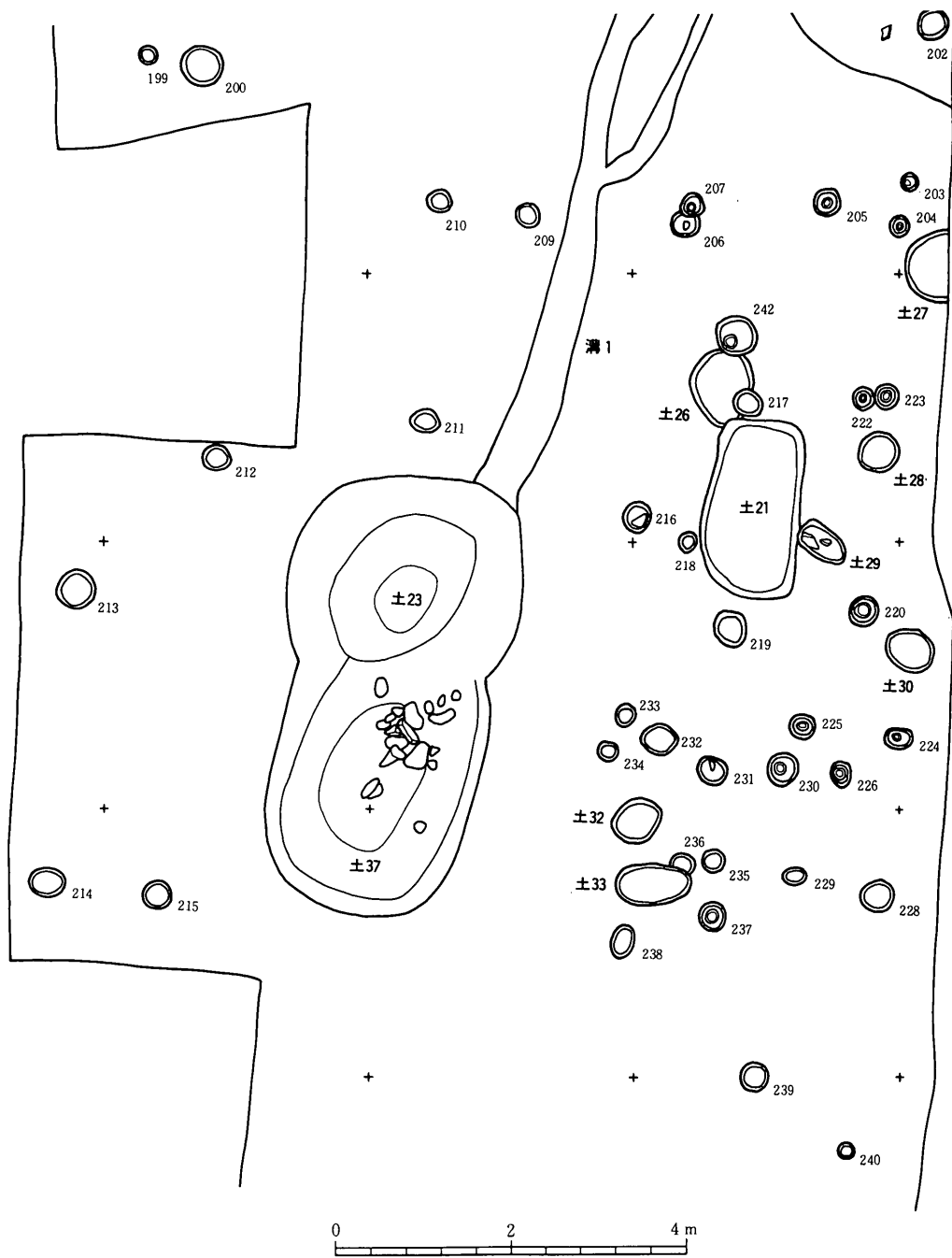
表15

北中遺跡土壇一覽表

番号	平面図	規 模 (cm)		出 土 遺 物	摘 要
		長軸×短軸	深さ		
1	楕円形	190×130	27	白磁	10～20 cm 大の集石
2	長方形	192×96	26	土師器、須恵器	墓壇、北側より歯？
3	楕円形	308×194	27		10～40 cm 大の集石
4	楕円形	188×178	21	須恵器、砥石	10～30 cm 大の円礫
5	楕円形	252×216	40	土師器、陶器、白磁	土壇6を切る、10～30 cm 大の円礫
6	楕円形	( )×156	16	土師器、砥石	
7	長方形	236×77	12	土師器、鋏、釘	墓壇、周囲に柱穴を持つ
8	(楕円形)	( )×(82)	22		
9	楕円形	68×(54)	27		
10	円形	86×84	20		
11	円形	径56	12		
12	楕円形	80×64	19		
13	楕円形	82×56	18		
14	楕円形	80×48	14		
15	長方形	128×92	29	土師器	
16	円形	径102	11	土師器	
17	長方形	108×70	20	古銭	火葬墓、西壁と中層に焼土面、焼骨
18	円形	径78	22	土師器	10～30 cm 大の石、炭化物含む
19	円形	66×62	17		
20	楕円形	224×140	10		10～40 cm 大の円礫、垂円礫
21	長方形	204×110	42		西側北寄10 cm 大の集石
22	長方形	210×154	35	土師器、須恵器、鉄器	炭化物、焼土粒少量含む、2住を切る
23	楕円形	266×232	77	土師器、須恵器、鉢形土器 陶器、鉄器、砥石、凹石	5～50 cm 大の集石、二重底
24	楕円形	322×240	90	須恵器、陶器、土師器	上層部に10～30 cm 大の集石、二重底
25	欠番				
26	楕円形	( )×65	18		
27	(楕円形)	74×( )	16		
28	円形	径48	28		
29	楕円形	62×37	26		
30	楕円形	54×44	49		
31	欠番				
32	楕円形	56×47	54		
33	楕円形	85×44	37	土師器	
34	円形	56×59	27		
35	欠番				
36	楕円形	55×43	21		
37	楕円形	( )×233	56	土師器、須恵器	土壇23に切られる、10～50 cm 大の集石、二重底
38	楕円形	54×44	30	陶器	



第62図 北中遺跡Ⅱ区土壇・ピット



第63図 北中遺跡Ⅲ区土壇・ピット

### 第3節 遺物

#### 1. 土器・陶磁器（第64図）

土師器・須恵器・瀬戸美濃系陶器・白磁・青磁・青白磁が各遺構の覆土および検出面から少量出土している。小破片のものが多く全形を知ることのできるものは少ない。各遺構毎の出土土器・陶磁器の種別および器種・器形は表16に示すとおりで、ここに掲載したものが今回の調査で出土した土器・陶磁器類のすべてである。

全体的な時期の傾向は、古墳時代から中世にかけての様相をもっている。土師器のなかに坏A・甕A・高坏など、古墳時代後期に属するものが比較的多く見られ、須恵器にも横瓶や焼成の悪い甕など同時期のものが少数見られる。また土師器の甕D・Eや坏C・D、須恵器の坏C・Dなどは奈良時代から平安時代の前半にかけての要素であり、陶磁器は12世紀以降の時期を示している。ただし一つの遺構から二つの時期が混じって出土することも多く、これらのことから見ると、住居址を除く大半の遺構は陶磁器類で表わされる時期の所産であり、ごく少数、古い時期の遺構があるという状況が考えられる。

住居址出土の土器の時期については、第1号住居址は遺物が微量のため論及できない。第2号住居址は、第64図1の土師器鉢形土器が類例のない珍しいものであるが、焼成の悪い須恵器甕が存在することから古墳時代後期から奈良時代の最初にかけての時期内に収まるものとみたい。

表16

北中遺跡出土土器器種・器形一覧

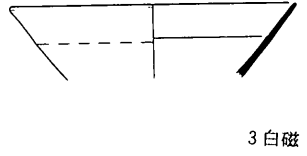
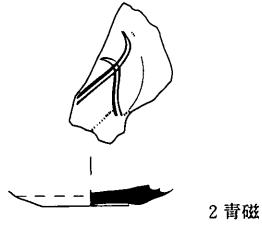
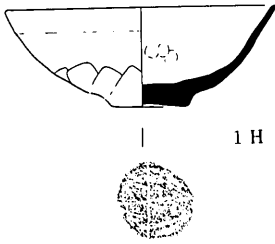
数字は図示番号

出土遺構名	土 師 器	須 恵 器	そ の 他
第1号住居址	甕?		
第2号住居址	坏(鉢?): 1	甕	
溝 1	坏、甕(把手?)	甕	青磁皿: 2
土 墳 1			白磁碗IV類: 7
土 墳 2	坏?	坏D	
土 墳 3		横瓶	青磁碗
土 墳 4		甕	
土 墳 5	甕E、甕器形不明		白磁碗VかVII類: 8、陶器こね鉢: 6・壺: 9
土 墳 6	器種不明		
土 墳 7	甕、坏?、器種不明		
土 墳 15	坏		
土 墳 16	坏CまたはD		
土 墳 18	坏D		
土 墳 21			青白磁平型合子蓋
土 墳 22	坏?、器種不明	甕	
土 墳 23	厚手の甕(甕A)、坏A?	甕、須恵質の鉢形土器: 11	陶器こね鉢: 5
土 墳 24	坏A、厚手の甕(甕A)、高坏	坏C、甕	陶器こね鉢: 4、白磁碗IV類、青磁碗
土 墳 33	厚手器種不明		
土 墳 37	厚手の甕(甕A)、脚部?: 10	甕	
建物址 1 P <sub>1</sub>		甕	
建物址 1 P <sub>10</sub>			白磁碗V類
建物址 1 P <sub>11</sub>	甕D?		
建物址 3 P <sub>31</sub>	甕D		
建物址 3 P <sub>42</sub>	厚手の甕(甕A?)		
建物址 3 P <sub>43</sub>	厚手の甕(甕A?)		
建物址 3 P <sub>45</sub>			白磁碗V類: 3
検 出 面	坏A: 14、高坏、甕A?	坏B: 12、坏C、坏D: 13 短頸壺: 15、横瓶、甕: 16	白磁碗IVかV類

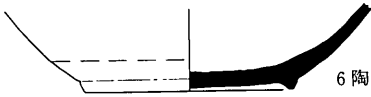
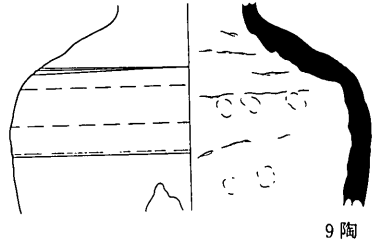
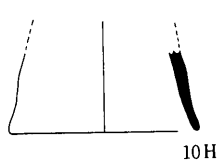
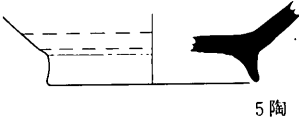
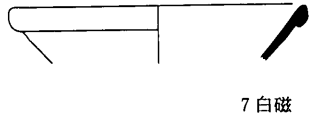
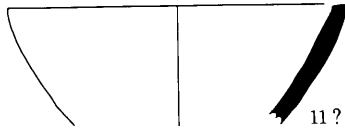
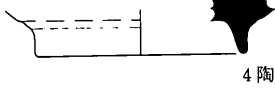
第2号住居址

溝

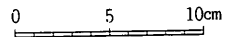
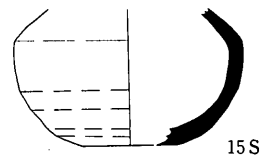
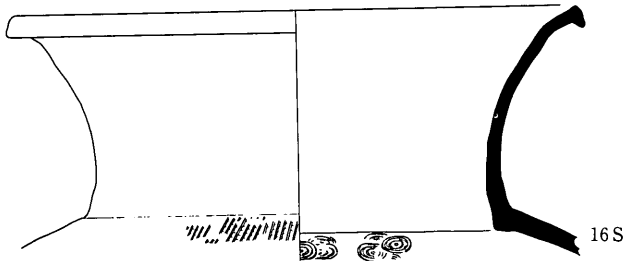
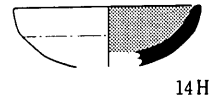
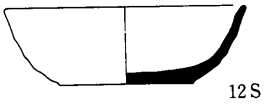
ピット



土壌



検出面



第64図 北中遺跡出土土器

表17

## 北中遺跡出土土器観察表

No.	出土地点	種別	器形	寸法 (cm)		残存度 口径 (底部)	色		調		成形・調整・形態の特徴	備考
				口径	器高		外面	内面	外面	内面		
1	2	住 土師器	杯	14.4	4.1	5.2	淡茶褐～黄褐	黒～茶褐	黒	淡黄褐	ロクロナデ 底部筋ヨコナデ 体部外面タテのケズリのちヨコナデ	底面木葉上痕
2	溝 1	青磁	皿	5.1			灰	灰	灰	灰	ロクロナデ 外面回転ヘラケズリ	見込に割書あり
3	ピット 45	"	碗	15.2			乳白	乳白	乳白	乳白	ロクロナデ 外面回転ヘラケズリ	
4	土溝 24	陶器	こね鉢		11.2		灰白	灰白	灰白	灰白	ロクロナデ 体部外面回転ヘラケズリ 付け高台のちヨコナデ	
5	" 23	"	"		11.2		淡灰	淡灰	淡灰	淡灰	ロクロナデ 体部外面回転ヘラケズリ 付け高台のちヨコナデ	
6	" 5	"	"		11.1		淡灰	淡灰	淡黄灰	淡黄灰	ロクロナデ 体部外面回転ヘラケズリ 付け高台のちヨコナデ	
7	" 1	白磁	碗	15.8			暗乳白	暗乳白	暗乳白	暗乳白	ロクロナデ	
8	" 5	"	"		4.0		淡黄灰	淡黄灰	淡黄灰	淡黄灰	ロクロナデ 削り出し高台	
9	" "	古瀬戸					灰白	灰白	灰白	灰白	ロクロナデ 外面ヘラケズリのちヨコナデ 沈線 内面指による庄、ナデ ロ線近くヨコナデ	
10	" 39、37	土師器	筒形		10.2		淡黄褐～黒	淡橙黄褐	淡橙黄褐	淡橙黄褐	ロクロナデ 端部ヨコナデ	
11	" 23	?					灰褐	灰褐	灰褐	灰褐	ロ線ナデ 外面端部ケズリ	
12	検出面	須恵器	杯	12.8	7.0	4.0	灰黄褐	淡灰～淡黄灰	淡灰～淡黄灰	淡灰～淡黄灰	ロクロナデ 底部ヘラ切り後板状の圧痕	
13	" "	"	"		6.4	3.9	灰	灰	灰	灰	ロクロナデ 底部回転糸切	
14	" "	土師器	"	10.0			茶褐～黒	黒	黒	黒	ロクロナデ 内面ヘラミガキ	内黒
15	" "	須恵器	短頸壺				灰	灰	灰	灰	ロクロナデ 底部回転糸切 外面回転ヘラケズリ	
16	" "	"	長頸壺				茶褐	茶褐	茶褐	茶褐	ロクロナデ 外面タタキ目 内面あて具痕	

## 2. 鉄器

鉄製品については合計で9点程出土した。細片が多く図示できたものは6点のみであった。1はⅢ区検出面、2は土壙23より出土したもので欠損と、さびがはげしく種別は不明である。3は土壙22より出土した釘状の鉄器である。4は土壙23に出土した。種別不明である。5は土壙7より出土した釘である。上部欠損している。6は土壙7より出土した鉄である。一部を欠くがほぼ完形である。

## 3. 石器

今回の調査では図示した9点が出土した。砥石4点と凹石5点である。1～4が砥石である。1は凝灰岩製で一部欠損する。表面は鉄分が付着して褐色を呈する。使用面は4面で真中が使用のためかなり磨耗している。裏面に線条痕がある。2は硬砂岩製で一部欠損する。使用面は2面で他は自然面を残す。特に一部については使用がはげしく光沢がある。3は石英閃緑岩製で表面は鉄分が付着して褐色をおびる。完形で使用面は1面のみである。手持使用で中央部が使用のためくびれている。石英閃緑岩は東山の牛伏川水系で採取される。4は頁岩製で両端を欠く。使用面は2面で片面に線条痕がある。軟らかく、粒子が細かいため最後の仕上げに使用したものであろう。5～9は安山岩製の凹石である。全て同遺構より出土した。5、7、9は完形で凹みは片面だけで、9が最も浅い。特に磨滅した部分はない。6は2/3を欠き両面に凹みをもつ。8は1/3を欠き凹み部分も欠損している。

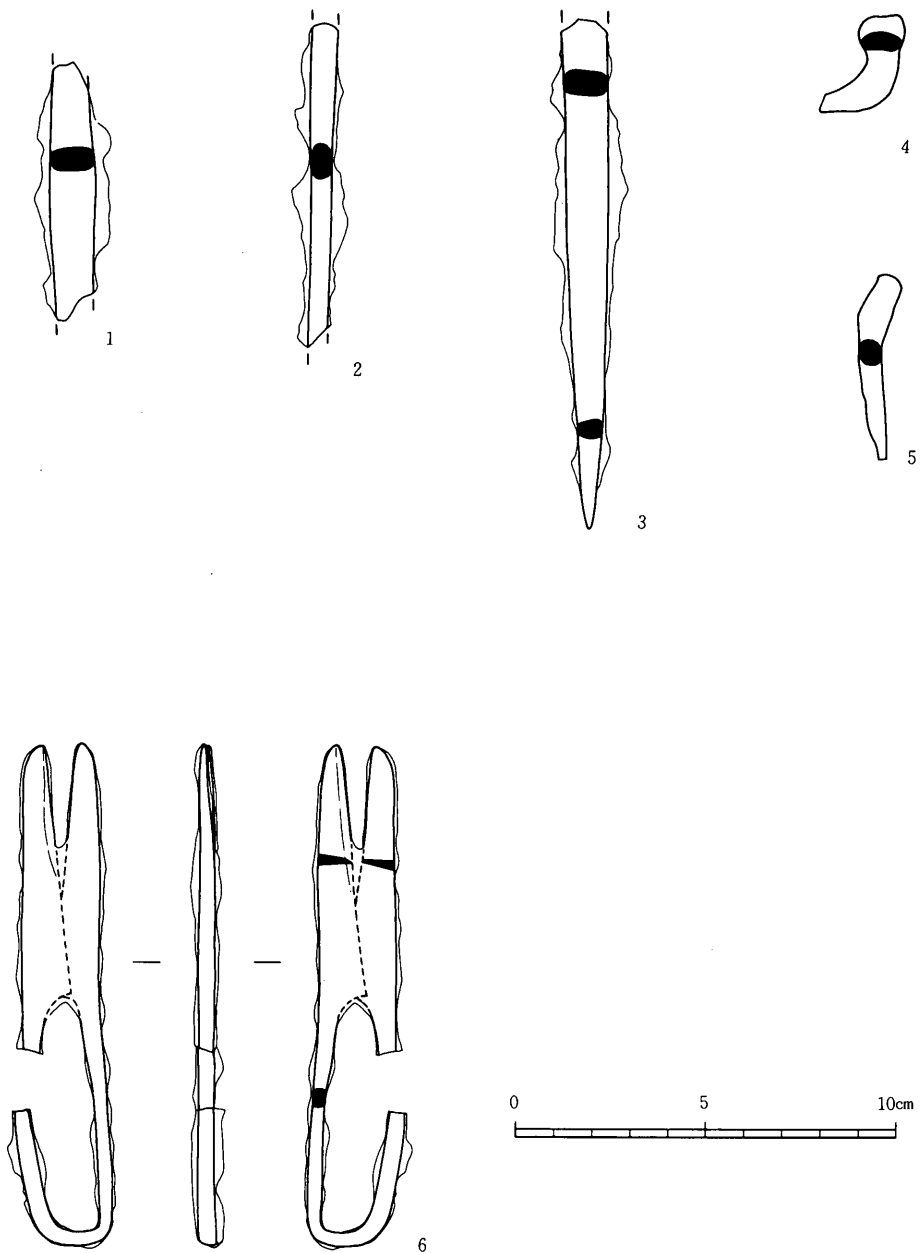
この凹石は平安時代後半から中世にかけての遺跡から多くの出土例を見るが、用途については不明である。資料の集成、検討については今後の課題としたい。

表18

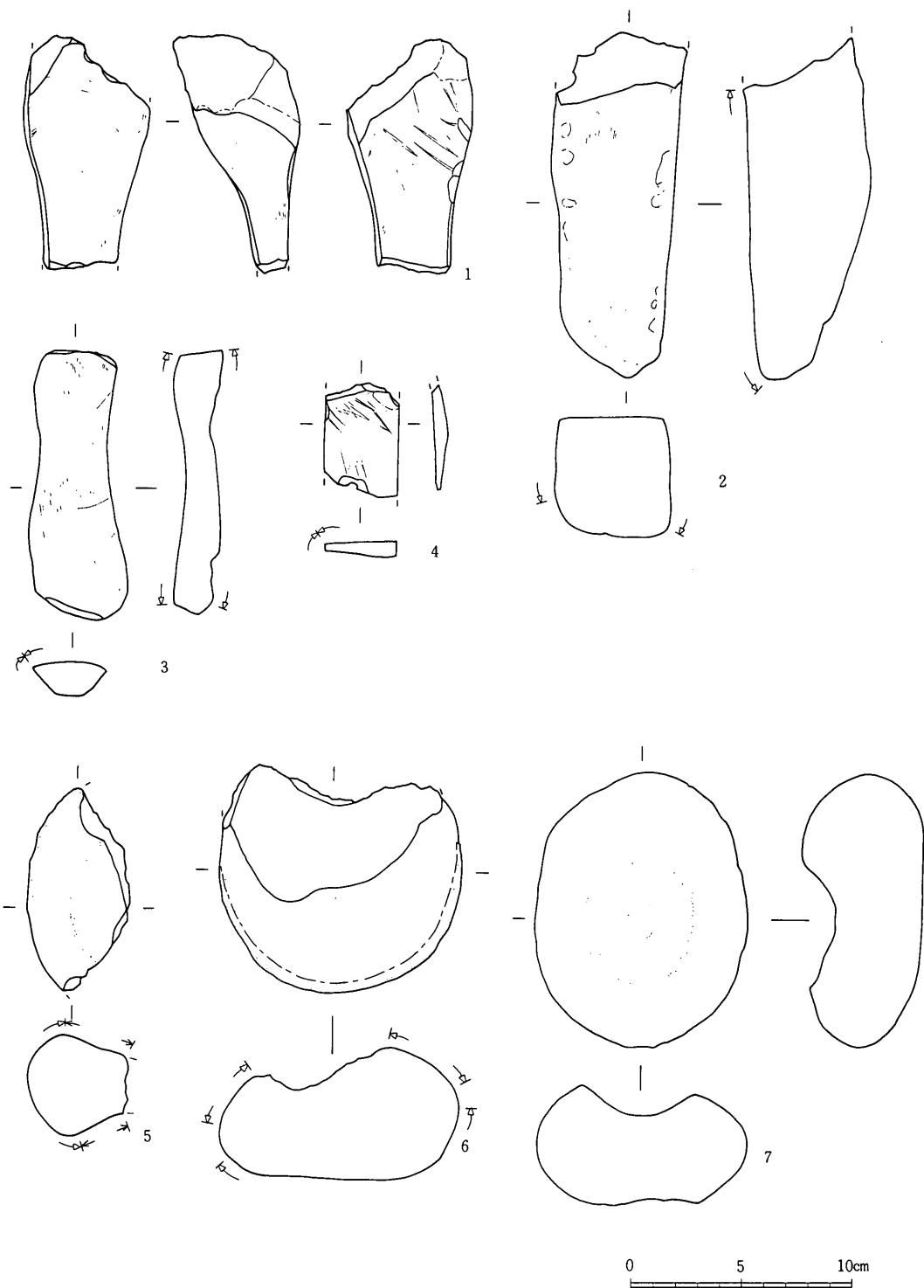
北中遺跡出土石器一覧表

番号	器種	遺構	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石質	欠損状況	備考
1	砥石	土壙23検出面	(10.42)	5.81	4.81	(274.78)	凝灰岩		
2	砥石	" 6	(15.09)	5.35	5.63	(985.00)	硬砂岩		
3	砥石	" 4	(11.87)	4.42	2.17	(119.20)	石英閃緑岩		
4	砥石	" 23	( 5.04)	3.32	(0.71)	( 14.66)	頁岩		
5	凹石	" 23 No.3	12.15	9.55	5.60	(855.00)	安山岩	完形	
6	凹石	" 23 No.2	( 8.98)	( 4.48)	4.80	(195.22)	"	1/3残	
7	凹石	" 23 No.4	14.5	12.61	7.56	1750.00	"	完形	
8	凹石	" 23 No.6	( 9.33)	10.84	5.62	(955.00)	"	1/3残	
9	凹石	" 23 No.5	13.3	10.46	6.78	1650.00	"	完形	

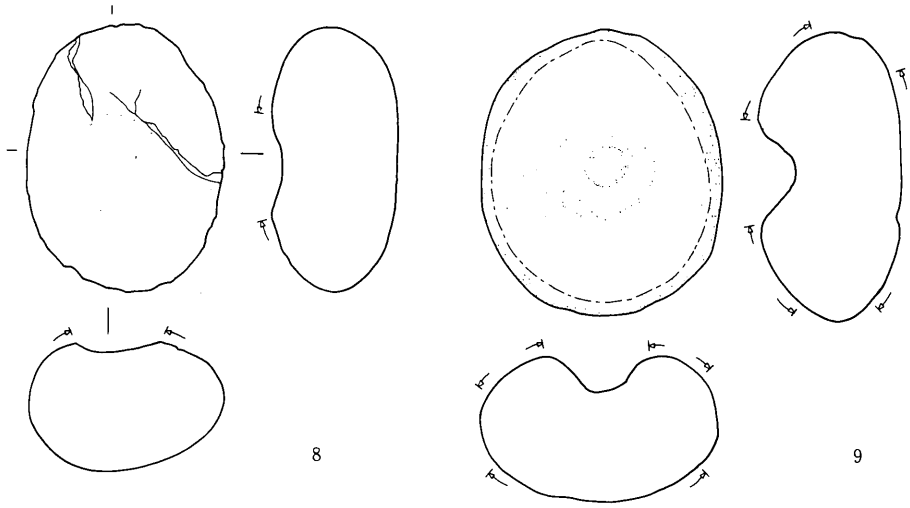




第65图 北中遺跡出土鉄器



第66图 北中遺跡出土石器(1)



第67图 北中遺跡出土石器(2)

## 第5章 調査結果のまとめ

### 1. 北方遺跡について

北方遺跡は59年度調査も合わせて23軒の竪穴住居址が確認された。また今回の調査と同時期に行なわれた、中央道長野線敷地内の(財)長野県埋蔵文化財センター調査で32軒が確認されている。

遺跡は梓川の旧流路に沿って形成された自然堤防状の微高地に立地し、その方向は南西から北東である。遺跡の範囲は59年度調査地がほぼ北東側の端に位置するであろう。南西側は本年度調査の結果まだその南西側へ広がっている。その限界は現在、小沢禎一郎氏の畜舎付近までと思われる。畜舎南側は59年度のは場整備時に確認したところ、大きな流路となっており、住居址等があるところとは思われない。このため南西→北東方向は約600 m、南東→北西方向は約300 m程の範囲が推定される。調査結果は前記で詳述したので以下は遺構別に所見を述べ今後の課題としたい。

#### 竪穴住居址について

第7から23号住居址まで確認されたが、白磁を出土した住居址以外は遺物の上から見れば時期差は僅少であるが、前述したように5グループに分けることができよう。また各住居址間の位置関係あるいは方向からみても大きくずれる住居址は見られない。住居址内施設、特にカマドの設置場所を見ると、①西壁中央、②東壁中央、③東壁北端寄、④南壁西端寄、⑤北壁東端寄の5つに分けることができる。①は第10、12、13、19、23号住居址の5軒、②は第15、21号住居址の2軒、③は第9号住居址1軒、④は第8号住居址1軒、⑤第20号住居址1軒で確認あるいは推定できなかった住居址は第7、11、14、16、17、18、22号住居址の7軒である。これを出土遺物からみた時期順（グループ別）と比較してみると①と⑤が先のグループにほぼあたる。今回の調査地区は当遺跡の一部であるので全体について述べることはできないが、今回の調査地区に限って言えば西壁及び西壁寄に構築されるカマドをもつ住居址は他の住居址に比較してやや先行するものであるといえる。またカマドが確認できなかったものの内、第17号住居址については出土遺物も磁器1片で床面に地床炉を思わせる灰、炭化物のかたまりが認められたことから59年度調査の第6号住居址とよく似ている。この両址は所属時期も同時期で、確認された住居址中最も新しいものであろう。

次に住居址内にみられる集石状の投込みについてである。これらは礫の大小、量の多少はあるがほとんどの住居址で見られた。これは59年度調査住居址にも見られたものである。礫は床面から5 cm～10 cm 程上にあり、この間には土層の変化が認められない。このことは住居址の廃棄とほぼ同時に投入されたことを示す。礫の大きさはほとんどが50 cm 前後の円礫であるが、第21号住居址については特別である。大きさは100 cm 前後のものもあり、また量も多い。これらの礫中には焼けたもの、ススの付着しているものもあり、これらは住居址内やその付近で使用していたものとも考えられるが他のもの、特に100 cm 大の大礫については不明である。礫の投込みが何のためなのかも含め

て資料集収、検討は今後の課題としたい。

その他の遺構について

掘立柱建物址は覆土、柱穴の形態等から平安時代末から中世以降としたい。ここでは特異な状態で環状鉄製品(33)を出土した建物址3の柱穴P<sub>89</sub>についてふれてみたい。建物址3は内側に建物址4を包むように検出された。4×2間で南側は中央の柱穴がなく1間である。P<sub>89</sub>は北側の中央の柱穴を構成する。33は南側の壁をくり抜くようにした内から出土した。掘立柱建物の柱穴内から古銭が出土する例は時々見られるが、これと同様に家を建てる際の災い除けなどのまじないに使用したものと推定できる。この鉄製品が何であるかは不明である。竪穴状遺構は内部に礫が多量に入っている。礫が入る点は住居址あるいは土壙と同様であるが、規模が小さく、壁と底面の接点が丸みを持つ、屋内施設を持たない等の点で住居址と異なり、土壙としたものとは形状、礫の量などで異なるため区別した。性格としては土壙に近いものと思われる。今回の調査遺構中特異な遺構としては大甕埋設遺構がある。須恵器の大甕3個が出土した。内部の状態に多少の違いはみられるが多くは同個体の破片や炭化物等が出土した。当時の地表面は検出面より上であるが大甕の大きさを考えれば当時は地表にかなり出たであろう。墓址と考えれば盛土があったと思われるが不明である。大甕を使用するものとしては骨蔵器の外容器、染料の保存容器、水等の液体貯蔵器、人糞等の肥甕などが考えられる。他の類例や内部の詳細な検討など、今後の課題としたい。時期は出土した須恵器坏、四耳壺などから住居址での①のグループに属するものと思われる。

## 2. 北中遺跡について

当遺跡は主として墓址と思われる土壙が検出された。(財)長野県埋蔵文化財センターでの調査でも墓址が確認されている。どちらの調査でも遺跡の一部であるので確定はできないが、当遺跡は墓域を中心とした遺跡とも考えられる。調査された土壙の内、土壙7について少し述べたい。前記したように周囲に9本の柱穴を持つ。土壙は長方形で炭化物、焼土などはあまり認められなかったので土葬と考えられる。墓址に柱穴を持つ施設としては民俗例でみられるシズヤ、タマヤと呼ばれるものなどが考えられるが類例を集成し今後の課題としたい。

最後に、北方・北中遺跡の調査を通じて多大なご便宜、ご配慮をいただいた島内土地改良区、島内公民館、出張所、また作業にご協力いただいた地元の皆様、特に同時期に調査を実施した(財)長野県埋蔵文化財センターの北方遺跡調査班の先生方には調査全般にわたりご便宜、ご教示をいただきまして心から感謝いたします。

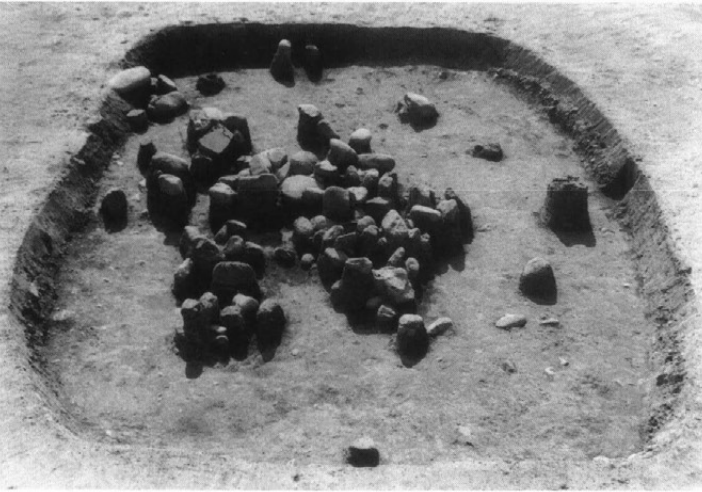
### 参考文献

- 水野正好「招福・除災—その考古学—」国立歴史民俗博物館研究報告第7集 昭和60年
- 新谷尚紀「生と死の民俗史」水耳社 昭和61年
- (財)長野県埋蔵文化財センター「長野県埋蔵文化財センター年報3」 昭和62年
- 松本市教育委員会「松本市島内遺跡群北方遺跡・南中遺跡—緊急調査報告書—」 昭和60年



北方遺跡

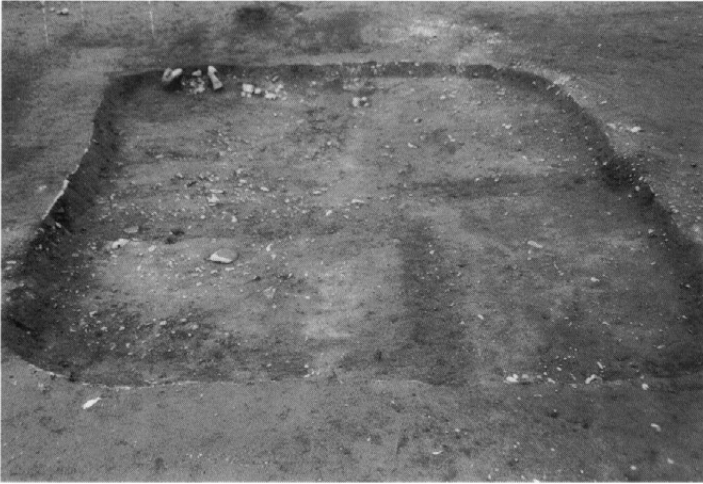
第7号住居址



第8号住居址  
礫出土状態



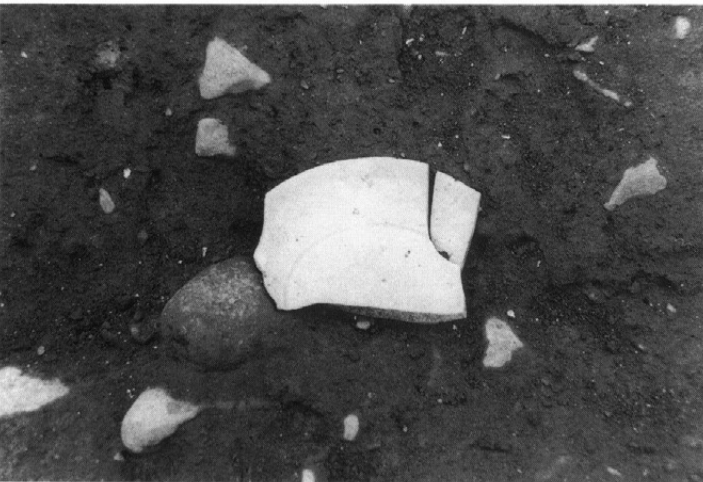
第8号住居址  
カマド



第9号住居址

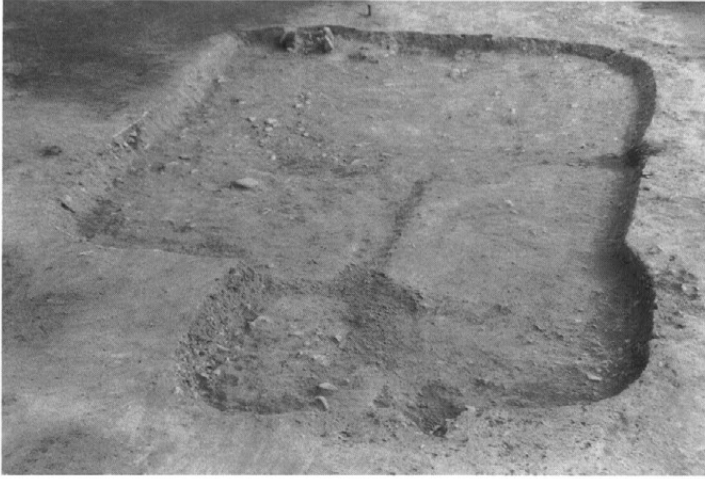


第9号住居址  
カマド

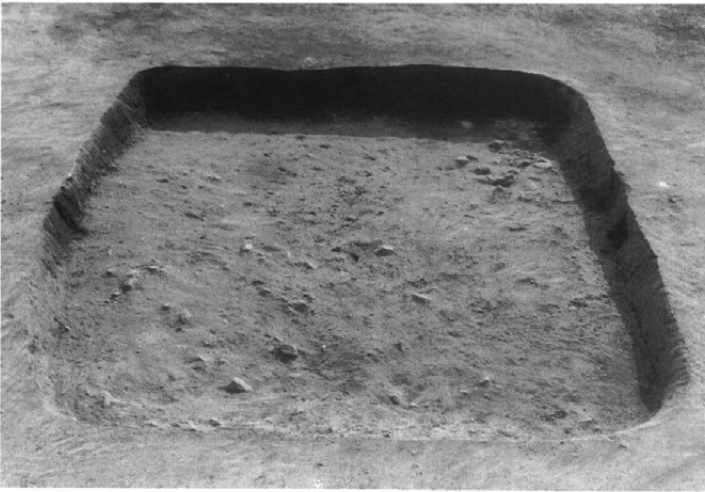


第9号住居址  
13出土状態

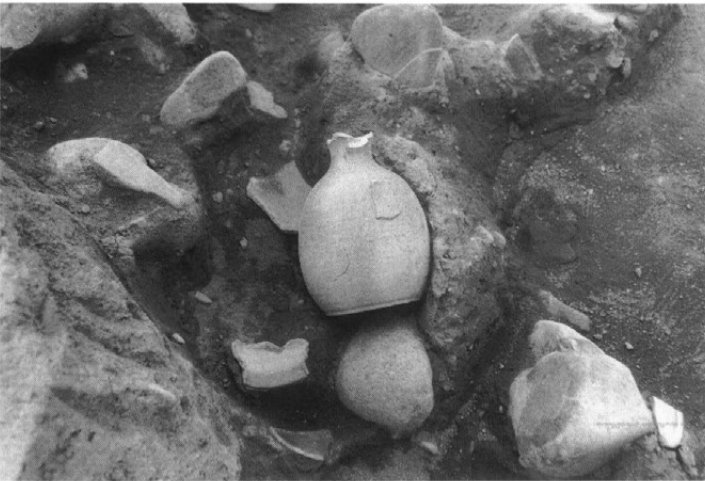
第 2 図 版



第9、10号住居址



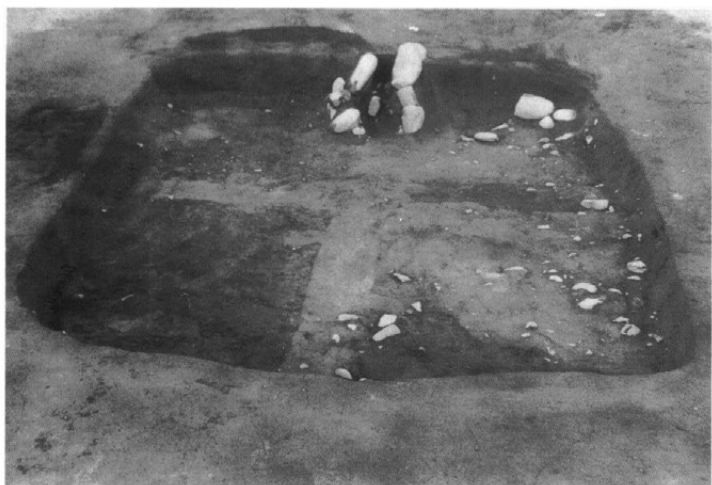
第11号住居址



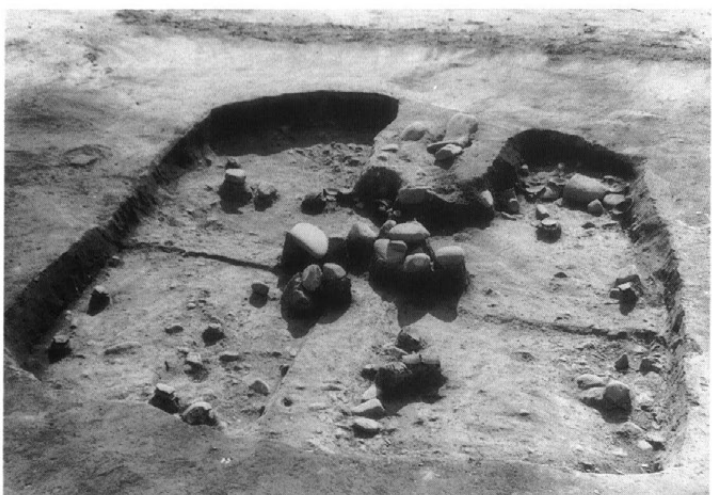
第12号住居址  
42出土状态

第 3 图 版





第13号住居址



第13号住居址  
礫出土状態



第13号住居址  
カマド

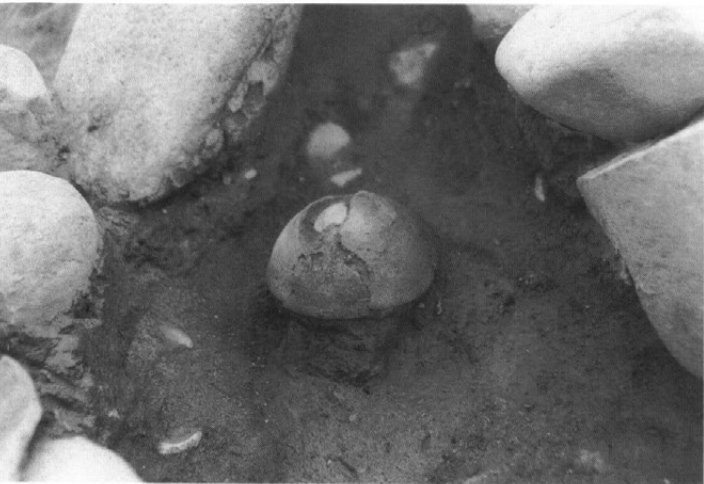
第 4 図 版



第13号住居址  
遺物出土状態



第13号住居址  
61、62出土状態



第13号住居址  
54出土状態

第 5 图 版



第15号住居址

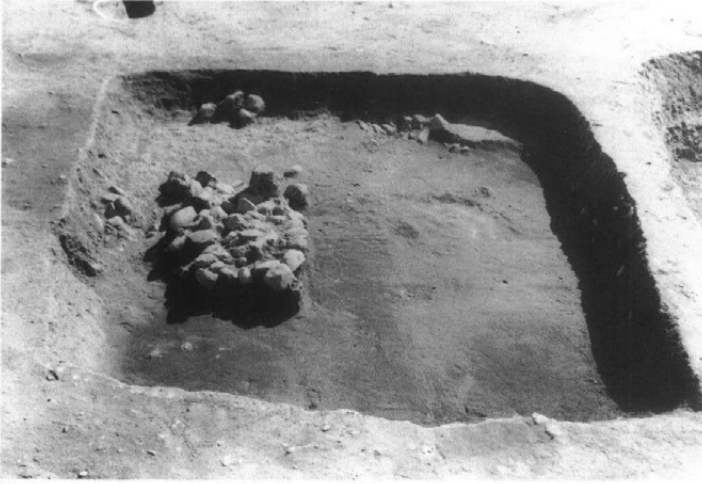


第15号住居址  
71、72出土状态



第15、16、22号住居址

第 6 图 版



第17号住居址



第18号住居址



第18号住居址  
礫出土状態

第 7 图 版



第19号住居址

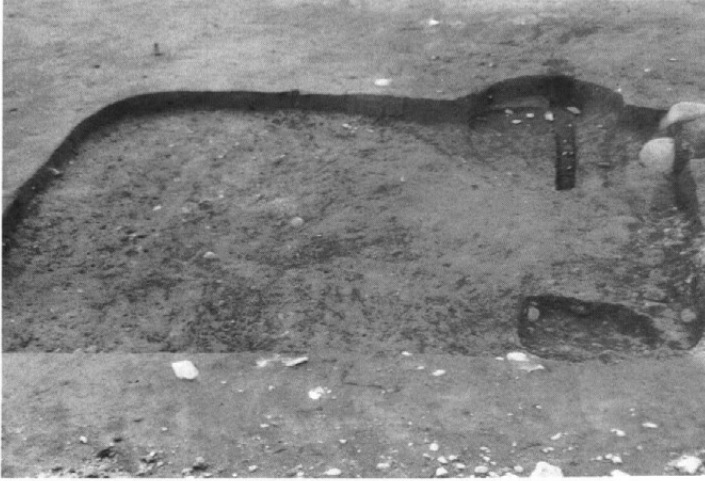


第19号住居址  
カマド



第19号住居址  
106出土状態

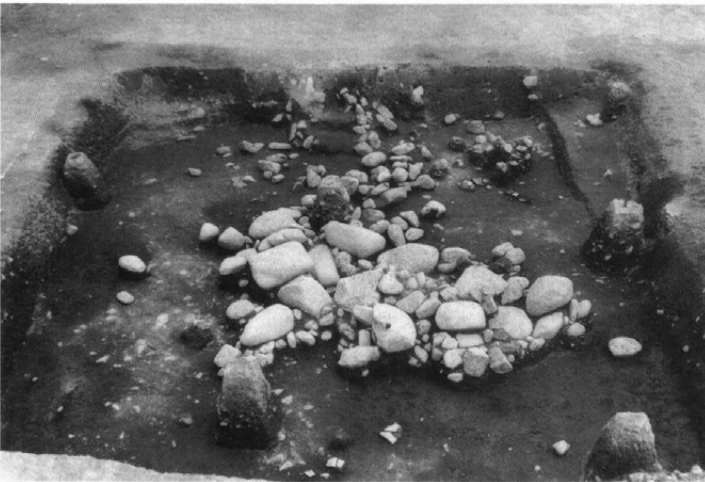
第 8 図 版



第20号住居址



第21号住居址



第21号住居址  
礫出土状態

第 9 图 版

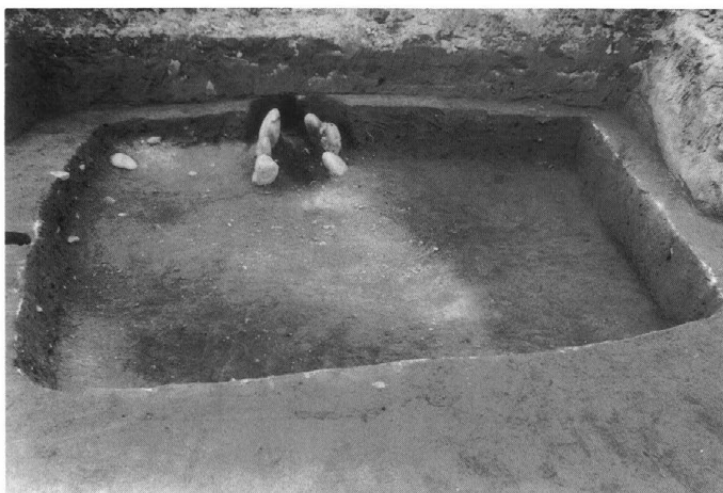




第21号住居址  
カマド



第21号住居址  
左 127  
右 135出土状態



第23号住居址

第 10 図 版



第23号住居址  
礫出土状態

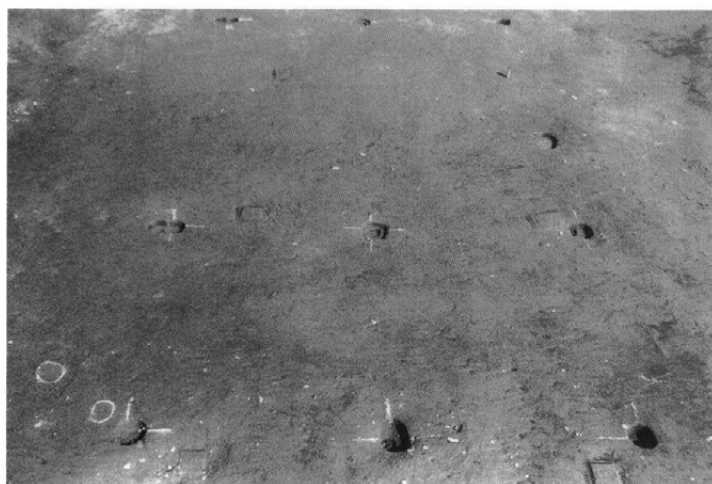


第23号住居址  
カマド

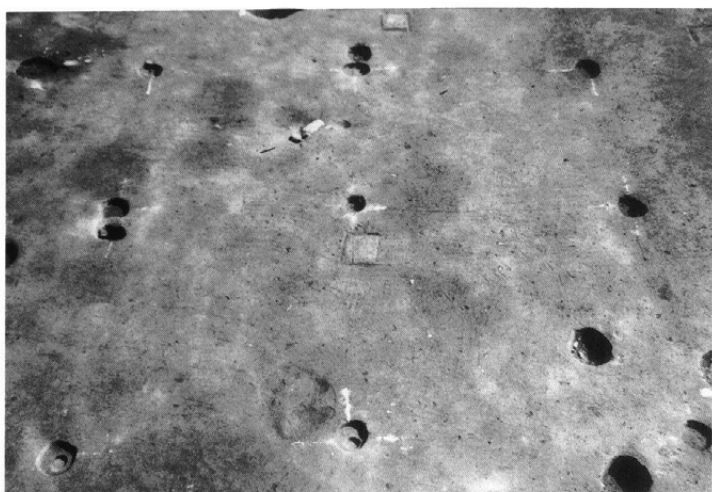


第23号住居址  
カマド内遺物出土状態





建物址 1

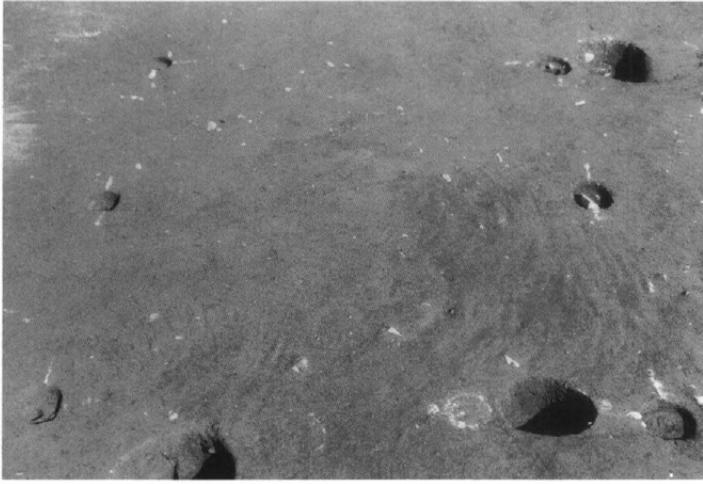


建物址 2



建物址 3、4

第 12 図 版



建物址 5



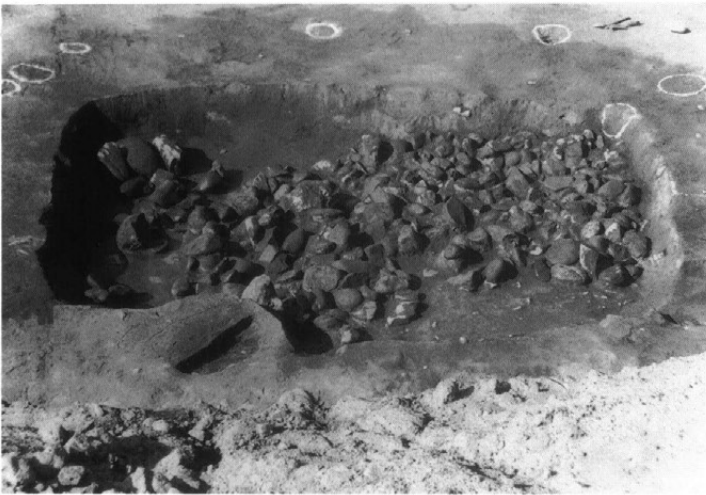
竪穴状遺構 1



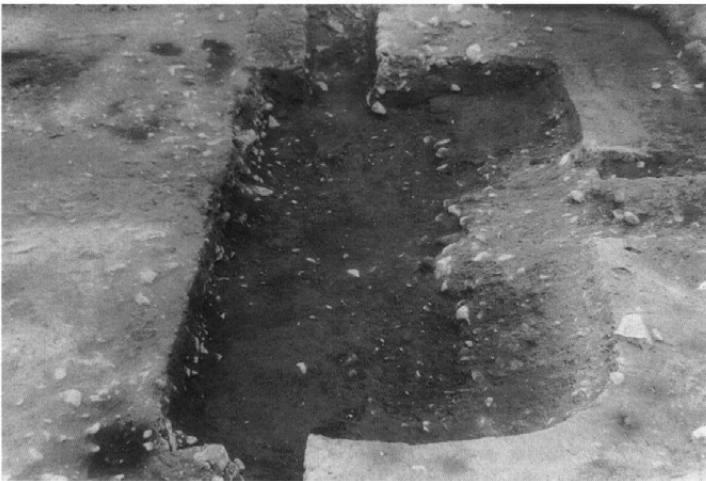
竪穴状遺構 1  
礫出土状態



豎穴状遺構 2



豎穴状遺構 2  
磔出土状態

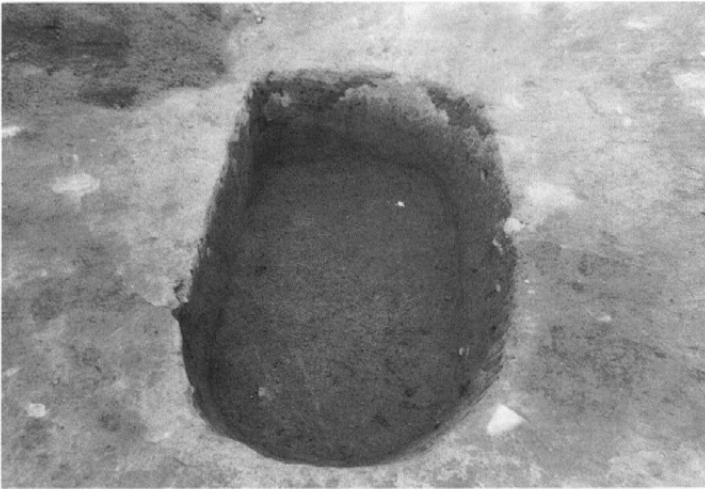


豎穴状遺構 3

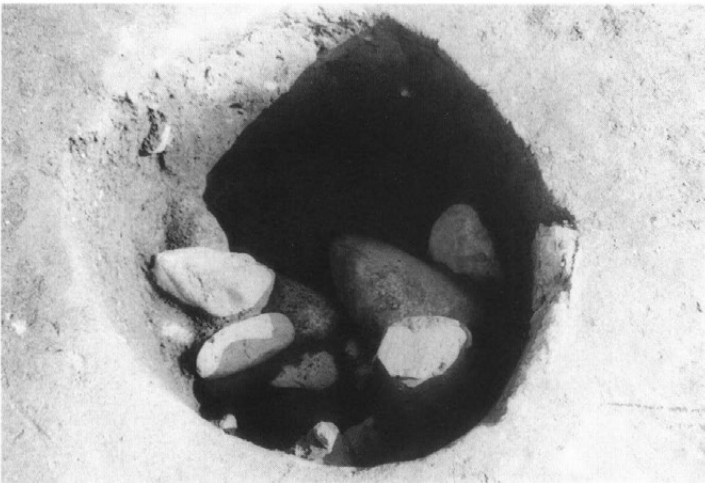
第 14 図 版



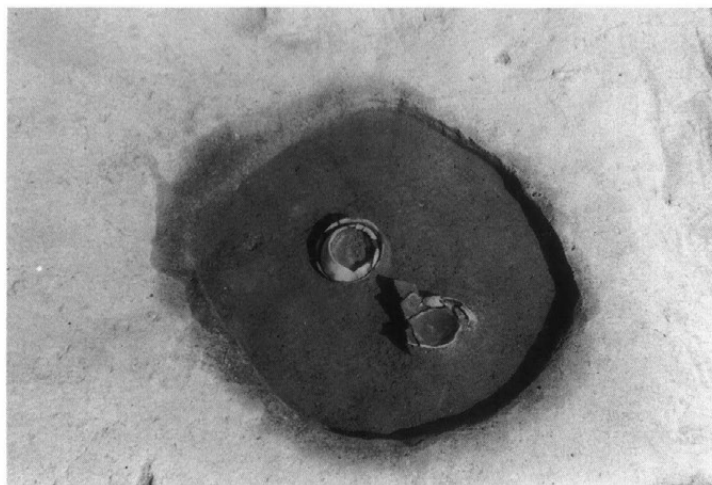
豎穴状遺構 3  
礫出土状態



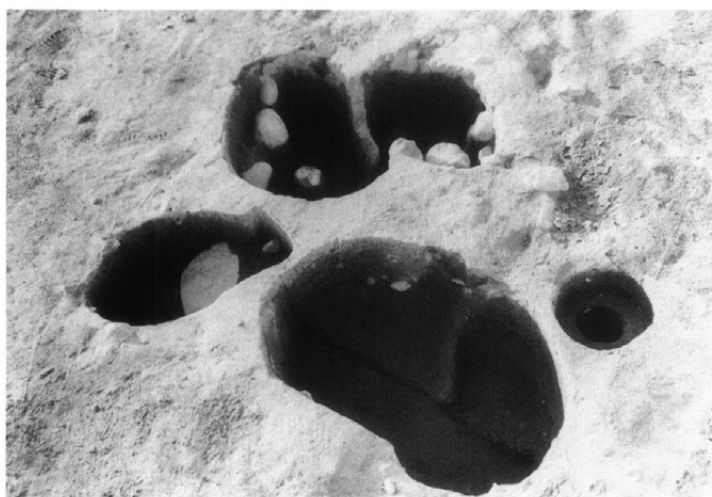
土壙36



土壙40



土城44



土城47～49、62ピット 164



建物址 3ピット89  
環状鉄製品出土状態

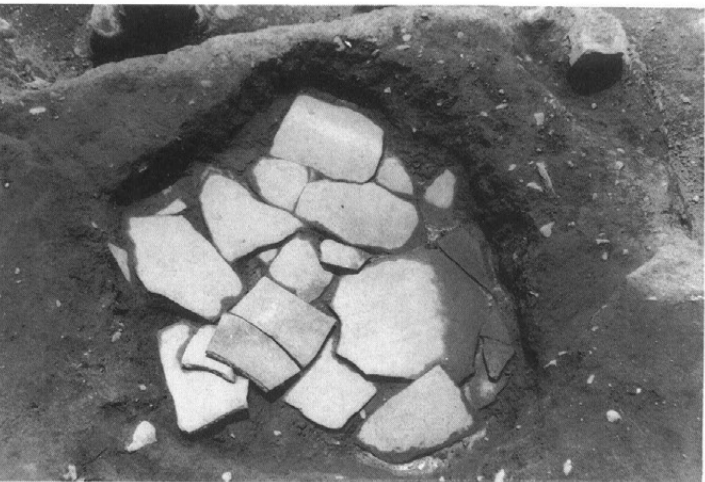
第 16 図 版



大甕 1  
上 面



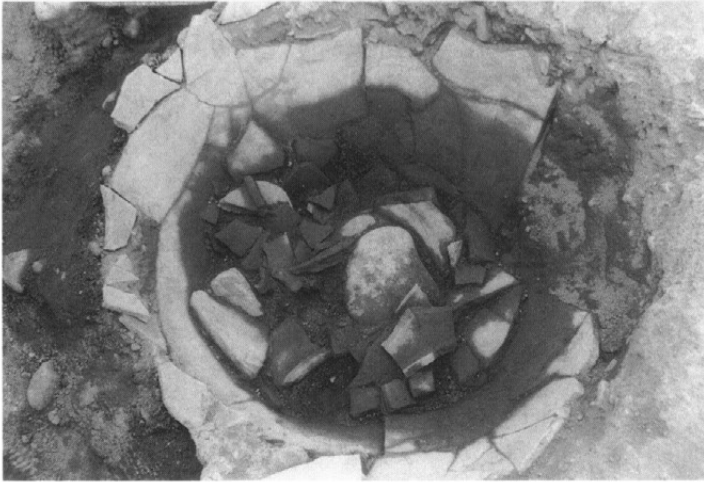
大甕 1  
断 面



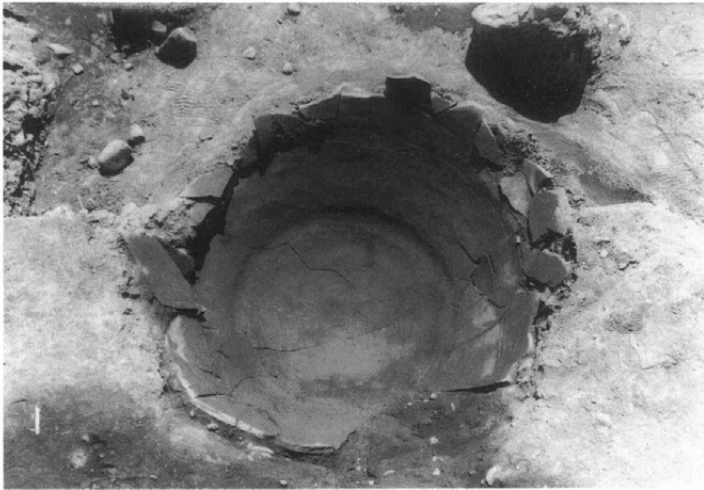
大甕 2  
上 面

第 17 図 版





大甕 2  
内部



大甕 2  
掘上げ

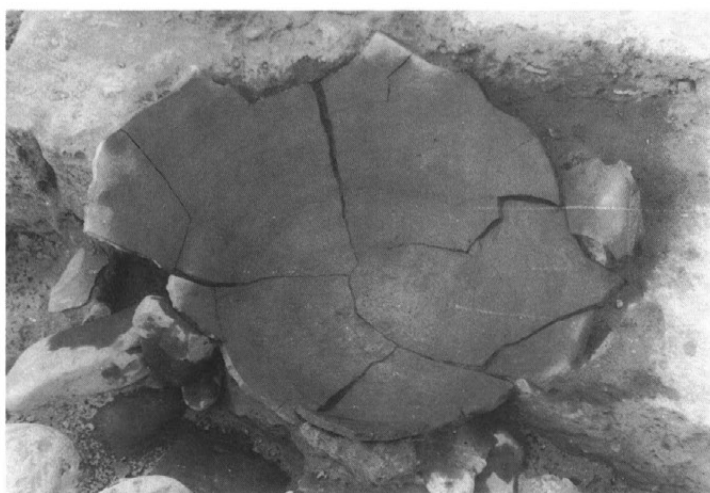


大甕 3  
上面

第 18 図 版



大甕 3  
内 部



大甕 3  
掘上げ



大甕 3  
163出土状態





調査地区全景  
南側より

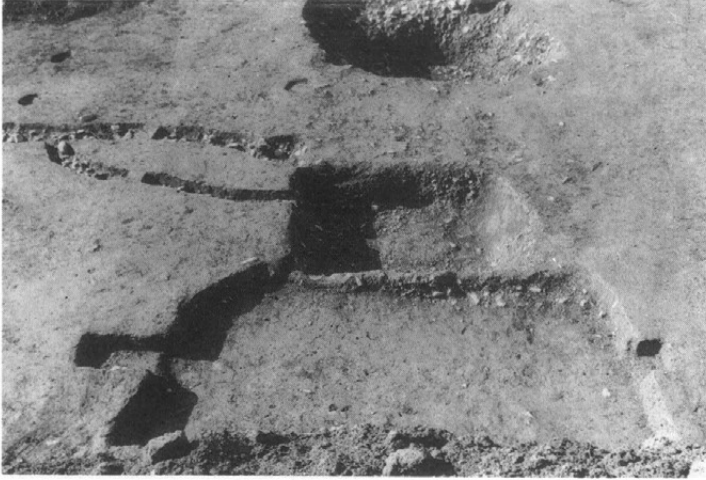


調査地区全景  
西側より



北 中 遺 跡

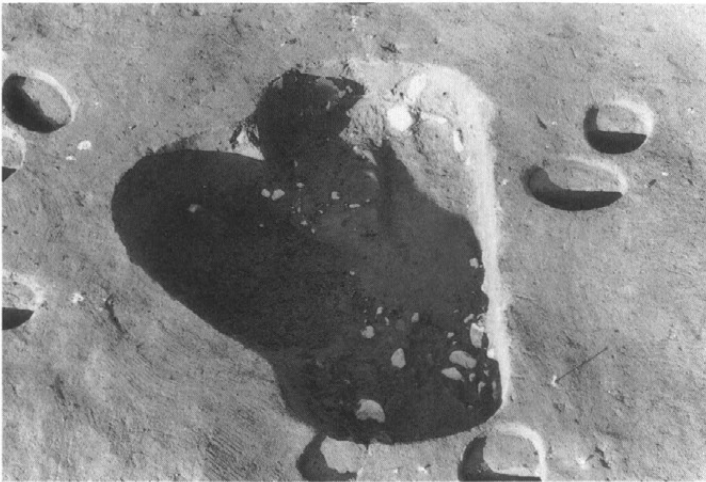
第 1 号住居址



第 2 号住居址



土城 1

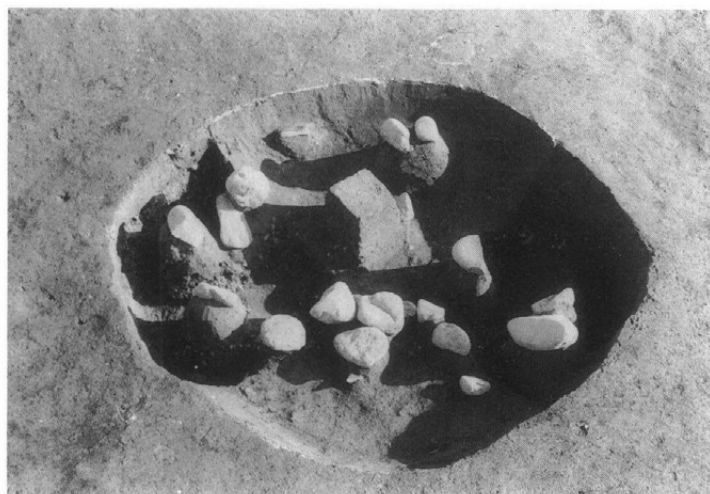


土城 2、8

第 21 図 版



土城 3

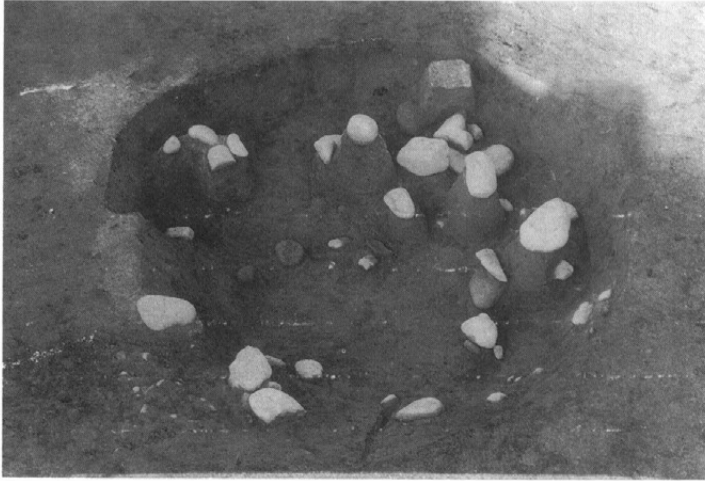


土城 4

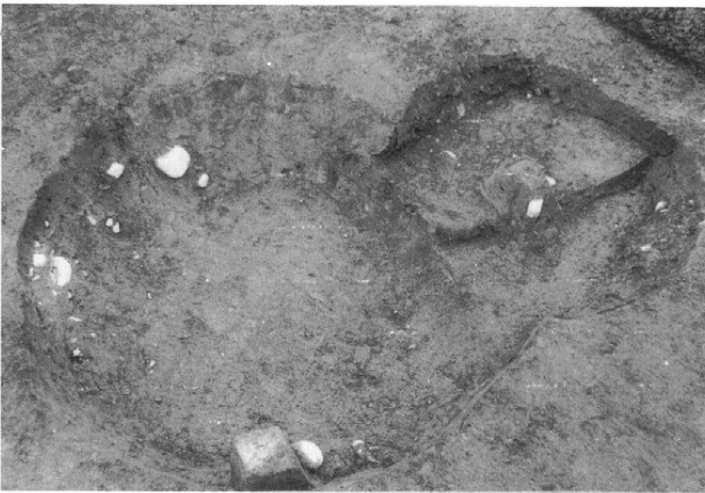


土城 4  
砥石出土状態

第 22 图 版



土城 5



土城 5、6

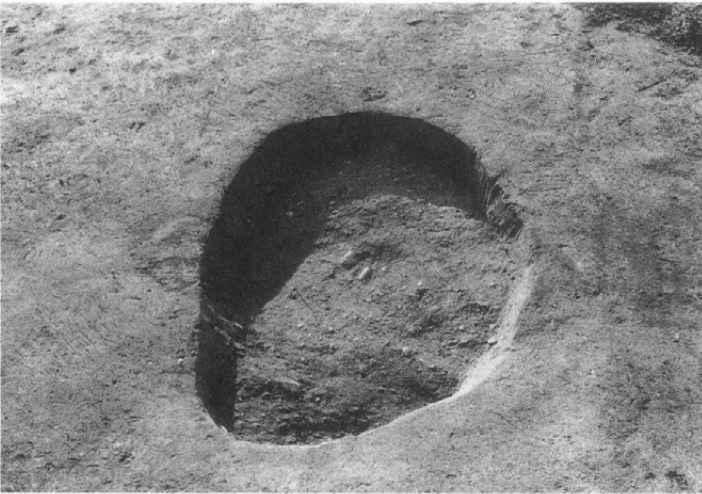


土城 7

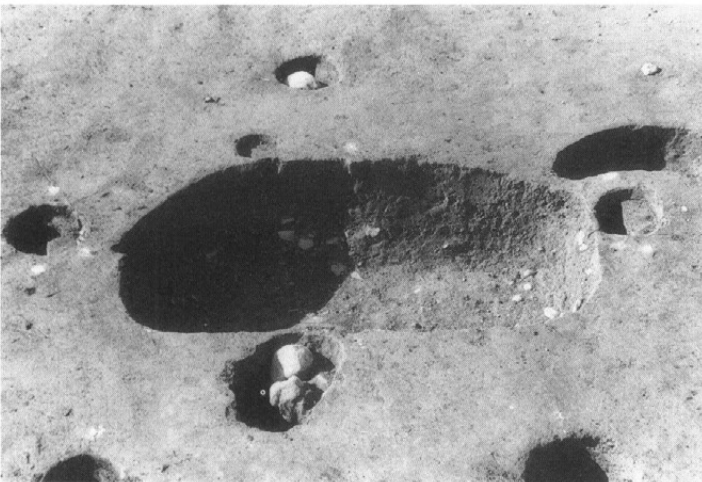
第 23 図 版



土壙17



土壙20



土壙22

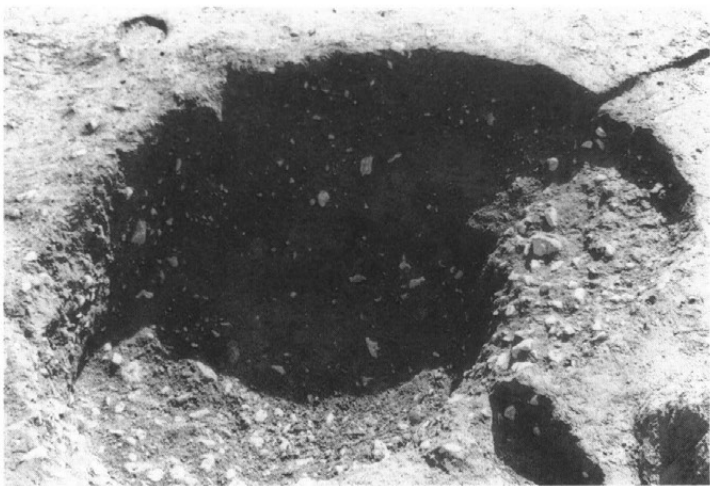
第 24 图 版



土城21



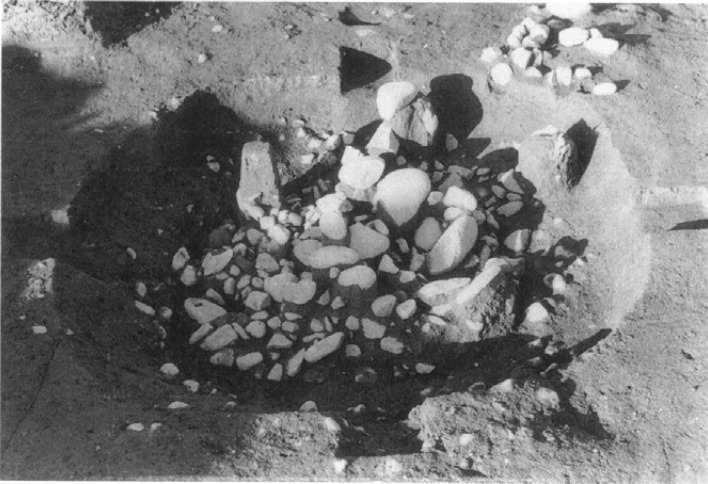
土城23



土城24

第 25 図 版





土坑24



土坑37、23



建物址5



I区  
土城、ピット、溝



II区  
建物址 2、3



II区  
建物址 1、2、3、5





125



77



82



60



107



72

第 29 图 版



59



31

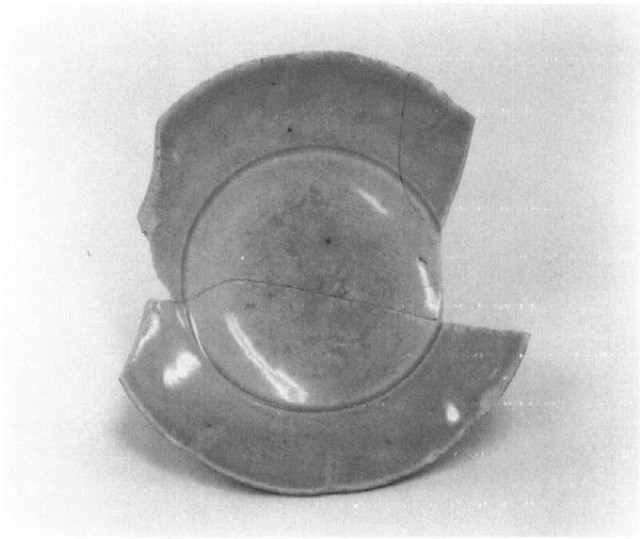


126

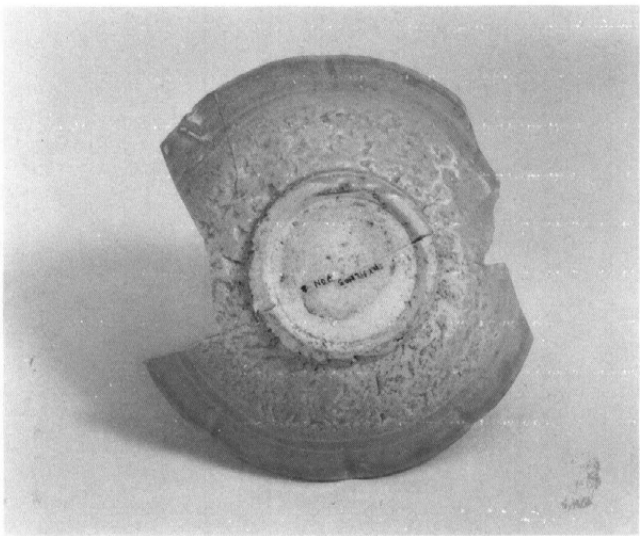
第 30 图 版



32

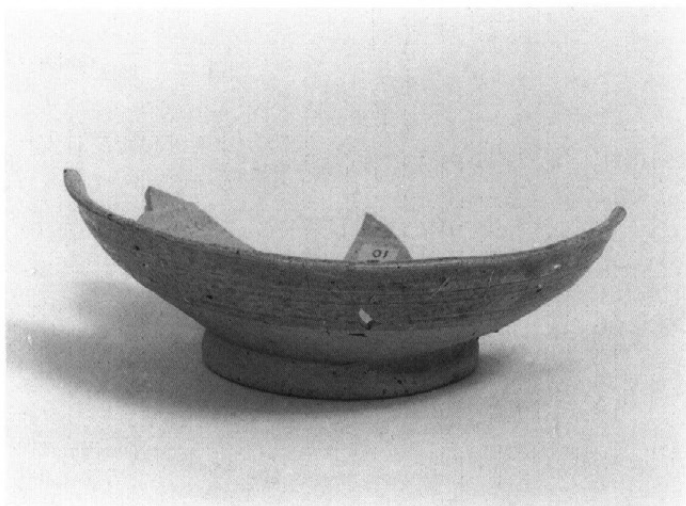


見込み

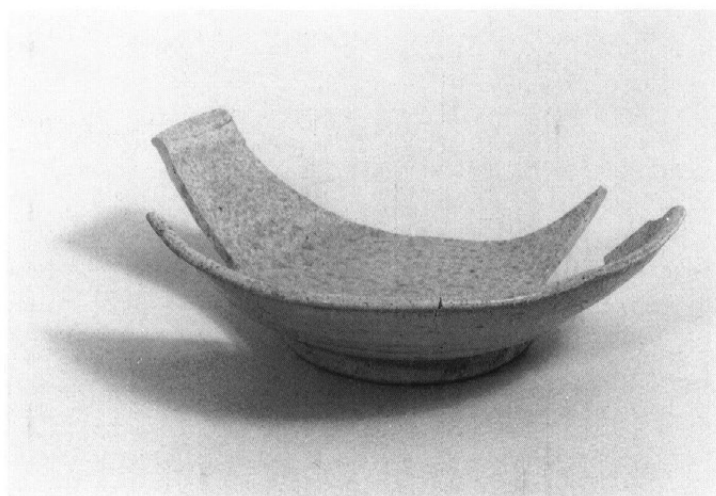


底部

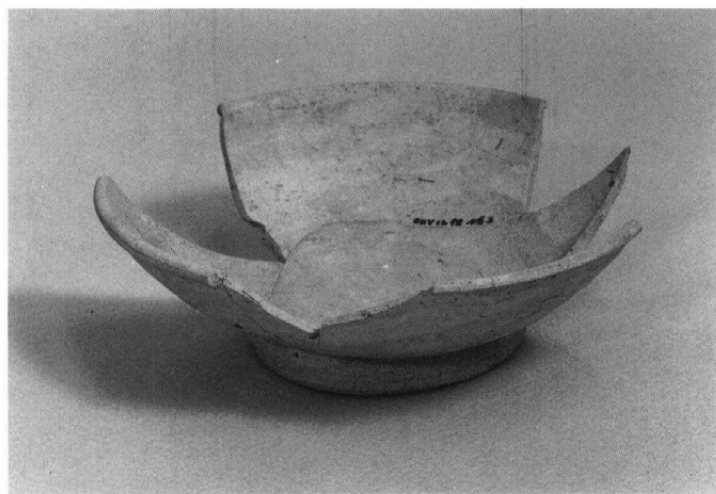
第 31 図 版



76

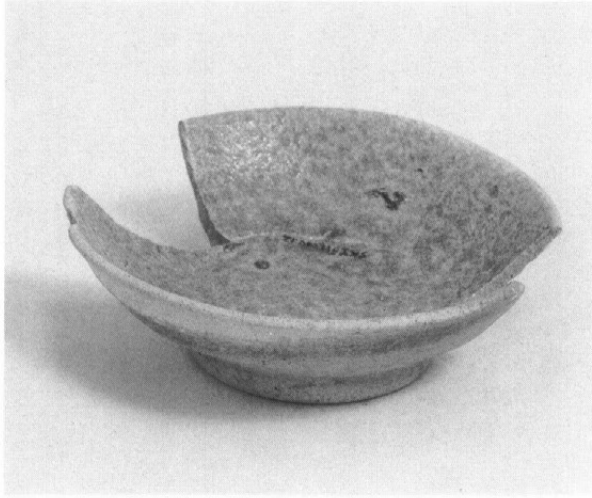


99



98

第 32 図 版



34



12

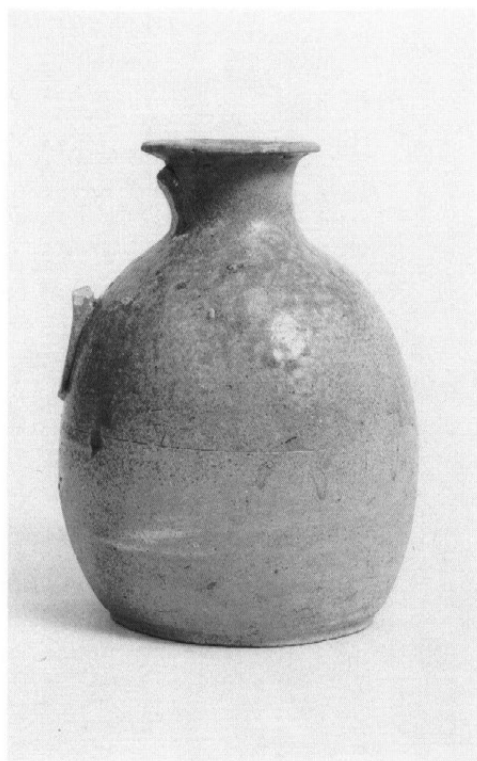


135

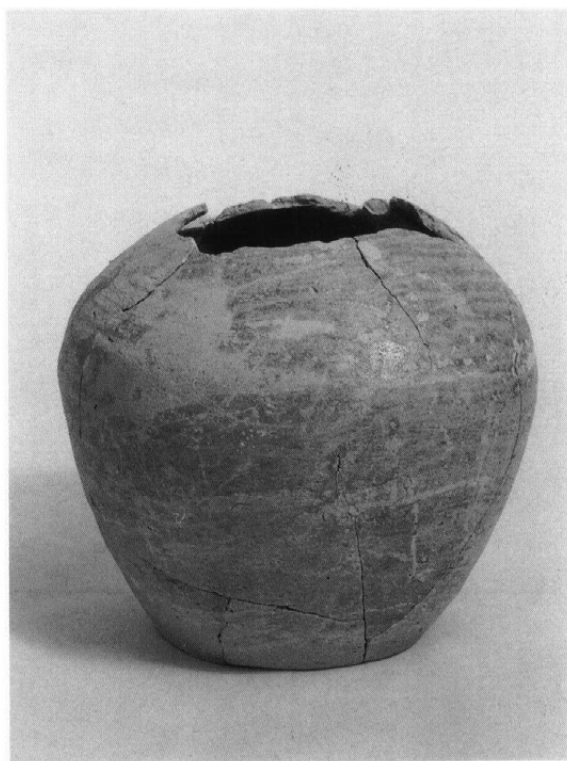
第 33 図 版



127



42



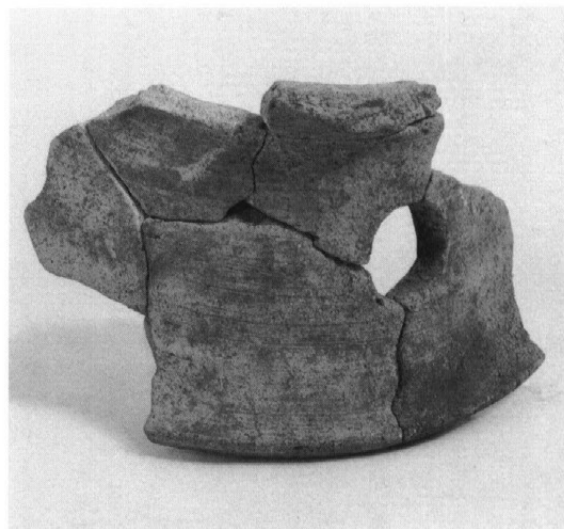
133

第 34 図 版





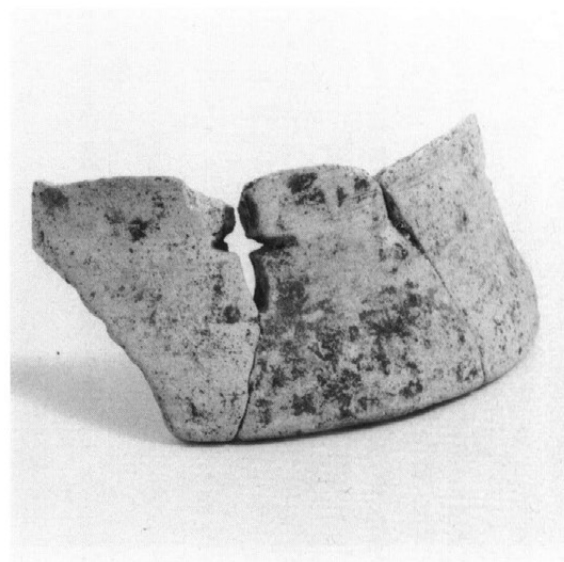
62



141



61



44





63



153

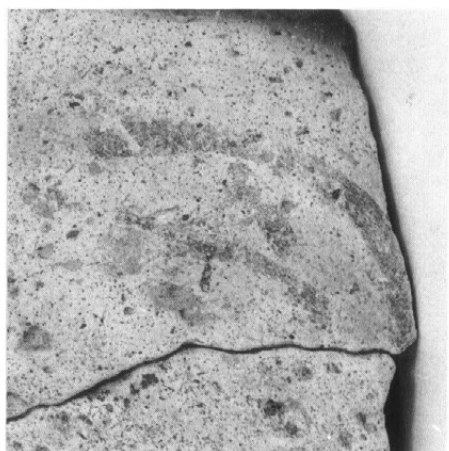


152

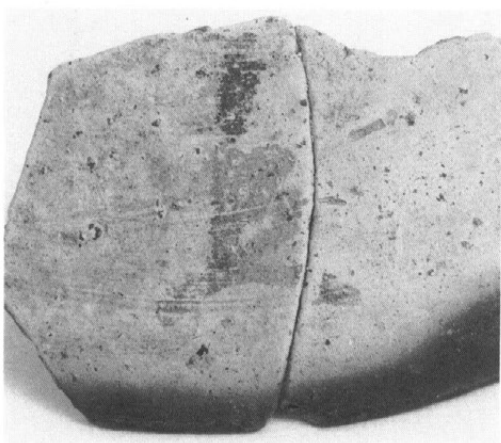
第 36 图 版



31



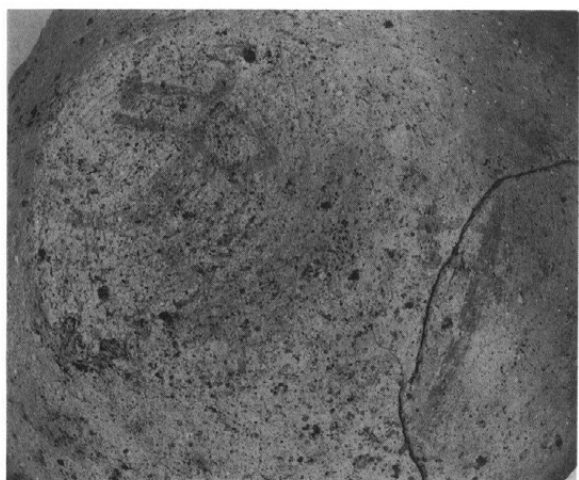
89



106

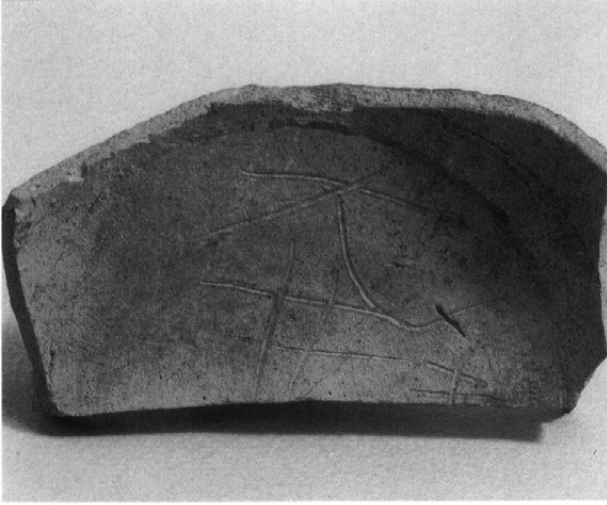


103

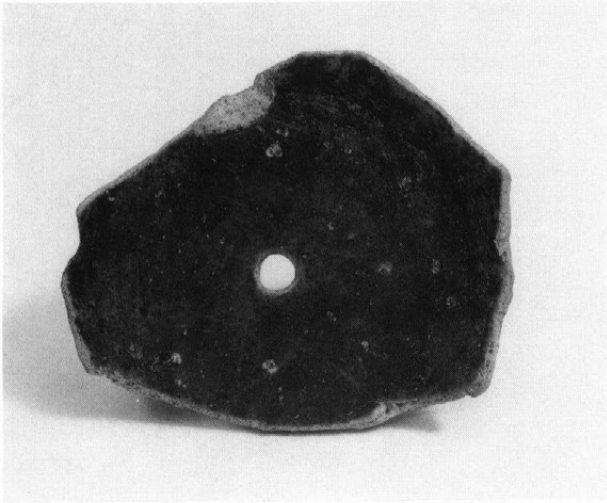


84

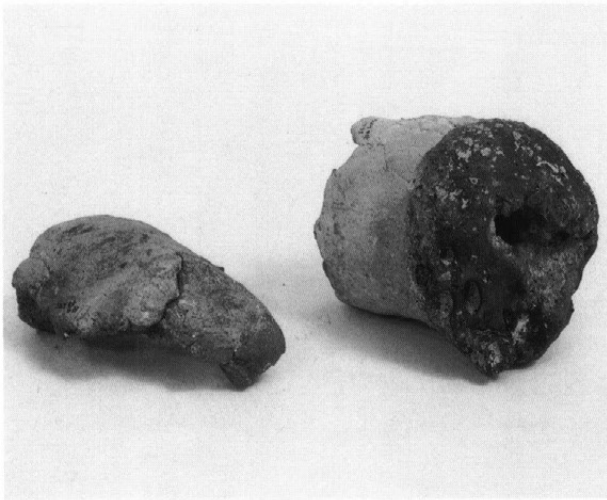
第 37 图 版



100



97

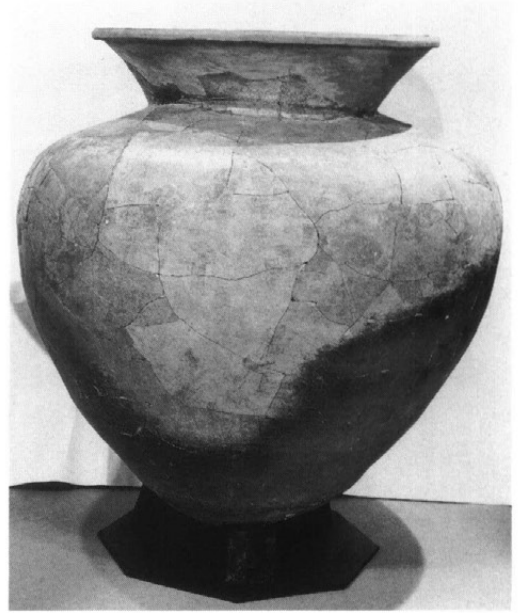


15

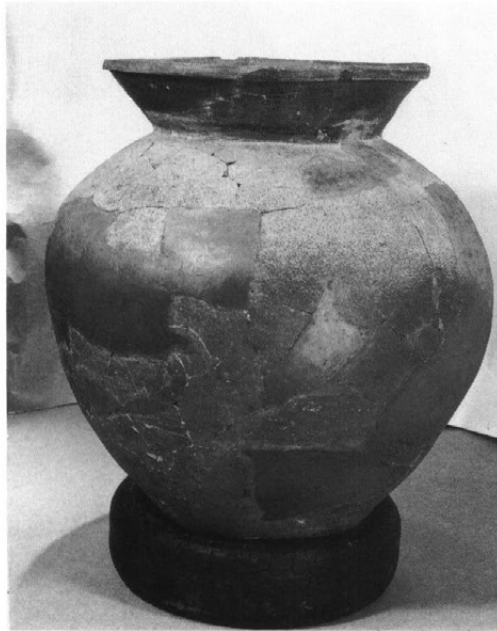
第 38 图 版



大甕 1



大甕 2



大甕 3

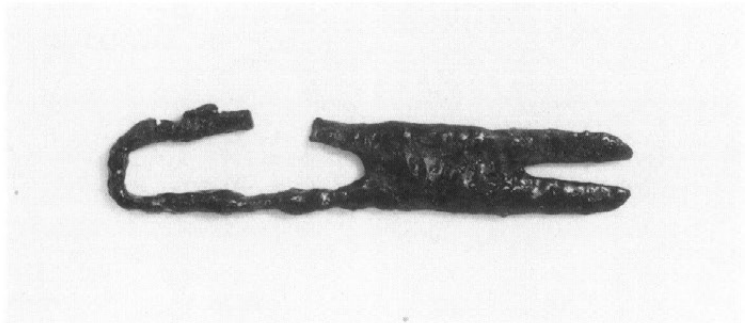
第 39 図 版



1



底部



6

---

---

松本市文化財調査報告No.59

松本市島内遺跡群  
北方遺跡Ⅱ・北中遺跡

昭和63年3月20日 印刷

昭和63年3月30日 発行

発行 松本市教育委員会

印刷 電算印刷株式会社

---

---



